

スポーツ実技（水泳）		実習	非常勤講師 野村 孝路
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコース，スポーツトレーナーコースの専門選択科目 教職科目 柔道整復師コースの教養選択科目 教職科目 救急救命士コースの教養選択科目 教職科目	科目ナンバリング	11322110 11531104 12220112 12531104 13220109 13531104

1. 授業のねらい・概要

幼児から高齢者まで幅広い年齢で楽しめる水泳の特性にふれることで，水泳指導員の養成を目的とした（財）日本水泳連盟アシスタント指導員資格検定試験に基づく，資質・知識・技術の習得を図る。

そのため，水泳指導に必要な基礎・応用・実践技術・補助技術を身につけ，初心者指導法および各種泳法（バタフライ・背泳ぎ・平泳ぎ・クロール），さらに救助法・救急法を理解し現場における救急処置が行なえる技量を身につける。

2. 授業の進め方

教本の内容に沿った泳法指導を基本とするが，随時，泳力別にグループ分けし個別的な課題を明確にし，具体的な出練習法・指導法を取り上げて実践的なポイントを説明し練習する。また，理解の定着を図るため，実技問題および関心意欲・態度を促す所感を筆記させる課題を課すこととする。

3. 授業計画

1. 水泳概説 水慣れ，呼吸法，バランスの習得	7. 背泳ぎの初歩技術の習得
2. 初心者指導法 エレメンタリー泳法および補助技術の習得	8. 背泳ぎの技術の応用（スタート，ターン）
3. クロール初歩技術の習得と指導法	9. バタフライの初歩技術の習得
4. クロール技術の応用（スピードの上げ方，スタート，ターン）	10. バタフライの技術の応用（スタート，ターン）
5. 平泳ぎの初歩技術の習得と指導法	11. 救助技術の習得（横泳ぎ，潜行）
6. 平泳ぎの技術の応用（遠泳，スピードの上げ方，スタート，ターン）	12. 蘇生法の習得
	13. 泳法指導の実際
	14. 50m個人泳法測定
	15. まとめ

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講し，実技指導のポイントの配布資料を復習しておく。そのためには30分程度が必要である。さらに，実技内容を毎回の授業で実践し，改善していく。これらの実技習得には，毎回の授業前後に20分程度の陸での実技練習を行う。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

実技試験や机上試験の実施の際，解答のポイントおよび評価の観点を終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

水泳の競技特性の基本的な概要を理解して，現場での初心者指導が理論的に組み立てられ，安全かつ効果的に進めることができる。また本授業を通じて将来スポーツの指導者となれるよう資質向上に務める意欲を育む。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（50%）および実技テストおよびペーパーテストの結果（50%）によって，評価する。

8. テキスト・参考文献

テキストは、財団法人日本水泳連盟編 競技力向上指導者用『水泳教師教本教本』大修館書店をベースに毎回の授業を組み立てている。また、参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

受講の要件としては、受講生の健康診断や既往症を把握していることが重要である。水泳経験があることが望ましいが、そうでない場合も、理解でき、実践できるように授業を個別に対応し進めていく。疑問や不明な点については、遠慮なく質問してもらいたい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、学校及び地域スポーツ活動における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツ実技（柔道）(1) (2)		実習	講師 佐藤 康宏	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門選択科目 スポーツトレーナーコースの専門選択科目 救急救命士コースの教養選択科目 教職科目 教職科目		科目ナンバリング	11322112 11322112 13220116 11531107 13531107

1. 授業のねらい・概要

大学における「スポーツ」はスポーツの実習と科学理論の学習を通して、自己のライフステージや心身の状態（健康、体力、運動能力）に適したスポーツを生活の中に取り入れ、豊かなライフスタイルを形成できる能力を目的としている。

柔道は日本を発祥とするオリンピック競技種目であり、健康と体力の維持、増進のための身体や運動に基礎的な理論と実践方法を身に着けることができる競技である。本講義では学科の特性を踏まえ、その精神、体力、歴史、礼法、基本動作、受身、投技、固技、乱取りなどを通して、中学・高等学校保健体育教育職員、柔道整復師になる上で必要な技能の習得をねらいとする。

2. 授業の進め方

柔道衣の着方と礼法～柔道修行に於ける受身の重要性の理解と学習基本動作～後方受身、側方受身、前方受身の学習～前方回転受身の学習。補強運動と柔道を通しての機能解剖～受身の復習並びに 受身の応用練習～足技、腰技、手技の学習～足技、腰技、手技の応用練習～固め技一抑え技、絞め技、関節技。各技の説明と実践練習。

3. 授業計画

1. ガイダンス（柔道の歴史について）	9. 固技の基本動作
2. 柔道着の着用～礼法の習得	10. 固技（袈裟固・崩袈裟固・肩固・横四方固）
3. 基本動作（受身：後受身・横受身）	11. 固技（上四方固・崩上四方固・縦四方固）
4. 基本動作（受身：前受身・前回受身）	12. 固技（関節技・絞技）
5. 基本動作（姿勢・組み方・進退動作）	13. 投げ技の応用練習～立技の乱取
6. 投技（背負投・体落・大腰・釣込腰・払腰）	14. 基本動作、投技、固技の総復習
7. 投技（小内刈・大内刈・大外刈・出足払）	15. まとめ（礼法・受け身・投技のテスト）
8. 投げ技の応用練習～立技の乱取	解説および再試験

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習として、高等学校学習指導要領（体育）の武道について30 分程度読み、理解をしておくこと。実技前はストレッチングを上・下肢ともに十分程度行い、身体を柔軟に動かせるように準備をすること。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

各段階で習得したことを実践させて確認する。その都度、解説をして再練習をさせる。最終授業の15 回目のテスト後に再度解説を行う。

6. 授業における学修の到達目標

健康と体力の維持、増進のための身体や運動に基礎的な理論と実践方法を身に着けること。また、柔道精神、体力、歴史、礼法、基本動作、受身、立技、固技などの技能の習得を到達目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（50%）、および最終テストの結果（下記①②③）によって評価する。

- ① 身体の安全を、守れる体力・技術・知識を身につけているか（受身の試験 15%）
- ② 柔道の基礎的知識を理解して、その基本的技術を習得しているか（投技の試験 15%）
- ③ 講義内に行われる応用練習について理解しているか（20%）

8. テキスト・参考文献

講義内で参考資料を配布。

9. 受講上の留意事項

- ・手足の爪は、短く切ること。
- ・装飾品（指輪、ネックレス、ピアス）等は外すこと。
- ・髪形について、ロングヘアーの学生は髪を結って襟につかないようにして参加すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、講道館柔道六段、柔道指導員 A 資格を有し、国際交流基金文化交流事業、海外での柔道指導歴などの実務経験を活かして実技指導を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

生理・心理機能測定法		実習	教 授 大森 肇 教 授 竹内 成生	
科目カテゴリー	スポーツトレーナーコースの選択必修科目 柔道整復師コースの専門基礎科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	11301102 12312102 13312101	

1. 授業のねらい・概要

スポーツを科学的に検証するためには、生理・心理の変化とパフォーマンスの関係性を捉える必要がある。一般に生理機能や心理機能の測定は難しいと考えられがちだが、測定の理論的背景を理解すれば、実際には明解かつ平易であることが理解できる。

本講義ではスポーツ科学研究、生理学研究、心理学研究といった複数の研究分野で多用される指標を題材として取り上げ、テーマごとに理論的背景、測定方法、解析方法、データの見方までを取り扱う。一連の学習を通じて、科学的なデータの扱いや見方の基礎を習得することを目標とする。

2. 授業の進め方

教員 2 名による講義と実習形式によって進められる。講義ではパワーポイント、スライド、プリント、板書、視聴覚教材を適宜使用し、実習では学生が互いに実験者と被験者を体験する。また、各自データ処理を体験し、データの見方や結果に関する討議も行う。

3. 授業計画

1. ガイダンス：本講義の概要と評価法（両教員）	9. 生理学的研究の概略（大森：講義）
2. 心理学的研究の概略（竹内：講義）	10. 生理学的手法（大森：講義と実習）
3. 生理学的手法（竹内：講義と実習）	11. 生理学的計測（大森：実験）
4. 心理学の計測（竹内：実験・調査）	12. 生理学的解析①（大森：実習 [データ整理]）
5. 生理学的解析①（竹内：実習 [データ整理]）	13. 生理学的解析②（大森：実習 [データ解析]）
6. 生理学的解析②（竹内：実習 [データ解析]）	14. 生理学的考察（大森：講義と実習）
7. 生理学的考察（竹内：講義と実習）	15. まとめとフィードバック（大森：生理学領域）
8. まとめとフィードバック（竹内：心理学領域）	※実際の教員指導順序等の詳細は改めて告知する

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

講義はシラバスに則って進行するため、各講義前には予めテーマについて調べておくこと（1 時間）。また、テーマ毎の簡単なレポートを必ず教員の指定する方法と期間に提出する必要がある（1 時間）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポート提出後、質疑および要点等の解説を行う。

6. 授業における学修の到達目標

各テーマに関する教授と実際の実験を通じて、科学的なデータの扱いや見方の基礎を習得することを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

授業態度（20%）、積極性（30%）、各回のレポート（50%）を基本として、総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

特に指定しない。参考図書は必要があれば授業中に適宜紹介し、プリントを配布することがある。

9. 受講上の留意事項

本講義では生理や心理、動作の測定と解析を実施することから、測定機器を取り扱う。測定機器は精密機械であること、ならびに人を対象として機器を操作することから、慎重かつ真面目な態度で受講すること。本講義を通じて、人間の生理機能と心理機能への理解とその面白さを体験してほしい。

また、本講義は夏期集中講義を予定しており、各自が実際に測定体験をすることが重要なため、前期当初にガイダンスを実施する。このとき、履修希望者が定員を超えた場合には抽選となる可能性があるため、希望者は必ず参加すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。竹内は障害を対象とした研究所における経験を踏まえて指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

知覚運動論		講義	准教授 中川 剣人	
科目カテゴリ	スポーツトレーナーコースの選択必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	11301209 12220209 13312204	

1. 授業のねらい・概要

知覚は行為の手段であり、行為は知覚の手段である。知覚と行為（運動）は機能的に繋がっており、日常生活においてもスポーツ場面においても、これらを高度に連携させることが、効率的で合目的な運動行動を遂行するために必要となる。本授業では、まず主に視覚系の感覚情報処理についての基礎理論を学び、さらに知覚運動に関わる学問領域の横断的な解説を交えながら、知覚と運動の機能的連携に対する理解を深めていく。また、実際の学术论文で示された結果を概覧しながら、過去から現在までの研究トピックに触れ、将来に向けたこの分野の展望を考察する。

2. 授業の進め方

主にスライド呈示による講義形式で授業を進める。話題にした現象や方法論についての体験的学習（実験）を盛り込みつつ、関連する学术论文を紹介しながら解説を行う。また、毎回の授業中に小テストを実施し、理解度を測る。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. 高速移動物体の捕捉運動（野球を例に）
2. 眼球光学系と神経生理	10. アスリートの立体視／動作遂行のための視覚情報
3. 光の強度と色覚	11. 注意と知覚運動
4. 視覚系の時空間特性／錯視	12. 【トピック】トップサッカー選手の知覚運動システム
5. 運動視／知覚行為カップリング	13. 知覚運動に関わる脳領域
6. 知覚運動行動に係る用語の解説	14. アスリートの知覚運動に関わる脳の特徴
7. ミラーニューロン・運動伝染	15. 総復習
8. 眼球運動／アスリートの視線	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前回までの授業ノートの見直しに 30 分程度、また課題が出された場合はさらに 30 分程度以上の準備学修を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

期末試験期間中の同時限内において、解答のポイントや出題の意図について全体説明を行い、個別質問にも応じる。

6. 授業における学修の到達目標

感覚系と運動系の情報処理過程について基本的な概念を理解し、あわせて実際の学术论文の構成や論法に親しむ。

7. 成績評価の方法・基準

受講態度と参加・活動状況（30%程度）、期末試験（70%程度）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

「視覚Ⅰ—視覚系の構造と初期機能—」（内川恵二・篠森敬三：朝倉書店）、「視覚Ⅱ—視覚系の中期・高次機能—」（内川恵二・塩入諭：朝倉書店）、「現場で生きるスポーツ心理学」（石井源信ほか：杏林書院）を参考図書とする。

9. 受講上の留意事項

特になし。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、国立研究機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツの科学A		講義	講師 菅谷 美沙都 教授 谷口 英規 非常勤講師 小野 壮二郎	
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの教養 選択科目、スポーツトレーナーコースの教養選択科目 教職科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目 教職科目	科目ナンバリング	11220132 11510104 12220148 12510104 13220129 13510104	

1. 授業のねらい・概要

スポーツとは「日常からの解放」という原義を包含しつつ、現代においては「職業」、「学生の課外活動」、「趣味」、「健康維持」など様々なスポーツの在り方が存在し、人々の日常生活や社会生活に広く取り入れられている。スポーツの社会的な価値が認められつつある一方で、近年はスポーツという文化が内包する負の側面（暴力の許容等）についても露呈されており、我々はこうした問題を看過することはできない。本講義では、スポーツをあらゆる側面から多面的に捉え、現代社会におけるスポーツの価値を学ぶとともに、スポーツ実践者としてスポーツとどのように向き合うべきか、理論と実技を通じて一人一人が深く再考する講義としたい。

2. 授業の進め方

本講義は、理論と実技の混合型講義である。講義においては、スポーツの起源から始まり、スポーツを行なう上でのスポーツマンシップの姿勢やフェア志向の考え方を概観する。実技においては、バスケットボールやソフトボールといったチームスポーツを体験する。

3. 授業計画

1. ガイダンス（菅谷）	9. 基本的なシュート（小野）
2. スポーツの起源と歴史（菅谷）	10. 戦術や連携プレー（小野）
3. 現代社会におけるスポーツの価値（菅谷）	11. 投球基礎【キャッチボール】（谷口）
4. 現代スポーツの諸問題（菅谷）	12. 守備基礎【ゴロ捕球・フライ捕球】（谷口）
5. スポーツマンシップとフェア志向（菅谷）	13. 打撃基礎【トスバッティング】（谷口）
6. バスケットボールの特性と基本動作（小野）	14. ゲーム①【ケースを設定】（谷口）
7. ボールコントロールの指導①ドリブル（小野）	15. ゲーム②【チーム毎に戦術を立てる】（谷口）
8. ボールコントロールの指導②パスとキャッチ（小野）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

講義はシラバスに則って進行するため、各テーマについて予め疑問に思ふこと、知りたいことを考察しておくこと。また、レジュメを振り返りながら講義内容に関して理解しているかを確認し、疑問に思ったこと等を次回の講義で質問できるようにまとめておくこと。これらの準備学修には2時間程度が必要である。実技に関しては、可能な範囲で繰り返し練習すること。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポート提出後、解答、要点等を解説し、フィードバックする。

6. 授業における学修の到達目標

スポーツをあらゆる側面から多面的に捉える能力を身につけることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

菅谷担当分は課題レポート（40%）として実施し、小野担当分（30%）、谷口担当分（30%）の実技評価と合わせて評価する。

8. テキスト・参考文献

テキストは基本的には使用しない。講義レジュメを適宜配布する。

9. 受講上の留意事項

実技の際、服装はスポーツに適したものを着用し、その他、各担当の先生の指示に従うこと。また、爪は短く切り、ネックレス、ピアス等は、危険なので外すこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツの科学B		講義	講師 菅谷 美沙都 教授 谷口 英規 非常勤講師 小野 壮二郎	
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの教養 選択科目、スポーツトレーナーコー スの教養選択科目 教職科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目 教職科目	科目ナンバリング	11220133 11510105 12220149 12510105 13220130 13510105	

1. 授業のねらい・概要

スポーツとは「日常からの解放」という原義を包含しつつ、現代においては「職業」、「学生の課外活動」、「趣味」、「健康維持」など様々なスポーツの在り方が存在し、人々の日常生活や社会生活に広く取り入れられている。スポーツの社会的な価値が認められつつある一方で、近年はスポーツという文化が内包する負の側面（暴力の許容等）についても露呈されており、我々はこうした問題を看過することはできない。本講義では、スポーツをあらゆる側面から多面的に捉え、現代社会におけるスポーツの価値を学ぶとともに、スポーツ実践者としてスポーツとどのように向き合うべきか、理論と実技を通じて一人一人が深く再考する講義としたい。

2. 授業の進め方

本講義は、理論と実技の混合型講義である。講義においては、スポーツの科学 A の発展的な内容として、スポーツ倫理やスポーツ原理、哲学的な視点から深く学んでいく。実技においては、バスケットボールやゴルフといった球技スポーツを体験し、それぞれのスポーツのルールや技術、戦術を学ぶ。

3. 授業計画

1. ガイダンス（菅谷）	9. オンボールスクリーンの攻防（小野）
2. スポーツのルールを考える：競技の本質とは（菅谷）	10. 戦術及び実践形式（小野）
3. スポーツにおける「競技者」の世界（菅谷）	11. ゴルフ・ルールの説明・スウィング（谷口）
4. スポーツと人格形成（菅谷）	12. ゴルフ・アプローチ練習（谷口）
5. 勝敗の倫理（菅谷）	13. ゴルフ・プラスチックボール打ち（谷口）
6. ボールコントロール及び基本的なシュート（小野）	14. ゴルフ・パター練習（3ヶ所）（谷口）
7. 連係プレー（小野）	15. ゴルフ・パター（ホールを作成してスコア記入）（谷口）
8. オフボールスクリーンの攻防（小野）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

講義はシラバスに則って進行するため、各テーマについて予め疑問に思うこと、知りたいことを考察しておくこと。また、レジュメを振り返りながら講義内容に関して理解しているかを確認し、疑問に思ったこと等を次回の講義で質問できるようにまとめておくこと。これらの準備学修には2時間程度が必要である。実技に関しては、可能な範囲で繰り返し練習すること。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポート提出後、解答、要点等を解説し、フィードバックする。

6. 授業における学修の到達目標

スポーツをあらゆる側面から多面的に捉える能力を身につけることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

菅谷担当分は課題レポート(40%)として実施し、小野担当分(30%)、谷口担当分(30%)の実技評価と合わせて評価する。

8. テキスト・参考文献

テキストは基本的には使用しない。講義レジュメを適宜配布する。

9. 受講上の留意事項

実技の際、服装はスポーツに適したものを着用し、その他、各担当の先生の指示に従うこと。また、爪は短く切り、ネックレス、ピアス等は、危険なので外すこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

健康心理学		講義	教授 竹内 成生	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目, スポーツトレーナーコースの選択必修科目	科目ナンバリング	11321206	

1. 授業のねらい・概要

健康心理学は健康の維持・増進、疾病の予防と治療といった健康に関する諸問題と、その改善に心理学の立場から貢献することを目的とした心理学分野である。本講義では、健康心理学の歴史的背景と理論的背景について概観し、感情やストレス、パーソナリティなどの健康心理学が取り扱う基本的問題を扱い、さらには対人関係といった個人と社会との関係性における健康問題について学ぶ。これら健康の要因・増進・管理について総合的に理解することで、健康問題に対して心理学的知見から考察する知識を身に付けることを目標とする。

2. 授業の進め方

パワーポイント、視聴覚教材、板書等による講義形式で授業を進める。また実体験を目的として心理検査等の各種心理測定材料を適宜利用する。

3. 授業計画

1. 健康心理学とは	9. 健康とパーソナリティ 2 (獲得的要因)
2. 健康の概念	10. 健康行動と決定要因
3. 健康心理学の基礎理論 1 (認知・行動)	11. 生活習慣と健康 1 (個人)
4. 健康心理学の基礎理論 2 (生理)	12. 生活習慣と健康 2 (対人・社会)
5. 健康の生理学的メカニズム	13. ソーシャルサポート
6. ストレスと健康	14. 疾病予防と健康教育, 健康教育
7. ストレスとコーピング	15. まとめ
8. 健康とパーソナリティ 1 (生得的要因)	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

講義はシラバスに則って進行するため、各テーマについて予め考察しておくこと。加えて、各講義で学んだ概念や各トピックについて、自らの経験と照らし合わせて理解を深めることが重要である。なお、各講義における準備学習時間は2時間程度を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

小レポートに関する詳細解説は次の講義内にておこなう。また、試験のフィードバックは出題意図・解答ならびに理解すべき点等について試験終了直後に実施する。

6. 授業における学修の到達目標

個人や社会における健康について理解し、健康の維持・増進とその管理に関して、心理学的立場から理解する。そして、健康に関する諸問題について自ら考察するための知識と考察力を身に付けることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

各回講義に伴う課題実施状況（35%）、小レポート（15%）、試験（50%）を基準として総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキストは特に指定しないが、参考図書を初回授業内に紹介する。各講義でプリントを配布することがある。

9. 受講上の留意事項

健康心理学もスポーツ心理学と同じく、我々にとって身近な分野であり、健康に関する心理的背景や諸問題を具体的に

にイメージしやすい。各自、自らの経験と照らし合わせて理解を深めるようにすること。また、講義内で各テーマに関係した心理検査なども体験してもらう予定である。実際の体験を通じてイメージを深め、積極的に学習を進めてほしい。履修希望者が定員を超えた場合には抽選となることがあるため、希望者は初回講義に必ず参加すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。障害を対象とした研究機関での実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

運動生理学		講義	教授 大森 肇	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目、スポーツトレーナーコー スの選択必修科目 教職科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの専門基礎分野科 目 教職科目	科目ナンバリング	11531202 12531202 13531107 11321204 12220207 13311102	

1. 授業のねらい・概要

運動生理学とは、運動時の身体応答とその機序を追究するとともに、そうした環境の変化に身体がどのように適応していくかを求めていく学問である。またその応用範囲は広く、スポーツパフォーマンスの向上、健康の維持・増進、疾病の予防・治療、幅広い年齢層への身体教育などに及んでいる。本授業では、特に運動に関係の深い身体機能に焦点を当て、基本となる構造・機能を学ぶとともに、上記の応用例について考えていくことをねらいとしている。

2. 授業の進め方

パワーポイントによるプレゼンテーション、配布資料、板書等により授業を展開する。

3. 授業計画

1. ガイダンス 2. 運動生理学とは何か 3. 骨格筋の構造と機能 4. 神経系による運動の調節 5. 筋力と筋パワー 6. 筋の肥大と萎縮 7. 栄養素の消化・吸収と代謝 8. 運動時の代謝	9. 運動時のホルモン分泌 10. 運動と呼吸 11. 運動と循環 12. 運動時の疲労と生理的合目的性 13. 運動と酸化ストレス 14. 運動と抗疲労（休養・栄養・トレーニング） 15. まとめ
--	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各テーマについて予習し、理解のための基盤を作っておくこと（30分）。復習時に講義内容を改めて整理し、理解が不十分な部分は自ら調べを深め、疑問点を次のショートレポートで質問できるようにまとめておくこと（30分）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回の授業冒頭において、前回のショートレポートで出された質問に答えることでフィードバックする。また、定期試験後に全体講評を掲示または一斉メールにてフィードバックする。

6. 授業における学修の到達目標

身体の基本的なメカニズムと運動時の変化に関する知識を身につけることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験（70%）および受講態度（30%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

私語，水分補給以外の飲食，授業内容に関する検索以外のスマホ・PC 等の使用，居眠りの 4 項目を禁止する。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

柔道整復演習Ⅲ		講義	非常勤講師 西川 晃子
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12371401

1. 授業のねらい・概要

私たちが問題なく安全に日々を送ることができるのは何故だろうか。「キレイ」や「汚い」とは一体何か。公衆衛生を理解することにより答えは見えてくる。

本授業では解剖生理学を基礎とした上で健康の保持・増進をはかり、疾病を予防していくことを学ぶ。そして、医療従事者として必要な感染症や消毒、保健等の基本的知識を身につけ、地域社会において衛生的に施術を実施できるよう取り組んでいく。

2. 授業の進め方

授業では配布資料とスライドを活用する。

3. 授業計画

1. ガイダンス 健康の概念	9. 生活環境・食品衛生活動
2. 疾病予防と健康管理	10. 母子保健
3. 感染症の予防（感染症成立の条件、感染症の種類）	11. 学校保健
4. 感染症の予防（感染症の予防対策）	12. 産業保健
5. 消毒	13. 成人・高齢者保健
6. 環境衛生（環境の種類、環境問題、環境の把握・評価）	14. 地域保健と国際保健
7. 環境衛生（物理的・化学的・生物的環境要因）	15. 医療の倫理と安全の確保
8. 生活環境・食品衛生活動	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

事前に配布した資料に目を通し、わからない単語があれば事前に調べておくこと（およそ 30 分間）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

定期試験の正答と問題の要点を希望者に配布する。

6. 授業における学修の到達目標

「公衆衛生学」の必要性を確認する。

健康や地域保健等の理解を深める。

医療従事者としての基礎的な知識ならびに国家試験に対応した知識を身につける。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（小テスト）（約 30%程度）並びに定期試験の結果（約 70%程度）より総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

（社）全国柔道整復学校協会 監修、『衛生学・公衆衛生学 改訂第 6 版』，南江堂，2023 年
その他、授業内容に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

授業開始 5 分前には着席しておくこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

柔道整復演習Ⅳ		講義	准教授 伊藤 新
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12371402

1. 授業のねらい・概要

この科目は、柔道整復師国家試験対策の授業を行う。整形外科および外科学概論の科目で、国家試験によく出題されている内容や、キーワードを説明する。また、国家試験の傾向をつかみ、問題をしっかり解答できるようになることをねらいとする。

2. 授業の進め方

第1～8回は整形外科、第9～15回は外科学概論の授業を行う。毎講義ごとのテーマに合わせてPower Pointを用いて授業を行う。また、国家試験問題を解きながら、その解説も行う。

3. 授業計画

1. 整形外科診察法・検査法	9. 総論1（損傷・炎症と外科感染症）
2. 整形外科治療法・骨関節損傷総論	10. 総論2（腫瘍・ショック）
3. 疾患別各論1（感染性疾患）	11. 総論3（輸液・輸血、消毒と滅菌）
4. 疾患別各論2（骨および軟部組織腫瘍）	12. 総論4（手術・麻酔、移植）
5. 疾患別各論3（全身性の骨・軟部疾患）	13. 総論5（出血と止血、心肺蘇生法）
6. 身体部位別各論1（体幹）	14. 各論（頭部、胸部の外傷）
7. 身体部位別各論2（上肢）	15. 各論（腹部の外傷）
8. 身体部位別各論3（下肢）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

整形外科および外科学概論の教科書、配布した資料を用いて毎講義の内容を復習すること（1時間程度）。また、次の授業に備えて予習を行い、疑問点を明確にしておくこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後もしくは授業内で説明する。

6. 授業における学修の到達目標

国家試験でよく出題されているキーワードを把握し、内容を理解しながら問題を解き、解説できるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

定期試験を実施し評価する（100％）。

8. テキスト・参考文献

- ①整形外科学改訂第4版 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②外科学概論改訂第4版 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ③国家試験で重要ポイントとなる補足資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

私語およびスマートホンの使用、飲食、帽子の着用は禁止とする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、整形外科における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

トレーニング演習 I		講義	准教授 伊藤 新
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12371403

1. 授業のねらい・概要

この科目は、柔道整復師国家試験対策の授業を行う。柔道整復学上肢の骨折、脱臼の範囲を対象として、国家試験でよく出題されている内容やキーワードを説明する。また国家試験の傾向をつかみ、問題をしっかり解けるようになることをねらいとする。

2. 授業の進め方

Power Point を用いたスライドによる授業を行う。毎講義ごとのテーマに合わせて国家試験問題を解きながら、その解説も行う。

3. 授業計画

1. 鎖骨の骨折と肩甲骨骨折	9. 手根骨骨折
2. 上腕骨近位端部骨折	10. 中手骨骨折
3. 上腕骨骨幹部骨折	11. 手指部骨折
4. 上腕骨遠位端部骨折①（顆上骨折）	12. 肩部の脱臼
5. 上腕骨遠位端部骨折②（外顆および内側上顆骨折）	13. 肘部の骨折
6. 前腕骨近位端部骨折・前腕骨骨幹部骨折	14. 手部の脱臼
7. 前腕骨遠位端部骨折①（コーレス骨折）	15. まとめ（問題演習）
8. 前腕骨遠位端部骨折②（スミス骨折など）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- ①毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容である上肢外傷の受傷機転や症状、整復法、固定法、合併症についてテキストを用いて予習し、疑問点などを明確にしておくこと（1～2時間程度）。
- ②毎講義終了後はテキストの予想問題などを解答し、必ず復習すること（2時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

国家試験でよく出題されているキーワードを理解し、問題を解いて解説できるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

定期試験を実施し評価する（100%）。

8. テキスト・参考文献

- ①柔道整復学・理論編改訂6版 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②柔道整復学・実技編改訂2版 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ③絶対出る！柔道整復師国家試験重要問題 柔道整復学下肢・総論編 医歯薬出版
- ③必要に応じて各項目の重要ポイントを補足資料として配布する。

9. 受講上の留意事項

私語およびスマートホンの使用、飲食、帽子の着用は禁止とする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、整形外科における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

トレーニング演習Ⅱ		演習	教授 西川 彰
科目カテゴリ	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12371404

1. 授業のねらい・概要

柔道整復師国家試験で出題される「柔道整復理論」の中で「総論」「頭部・体幹」の分野の理解を深めることを目的とする。そのため、過去の国家試験問題の演習を通して出題傾向の高い項目や学習のポイントを理解すると同時に、配布するオリジナルプリント教材を用いてキーワードとなる重要語句の確認と暗記すべき項目の整理を行う。

2. 授業の進め方

関連する科目として「柔道整復学総論Ⅰ・Ⅱ」「臨床柔道整復学Ⅰ」で学んだ学習内容から、特に国家試験での出題傾向の高い項目を取り上げて授業を実施する。また、国家試験問題の解説を記入した「国試問題レポート」を作成し提出課題とする。

3. 授業計画

1. ガイダンス 骨の損傷①（分類，症状）	8. 頭部，顔面部の骨折
2. 骨の損傷②（併発症，続発症，後遺症）	9. 頸部，体幹部の骨折
3. 骨の損傷③（小児骨折と高齢者骨折，予後など）	10. 胸郭部の骨折
4. 関節の損傷①（脱臼の分類，症状，合併症）	11. 頭部および体幹部の脱臼
5. 関節の損傷②（靱帯損傷，筋損傷など）	12. 頭部，胸郭部の軟部組織損傷
6. 治療法①（骨折および脱臼の整復法，固定法）	13. 頸部の軟部組織損傷
7. 治療法②（後療法）	14. 胸背部，腰部の軟部組織損傷
	15. まとめ

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業時に配布する国家試験の過去問題に取り組んだ上で，毎回の授業に臨むこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポートについては添削，採点を行った上で返却する。また，定期試験については正答と問題の要点を希望者に配布する。

6. 授業における学修の到達目標

本授業では，柔道整復師国家試験の合格基準を満たす知識レベルまでの到達を目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（レポート）（約30％程度）並びに定期試験の結果（約70％程度）より総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

小林直行 監修，西川彰 ほか著，『絶対出る！柔道整復師国家試験重要問題 柔道整復学 上肢・体幹編』，医歯薬出版，2018年

小林直行 監修，伊藤新 ほか著，『絶対出る！柔道整復師国家試験重要問題 柔道整復学 下肢・総論編』，医歯薬出版，2018年

その他の参考資料は，必要に応じて授業中に紹介または配布する。

9. 受講上の留意事項

毎回の授業時にはテキスト並びに配布プリントを必ず持参すること。

講義回数の3分の1以上を欠席した場合は，定期試験の受験資格を失うこととする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、接骨院における臨床経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

測定評価学実習		講義	非常勤講師 星野 亮磨
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12371405

1. 授業のねらい・概要

本学において将来の職業世界への関心を高め、柔道整復師として働くことの意義を見出すことをねらいとする。また、本学を通して身体の解剖学的、生理学的特徴とその機能を把握し、施術の判断や評価、整復固定処置等を理解することで外傷の早期回復、QOLの向上及び再発予防へ導くことの大切さを学ぶ。

2. 授業の進め方

これまで培ってきた臨床上の理学所見の取り方、処置、再発予防について各部位ごとに講義する。

3. 授業計画

1. 鎖骨部の損傷	9. 上肢の損傷
2. 肩関節部の損傷	10. 体幹部の損傷
3. 上腕部の損傷	11. 大腿部の損傷
4. 肩部の軟部組織損傷	12. 膝関節部の損傷
5. 肘関節部の損傷	13. 下腿部の損傷
6. 手関節部の損傷	14. 足関節の損傷
7. 手部の損傷	15. 体幹・下肢の損傷
8. 指部の損傷	16. レポート実施

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各授業内容に必要な機能解剖や各部位の外傷について予習しておく。復習については、前回の授業内容を配布プリントやノートを使って整理し疑問点を明確にしておく。この授業予習に必要な時間は2時間以上を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポート実施の際、解答例などを説明する。

6. 授業における学修の到達目標

本授業で説明する外傷の臨床所見の取り方、処置、再発予防について理解できるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

成績は、授業内で説明した内容を理解しているか評価する。医用画像の理解、測定評価、固定処置等を理解しているかレポートを実施する。（学期末のレポート80%、授業への貢献度・積極性など20%）

8. テキスト・参考文献

- ①包帯固定学 改訂2版 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②施術の適応と医用画像の理解 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ③必要に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

私語および携帯電話の使用や、他の生徒の受講に迷惑をかけること。また、授業回数の3分の1以上欠席した場合は評価の対象としない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、接骨院や整形外科における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

必修英語B		講義	教授 吉田 英二郎 講師 ジェリー・ブッシュ 講師 松本 秀樹 講師 村元 エリカ マリア	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコース・スポーツトレーナーコースの必修科目 スポーツマネジメントコース・スポーツトレーナーコースの教職科目 柔道整復師コースの教職科目 救急救命士コースの教職科目	科目ナンバリング	11110102 11510107 12510107 13510107	

1. 授業のねらい・概要 Course Aims

The aim of Core English is to increase students' ability to communicate in English about daily life topics and current events. This course also aims to provide a foundation for further English study, such as for the Eiken or TOEIC tests, or for traveling abroad.

2. 授業の進め方 Course Progression

Students will have Core English twice per week. They will be with the same classmates and have the same instructor for the whole year. In each class, students will engage in topic-based conversation, listening, grammar and vocabulary exercises aimed at improving their knowledge of English as well as their communications skills.

3. 授業計画 Course Schedule

Week	Week
1. Self-Introduction	1. Airport and Public Transportation
2. Time	2. The Human Body
3. Money and Shopping	3. Illness, Injuries, Symptoms, and Disabilities
4. Classroom Activities	4. Hospital and Pharmacy
5. School and Computers	5. Jobs and Working
6. Family and Life Events	6. Office and Factory
7. Daily Activities	7. Weather
8. Feelings	8. Energy, Pollution, and Natural Disasters
9. Places Around Town and Shops and Stores	9. The United States and Canada
10. Post Office and Library	10. The World and the Universe
11. Crime and Justice	11. Math and Science
12. House and Home	12. Writing
13. Food and Cooking	13. Explore, Rule and Invent
14. Restaurant and Fast Food	14. Film, TV and Music
15. Clothes, Shoes and Accessories	15. Sports and Recreation

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

Students should spend 20-30 minutes reviewing notes and materials from previous classes and preparing for the next lecture.

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

Each instructor will have their own method of evaluating and testing each student. All testing formats and procedures will be decided by each instructor.

6. 授業における学修の到達目標

- To develop English communication skills.
- To use English to talk about various topics.
- To study with a native-speaker or fluent Japanese teacher.
- To learn English by using English.
- To enjoy English.

7. 成績評価の方法・基準

Grades will be based on: Test score 60% Class participation 20% Quizzes and assignments 20%

8. テキスト・参考文献

Classroom set textbooks, reference and other materials will be announced by each instructor.

9. 受講上の留意事項

Between classes, it will be beneficial to students if they attempt to use authentic English through reading and listening to various media sources on topics that suit their interests.

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

This course does not require any correspondence.

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

As described in the subject column above.

スポーツ産業論		講義	講師 菅谷 美沙都
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの選択必修科目 スポーツトレーナーコースの専門選択科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目 教職科目	科目ナンバリング	11312206 12220213 13220206 11532203 12532203 13532203

1. 授業のねらい・概要

私たちにとってスポーツは非常に身近なものとなり、スポーツを楽しむ場所や機会は飛躍的に増大した。スポーツ参加の機会は増えるとともに、私たちはスポーツにおいても消費行動を展開するようになった。この授業では、スポーツ観戦やスポーツ関連商品の消費行動から、プロスポーツのクラブビジネス、プロリーグの構造などスポーツ産業全般を理解するとともに、スポーツ産業の諸領域の今日的な課題を議論する。将来、スポーツ関連の仕事に携わりたいと考えている学生にとって、スポーツの価値を活かし、スポーツ産業界で仕事を創り出すとはどういうことなのか、具体的なイメージを抱けるようになることを目指す。

2. 授業の進め方

授業ではレジュメを配布する。また、隔回授業最後にリアクションペーパーを提出し、授業内容の理解度を確認する。

3. 授業計画

1. オリエンテーション（授業の進め方、成績と評価について等） 2. スポーツ産業とは（スポーツ産業の領域、スポーツ市場の現状） 3. スポーツ用品産業 4. スポーツ施設産業 5. スポーツサービス情報産業（スポーツとメディア） 6. フィットネスクラブのマネジメント（フィットネス産業の現状、サービス特性） 7. クラブ事業のマネジメント（チーム、クラブ、球団、ステークホルダー） 8. オリンピックとスポーツ産業界（オリンピック開催を巡る諸問題）	9. 日本のプロスポーツ①（リーグの構造） 10. 日本のプロスポーツ②（プロ野球のマネジメント） 11. スポーツスポンサーシップ 12. 権利ビジネスとしてのスポーツ（スポーツ選手の契約、企業との権利関係） 13. スポーツファンを知る（みるスポーツとしてのビジネス展開） 14. 海外のプロスポーツ（欧州の事例） 15. 大学スポーツの産業化を考える／まとめ
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業時に配布するレジュメや資料等を復習し、疑問点を明確にしておくこと。また、次回の講義内容に関する時事問題（新聞記事などを事前に配布することもある）を自ら調べること。これらの自主学修には2時間以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の直後、解答のポイントや評価の基準に関する説明を行う。また、中間レポートやリアクションペーパーについては、授業内で優秀な回答例を紹介し評価の基準等の解説を行う。

6. 授業における学修の到達目標

スポーツ産業の成り立ちや全体像を理解し、個別具体的なスポーツ産業領域の現状を理解する。

また、スポーツ産業の諸領域における今日的課題について理解を深め、論理的に自分の意見を記述できるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験（50％）、中間レポート及びリアクションペーパー（30％）、授業態度（20％）をみて総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

教科書は特に指定しない。適宜、資料・プリントを配布する。

参考文献：原田宗彦 編著「スポーツ産業論第7版」（杏林書院，2021）

9. 受講上の留意事項

特になし。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

生体力学の基礎		講義	准教授 中川 剣人	
科目カテゴリ	スポーツトレーナーコースの選択必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	11301208 12220201 13312201	

1. 授業のねらい・概要

力学とは、物体の運動とその物体に働く力を考察する学問である。メジャーを使って遠投距離を測る、体重計に乗って体重を量る、ストップウォッチを使ってスプリント走のタイムを計る—これらはすべてヒトの身体やパフォーマンスに対して物理量的指標を用いて評価を行うものであり、我々は日常的に、力学の概念に基づいた身体活動の観察や分析を行なっている。本授業では、初等力学の初学者も対象に含めて、生体の運動やその力学的特性を論じるために必要となる数値表現および力学法則の基礎について学習を進める。また、「基礎運動学」で学習する内容とあわせて、発展的に「バイオメカニクス」を学習するための基礎を固める。

2. 授業の進め方

主にスライド呈示による講義形式で授業を進める。また、自身を対象とした簡易な身体測定実習、およびその測定データを用いた力学計算演習も行う。また、毎回の授業中に小テストを実施し、理解度を測る。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. 自由落下と放物運動②（斜方投射）
2. 単位・記号・文字・表記法	10. 角度・角速度・角加速度
3. 座標・関数	11. エネルギー・仕事・パワー
4. スカラー・ベクトル	12. 運動量・保存則
5. ベクトルの積	13. 剛体の運動・回転運動
6. 変位・速度・加速度・躍度	14. 生体力学計算演習
7. 力と運動の法則	15. 総復習
8. 自由落下と放物運動①（重力加速度）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前回までの授業ノートの見直しに1時間程度、また課題が出された場合はさらに1時間程度以上の準備学修を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

期末試験期間中の同時限内において、解答のポイントや出題の意図について全体説明を行い、個別質問にも応じる。

6. 授業における学修の到達目標

基本的な数値表記法や力学概念を理解し、諸々の生体活動に対して妥当かつ正確な力学的説明を行えるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

受講態度と参加・活動状況（30%程度）、期末試験（70%程度）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

「スポーツバイオメカニクス」（宮西智久・岡田英孝・藤井範久：化学同人）を参考図書とする。

9. 受講上の留意事項

初等力学の初学者を想定した授業内容であるため、これまでの物理学や力学関連科目の学習状況は問わない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、国立研究機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

基礎運動学		講義	准教授 中川 剣人	
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目、スポーツトレーナーコースの 選択必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目		科目ナンバリング	11321201 12220212

1. 授業のねらい・概要

運動学は、ヒトや動物の身体運動に関する学問領域であり、解剖学と生理学の理論に基づいてからだの動き方・使い方を観察し、その機能および機序について探求するものである。また近年では、心理学、機械学、情報学などの横断的な知見と融合しながら、運動の制御、学習、発達といった認知神経科学的課題へのアプローチも進む。本授業では、これらの基礎となるヒトの解剖学的な構造と機能について学習し、そのうえでより複雑な運動行動や身体動作に対して運動学的視点からの観察力を養成することを目指す。

2. 授業の進め方

指定テキストにそって、主にスライド呈示による講義形式で授業を進める。また機能解剖を対象とする回では、解剖図の書き写しを課し、関係する理論概念や専門用語に関する説明を求めることがある。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. 下肢の機能解剖②（関節構造）
2. 運動学の対象と歴史／位置と方向の表現	10. 下肢の機能解剖③（関節運動）
3. 細胞と組織／運動器の構造と機能	11. 体幹の機能解剖①（骨格）
4. 神経系と反射／感覚器の構造と機能	12. 体幹の機能解剖②（筋）
5. 上肢の機能解剖①（骨格・筋・神経）	13. 体幹の機能解剖③（脊柱の運動）
6. 上肢の機能解剖②（上腕と前腕の関節運動）	14. 姿勢の制御／歩行と走行
7. 上肢の機能解剖③（手指の関節運動）	15. 総復習
8. 下肢の機能解剖①（骨格・筋・神経）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前回までの授業ノートの見直しに 30 分程度、また課題が出された場合はさらに 1 時間程度以上の準備学修を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

期末試験期間中の同時限内において、解答のポイントや出題の意図について全体説明を行い、個別質問にも応じる。

6. 授業における学修の到達目標

運動器・感覚器の基本的な構造と機能を理解し、身体運動に対して機能解剖学的表現を用いて説明できるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

受講態度と参加・活動状況（30%程度）、期末試験（70%程度）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

「基礎運動学第 6 版（補訂）」（中村隆一・斎藤宏・長崎浩：医歯薬出版）を指定テキストとする。

9. 受講上の留意事項

特になし。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、国立研究機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

道徳教育の指導法		講義	教授 平沢 信康
科目カテゴリー	教 職 科 目	科目ナンバリング	11520301 12520301 13520301

1. 授業のねらい・概要

教育基本法と学校教育法に定められた教育の根本精神をふまえて、学校の教育活動全体を通じて行うことを原理とする我が国における道徳教育の基本方針の確認に努め、学校における道徳教育の目標および内容を理解する。

そのうえで、新設された「特別な教科 道徳」の教育課程上の位置づけを把握し、その目標と内容および指導方法・指導計画等を「学習指導要領」に即して理解する。

併せて、講義を通じて道徳に対する自覚と感受性を涵養するとともに、我が国における道徳教育の歴史的変遷と伝統を理解する。

2. 授業の進め方

基本的には、講義内容の概要を記した講義要旨（レジュメ）にそって解説する。必要に応じて PowerPoint を活用してテーマに関係する画像や文字資料をスクリーンに映して紹介し、そのビジュアルな参考情報を以てレクチャーの理解を補う。また『中学校学習指導要領』の道徳の部分の読み合わせを行う。

適宜、口頭試問を行い、受講者の理解の定着を確認・促進しながら進める。

なお、新型コロナウイルスの感染状況によっては遠隔授業とする場合がある。

3. 授業計画

1. 「道徳」の定義・イメージ — 諺、標語、モラルとモラル	8. 21 世紀日本の道徳教育政策と課題 — いじめ、自殺、情報モラル、公共性
2. 徳・徳育・道徳教育	9. マナーについて — 道徳的規範意識の涵養
3. 教育基本法と学校教育法および学習指導要領にみる道徳教育の指針	10. 躰（しつけ）と礼儀作法・エチケット
4. 歴史と国際比較の観点からみた道徳教育 — モラルに関する伝統文化	11. 道徳的实践力について — 「生きる力」を求めて: virtue の古義
5. 前近代日本の道徳教育の伝統と指導法	12. 生徒の成長に伴う道徳の判断基準の変化 — コールバークの道徳性発達理論を中心に
6. 近代日本の道徳教育政策と指導法 — 「修身」の登場・変遷・終焉	13. 道徳教育の指導計画—学校現場における工夫と取り組み
7. 戦後の日本における道徳教育政策と若者の間の道徳	14. 道徳教育の実践—方法と教材選択および評価について
	15. 「道徳科」の学習指導案作成と模擬授業

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

講義要旨の pdf 版を事前に配信するので、その該当ページを次回講義までに読んで予習（30 分程度）しておくこと。また講義終了後は内容を復習し、気になった事項や人名についてはスマホ等で検索して確認や学習の深堀りをしておくこと（30 分程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回の講義終了時に提出してもらう「感想文」に対して、誤字の添削を含めたコメントを付して返却するので、注視されたい。

学期末試験の終了後、最高点や注意を喚起すべき事項（多かった誤答など）について指摘した講評を配信する。

6. 授業における学修の到達目標

1. 道徳に関連する言葉（外来語や外国語を含む）を学び、それらの意味を理解し、正しく読み書きができる。

2. 世界の道徳（教育）の伝統文化について，東洋と西洋を比較して概略その特徴を理解できる。
3. 我国の道徳教育の歴史の概要を理解し説明できる。その際，長らく影響のあった中国の儒教思想について基本的な教養を身に付ける。
4. 近代日本の道徳教育政策史について概略説明ができる。
5. 学校教育における「道徳」教育の要となる「道徳科」の目標と内容を理解する。
6. 道徳教育を指導するための素養として，道徳的な内容を含む伝統的な諺・格言・箴言を学んで暗唱できる。
7. 道徳教育の指導案を構想・作成し，模擬授業の試行を通して，必要最低限の実践的な指導力を身に付ける。

7. 成績評価の方法・基準

レポート（30％），授業への取り組み姿勢・貢献度・積極的な受講態度（30％），学期末試験の成績（40％）。
なお，新型コロナウイルス感染の再拡大が深刻化する場合は，学期末試験を実施せず，期末レポートに替える。

8. テキスト・参考文献

テキスト：自作プリント

参考文献：井ノ口淳三編『道徳教育「改訂版」』（学文社，平成28年）

文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』（教育出版，平成29年7月）

9. 受講上の留意事項

事前に「教育史」（1年次後期開講）を受講しておくことが望ましい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

社会貢献実践		演習	教授 植松 盛夫
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの教養選択科目、スポーツトレーナーコースの教養選択科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11220136 12220153 13220144

1. 授業のねらい・概要

大学が認定する団体（公共機関、民間団体、NPOなど）でのボランティア活動等に参加することによって、地域社会になじみ、関わり、それを深め、地域課題を発見するというプロセスを通じて、問題解決に向けた構想力と実践力を身につけることをねらいとする。

このような学びは、現実にある問題に直面した際に、既存の「マニュアル」にない方法で解決を導くトレーニングであり、今後の学生諸君のライフ・キャリアにおいて重要な力となる。これはまた、現在、本学が積極的に取り組んでいるアクティブ・ラーニング（能動的な学習）の1つでもある。

以上の趣旨から、本講義は、教員が一方向的に学生に知識の伝達をする講義スタイルではなく、学生が自発的に取り組み、グループ学習や現地実習、ディスカッション、結果報告会（プレゼンテーション）などを行うことにより、単位が認定されることになる。

2. 授業の進め方

実習では、学生が希望する実習先の活動期間および活動事項について、大学が認定するボランティア機関の認定を受けてから教学課に届ける。たとえば、下記のようなボランティア活動が考えられる。

- ① 県内の行政との協働
- ② 地域の商工会との協働
- ③ 地域イベント（祭り等）へのボランティア（県、市町村など）
- ④ 関連する学会やボランティア活動の発表会への参加
- ⑤ 県内大学と連携するボランティア活動
- ⑥ 地域NPO・ボランティア団体への参加
- ⑦ その他の地域活動への参加

3. 授業計画

1. ボランティア活動の基礎（講義）	9. ボランティア実習（学習支援）
2. ボランティアの歴史と諸概念（講義）	10. ボランティア実習（高崎祭）
3. ボランティアの実践事例（講義）	11. ボランティア実習（子ども食堂）
4. 災害ボランティアについて（講義）	12. ボランティア実習（しんまち商工祭）
5. 活動計画書の作成（グループ活動・演習）	13. ボランティア実習（白鳥見守り隊）
6. ボランティア活動とSDGs（講義）	14. 活動報告書の作成（演習）
7. 災害に強いまちづくり（講義）	15. 活動結果報告会（プレゼンテーション）
8. ボランティア実習（新町七夕まつり）	（※ボランティア実習については例示である）

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- ・講義計画の講義テーマについて参考文献及び配布資料を講義までに読んでおくこと（30分程度）。
- ・5日間以上（30時間以上）の外部実習を行い、実習後に「社会貢献実践実習報告書」を作成（1件について60分程度）、提出し、それに基づいて発表（発表のための資料作成に120分程度）する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

「社会貢献実践実習報告書」はコメントをつけて返却する。

活動結果報告会では、講評を行う。

6. 授業における学修の到達目標

- ・一市民として社会貢献実践に参加する意義や活動のなかでの自己の役割やありかたについて理解し、説明できるようになる。
- ・社会貢献実践の学外実習(5日間以上)を行い、大学での学びを実習現場で活用できるようになる。
- ・実習結果と振り返りを実習報告書に報告・提出し、次回の社会貢献実践の学外実習に応用できるようになる。
- ・社会貢献実践の活動結果報告会で1年間の実習結果を発表し、その意義・役割・課題を理解し、活用できるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

活動計画書、実習報告書などの提出課題内容(60%)と活動報告会での発表(40%)により評価する。

8. テキスト・参考文献

参考文献：田村正勝『ボランティア論-共生の理論と実践』ミネルヴァ書房，2009年
前林清和・中村浩也編著『SDGs時代の社会貢献活動』昭和堂，2021年

9. 受講上の留意事項

学校行事として「学研災」の学生傷害保険が適用されるが、その条件として実習先や日程を大学側に届け出て、必ず承認を得ることが必要である。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

ストレングス・コンディショニング 特講		講義	教授 柳澤 修
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門選択科目, スポーツトレーナーコースの専門選択科目, 柔道整復師コースの教養選択科目, 救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11322401 12220401 13220401

1. 授業のねらい・概要

NSCA (National Strength and Conditioning Association) の認定資格である CSCS (Certified Strength & Conditioning Specialist: 認定ストレングス&コンディショニングスペシャリスト) の受験対策講義である。本授業のねらいは, CSCS 資格認定試験の受験に必要な基本的な知識の獲得である。本講義を通じて, 「運動科学の概念と適用」「測定と評価」「エクササイズテクニック」「プログラムデザイン」, そして「構成と運営」に関する基本的な事項を学ぶ。

2. 授業の進め方

講義と問題演習を組み合わせる授業を進めていく。

3. 授業計画

1. 筋系, 神経系, 呼吸循環系の構造と機能	9. ウォームアップとストレッチング
2. 運動とエネルギー供給系	10. レジスタンスエクササイズテクニック
3. トレーニングと内分泌系	11. 無酸素性運動の処方
4. レジスタンスエクササイズのバイオメカニクス	12. 有酸素性運動の処方
5. トレーニングに対する適応	13. ピリオダイゼーション
6. 競技と心理学	14. リハビリテーションとリコンディショニング
7. トレーニングと栄養	15. 組織と運営
8. テストと評価	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

今回のテーマに該当する章 (NSCA 決定版 ストレングストレーニング&コンディショニング) を熟読しておくこと。なお, この準備学修には2時間以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

問題演習の解説を通じて, トレーニング科学に関する知識をフィードバックする。

6. 授業における学修の到達目標

CSCS 資格認定試験の受験に必要な基本的な知識を獲得すること。

7. 成績評価の方法・基準

授業内の問題演習で評価する (100%)。成績評価にあたっては, 授業回数の 2/3 以上の出席を前提とする。

8. テキスト・参考文献

NSCA 決定版 ストレングストレーニング&コンディショニング

9. 受講上の留意事項

CSCS を受験する学生が履修の対象となる。受講までに「NSCA 決定版 ストレングストレーニング&コンディショニング」を熟読しておくこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、国内トップアスリートを対象とした研究機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

指導実習 I		実習	教授 柳澤 修
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目, スポーツトレーナーコースの専門選択科目	科目ナンバリング	11322301

1. 授業のねらい・概要

NSCA (National Strength and Conditioning Association) の認定資格である CSCS (Certified Strength & Conditioning Specialist: 認定ストレングス&コンディショニングスペシャリスト) に求められる運動指導の基本的事項を学ぶ。加えて、運動指導に関連した運動パフォーマンスの測定方法および評価方法を学習する。

2. 授業の進め方

授業はトレーニングルームで実技を中心に展開する。最後に、エクササイズプログラムに基づいたプレゼンテーションを実施する。

3. 授業計画

1. 柔軟性の測定評価と指導	9. プライオメトリックス（下肢）の実技
2. 無酸素性能力の測定評価と指導	10. プライオメトリックス（下肢）の指導法
3. 有酸素性能力の測定評価と指導	11. スピード・アジリティの実技
4. スピード・敏捷性の測定評価と指導	12. スピード・アジリティの指導法
5. ウォームアップとストレッチの実技	13. 有酸素系エクササイズの実技
6. ウォームアップとストレッチの指導法	14. 有酸素系エクササイズの指導法
7. プライオメトリックス（上肢）の実技	15. プレゼンテーション
8. プライオメトリックス（上肢）の指導法	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

今回のテーマに関する基本的な理論と実技を予習しておくこと。なお、これらの準備学修には、1 時間程度が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

事前学習の課題に対しては、授業冒頭で解説する。エクササイズの実施時や実習レポート提出時に、出題の意図などを説明する。

6. 授業における学修の到達目標

競技力向上や健康増進、障害予防を目的としたトレーニングを安全且つ効果的に指導できるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

プレゼンテーション（30%）と実習レポート（70%）にて評価する。成績評価にあたっては、授業回数の 2/3 以上の出席を前提とする。

8. テキスト・参考文献

NSCA 決定版 ストレングストレーニング&コンディショニング

9. 受講上の留意事項

- 1) NSCA の認定資格である CSCS を受験する学生が履修の対象となる。
- 2) 運動生理学, バイオメカニクス, およびトレーニングの科学的基礎を受講済み, もしくは履修中の学生を受講の対象とする。
- 3) トレーニングルームでの実技が中心となるため, 実技にふさわしい服装 (室内用運動シューズを含む) をすること。

と。

- 4) トレーニング実技は危険を伴うこともあるので、安全上の注意事項に留意して受講すること。
- 5) 実技に積極的に関わろうとする姿勢を求める。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、国内トップアスリートを対象とした研究機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

指導実習Ⅱ		実習	教授 柳澤 修	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門選択科目, スポーツトレーナーコースの専門選択科目	科目ナンバリング	11322302	

1. 授業のねらい・概要

NSCA (National Strength and Conditioning Association) の認定資格である CSCS (Certified Strength & Conditioning Specialist: 認定ストレンクス&コンディショニングスペシャリスト) に求められる運動指導の基本的事項を通じて学ぶ。

2. 授業の進め方

授業はトレーニングルームで実技を中心に展開する。最後に、エクササイズプログラムに基づいたプレゼンテーションを実施する。

3. 授業計画

1. 肩のレジスタンストレーニングの実技	9. 下腿のレジスタンストレーニングの実技
2. 肩のレジスタンストレーニングの指導法	10. 下腿のレジスタンストレーニングの指導法
3. 上腕のレジスタンストレーニングの実技	11. 腹部のレジスタンストレーニングの実技
4. 上腕のレジスタンストレーニングの指導法	12. 腹部のレジスタンストレーニングの指導法
5. 前腕のレジスタンストレーニングの実技	13. 背部のレジスタンストレーニングの実技
6. 前腕のレジスタンストレーニングの指導法	14. 背部のレジスタンストレーニングの指導法
7. 大腿のレジスタンストレーニングの実技	15. プレゼンテーション
8. 大腿のレジスタンストレーニングの指導法	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

今回のテーマに関する基本的な理論と実技を予習しておくこと。なお、これらの準備学修には、1時間程度が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

事前学習の課題に対しては、授業冒頭で解説する。エクササイズの実施時や実習レポート提出時に、出題の意図などを説明する。

6. 授業における学修の到達目標

競技力向上や健康増進、障害予防を目的としたトレーニングを安全且つ効果的に指導できるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

プレゼンテーション（30%）と実習レポート（70%）にて評価する。成績評価にあたっては、授業回数の2/3以上の出席を前提とする。

8. テキスト・参考文献

NSCA 決定版 ストレングストレーニング&コンディショニング

9. 受講上の留意事項

- 1) NSCA の認定資格である CSCS を受験する学生が履修の対象となる。
- 2) 運動生理学, バイオメカニクス, およびトレーニングの科学的基礎を受講済み, もしくは履修中の学生を受講の対象とする。
- 3) トレーニングルームでの実技が中心となるため, 実技にふさわしい服装 (室内用運動シューズを含む) をすること。

と。

- 4) トレーニング実技は危険を伴うこともあるので、安全上の注意事項に留意して受講すること。
- 5) 実技に積極的に関わろうとする姿勢を求める。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、国内トップアスリートを対象とした研究機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

測定評価学		講義	非常勤講師 星野 亮磨
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12361401

1. 授業のねらい・概要

本学において将来の職業世界への関心を高め、柔道整復師として働くことの意義を見出すことをねらいとする。また、本学を通して身体の解剖学的、生理学的特徴とその機能を把握し、施術の判断や評価、整復固定処置等を理解することで外傷の早期回復、QOLの向上及び再発予防へ導くことの大切さを学ぶ。

2. 授業の進め方

これまで培ってきた臨床上の理学所見の取り方、処置、再発予防について各部位ごとに講義する。

3. 授業計画

1. 鎖骨部の損傷	9. 上肢の損傷
2. 肩関節部の損傷	10. 体幹部の損傷
3. 上腕部の損傷	11. 大腿部の損傷
4. 肩部の軟部組織損傷	12. 膝関節部の損傷
5. 肘関節部の損傷	13. 下腿部の損傷
6. 手関節部の損傷	14. 足関節部の損傷
7. 手部の損傷	15. 体幹・下肢の損傷
8. 指部の損傷	16. 試験実施

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各授業内容に必要な筋肉、関節の機能解剖や各部位の外傷について予習しておく。復習については前回の授業内容を配布プリントやノートを使って整理し疑問点を明確にしておく。この授業の予習に必要な時間は2時間以上を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答などを説明する。

6. 授業における学修の到達目標

本授業で説明する外傷の臨床所見の取り方、処置、再発予防について理解できるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

成績は、授業内で説明した内容を理解しているか評価する。損傷の判断や評価、整復固定処置や後療法などを理解しているか試験する。（学期末の試験 80%、授業への貢献度・積極性など 20%）

8. テキスト・参考文献

- ①柔道整復学・理論編 改訂7版 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②柔道整復学・実技編 改訂2版 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ③必要に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

私語および携帯電話の使用や、他の生徒の受講に迷惑をかけること。また、授業回数の3分の1以上欠席した場合は評価の対象としない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、接骨院や整形外科における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

教育課程論		講義	准教授 堤 ひろゆき
科目カテゴリー	教職科目	科目ナンバリング	11520203 12520203 13520203

1. 授業のねらい・概要

現在の学習指導要領の特徴とそこで目指されている学校教育像を理解したうえで、現代のさまざまな教育問題に対して学校教育が果たすべき役割について、具体的なカリキュラム開発の方法論に基づく考察を行えるようになることを目指す。そのため、教育課程の意義と役割および現代的課題を概観した後、教育課程編成の方法論や学習指導要領の歴史の変遷について解説する。基礎的な知識と概念の修得を進めつつ、実際の事例に基づいて、カリキュラムについての理解を深め、自身の言葉でも表現できるようになる。

2. 授業の進め方

レジュメおよび参考資料を配布し、基本的には講義形式で進めていく。また具体的な教育実践を扱った映像資料や文献などを紹介し、その内容について受講者全員で議論する時間も多く設けたい。

3. 授業計画

1. 教育課程の意義と役割	9. 教育課程編成の方法①：基本方針と編成上の留意点
2. 現代の教育問題と教育課程①：学力とは何か	10. 教育課程編成の方法②：教育課程実施上の課題
3. 現代の教育問題と教育課程②：教師の専門性	11. 教育課程の評価方法
4. 学習指導要領の変遷①：戦後から現在まで	12. 潜在的カリキュラムと学校文化
5. 学習指導要領の変遷②：ゆとりと学力	13. 教育課程編成の現代的課題
6. 2008 年学習指導要領の特徴	14. 教育課程編成の実際と事例検討
7. 教育課程編成の基礎理論	15. 講義のまとめ
8. 2017 年学習指導要領の特徴	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の講義を受講する前に、前回の内容を復習しておく。さらに、毎日これまでの講義内容と関連するニュースを探し、読んでおく。なお、これらの準備学習には2時間以上を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

課題提出前に解答のポイントを説明する。課題後には講評を公開する。

6. 授業における学修の到達目標

教育課程を編成するための方法論や教育評価のあり方、学習指導要領の変遷と現在の学習指導要領の特徴などを十分に理解したうえで、現代のさまざまな教育問題について、教育課程という観点から考察できるようになることが本講義の到達目標である。

7. 成績評価の方法・基準

受講態度・講義中の小レポートなどによる平常点（30%）、期末課題（70%）の成績を総合的に加味して評価する。

8. テキスト・参考文献

『中学校学習指導要領』、『中学校学習指導要領解説 総則編』、『高等学校学習指導要領』、『高等学校学習指導要領解

説 総則編』(いずれも文部科学省のウェブサイトからのダウンロードも可)の最新のもの。参考文献は講義時に配布する。

9. 受講上の留意事項

現実の教育との関連を意識し、常に最新の情報に目配りするとともに、明確な目的意識をもち、教職に就くことを強く希望する学生の受講を望む。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツ概論①②		講義	教授 小笠原 正志	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目 スポーツトレーナーコースの必修科目 教職科目 柔道整復師コースの必修科目 教職科目 救急救命士コースの必修科目 教職科目	科目ナンバリング	11120107 11531110 12120104 12531110 13120103 13531110	

1. 授業のねらい・概要

古来よりスポーツは人生を豊かにさせる「遊び」として生活に溶け込んできた。人生 100 年時代となった現代社会において、スポーツは、長い人生を元気に楽しく過ごす生活ツールとしての比重が増し、その価値が高まっている。私たち一人ひとりはスポーツを形づくり（スポーツへの社会化）、スポーツは私たち一人ひとりを形づくる（スポーツの社会化）。政治・戦争・経済・宗教・人権問題・ドーピングなど、さまざまな矛盾を抱えた社会のなかでスポーツがこれまで歩んできたプロセスを学ぶことは、これからのスポーツと人間とのより良い関係性を論じる上で欠くことができないであろう。そこで、本講義では、主に近代オリンピックを題材として、スポーツの発展過程を社会の歴史的変化と絡めてスポーツの持つ役割や意味を理解し、スポーツを幅広く学習する。

2. 授業の進め方

スポーツの起源や概念を理解し、スポーツについてより深く学習する。関連のテキスト・資料を用いて、スポーツを広く様々な視点から捉えるとともに、必要に応じて映像を使用し、テーマに沿ったディスカッションなどを交えながら講義を進めていく。また、各回に行う課題の実施により、講義の理解度を確認しながら展開していく。

3. 授業計画

1. ガイダンス、講義の概要 スポーツの概念	9. 戦前のオリンピックにおける日本の活躍
2. イギリス発祥の近代スポーツの起源とその発展	10. 戦後のオリンピックとオリンピック東京招致
3. フットボールから派生したサッカー・ラグビー	11. 高度経済成長と 1964 東京オリンピック
4. アメリカ発祥の近代スポーツの起源とその発展	12. 近代オリンピックの抱える矛盾 (人権問題・テロリズム・肥大化・ボイコット)
5. 日本古来のスポーツと近代化	13. オリンピックの商業化 (1984 ロス五輪)
6. 日本の近代スポーツの普及	14. 近代オリンピックの発展
7. 古代オリンピック	15. 講義のまとめ
8. オリンピックの復興と近代オリンピック	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでにテキストを活用して復習しておくこと。これらの準備学修には、1 時間程度が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

各回に行う課題については数例を紹介するとともに、期末レポートについては、実施後に解答などを掲示板等に掲示する。

6. 授業における学修の到達目標

本講義では、現代社会におけるスポーツの在り方について学習し、スポーツの意義や文化的な価値を理解するとともに、スポーツを様々な視点から考える力を身につけることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

講義への参加意欲ならびに各回の課題への取り組み状況（50%）、および期末レポート（50%）により総合的に評価す

る。

8. テキスト・参考文献

小笠原正志：健康生活とスポーツ（SIS, 2024）

参考図書：「公認スポーツ指導者養成テキスト 共通科目Ⅰ」（財団法人 日本体育協会）

9. 受講上の留意事項

特になし。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、企業における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツマーケティング		講義	講師 菅谷 美沙都	
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの選択必修科目, スポーツトレーナーコースの専門選択科目	科目ナンバリング	11312207	

1. 授業のねらい・概要

オリンピックの放映権料収入やプロスポーツにおけるスポンサーシップ等、現代のスポーツではビジネスの効率性を高める先進的なマーケティングが不可欠になっている。スポーツマーケティングとは、単に収益性を求めるビジネス手法ではなく、スポーツの価値向上や社会的課題に対する貢献といった考え方が根幹にあることを抑える必要がある。本講義では、スポーツマーケティングの基礎理論を学び、スポーツ文化の発展に資するスポーツマーケティングの在り方を考える。なお、「スポーツマネジメント論」を履修していることが望ましい。

2. 授業の進め方

授業前半（第1回～第5回）は講義形式で行い、資料やレジュメを配布する。授業後半（第6回以降）は、実際のスポーツマーケティングを想定したグループワークを実施し、最終的にグループごとにプレゼンテーションを行う。

3. 授業計画

1. オリエンテーション（授業の進め方、成績と評価について等）	9. スポーツマーケティングの実際④（調査実施2，データ入力）
2. スポーツマーケティングの定義・特性・本質	10. スポーツマーケティングの実際⑤（データ入力の確認）
3. スポーツプロダクト	11. スポーツマーケティングの実際⑥（データ分析）
4. スポーツ消費者の理解	12. スポーツマーケティングの実際⑦（データの考察）
5. マーケットリサーチの考え方	13. グループプレゼンテーションの作成
6. スポーツマーケティングの実際①（企画設定・調査のデザイン）	14. グループプレゼンテーション①
7. スポーツマーケティングの実際②（調査票の作成）	15. グループプレゼンテーション②・まとめ
8. スポーツマーケティングの実際③（調査実施1）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

グループワークとプレゼンテーションにおいては、メンバーで議論を重ねてより良い企画を考案するよう努めること。これらの自主学修には2時間以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

グループプレゼンテーション実施時に口頭で評価を伝える。

6. 授業における学修の到達目標

スポーツマーケティングの基礎理論を理解し、スポーツ消費者の分析やマーケットリサーチの手法を身につける。

7. 成績評価の方法・基準

提出課題（40%）、グループワークへの取り組み姿勢（40%）、プレゼンテーション（20%）から総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

教科書は特に指定しない。適宜、資料・プリントを配布する。

9. 受講上の留意事項

授業時間内で分析が終わらない場合は、授業時間外にグループで集まって作業等を進めること。また、グループワークではエクセル及びパワーポイントを使用するので、各自使えるようにしておくこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無
該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連
上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

保健体育科教育法 A		講義	非常勤講師 山野 悟
科目カテゴリー	教職科目	科目ナンバリング	11531205 12531205 13531205

1. 授業のねらい・概要

体育科教育において求められる教育目標および学習の内容について、基礎的な概念をはじめ時代の背景とともにかわりゆく具体的な中身の変遷を理解するとともに、今日的な社会状況における体育科教育のあり方について学習する。また、体育教師として必要とされる資質や能力を培うと同時に、体育科教育の学習指導について、基本的な考え方をふまえ、教材づくりや学習指導案の作成など、実践的な授業づくりを中心に理解を深める。

2. 授業の進め方

指定テキストおよび関連の資料を用いて、体育科教育の基本理論から具体的な体育授業の目標および内容を検討し、講義を進めていく。毎時間レポートを提出し、理解度を確認しながら講義を展開していく。

3. 授業計画

1. 講義概要説明（オリエンテーション）	9. 体育科教育における検討課題（1） （体力・運動能力低下との関連性）
2. 体育科教育とは何か	10. 体育科教育における検討課題（2） （今日的な体育授業の課題とは）
3. 「体育授業」の変遷について（1） （重点目標の変遷）	11. 体育科教育における検討課題（3） （体育授業におけるできるとわかる）
4. 「体育授業」の変遷について（2） （教育課程の改善）	12. 指導計画の作成（1） （学習指導案作成の要点）
5. 体育科教育における目標と内容（1） （目標の構造と意義）	13. 指導計画の作成（2） （学習指導案の具体的な検討）
6. 体育科教育における目標と内容（2） （学習の対象運動とその変遷）	14. 学習評価を考える（評価の意義・内容・方法）
7. 体育科教育における目標と内容（3） （学習の内容）	15. 講義のまとめ
8. 体育科教育における目標と内容（4） （運動の特性）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各講義の際に示した内容について、テキストとして使用している学習指導要領解説の該当箇所を参照しておくこと。また、次の講義に向け、授業時に配布する資料を復習しておくこと。これらの準備学修には1時間程度が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎時間のレポート課題については、課題を提示した次週に要点を解説する。期末レポートについては、ポイントおよび出題意図をレポート回収後に教室にて説明する。

6. 授業における学修の到達目標

本講義では、体育科教育の教育目標および学習内容を理解し、体育教師として求められる教科内容の理解や授業づくり、学習評価について実践できる力を身につけることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験としてのレポート(60%)、毎時間レポート課題への取り組み(30%)、講義への参加意欲、活動状況(10%)によって総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト：文部科学省 「中学校学習指導要領解説」（保健体育編） 東山書房
「小学校学習指導要領解説」（体育編） 東洋館出版社
参考文献：文部科学省 「高等学校学習指導要領」 東山書房
「中学校学習指導要領」 東山書房
「高等学校学習指導要領解説」（保健体育／体育編） 東山書房

9. 受講上の留意事項

中学校・高等学校（保健体育）の**教員免許取得**を目指し、意欲的に取り組む学生の受講を望む。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は中等教育における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

保健体育科教育法B		講義	非常勤講師 山野 悟
科目カテゴリー	教職科目	科目ナンバリング	11531206 12531206 13531206

1. 授業のねらい・概要

体育授業の実践場面、学習の展開などを構造的に把握するとともに、各運動領域における教材の特性を理解し、授業の指導計画や進め方などを学習する。具体的には、授業づくりの基本となる学習指導案の作成をはじめ、各運動領域・種目における実際の授業場面を想定した模擬授業を実施し、教師としての実践力を身につける。

2. 授業の進め方

指定テキストおよび関連の資料を用いて、体育科教育の授業づくり、指導計画および学習指導案の作成について講義を進めていく。各運動領域における指導案を作成し、実践的な授業づくりを想定するとともに、模擬授業として実際に授業を実施しながら指導法について議論を深めながら展開する。

3. 授業計画

1. 講義概要説明（オリエンテーション）	10. 学習指導案の作成及び模擬授業の実践（3） （短距離走・リレーの授業づくり）
2. 体育授業の構造（1） （体育授業の構成について）	11. 学習指導案の作成及び模擬授業の実践（4） （マット運動の授業づくり）
3. 体育授業の構造（2） （よい体育授業の条件）	12. 学習指導案の作成及び模擬授業の実践（5） （跳び箱運動の授業づくり）
4. 体育授業の学習指導（1） （体育授業における教材・教具論）	13. 学習指導案の作成及び模擬授業の実践（6） （ゴール型の授業づくり）
5. 体育授業の学習指導（2） （学習指導論、学習形態論）	14. 学習指導案の作成及び模擬授業の実践（7） （創作ダンスの授業づくり）
6. 体育授業の学習指導（3） （指導方略と指導技術）	15. 学習指導案の作成及び模擬授業の実践（8） （現代的なリズムのダンスの授業づくり）
7. 体育授業の観察・評価	
8. 学習指導案の作成及び模擬授業の実践（1） （体ほぐしの運動の授業づくり）	
9. 学習指導案の作成及び模擬授業の実践（2） （体の動きを高める運動の授業づくり）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各講義の際に示した内容について、テキストとして使用している学習指導要領解説の該当箇所を参照しておくこと。これらの準備学修には、1時間程度が必要である。また、模擬授業の実践の際に作成する学習指導案への取り組みや模擬授業を振り返るワークシート作成等の学修活動においては、1～2時間程度が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎時間のレポート課題については、課題を提示した次週に要点を解説する。期末レポートについては、ポイントおよび出題意図をレポート回収後に教室にて説明する。

6. 授業における学修の到達目標

本講義では、体育科教育の教育目標および学習内容を理解し、体育教師として必要とされる授業づくり、学習評価について実践できる力を身につけることを目標とする。また、より実践的な学習指導案を作成することを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験としてのレポート(60%)，毎時間レポート課題への取り組み(30%)，講義への参加意欲，活動状況(10%)によって総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

- テキスト：文部科学省 「中学校学習指導要領解説」（保健体育編） 東山書房
「小学校学習指導要領解説」（体育編） 東洋館出版社
「高等学校学習指導要領解説」 東山書房
- 参考文献：文部科学省 「高等学校学習指導要領解説」 東山書房
「中学校学習指導要領」 東山書房
「高等学校学習指導要領解説」（保健体育／体育編） 東山書房

9. 受講上の留意事項

中学校・高等学校（保健体育）の**教員免許取得**を目指し，意欲的に取り組む学生の受講を望む。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は，中等教育における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

保健体育科教育法C		講義	非常勤講師 新井 淑弘
科目カテゴリー	教職科目 教職科目 教職科目	科目ナンバリング	11531303 12531303 13531303

1. 授業のねらい・概要

中学校における保健体育科「保健分野」および高等学校における保健体育科科目「保健」に関する目標・内容・方法について学習を行う。保健学習を進めていく上で必要な知識を身につけるとともに、実際の指導に必要な学習指導案の書き方、指導方法の工夫などについて学ぶ。

2. 授業の進め方

主に講義形式で授業を進めます。保健学習を進めていく上で必要な知識や技術について学習を行った後に、学習指導案の作成を行う。

2. 授業計画

1. 保健教育の役割と概要 2. 学習指導要領内容と変遷 3. 保健学習の目標と課題 4. 総合的な学習と保健教育 5. 保健学習における授業形態 6. 「保健分野」の学習内容 7. 「保健分野」の学習内容の系統性（小，中，高校にまたがる系統性と関連教科） 8. 学習指導案の書き方①（概要）	9. 学習指導案の書き方②（各項目について） 10. 保健の授業の進め方 11. 授業研究・教材研究の進め方 12. 授業評価の方法と実際 13. 授業改善の方法とその継続 14. 保健教育と安全教育，諸外国の保健教育 15. まとめ
---	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業について復習を行いながら、ノートを整理しておくこと。（毎回2時間程度を必要とする内容）

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後もしくはミニレポート提出後に、解答のポイント、出題意図等についての説明を行う。

6. 授業における学修の到達目標

保健学習および保健指導の目的・目標およびその内容について理解する。また、保健学習の必要な授業づくりに関する基本事項について理解し、指導案の作成・空授業・模擬授業・授業研究会の経験を通して授業づくりについての理解を深めることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

授業への貢献度・積極性などの平常点：20%，学習指導案の作成：30%，模擬授業実施および指導案改善状況：20%，試験もしくはレポート：30%

8. テキスト・参考文献

文部科学省学習指導要領解説（保健体育編）

中学校保健体育の教科書

9. 受講上の留意事項

学習指導案の作成を行うので、ワープロや表計算ソフト（ワード、エクセルなど）を使えるように練習しておくこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

保健体育科教育法D		講義	非常勤講師 新井 淑弘
科目カテゴリー	教職科目 教職科目 教職科目	科目ナンバリング	11531304 12531304 13531304

1. 授業のねらい・概要

保健体育科教育学の基礎理論について学び、学習指導案の作成から授業研究、授業改善までの一連の流れを経験し、より良い授業づくりに必要な考え方と技術について学習を行う。より効率の良い保健学習を進めていく上で必要な知識や技術を身につけるとともに、実際の指導に必要な学習指導案の書き方、指導方法の工夫などについて学ぶ。

2. 授業の進め方

主に講義形式で授業を進める。保健学習を進めていく上で必要な知識や技術について学習を行った後に、学習指導案の作成を行う。

3. 授業計画

1. 保健体育科教育の基礎理論について	9. 模擬授業および授業研究会の実施①（一斉授業形式）
2. 中学校保健学習年間計画	10. 模擬授業および授業研究会の実施②（課題学習形式）
3. 高等学校保健学習年間計画	11. 模擬授業および授業研究会の実施③（実験・実習形式）
4. 保健指導年間計画について	12. 総合的な学習における保健的内容の取扱いとその事例について
5. 事例①（一斉授業形式の事例）	13. 授業評価方法とそれに対する改善方法について
6. 事例②（課題学習形式の事例）	14. 授業評価とそれに基づく授業改善の具体例について
7. 事例③（実験・実習形式の事例）	15. まとめ
8. 学習指導案の作成と模擬授業実施、授業記録のとり方および授業研究の実施について	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業について復習を行いながら、ノートを整理しておくこと。（2時間程度を必要とする内容）

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後もしくはミニレポート提出後に、解答のポイント、出題意図等についての説明を行う。

6. 授業における学修の到達目標

保健学習および保健指導の計画から実施までの流れを理解し、授業づくりを行う。さらに、授業実施から授業評価、授業改善の方法について検討を行い、各自で作成した指導案の修正を行い授業改善についての理解を深め、知識や技術を身につけることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

授業への貢献度・積極性などの平常点：20％、学習指導案の作成：30％、模擬授業実施および指導案改善状況：20％、試験もしくはレポート：30％

8. テキスト・参考文献

中学校・高等学校 保健科教育法 森 良一 編著 東洋館出版社
文部科学省学習指導要領解説（保健体育編）
中学校保健体育の教科書

9. 受講上の留意事項

学習指導案の作成を行うので、ワープロや表計算ソフト（ワード、エクセルなど）を使えるように練習しておくこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無
該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連
上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

教育実習 A		実習	教授 松下 晋 講師 堤 ひろゆき
科目カテゴリー	教職科目	科目ナンバリング	11520304 12520304 13520304

1. 授業のねらい・概要

本講義は、教育職員免許取得を希望する学生が必修とされている「事前指導」「事後指導」のうち、「事前指導」を行うものである。具体的には、教育実習の意義、目的、教育実習の概要、教育実習生としての基本姿勢・生活態度、教育実習の心構え等と教科の学習指導案の作成及び模擬授業の実施・授業研究、教育実習日誌の作成など、教育実習に必要な内容について担当教員のもと教育実習生が相互に学習する。特に、模擬授業では情報機器の活用を積極的に心がける。これらの学習を通して、既習の教職教養科目で習得した基礎的教育理論を確実なものにするとともに、その応用・実践に向けて授業技術や授業について演習を行い、集団として学び、授業の観察・記録の技術を身に付ける。教育実習に必要な実践力の養成をめざす。

2. 授業の進め方

基本的には、学習内容を示したレジュメを配布し、講義、学生による学習指導案の作成と模擬授業の実施を中心に進める。また、模擬授業後の授業研究や学習課題に基づく意見交換等の学習活動も取り入れる。

3. 授業計画

1. 講義概要説明（オリエンテーション） 2. 中学校・高等学校の教育課程 3. 教育実習の意義と目的（教育実習の意義） 4. 教育実習の内容と計画、心構え 5. 授業技術の確認 1（実践例の検討） 6. 授業技術の確認 2（教材、指導方法の検討） 7. 学習指導案の作成と検討 1（授業成立要件） 8. 学習指導案の作成と検討 2（授業構成時の注意点） 9. 学習指導案の作成と検討 3（授業の目的と方法） 10. 授業技術の確認 1（模擬授業による授業時の注意点）	11. 授業技術の確認 2（模擬授業による授業研究の方法確認） 12. 授業技術の確認 3（模擬授業による授業見学時の着眼点） 13. 授業技術の確認 4（模擬授業による課題設定方法の研究） 14. 授業技術の確認 5（模擬授業による課題追究方法の研究） 15. 総括
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

配布資料及び参考文献の読解に 30 分程度、グループディスカッションや発表、模擬授業に向けての準備に 1～2 時間程度を目安とするが、模擬授業に向けての教材研究は可能な限り行うことが望ましい。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

各回の開始時と終了時、模擬授業、グループディスカッション及び発表等の後に講評を行う。

6. 授業における学修の到達目標

- ・既習の教育教養科目で習得した基礎的教育理論が確実なものになっている。
- ・教育実習に必要な技能・知識を身につけ、教員に相応しい基本的な資質能力を身につけることができる。
- ・教育実習生の遵守すべき義務と責任を理解する。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（50%）、模擬授業（50%）の総合評価。

○平常点について、課題の提出状況・内容及び学習課題への取り組み態度を評価対象とする。

○模擬授業について、学習指導案及びこれを用いた授業実践等を評価対象とする。

8. テキスト・参考文献

文部科学省 中学校，高等学校の『学習指導要領』『学習指導要領解説 総則編』。最新のもの。
保健体育：文部科学省『中学校学習指導要領解説 保健体育編』

9. 受講上の留意事項

- 1 学部2年生修了時の学業成績が，次の2つの「教育実習に関する学内規定」を満たしていること。
 - ①GPA(Grade Point Average)値の総合が，2.0以上であること。
 - ②次の両方を満たしていること。
 - (1) 教育の基礎的理解に関する科目のGPAが，2.0以上であること。
 - (2) 教科及び教科の指導法に関する科目のGPAが，2.3以上であること。
- 2 遅刻・早退は，原則として欠席と見なす。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

教育実習B		実習	教授 松下 晋 講師 堤 ひろゆき
科目カテゴリー	教職科目	科目ナンバリング	11520401 12520401

1. 授業のねらい・概要

本講義は、教育職員免許取得を希望する学生が必修とされている「事前指導」「本実習」「事後指導」のうち、本実習に備え教育実習Aの確認、実習校での本実習、本実習実施後の事後指導を行うものである。具体的には、各自の実習日誌や学習指導案等実習期間中に作成した資料、各実習校での指導内容に関する報告を基に、各教科・道徳・特別活動並びに学級経営や生徒指導など教科外領域の指導内容に関する検討を行う。これら一連の反省的な振り返りを踏まえ、学校教育を担う教員として必要な基本的知識とそのスキルを再度確認し、教育実習を通して得られた成果と課題を整理する。

2. 授業の進め方

受講者による教育実習に関する報告と検討、並びに担当者のコメントを軸に授業を進める。なお、受講者による報告は、自ら専門とする教科指導に関する事項のみならず、生徒指導や学級経営など、教科外領域における指導事項に関するものも含まれる。

3. 授業計画

1. 教育実習直前ガイダンス（本実習に備えての教育実習Aの確認） 2. 「事後指導」の意義と目的 3. 教育実習校の特徴及び学校経営方針①（教育実習校の教育目標についての報告、コメント） 4. 教育実習校の特徴及び学校経営方針②（教育実習校の学校経営方針についての報告、コメント） 5. 教育実習校の特徴及び学校経営方針③（教育実習校の特色ある取り組みについての報告、コメント） 6. 教育実習校の特徴及び学校経営方針④（教育実習校の概容についての報告、コメント） 7. 各教科指導に関する報告並びに検討、コメント①（授業計画等） 8. 各教科指導に関する報告並びに検討、コメント②（学習指導案等）	9. 各教科指導に関する報告並びに検討、コメント③（授業技術、方法等） 10. 各教科指導に関する報告並びに検討、コメント④（授業計画、学習指導案等の小括） 11. 教科外領域指導に関する報告並びに検討、コメント①（生徒指導） 12. 教科外領域指導に関する報告並びに検討、コメント②（学級経営等） 13. 教科外領域指導に関する報告並びに検討、コメント③（特別活動等） 14. 教科外領域指導に関する報告並びに検討、コメント④（小括） 15. 総括 ※この間、保健体育：中学校3週間の本実習がある。
--	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

配布資料及び参考文献の読解に30分程度、グループディスカッションや発表、模擬授業に向けての準備に1～2時間程度を目安とするが、模擬授業に向けての教材研究は可能な限り行うことが望ましい。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

各回の開始時と終了時、模擬授業、グループディスカッション及び発表等の後に講評を行う。

6. 授業における学修の到達目標

- ・教科指導（授業計画・学習指導案等）・教科外領域指導（生徒指導・学級経営等）に必要な基本的知識とそのスキルを習得していること。
- ・教育実習を通して得られた成果と課題を分析し、整理できていること。

7. 成績評価の方法・基準

教育実習成績報告書（50%）、平常点（25%）、作成物等（25%）の総合評価。

- 平常点については、受講者各自の報告内容と提出資料、並びに講義中の学習課題への取り組み態度を評価対象とする。
- 作成物については、教育実習日誌を評価対象とする。
- 評価については、実習校からの『教育実習成績報告書』の評価を中心に、平常点、作成物の評価を加えて総合的に行う。

8. テキスト・参考文献

文部科学省 中学校、高等学校の『学習指導要領』『学習指導要領解説 総則編』。最新のもの。
保健体育：文部科学省『中学校学習指導要領解説 保健体育編』

9. 受講上の留意事項

学部2年生終了時に、次の二つの「教育実習に関する学内規定」を満たしていること。

- ① GPA(Grade Point Average)値の総合が、2.0 以上であること。
- ② 次の両方を満たしていること。
 - (1) 教育の基礎的理解に関する科目の GPA が、2.0 以上であること。
 - (2) 教科及び教科の指導法に関する科目の GPA が、2.3 以上であること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

教育実習 C		実習	教授 松下 晋 講師 堤 ひろゆき
科目カテゴリー	教職科目	科目ナンバリング	11520402 12520402 13520402

1. 授業のねらい・概要

本講義は、教育職員免許取得を希望する学生が必修とされている「事前指導」「事後指導」のうち、「事後指導」を行うものである。具体的には、各自の実習日誌や学習指導案等実習期間中に作成した資料、各実習校での指導内容に関する報告を基に、各教科並びに学級経営や生徒指導など教科外領域の指導内容に関する検討を包括的に行う。これら一連の反省的な思索を踏まえ、学校教育を担う教員として必要な基本的知識とそのスキルを再度確認し、教育実習を通して得られた成果と課題を整理する。

2. 授業の進め方

受講者による教育実習に関する報告と検討、並びに担当者のコメントを軸に授業を進める。なお、受講者による報告は、自ら専門とする教科指導に関する事項のみならず、生徒指導や学級経営など、教科外領域における指導事項に関するものも含まれる。

3. 授業計画

1. 「事後指導」の意義と目的（オリエンテーション） 2. 教育実習の包括的な反省と整理 3. 生徒の実態についての気付きの報告並びにコメント① 4. 生徒の実態についての接し方等の報告並びにコメント② 5. 生徒の課題についての報告並びにコメント③ 6. 生徒の課題の改善点についての報告並びにコメント④ 7. 教育活動全体での生徒との関わりについての報告並びにコメント①（総論） 8. 教育活動全体での生徒との関わりについての報告並びにコメント②（授業等での視点）	9. 教育活動全体での生徒との関わりについての報告並びにコメント③（学級経営の視点） 10. 教育活動全体での生徒との関わりについての報告並びにコメント④（生徒指導上の視点） 11. 各教科指導上の課題についての報告① 12. 各教科指導上の今後の取り組みについての報告② 13. 教科外領域指導上の課題についての報告③ 14. 教科外領域指導上の今後の取り組みについての報告④ 15. 総括
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

配布資料及び参考文献の読解に 30 分程度、グループディスカッションや発表に向けての準備に 1～2 時間程度の準備学修を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

各回の開始時と終了時、グループディスカッション及び発表等の後に講評を行う。

6. 授業における学修の到達目標

- ・教科指導（授業計画・学習指導案等）・教科外領域指導（生徒指導・学級経営等）に必要な基本的知識とそのスキルを習得し、他の学生及び担当者との意見交換が積極的にできていること。
- ・教育実習を通して得られた成果と課題を具体的に分析し、教員免許取得までに必要な知識や技能等を整理できていること。
- ・教育実習で得られた自分自身の今後の課題に意欲的に取り組んでいること。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（50%）、作成物等（50%）の総合評価。

○平常点については、受講者各自の報告内容と提出資料及び講義中の学習課題への取り組み態度を評価対象とする。

○実習校からの『教育実習成績報告書』に基づき評価する。

8. テキスト・参考文献

文部科学省 中学校，高等学校の『学習指導要領』『学習指導要領解説 総則編』。最新のもの。
保健体育：文部科学省『中学校学習指導要領解説 保健体育編』

9. 受講上の留意事項

学部2年生終了時に，次の二つの「教育実習に関する学内規定」を満たしていること。

- ① GPA(Grade Point Average)値の総合が，2.0 以上であること。
- ② 次の両方を満たしていること。
 - (1) 教育の基礎的理解に関する科目の GPA が，2.0 以上であること。
 - (2) 教科及び教科の指導法に関する科目の GPA が，2.3 以上であること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

教職実践演習（中・高）		演習	教授 平沢 信康 教授 松下 晋 講師 堤 ひろゆき
科目カテゴリー	教 職 科 目	科目ナンバリング	11520403 12520403 13520403

1. 授業のねらい・概要

本学の教職課程で3年半学んだことの確認と復習を図るとともに、「教育実習」での経験等をもとに、「教科内容を指導する力」、「生徒理解や学級経営に資する力」、「社会性を構築したり人間関係を形成したりする力」に加えてICTの活用能力の修得に磨きをかける。

これらを通じて、教員に求められる専門的知識や指導技術、教員としての資質能力が修得できたかを総合的に点検するとともに、教員を目指すうえでの今後の課題を明確化する。

2. 授業の進め方

教育実習の体験発表をはじめ、グループ・ディスカッション、模擬授業やロールプレイング、事例研究、ニュース記事調べ等を組み合わせ、教育現場が有する課題に対し、より実践的な問題解決能力を身につけることを目指す。

また、受講者の各自が抱えている課題意識を積極的に表現し、それを分かち合える機会をも数多く設定したい。

原則的に対面型・参加型授業とするが、新型コロナウイルスの感染状況が深刻化した場合は、遠隔授業に切り替える場合もありえる。

3. 授業計画

1. オリエンテーション（授業の趣意と計画）（堤）	8. 教育実習先の紹介と課題抽出（平沢）
2. 学校組織における社会性や人間関係形成能力に関する確認（堤）	9. 教職をめぐる関係法規や歴史の再確認（平沢）
3. 家庭・地域とともに築く社会性や人間関係形成能力に関する確認（堤）	10. 教職に関する新聞報道調べ・時事 News 検索（平沢）
4. 社会性の構築や人間関係形成力の獲得へ向けた学修成果の振り返り（堤）	11. 模擬授業場面を通じた教科内容の指導力の確認（松下）
5. 教員に必要とされる社会性や人間関係形成能力のあり方（堤）	12. 生徒一人ひとりの理解と実態把握（松下）
6. 教職課程における学修の意義と振り返り（平沢）	13. 生徒一人ひとりと学級集団との関わりあいを生かした学級経営（松下）
7. 教育実習の振り返り（平沢）	14. 生徒理解と学級経営上の課題とその対応（松下）
	15. 個と集団の関わりあいを生かした生徒理解と学級経営のあり方（松下）

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- ・過去に配布された教材資料および参考文献の復習（30分程度）。
- ・体験発表や模擬授業にむけての準備（1時間程度）。
- ・パワーポイントソフトの使い方・操作方法に習熟しておくこと。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

体験発表や模擬授業の際には、直後に担当教員から講評を与える。

6. 授業における学修の到達目標

受講者の履修履歴をふまえ、教員に必要とされる知識、技能、資質能力を修得しえたことを確認する。本学の教員養成の理念に基づき、教員として相応しい人間性を涵養するとともに、生徒、教員、地域の関係者や保護者との人間関係形成力、集団における協調性と統率力といった資質能力の育成を図る。

7. 成績評価の方法・基準

体験発表，グループ・ディスカッション，ロールプレイング，補完指導等の内容をもとに，教員としての基礎的な資質能力の定着を確認し，単位認定を行う。また ICT の利活用能力も加味して総合的に評価する。

レポート（20％），発表内容と態度（30％），取り組みの積極性・授業への貢献度（50％）

8. テキスト・参考文献

特に指定せず，必要に応じて適宜指示する（教職科目で使用したテキストや学習指導要領の冊子など）。

なお，教育実習関係資料や実践記録を持参すること。

9. 受講上の留意事項

本科目は，教員に必要とされる資質能力が身についているかどうかを最終的に確認する時間である。教職課程の総仕上げの授業であるため，真摯な姿勢で積極的に取り組むことが求められる。当然ながら，全回出席を原則とし，遅刻や早退は欠席と見なすことがあるので，自戒してほしい。特に発表前は体調を整え，教師に相応しい姿勢・態度・声量・話し方ができるよう，心掛けられたい。

PowerPoint 作品に挿入・紹介するため，教育実習先で撮影した（校舎や授業風景の）写真を用意しておいてほしい。

なお，履修にあたっては，以下のいずれかを満たすことを条件とする。

- 1) 今年度までに教員採用試験を受験していること。
- 2) 今年度中に教員採用試験を受験することが決まっていること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

学習・発達論		講義	非常勤講師 大島 みずき
科目カテゴリ	教職科目	科目ナンバリング	11520201

1. 授業のねらい・概要

この授業では、教員として子どもと関わることに必要となる教育心理学・発達心理学の基礎知識を中心に学ぶことで、教える対象、教える方法について心理学の知見から考えていく。授業は基本的には対面の講義形式で行う。

2. 授業の進め方

講義及び演習。質疑応答の時間を設ける。

3. 授業計画

1. 本講義の意義と目的	9. 教育心理学(学習 古典的条件付／道具的条件付)
2. 発達心理学(発達とは何か)	10. 教育心理学(学習 記憶)
3. 発達心理学(発達理論)	11. 教育心理学(動機づけ)
4. 発達心理学(乳児期)	12. 教育心理学(学習指導)
5. 発達心理学発達心理学(幼児期)	13. 教育心理学(教育評価)
6. 発達心理学(児童期)	14. 発達障害の理解
7. 発達心理学(青年期)	15. 教育現場の中の心理学の活用
8. 発達心理学(成人期・中年期)	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

シラバスや参考文献をもとに今回の講義内容を理解しようとの思いを抱いて講義に臨んで欲しい。各講義における受講準備として、予習を、1時間程度行って欲しい。各講義の復習を必要に応じて行って欲しい。この復習に最低30分程度は時間をかけて欲しい。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

上記の各回における講義のまとめ時とその次の回における導入の時間に、学習してきた基礎的かつ基本的な知見の理解度をチェックする。定期試験の終了時に試験の解答を説明する。

6. 授業における学修の到達目標

授業の各回において取りあげる基礎的かつ基本的知見を理解し、自己のものとする。

7. 成績評価の方法・基準

授業後のリアクションペーパーの内容(50%)、定期テストの結果(50%)を評価の対象とする。定期テスト終了後に解説を行う。

8. テキスト・参考文献

指定しない。毎回資料を用意する。

9. 受講上の留意事項

4日以上以上の欠席者は定期試験の資格を失う。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリ」欄の記載のとおり。

生徒・進路指導論		講義	非常勤講師 音山 若穂
科目カテゴリー	教職科目	科目ナンバリング	25200304

1. 授業のねらい・概要

生徒指導は、一人一人の生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して教育活動全体を通じ行われる、学習指導と並ぶ重要な教育活動である。他の教職員や関係機関と連携しながら組織的に生徒指導を進めていくために必要な知識・技能や素養を身に付ける。

進路指導は、生徒が自ら、将来の進路を選択・計画し、その後の生活によりよく適応し、能力を伸長するように、教員が組織的・継続的に指導・援助する過程であり、長期的展望に立った人間形成を目指す教育活動である。それを包含するキャリア教育は、学校で学ぶことと社会との接続を意識し、一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育むことを目的としている。進路指導・キャリア教育の視点に立った授業改善や体験活動、評価改善の推進やガイダンスとカウンセリングの充実、それに向けた学校内外の組織的体制に必要な知識や素養を身に付ける。

15回の授業のうち、前半は主に「生徒指導提要」の内容の理解、後半は生徒指導上の諸問題の実態の理解と、基本的な対応について解説する。

2. 授業の進め方

講義及び演習。質疑応答の時間を設ける。

3. 授業計画

1. 生徒指導の意義と原理（生徒指導の意義、生徒指導の構造、生徒指導の方法、生徒指導の基盤、生徒指導の取組上の注意点）【生徒指導の意義や原理】 2. 生徒指導と教育課程（児童生徒の発達を支える教育課程、教科の指導と生徒指導、道徳・総合の時間における生徒指導、特別活動における生徒指導）【生徒全体への指導】 3. チーム学校における生徒指導体制（チーム学校における学校組織、生徒指導体制、危機管理体制、法制度、生徒指導と教育相談が一体となったチーム支援）【生徒指導の意義や原理】【生徒全体への指導】 4. 個別の課題に対する生徒指導① 暴力行為（暴力行為に関する対応指針等、学校の組織体制と計画、重層的支援、関係機関との連携体制）② いじめ（いじめ防止対策推進法、組織と計画、重層的支援、関係機関との連携）【個別の課題を抱える個々の児童及び生徒への指導】 5. 個別の課題に対する生徒指導③ 不登校・長期欠席・中途退学（関連法と基本指針、未然防止と組織体制、重層的支援、関係機関との連携）【個別の課題を抱える個々の児童及び生徒への指導】 6. 個別の課題に対する生徒指導④ 少年非行・児童虐待・自殺（基本方針、学校の体制、関係機関との連携など）【個別の課題を抱える個々の児童及び生徒への指導】	7. 個別に課題に対する生徒指導⑤ インターネット・携帯電話・性に関わる課題（法律等、基本方針、課題の発見と対応、重層的支援）【個別の課題を抱える個々の児童及び生徒への指導】 8. 多様な背景を持つ児童生徒への生徒指導（発達障害についての理解、精神疾患についての理解、健康課題の理解、支援を要する家庭状況）【個別の課題を抱える個々の児童及び生徒への指導】 9. 進路指導・キャリア教育とは（意義と原理、キャリア教育の代表的な理論）【進路指導・キャリア教育の意義及び理論】 10. キャリア教育の指導と実際（指導の在り方、組織的な指導体制、関係機関との連携）【進路指導・キャリア教育の意義及び理論】 11. ガイダンスとしての指導①（キャリア・シミュレーションプログラム）【ガイダンスとしての指導】 12. ガイダンスとしての指導②（インターンシップと事前事後指導）【ガイダンスとしての指導】 13. キャリアカウンセリング①（カウンセリングの手法と実際、ポートフォリオ）【カウンセリングとしての指導】 14. カウンセリングとしての指導②（キャリアパスポートと活用の仕方）【カウンセリングとしての指導】 15. 全体のまとめと振り返り
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、配布資料等を使って復習しておく。さらに、課題についても振り返っておく。なお、これらの準備学修には、2 時間以上が必要である。配布資料等（期末のレポートのフィードバックを含む）については、Google 等に資料保管庫を設け、ダウンロードできるようにする。初回講義で解説する

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

授業の冒頭で、前週に課した小レポート課題について解説を行う。期末レポートのフィードバックは資料保管庫にアップロードする。

6. 授業における学修の到達目標

ⁱ生徒指導、進路指導についての基本的な考え方や指導法、対応法について、初任者レベルの内容を理解し説明できる。

7. 成績評価の方法・基準

毎時間に提出を求めるミニレポート（60%）の提出状況、および期末レポート（40%）の提出状況および内容を合算して評価する。

8. テキスト・参考文献

テキストとして市販の書籍等は使用しない。（文部科学省サイトに公開されている、生徒指導提要のデジタルテキストを使用する。入手方法は初回講義で解説する）。また、参考文献は講義中に随時解説する。

9. 受講上の留意事項

演習の際は、積極的な参加が求められます。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

経営管理総論 A		講義	教授 大澤 秀一
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの選択 必修科目	科目ナンバリング	11310205

1. 授業のねらい・概要

経営管理論は、会社の各業務を管理・運営（マネジメント）するための仕組みや手法を体系的に研究する学問です。生産、販売、人事、労務、財務などの部署における目標設定、事業実施、計画進捗評価、効率化、改善活動などの一連のプロセスのマネジメント方法を学びます。前期に開講する「総論A」は生産管理、販売管理、財務・会計管理に焦点を当て、ケーススタディで実践的なスキルを身に付けます。後期の「総論B」は財務管理、人事管理、労務管理を取り上げます。

2. 授業の進め方

授業は講義形態で行い、概ね以下の内容に沿って進めます。

3. 授業計画

1. 授業の概要説明	9. サプライチェーン管理
2. 生産管理概要	10. ケースステディ（2）
3. 生産計画	11. 財務・会計管理概要
4. オペレーションマネジメント	12. 資金調達と運用・投資
5. ケーススタディ（1）	13. 財務諸表と経営分析
6. 販売管理概要	14. ケーススタディ（3）
7. 店舗・施設と地域経済	15. 総括
8. マーチャンダイジング	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各授業の最初に前回授業の振り返りと、最後に次回授業の予習ポイントを説明します。自分で2，3の論点を考え、毎回2時間以上の時間をかけて納得できるまで予習・復習をしてください。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

定期試験実施の際、出題の意図と解答のポイントを試験終了直後に説明します。

6. 授業における学修の到達目標

経営管理論を構成するテーマを幅広く学び、実践に応用するための基礎的な力を付けることが目標です。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取組姿勢(50%)と定期試験の結果(50%)によって評価します。

8. テキスト・参考文献

テキストは使用しません。必要に応じて参考文献などを適宜紹介します。

9. 受講上の留意事項

初回の授業で説明します。授業への主体的な参加を期待します。疑問や不明な点については、遠慮なく質問して授業中か授業直後には理解し、持ち越さないようにしましょう。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、シンクタンクや金融機関における実務経験を活かして指導します。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

経営管理総論B		講義	教授 大澤 秀一
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの選択必修科目	科目ナンバリング	11310206

1. 授業のねらい・概要

経営管理論は、会社の各業務を管理・運営（マネジメント）するための仕組みや手法を体系的に研究する学問です。生産、販売、人事、労務、財務などの部署における目標設定、事業実施、計画進捗評価、効率化、改善活動などの一連のプロセスのマネジメント方法を学びます。「総論B」では前期「総論A」で扱わなかった財務管理の一部領域と人事管理、労務管理に焦点を当て、ケーススタディで実践的なスキルを身に付けます。

2. 授業の進め方

授業は講義形態で行い、概ね以下の内容に沿って進めます。

3. 授業計画

1. 授業の概要説明	9. ケーススタディ（2）
2. 企業財務と企業価値	10. 労務管理概要
3. 資本市場と証券投資	11. 労働契約と保険
4. ケーススタディ（1）	12. コンプライアンス
5. 人事管理概要	13. コーポレートガバナンス
6. 報酬制度と人材育成	14. ケーススタディ（3）
7. 健康経営	15. 総括
8. 人的資本経営	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各授業の最初に前回授業の振り返りと、最後に次回授業の予習ポイントを説明します。自分で2，3の論点を考え、毎回2時間程度の時間をかけて納得できるまで予習・復習をしてください。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

定期試験実施の際、出題の意図と解答のポイントを試験終了直後に説明します。

6. 授業における学修の到達目標

経営管理論を構成するテーマを実践的に学び、現実の社会経済の動向や背景を理解できることが目標です。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取組姿勢(50%)と定期試験の結果(50%)によって評価します。

8. テキスト・参考文献

テキストは使用しません。必要に応じて参考文献などを適宜紹介します。

9. 受講上の留意事項

初回の授業で説明します。授業への主体的な参加を期待します。疑問や不明な点については、遠慮なく質問して授業中か授業直後には理解し、持ち越さないようにしましょう。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、シンクタンクや金融機関における実務経験を活かして指導します。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

柔道整復の理念と歴史		講義	講師 佐藤 康宏
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門基礎科目	科目ナンバリング	12331102

1. 授業のねらい・概要

柔道整復師は国民医療の一端として、国民大衆に広く受け入れられ、民族医学として伝承されてきた。柔道整復術の現代的意義について「患者からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上と高度の医学的知識の修得が必須である。」と言うように、崇高な理念について学ぶことで柔道整復の進歩発展につながるものと考えられる。

また、医学史は現代医学の礎となり、今後も学ぶべき点が多い学問領域だと考える。時代に遅れないように常に研究していくことが重要な柔道整復にとって、先人たちが積極的に取り込んで築き上げた歴史を学ぶことも進歩発展につながることを理解して講義に参加していただきたい。

2. 授業の進め方

テキストの内容に沿った講義形式を基本とするが、随時、過去の映像や記録から具体的な出来事を取り上げて、パワーポイントで説明も行う。また、理解の定着を図るため、講義の途中でレポートを作成する。

3. 授業計画

1. ガイダンス（柔道整復師の仕事について）	8. 柔道整復術の現代的意義
2. 柔道整復術および柔道整復師の沿革① 医療の起源と発展 柔道整復の基本理念の成立	9. 業務範囲と心得① 業務範囲と条文 業務範囲と指導要領 業務範囲と柔道整復術
3. 柔道整復術および柔道整復師の沿革② 海外との交流 江戸時代前期	10. 業務範囲と心得② 業務禁止と施術制限 権能と施術目的 業務範囲と施術限界
4. 柔道整復術および柔道整復師の沿革③ 江戸時代の接骨術への影響 明治・大正時代	11. 業務範囲と心得③ X線と附帯決議 的確な判断 柔道整復師としての心得
5. 柔道整復術および柔道整復師の沿革④ 柔道整復術の公認 第二次大戦後	12. 柔道整復師倫理
6. 柔道整復術および柔道整復師の沿革⑤ 柔道整復師法の成立 国家試験への移行 指導要領の制定	13. 柔道整復師概論
7. 柔道整復師と柔道	14. 西洋医学と東洋医学について
	15. まとめ レポート提出後に重要箇所について解説

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前回の授業内容を、復習しておく。復習には前回に自分が作成したレポートを参考にする。なお、これらの準備学修には、1時間以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポート提出の際、重要箇所について解説を行う。訂正箇所があった場合は後日、改めて提出日を設定する。

6. 授業における学修の到達目標

柔道整復の理念と歴史について十分に理解し、最終的に柔道整復術の現代的意義について自らの考えをまとめてレポートを作成すること。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（50%）およびレポート審査（50%）によって，評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト，参考文献，資料等は必要に応じて配布する。

9. 受講上の留意事項

受講の要件としては，難しい人名漢字が多く出てくるので，辞書（電子辞書）を持込可とする。その他，疑問や不明な点については，遠慮なく質問してもらいたい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は，講道館柔道六段，柔道整復師免許，柔道整復師専科教員資格を有し，接骨院に勤務，文化人類学や社会人類学における海外でのフィールドワーク等の実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

テーピングの理論と実際		演習	講師 准教授	佐藤 牛島	康宏 詳力
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの専門選択科目、 スポーツトレーナーコースの専門選択科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング			11322116 11322116 12220101 13322101

1. 授業のねらい・概要

テーピングは、スポーツ外傷・障害予防の一手段として活用される方法である。さまざまなスポーツ医療現場において活動していく上で、テーピングの理論および技術を習得することは必要不可欠である。また、今後学習するスポーツリハビリテーション、アスレティックリハビリテーションなどとも密接に関連する。本講義では、テーピングの理論およびテーピングを巻く際に必要な解剖学的知識、および傷害の受傷メカニズムを理解し、実際のテーピング技術を習得することを目指す。

2. 授業の進め方

テーピングの技術を習得するだけでなく、テーピングの理論、解剖学的知識および傷害の受傷メカニズムを学ぶ。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. 確認テスト（テーピングの理論）
2. テーピング理論、テープの切り方実践	10. 足関節・足部の機能解剖、足関節内反捻挫
3. テーピングの基礎（アンカーとブリッジ）	11. 足関節捻挫予防テーピング（アンカーラップ、アンカーの巻き方）
4. 指（側方動揺性の予防）のテーピング	12. 足関節捻挫予防テーピング（スケアップ、ホスシュの巻き方）
5. 肘関節（内側側副靱帯損傷）のテーピング	13. 足関節捻挫予防テーピング（フィギュアイト巻き方）
6. 肘関節（過伸展予防）のテーピング	足関節捻挫予防テーピング（ヒールロック巻き方）
7. 膝関節（前十字靱帯損傷、内側側副靱帯損傷）のテーピング	14. キネシオテープの基礎
8. フィギュアイトの習得（母指 MP 関節を例に）	15. その他特殊なテープの紹介

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

柔道整復師コースならびに救急救命士コースの学生以外は原則として「人体構造学」を C 評価以上の成績で修了したものが受講できる。本講義受講期間中においては、配布テキスト、解剖および傷害の学習（30 分程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

実技試験および小テストに関して、終了時に改善点ならびに模範解答を口頭および実技で説明する。

6. 授業における学修の到達目標

各部位においてテーピングを巻く際に必要な解剖学的知識および傷害の受傷メカニズムを理解し、指導者として巻くことができるテーピング技術を習得する。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（30%）、確認試験（20%）、実技試験（50%）によって評価する。実技試験は足関節捻挫予防テーピングとする。ただし講義回数の 5 分の 1（3 回以上）以上欠席した者は評価の対象としない。

8. テキスト・参考文献

四肢・体幹の解剖学、テーピングの巻き方に関する資料を配布。

9. 受講上の留意事項

使用するテーピングは実費となり、3,000 円程度かかる予定。学内に支払期限の掲示をするので、教学課に支払いをして参加すること。また、素肌の状態でテーピングを巻くので実技の際はタイツ等の着用は禁止する。実技終了時は教室の掃除を徹底して行うこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は柔道整復師免許資格を有し、整形外科医院、接骨院、プロスポーツチームに勤務した実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツ実技（サッカーB）		実習	准教授 山口 重信	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目	科目ナンバリング	11322105	
	スポーツトレーナーコース の専門選択科目		11322105	
	教職科目		11532103	
	柔道整復師コースの教養選択科目		11220107	
	教職科目		13220112	

1. 授業のねらい・概要

本科目は、サッカーの基本的なルールや基礎技術を学び、試合形式のゲームを通じてサッカーの魅力、楽しさを体験する。仲間とともにゴールや勝利の喜びを体感する。また、この授業をとうして体力の増進を図る。

2. 授業の進め方

初心者、経験者を問わずサッカーのルール・基本技術の習得と様々な形の試合形式を中心に行う。

雨天時は教室においてビデオを使用して、ルールの確認や海外の試合を見る。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. セットプレー（CK FKの攻守）
2. アイスブレイクの実践	10. 対人プレー 7対7
3. 守備の個人戦術（講義）	11. ハーフコートゲームでの攻守の切り替え
4. 守備の個人戦術（実技）	12. 試合11対11 リトリートからの守備
5. 攻撃の個人戦術（講義）	13. 試合11対11 ビルドアップからの攻撃
6. 攻撃の個人戦術（実技）	14. 試合11対11 主審・副審の実践
7. 守備のグループ戦術の習得	15. まとめ
8. 攻撃のグループ戦術の習得	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

Jリーグや海外の試合を見ることでサッカーの技術・戦術の魅力を感じて欲しい、グラウンドレベルで再現できるかは別として真似をしてみようとイメージをつくる。当然、サッカーの1試合（90分）を通して見ること。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

授業中のプレーに対して留意点を指摘する。また、素晴らしいプレーに関しては褒める声掛けをしてモチベーションを上げる。

6. 授業における学修の到達目標

サッカー観戦およびサッカーの試合を行うとき、指導を行うときにルールを十分に理解してサッカーを楽しむことができる。対戦相手、レフリー、チームメイトをリスペクトしてトレーニングや試合を行うことができる。

7. 成績評価の方法・基準

授業の取り組み、技術、戦術の理解度（50％）。定期的に試験（リフティング等の技術）を行い、上達度を加味して（30％）講義への参加意欲（20％）で評価する。

8. テキスト・参考文献

サッカー競技規則と実践的審判法（公益財団法人 日本サッカー協会審判委員会 制作）

9. 受講上の留意事項

実技の際は、運動に適した服装・シューズで参加すること。また、時計・装飾品（ネックレス、ピアス、指輪）は外して参加すること、自分や他の人を傷つける可能性があるため。

運動に適さない服装で出席した場合は、授業の参加を認めない場合もある。

怪我をしていて参加できないときは怪我の状況を伝えて見学をすること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当なし

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

柔道整復学総論Ⅰ		講義	教授 川崎 一朗
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12351101

1. 授業のねらい・概要

柔道整復師は、「骨折、脱臼、打撲、捻挫等」といった運動器に対する急性の外傷性疾患に対して保存的治療を行うことを業務としている。この授業では、骨の損傷における基礎的知識（様々な骨折の分類法、骨折時の局所または全身の症状、骨折時に起こる合併症、小児骨折と高齢者骨折の特徴、骨折後の治癒経過と予後など）とその評価法や治療法（一般的な整復法、固定法、後療法など）について学習する。

2. 授業の進め方

主に Power Point を用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。必要に応じて DVD などのメディアを教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された教科書を補足的に用いる。

3. 授業計画

1. ガイダンス、柔道整復師の沿革、業務範囲 2. 柔道整復術の概論、損傷時の身体の基礎的状態、損傷時の外力 3. 骨の損傷①（骨の形態と機能） 4. 骨の損傷②（分類） 5. 骨の損傷③（症状） 6. 骨の損傷④（併発症、続発症） 7. 骨の損傷⑤（後遺症） 8. 骨の損傷⑥（小児骨折と高齢者骨折の特徴）	9. 骨の損傷⑦（癒合日数、治癒経過） 10. 骨の損傷⑧（予後、治癒の影響因子） 11. 評価法、治療法①（骨折の整復法） 12. 治療法②（固定法） 13. 治療法③（手技療法、運動療法） 14. 治療法④（物理療法） 15. まとめ
---	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、配布プリントやノートを使って復習しておく（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

本授業では、運動器に対する急性の外傷性疾患を評価し治療する上で必要な専門的知識や技術の基礎となる総論的事項を習得することを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

定期試験の結果（100％）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- ①柔道整復学・理論編改訂7版社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②毎授業で資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用、飲食、帽子の着用は認めない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

人体構造学Ⅰ		講義	教授 西川 彰
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門基礎科目	科目ナンバリング	12311101

1. 授業のねらい・概要

医療専門職を志す者にとって、人体の構造学（解剖学）は最も基盤となる学問である。この授業では、心臓や血管といった循環器の構造を学ぶことから始め、その後は、消化器、呼吸器、泌尿器、生殖器、内分泌器などの内臓を順次学習し、最後には視覚器、聴覚器、平衡覚器を中心に感覚器について学ぶ。また、單元ごとに該当する演習問題にも取り組むことで、将来の資格試験合格に向けた知識の定着も図る。

2. 授業の進め方

プレゼンテーションソフトを用いたスライドにより関連する写真やイラストを呈示しながら、さらに板書を組み合わせた講義形式で授業を進めていく。さらに、重要な部位についてはテキストの解剖図をスケッチし、その構造学的特徴を記入した「人体構造学レポート」を作成し提出課題とする。

3. 授業計画

1. ガイダンス 人体構造学の基本（細胞，組織，器官）	8. 呼吸器（気道と肺）
2. 循環器①（心臓）	9. 泌尿器（腎臓と尿路）
3. 循環器②（動脈系）	10. 生殖器（男性生殖器，女性生殖器）
4. 循環器③（静脈系とリンパ系）	11. 内分泌器（下垂体，甲状腺，副腎）
5. 消化器①（上部消化管）	12. 感覚器①（外皮，味覚器，嗅覚器）
6. 消化器②（下部消化管）	13. 感覚器②（視覚器）
7. 消化器③（消化腺と付属器官）	14. 感覚器③（聴覚器と平衡覚器）
	15. まとめ

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業で学んだ重要語句や図表などをまとめた「人体構造学レポート」を作成した上で、それを基に單元別の演習問題にも取り組み毎回の授業に臨むこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポートおよび演習問題については添削，採点を行った上で返却する。また，定期試験については正答と問題の要点を希望者に配布する。

6. 授業における学修の到達目標

本授業では，構造学的な特徴をただ暗記するだけでなく，その機能や病態との関連性などの統合的な理解が得られることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（レポート）（約30％程度）並びに定期試験の結果（約70％程度）より総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

全国柔道整復学校協会監修、『解剖学 第2版』，医歯薬出版，2008年
その他の参考資料は，必要に応じて授業中に紹介または配布する。

9. 受講上の留意事項

毎回の授業時にはテキスト並びに配布プリントを必ず持参すること。
講義回数の3分の1以上を欠席した場合は，定期試験の受験資格を失うこととする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、人体解剖トレーニングセミナーにおける実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

人体構造学Ⅱ		講義	教授 西川 彰
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門基礎科目	科目ナンバリング	12311102

1. 授業のねらい・概要

医療専門職を志す者にとって、人体の構造学（解剖学）は最も基盤となる学問である。この授業では、骨格系並びに筋系といった運動器の構造を各部位別に学ぶことから始め、その後は、中枢神経と末梢神経に分けて神経系について学習する。また、単元ごとに該当する演習問題にも取り組むことで、将来の資格試験合格に向けた知識の定着も図る。

2. 授業の進め方

プレゼンテーションソフトを用いたスライドにより関連する写真やイラストを呈示しながら、さらに板書を組み合わせた講義形式で授業を進めていく。さらに、重要な部位についてはテキストの解剖図をスケッチし、その構造学的特徴を記入した「人体構造学レポート」を作成し提出課題とする。

3. 授業計画

1. ガイダンス 運動器①（骨組織と筋組織の基本構造）	8. 運動器⑧（下肢の筋） 9. 神経系①（神経組織の基本構造）
2. 運動器②（頭部の骨と関節）	10. 神経系②（脳）
3. 運動器③（体幹の骨と関節）	11. 神経系③（脊髄）
4. 運動器④（頭部・体幹の筋）	12. 神経系④（脳神経）
5. 運動器⑤（上肢の骨と関節）	13. 神経系⑤（脊髄神経）
6. 運動器⑥（上肢の筋）	14. 神経系⑥（自律神経）
7. 運動器⑦（下肢の骨と関節）	15. まとめ

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業で学んだ重要語句や図表などをまとめた「人体構造学レポート」を作成した上で、それを基に単元別の演習問題にも取り組み毎回の授業に臨むこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポートおよび演習問題については添削、採点を行った上で返却する。また、定期試験については正答と問題の要点を希望者に配布する。

6. 授業における学修の到達目標

本授業では、構造学的な特徴をただ暗記するだけでなく、その機能や病態との関連性などの統合的な理解が得られることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（レポート）（約30％程度）並びに定期試験の結果（約70％程度）より総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

全国柔道整復学校協会監修、『解剖学 第2版』，医歯薬出版，2008年
その他の参考資料は，必要に応じて授業中に紹介または配布する。

9. 受講上の留意事項

毎回の授業時にはテキスト並びに配布プリントを必ず持参すること。
講義回数の3分の1以上を欠席した場合は，定期試験の受験資格を失うこととする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、人体解剖トレーニングセミナーにおける実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

柔道整復実技Ⅰ（包帯）		実習	准教授 伊藤 新
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12371101

1. 授業のねらい・概要

柔道整復師が行う治療法には主に整復法、固定法、後療法の3種類がある。この授業では、初めに固定における基本的事項（固定の目的・範囲・肢位、固定材料の種類など）を学んだ後、基本包帯法を習得し、さらにそれらを組み合わせた身体各部位別の包帯法の実習へと進めていく。また、最後には次の学年以降の実技授業への橋渡しとして、冠名包帯法や副子などの固定材料を用いたより実践的な固定法についても取り組む。

2. 授業の進め方

担当教員によるデモンストレーションの後、学生同士が2人1組のペアとなり反復練習を実施する。この間、包帯の技術習得において重要なポイントである機能性（固定範囲と肢位、圧迫圧）、外観（見た目の美しさ）、スピード（施行時間）などの完成度を高めるための指導を行う。また、毎回の授業終了後には「包帯実習レポート」を作成する。

3. 授業計画

1. ガイダンス、包帯の巻き方の基礎と巻き戻し	9. 部位別包帯法⑤（膝関節部、下腿部）
2. 基本包帯法①（環行帯、螺旋帯、蛇行帯、折転帯）	10. 部位別包帯法⑥（足関節部、足指部）
3. 基本包帯法②（亀甲帯、麦穂帯）	11. 部位別包帯法⑦（胸・背部、腰部）
4. 部位別包帯法①（肩関節部）	12. 冠名包帯法（デゾー包帯）
5. 部位別包帯法②（肘関節部、前腕部）	13. 固定材料を用いた固定①（クラーメル副子）
6. 部位別包帯法③（手関節部、手指部）	14. 固定材料を用いた固定②（ギプス）
7. 中間試験	15. まとめ（部位別包帯法およびクラーメル副子、ギプス固定におけるポイントの復習）
8. 部位別包帯法④（股関節部、大腿部）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

学生は、互いの包帯技術を高めるために、毎授業で「包帯実習チェック表」に重要ポイントを記載してもらう。それを確認しながら復習し、毎回の授業に臨むこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

本授業では固定法の基本となる巻軸包帯を用いた関節固定について実技実習を行い、その基礎的技術を習得することを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

中間試験（50%）並びに定期試験（50%）の結果より評価する。

8. テキスト・参考文献

- ①（社）全国柔道整復学校協会監修、包帯固定学改訂第2版、（株）南江堂、2017年
- ②その他の参考資料は、必要に応じて授業中に紹介または配布する。

9. 受講上の留意事項

- ①毎回の授業時にはテキスト並びに固定材料（包帯など）を必ず持参すること。
- ②実習着（ポロシャツ）を着用すること。
- ③アクセサリ（ピアス、指輪、ネックレス）は、はずすこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は整形外科における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

公務員試験対策ゼミ A		講義	准教授 黒沢 賢一
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの教養選択科目、スポーツトレーナーコースの教養選択科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目 国際ビジネス学科の教養選択科目	科目ナンバリング	11220137 12220154 13220145 22200129

1. 授業のねらい・概要

公務員試験の教養試験分野の問題は大きく一般知能と一般常識(知識)に分けられるが、その合否を決するのは一般知能の問題である。一般知能はさらに判断推理、空間把握、数的推理、資料解釈などに分けられ、この授業では判断推理と空間把握について、その問題の解き方を講義する。判断推理はクイズのような問題で、空間把握はパズルのような問題である。いずれも公務員試験独特のもので、学校では習ったことがなく、最初はとまどうかも知れないが、試験に出題される問題は決まっているので、その解法パターンをひとつでも多く身につけていくことが大切である。合格ラインをこえるために必要な解法パターンはこの授業ですべて身につけることができるようにする。また判断推理と空間把握の講義と並行して、授業では一般常識の主要科目である社会科学の試験に出るポイントも解説していく。さらに最近の人物重視の試験傾向をふまえて、面接攻略のためのポイントも講義する。

科目名は公務員試験対策ゼミとなっているが、これらは就職試験にも役立つ知識であり、最近の地方公務員試験では、市町村を中心に SPI や SCOA を実施するところがあり、それらの内容にも配慮した授業内容にするので、民間企業への就職を考えている学生にも役立つ内容になる。

2. 授業の進め方

毎回の授業は、①一般知能テスト(判断推理、空間把握の過去問を教材にした頻出問題を出題)→②解説講義→③一般常識のポイント解説講義という流れで進んでいく。面接対策については講義形式をとる。

3. 授業計画

1. ガイダンス 〈判断推理〉	9. 真偽
2. 順序関係	10. 暗号
3. 時刻	〈空間把握〉
4. 位置関係	11. パズル問題(図形の分割・構成)
5. 対応関係	12. 立体図形
6. 試合の推理(リーグ戦)	13. サイコロと位相
7. 試合の推理(トーナメント戦)	〈面接対策〉
8. 命題と論理・集合算	14. 面接攻略法
	15. まとめ講義

※判断推理、空間把握のほかに社会科学分野の公務員試験に出題されるポイントも解説する。

4. 準備学修(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習は必要ないが、授業を受けた後は必ず一般知能テストで出題された問題について、授業中にとったノートとは別のノート(これを「課題ノート」と呼ぶ)に問題の解き方を詳細にまとめ直し、すべての問題について何も参照しないで解けるようになるまで、くり返し復習することが求められる。一般常識については、テキストの指定された範囲のポイント暗記するまで反復する。そのための復習時間としては2時間以上必要になる。

5. 課題(試験やレポート等)に対するフィードバックの方法

テスト、課題ノート返却時に評価のポイントなどを指摘する。

6. 授業における学修の到達目標

(1)公務員試験に出題される一般知能の解法の基礎が理解できるようになる。

- (2)公務員試験に出題される社会科学の知識を修得する。
- (3)公務員試験の面接に向けた準備ができるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

授業内で実施する確認テスト(50%)と課題ノートの提出(50%)によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- (1)黒沢賢一著『Point Master 社会科学の論点』（三恵社） 毎回使用するので必ず持参すること。
- (2)その他の受験教材については授業の中で紹介する。

9. 受講上の留意事項

毎回、授業のはじめに一般知能のテストをするが、できなくても気にする必要はない。解説講義を聞いて、くり返し復習してできるようになればいい。解説講義はただ聞いているだけでなく、説明の内容をしっかりとメモし、ポイントを聞き逃さないようにすることが大切である。

授業中の私語やスマートフォン、イヤホン等の使用、他の学生に迷惑となる教室内の秩序を乱す行為については厳しい態度で臨むので十分留意すること。

公務員試験合格を確実にしたいという方には、「社会科学の基礎A」も受講することをおすすめする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

社会科学の基礎A		講義	准教授 黒沢 賢一	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの教養選択科目、スポーツトレーナーコースの教養選択科目	科目ナンバリング	11220116	

1. 授業のねらい・概要

科学は社会科学，人文科学，自然科学に分けられるが，このうち社会科学は法学，政治学，行政学，経済学，財政学などの総称で，社会の真理を探究する学問である。中学，高校では「公民」「政治経済」などの科目で学んだ知識が社会科学である。

「社会科学の基礎A」では，法学，政治学，行政学の基礎概念について学び，それらの知識をもとにますます複雑化している現代社会を見る眼を養っていくことを目的とする。また社会科学は公務員試験で出題される一般常識(知識)分野の重要科目であり，講義では試験に出るポイントも解説し，この授業だけで合格ラインをこえられる知識を修得できるようにする。

2. 授業の進め方

板書しながら解説する講義形式で進める。授業では知識を解説してだけでなく，その日の授業に関連する時事問題も積極的に取り上げ，理論と現実との懸け橋となれる講義をめざしていきたい。また公務員試験の過去問題も紹介していく。

3. 授業計画

1. ガイダンス（授業予定と注意事項） 〈法学〉	8. 政治制度論
2. 法の分類	9. 国会
3. 法の支配と法治主義	10. 内閣
4. 日本国憲法	11. 裁判所
5. 基本的人権	12. 政党政治と選挙
〈政治学・行政学〉	13. 地方自治
6. 国家論	14. 国際政治
7. 民主政治の基本原理	15. まとめ講義

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習は必要ないが，授業を受けた後はテキストと配布されたプリントを必ず読み直し，授業時に紹介された参考文献等があれば，それを読んでさらに理解を深めて欲しい。そのための復習時間は1～2時間程度，必要になる。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

講義ノート，レポート提出後に評価のポイントなどを指摘する。

6. 授業における学修の到達目標

- (1)社会科学の基礎知識が理解できるようになる。
- (2)法学，政治学，行政学の基礎概念がわかるようになる。
- (3)時事問題について，自分の意見や考えを言えるようになる。
- (4)大卒レベルの警察官，消防官，市町村職員採用試験等の問題が解けるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

講義ノート(50%)とレポートの結果(50%)によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- (1)黒沢賢一著『社会科学の基本理論 大学教養講義ノート』（学術研究出版） 毎回必ず持参すること。

(2) この他、必要なプリントを配布し、参考文献や受験教材等は授業の中で紹介する。

9. 受講上の留意事項

授業中は板書したことをしっかり講義ノートにとり、また授業はただ聞いているだけでなく、説明された内容はメモを取りながら聞く習慣を身につけること。

授業中の私語やスマートフォン、イヤホン等の使用、他の学生に迷惑となる教室内の秩序を乱す行為については厳しい態度で臨むので十分留意すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は地方議会における実務経験(市議会議員)を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

社会科学の基礎B		講義	准教授 黒沢 賢一	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの教養選択科目、スポーツトレーナーコースの教養選択科目		科目ナンバリング	11220117

1. 授業のねらい・概要

科学は社会科学，人文科学，自然科学に分けられるが，このうち社会科学は法学，政治学，行政学，社会政策，財政学，経済学などの総称で，社会の真理を探究する学問である。中学，高校では「公民」「政治経済」などの科目で学んだ知識が社会科学である。

「社会科学の基礎B」では，社会政策，財政学，経済学の基礎概念について学び，それらの知識をもとにますます複雑化している現代社会を見る眼を養っていくことを目的とする。また社会科学は公務員試験で出題される一般常識(知識)分野の重要科目であり，講義では試験に出るポイントも解説し，この授業だけで合格ラインをこえられる知識を修得できるようにする。

2. 授業の進め方

板書しながら解説する講義形式で進める。授業では知識を解説してだけでなく，その日の授業に関連する時事問題も積極的に取り上げ，理論と現実との懸け橋となれる講義をめざしていきたい。また公務員試験の過去問題も紹介していく。

3. 授業計画

1. ガイダンス（授業予定と注意事項） 〈社会政策〉	7. 国民所得と経済の変動
2. 社会保障と労働問題 〈財政学〉	8. インフレ・デフレと通貨
3. 財政と予算 〈経済学〉	9. 金融と日本銀行
4. 経済学の発達	10. 貿易と国際収支
5. 経済の発展と現代の市場	11. 国際経済
6. 企業と資本結合	12. 日本経済の発展
	13. 産業構造の高度化
	14. レポート課題の考察
	15. まとめ講義

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習は必要ないが，授業を受けた後はテキストと配布されたプリントを必ず読み直し，授業時に紹介された参考文献等があれば，それを読んでさらに理解を深めて欲しい。そのための復習時間は1～2時間程度，必要になる。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

講義ノート，レポート提出後に評価のポイントなどを指摘する。

6. 授業における学修の到達目標

- (1)社会科学の基礎知識が理解できるようになる。
- (2)社会政策，財政学，経済学の基礎概念がわかるようになる。
- (3)時事問題について，自分の意見や考えを言えるようになる。
- (4)大卒レベルの警察官，消防官，市町村職員採用試験等の問題が解けるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

講義ノート(50%)とレポートの結果(50%)によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- (1) 黒沢賢一著『社会科学の基本理論 大学教養講義ノート』（学術研究出版） 毎回必ず持参すること。
- (2) この他、必要なプリントを配布し、参考文献や受験教材等は授業の中で紹介する。

9. 受講上の留意事項

授業中は板書したことをしっかりノートにとり、また授業はただ聞いているだけでなく、説明された内容はメモを取りながら聞く習慣を身につけること。

授業中の私語やスマートフォン、イヤホン等の使用、他の学生に迷惑となる教室内の秩序を乱す行為については厳しい態度で臨むので十分留意すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は地方議会における実務経験(市議会議員)を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

日本史概説		講義	教授 中村 光一	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの教養選択科目、スポーツトレーナーコースの教養選択科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目		科目ナンバリング	11220105 12220126 13220131

1. 授業のねらい・概要

日本の歴史を時代区分した場合、古代・中世・近世・近現代の4つに分ける考え方がある。もし1セメスターの中でこれらすべてを網羅的に見ていくとすると、一つの時代についておよそ3,4コマで対応することになるが、これでは大学生にとっての教養科目としてあまりに茫漠たる内容とならざるをえない。

そこで、本講義は対象を8,9世紀のおよそ200年間にしぼり、その間のわが国の政治、社会、文化の様相を見ていくことで日本史の概説にあてたいと思う。

対象をこの時期とした第一の理由は、講義担当者がこれまで8,9世紀史を主な研究対象としてきたことである。第二の理由は、「律令国家」の時代と呼ばれるこの時期に、前近代を規定する様々な法制度が確立されていること、また、この時期に都の置かれた奈良・京都が古都として、今日でも日本人のいわば「心のふるさと」としての地位を占めていると考えるからである。高校の日本史の時間であればわずか数時間の講義で終えてしまう部分を、じっくりと解説していきたいと考えている。

2. 授業の進め方

講義形式で授業を進めるが、受講生の理解をより深めるため、パワーポイント等のAV機器を活用したいと思う。

3. 授業計画

1. 7世紀後半期の東アジア情勢と日本	9. 奈良朝政治の諸相④ 称徳・道鏡政権
2. 律令国家の構造①ー統治のしくみ	10. 光仁から桓武へ
3. 律令国家の構造②ー一般農民の生活と税の負担	11. 『万葉集』の時代
4. 藤原京から平城京へ	12. 征夷と造都
5. 奈良仏教	13. 三代の平安
6. 奈良朝政治の諸相① 長屋王の悲劇	14. 平安貴族の生活
7. 奈良朝政治の諸相② 天然痘と奈良朝政治	15. まとめ 一律令国家二百年をふりかえって
8. 奈良朝政治の諸相③ 藤原仲麻呂政権	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前の回の講義時間の中で紹介する参考文献等を、次の講義時間までに目を通しておくこと。この準備学修には、2時間程度が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

定期試験の際、受験者に対して出題意図・解答のポイントについて解説を行う。

6. 授業における学修の到達目標

「日本古代史」について理解を深め、講義で取り上げた事項についてそれぞれ簡単な説明ができる程度の知識を有すること。

7. 成績評価の方法・基準

試験の結果（70%）、授業への取り組み姿勢（30%）。講義への積極的な参加を希望する。

8. テキスト・参考文献

テキストは特に指定せず、必要に応じて講義プリントを配付することがある。その試験持ち込みは不可であるため、

ノートを別に用意して講義を受講すること。参考文献は講義の中で随時紹介していくので、図書館を利用するほか、新書レベルの書籍は各自購入して読むように心がけてほしい。

9. 受講上の留意事項

授業に出ることは必要条件であって、けっして十分条件ではない。また、授業では「ノートに写す」ことも必要だが「ノートを作る」ことも重要である。板書、投影したものを単に写していくだけでは、本当にその講義の内容を理解したことにはならないということに気づいてほしい。なお、本講義では歴史上の人物や法令など固有名詞が頻出するので、あらかじめ高校程度の日本史の知識を修得しておいてほしい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、博物館学芸員としての実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

生物学基礎		講義	教授 田中 基晴	
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの教養選択科目、スポーツトレーナーコースの教養選択科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目		科目ナンバリング	11220126 12220143 13220104

1. 授業のねらい・概要

生体の働きを学ぶに当たっての基礎を学習する。みなさんの仕事は身体機能を高める、または修復することが主な業務である。生体がどのような仕組みで動いているのかを理屈に沿って分かりやすく理解してもらいたい。長い進化の歴史の中で合理的に身体が進化してきたことを理解してもらいたいと思う。授業は高校生物の復習が中心となるが、生体の仕組みの奥深さに興味を持っていただきたい。そうすることで、自ら学ぶ意欲が湧いてくるであろう。

2. 授業の進め方

基本的には、教科書を中心にして講義（OHP and/or 板書）を進める。授業最後にその日のまとめを入れる。

3. 授業計画

1. はじめに 2. 世界を構成する物質 3. 生体物質 4. 身体内外の圧力 5. 細胞 I（いろいろな細胞） 6. 細胞 II（細胞小器官） 7. 栄養，代謝 8. 栄養，代謝，エネルギー	9. 電気 10. 遺伝情報 11. 細胞分裂 12. 人体の階層構造（組織，器官） 13. 人体の階層構造（器官系） 14. ホメオスタシス 15. 生体防御機構と免疫
---	---

4. 準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

1) 予習（必要時間：約 50 分）

- 第 1 回の授業以外第 2 回から前週の授業で予習内容を伝える。下記のイ) -ロ) に示す 2 項目を学生に提示する。
 - 学習概要
 - 受講するにあたり必要な専門用語の説明

2) 復習（必要時間：約 40 分）

- 授業内容整理
授業で紹介した教科書、資料を再学習，整理する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

1) 筆記試験

- 正解は貼りだす。
- 解説は，不正解問題を中心に行う。

6. 授業における学修の到達目標

生物を化学物質で考えるとともに，生物の仕組みを化学物質の特性および化学の仕組みとして学習する。これらの知識は大人としての教養に資していただくとともに，スポーツや救急救命に役立ててもらいたい。

7. 成績評価の方法・基準

1) 成績評価の基準

主にスポーツに携わる者として最低限必要な生物学知識についての理解到達度によって成績評価を行う。

2) 成績評価の方法

- a) 受講態度（出欠・遅刻・早退など）（30 %）。
- b) 筆記試験（70 %）。

8. テキスト・参考文献

テキスト：解剖生理学や生化学をまなぶ前の楽しくわかる生物・化学・物理 岡田隆夫 羊土社 2019 年
参考書：大森徹の生物基礎が驚くほど身につく 41 講 大森徹 文英堂 2018 年

9. 受講上の留意事項

履修までに高校の生物（または生物基礎）を復習しておくこと。また解剖生理学を履修することが望ましい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。製薬会社における新薬開発の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

保健医療福祉論		講義	非常勤講師 一戸 真子
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの専門選択科目、スポーツトレーナーコースの専門選択科目 柔道整復師コースの専門基礎科目 救急救命士コースの専門基礎科目	科目ナンバリング	11322117 12331101 13332202

1. 授業のねらい・概要

保健、医療、福祉・介護に関連した関係法規と制度の基礎知識や理論について講義する。保健・医療・福祉・介護各サービスの内容や技術について学ぶことは大切であるが、これらのサービスは、法律によって根拠づけられ、規制され、一定のルールのもとで役割分担されているということの重要さと必要性を理解できるよう講義する。さらに人々の QOL の向上には、保健・医療・福祉・介護の連携が大変重要であり、相互に関連性があることについても講義する。

2. 授業の進め方

テキストの内容に沿った講義形式を基本とする。振り返りシートを活用して、理解を深められるよう工夫する。

3. 授業計画

1. 保健・医療・福祉・介護各サービスの特徴 2. 憲法第 25 条と社会保障、医師法・各医療従事者法 3. 医業と治療行為、医業類似行為 4. 医療法、健康保険法、介護保険法 5. 後期高齢者医療制度、障害者総合支援法 6. 診療報酬制度・介護報酬制度、公的扶助 7. 医療機能、病床機能、介護機能、在宅 8. サービス利用者の人権、自己決定・尊厳	9. 健康増進法、予防の重要性 10. 生活習慣病とがん対策 11. 患者の QOL とセルフケア 12. 職種間の連携・チーム医療の重要性 13. 障害者対策、難病対策 14. 地域包括ケアシステム 15. 利用者中心の保健・医療・福祉・介護システムの構築と連携
--	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

今回の授業テーマに関するテキストを読み込んでおくことと、各授業後に指示する課題についてまとめておくこと。これらの予習・復習の時間には 2 時間以上必要とする。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後、解答などを掲示板に掲示する。

6. 授業における学修の到達目標

- 保健・医療・福祉・介護各サービスの特徴と制度の果たす役割について説明できる。
- 保健、医療、福祉各関連法規および医療従事者各法について説明できる。
- 保健医療福祉制度のあり方について説明でき、保健・医療・福祉・介護の連携の重要性について説明できる。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験（60%）、レポート（40%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

テキストは、『保健医療福祉行政論』（2022）ミネルヴァ書房（ISBN9784623093434）を使用するので、毎回の課題に必要である。その他必要な参考書等は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

保健・医療・福祉・介護に関する各法制度等を知っておくことは、今後患者や患者家族経験、要介護者や介護者を経験

する際にも役立つことが多いので、関心を持って積極的に受講して欲しい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、医療施設や福祉施設評価に関する実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

医療倫理学		講義	教授 加藤 政彦	
科目カテゴリ	柔道整復師コースの専門基礎科目 救命救急士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	12331104 13332101	

1. 授業のねらい・概要

医療従事者として身に着けるべき医療倫理の原理・原則を理解すること、さらに医療倫理学がどのように医療現場で実践されるかにつき、理解することを狙いとした授業である。

2. 授業の進め方

テキストの範囲の内容を、適宜、スライドと配布資料を用いて授業する。授業の最後に最近の国家試験問題等を出題し解答を出席カードに記載して提出させる。テキストの内容に沿った講義形式を基本とするが、随時、新聞・雑誌の記事などから具体的な出来事を取り上げて診療の現場に即した説明も行う。

3. 授業計画

1. 生命倫理学と医療倫理学の原理	9. 救急医療における倫理
2. 説明と同意	10. 感染症対策
3. 研究倫理	11. ケーススタディ①（他者危害の防止）
4. 人工妊娠中絶と出生前診断	12. ケーススタディ②（自己危害の防止）
5. 脳死と臓器移植	13. ケーススタディ③（尊厳死）
6. 終末期医療・安楽死と尊厳死	14. ケーススタディ④（障害児の出生）
7. 新生児医療における生命倫理	15. ケーススタディ⑤（医療資源化の是非）
8. 遺伝子・ゲノム医療・再生医療	

準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、テキストと配布資料を使って復習しておく。さらに、授業の最後に出された問題を復習しておく。この問題は次回の授業の初めに解答を解説する。なお、これらの準備学習には90分以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回、過去に実施された国家試験の問題を実践解答させる。問題解答の際、また定期試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 倫理と道徳の相違を理解する。倫理に関して各自の考えをしっかりと構築する。
- 2) 医療倫理の実地においてコミュニケーションの理解は最も大切であるため、コミュニケーションについて理解を深める。
- 3) 医療倫理が柔道整復師、救急救命士の現場でどのように生かされるかにつき理解する。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（30%）、定期試験（70%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト：伏木信次，編，生命倫理と医療倫理 第4版，金芳堂，2020年

参考文献：明治東洋医学学院編集委員会編，2024 第22回～第31回 徹底攻略！国家試験過去問題集 柔道整復師用，医学の日本社，2023年

小関一英編，2023年版救急救命士国家試験対策出題分野別国試験問題・解説集，晴れ書房，2022年
適宜指定する教材

テキストは毎回の授業に必ず持参すること。また、参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

欠席回数が全講義回数の3分の1（6回）以上となった場合には受験資格を失う。

遅刻，欠席ならびに授業中の私語，許可の無い教室の出入り，授業に関係ない言動は慎むこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。医療機関における医師としての実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

群馬の歴史と文化		講義	教授 中村 光一
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの教養選択科目、スポーツトレーナーコースの教養選択科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11220108 12220129 13220134

1. 授業のねらい・概要

本学部には、県内出身者のほか、近県、遠くは外国からの留学生も多数在籍している。そして、県外出身者はもちろんのこと、県内出身の大部分の学生にしても、本学の2つのキャンパスが置かれている群馬の地がどのような歴史を辿ってきたのか、おそらくこれまでそれほど深く意識し、学んできたことはなかったのではなかろうか。

本科目では、人生の中の貴重な4年間を過ごすことになる群馬県域がどのような歴史を歩んできたのか、古代から現代まで、時代を下る形で講義していきたいと思う。もとより、半期という期間の中で「群馬県の歴史」を網羅的に述べることは困難であり、トピックを取り上げる形で講義を行うことをあらかじめ断っておきたい。

2. 授業の進め方

講義形式で授業を進めるが、受講生の理解を助けるため、パワーポイント等のAV機器を活用したいと思う。

3. 授業計画

1. 群馬の夜明け	9. 縁切寺満徳寺
2. 古墳時代の群馬県地域	10. 天明の浅間焼け
3. 上野三碑とその時代	11. 温泉大国群馬
4. 「三十八年戦争」と上野国	12. 群馬県の誕生
5. 『延喜式』に見る古代の上野国	13. 富岡製糸場と新町屑糸紡績所
6. 新田義貞と上野の武士	14. 工業都市太田の原点
7. 戦国時代の上野国	15. 今日の群馬
8. 中山道上州路を歩く	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前の回の講義時間の中で紹介する参考文献等を、次の講義時間までに目を通しておくこと。この準備学修には、2時間程度が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

定期試験の際、受験者に対して出題意図・解答のポイントについて解説を行う。

6. 授業における学修の到達目標

「群馬県域の歴史と文化」について理解を深め、講義で取り上げた事項についてそれぞれ簡単な説明ができる程度の知識を有すること。

7. 成績評価の方法・基準

試験の結果（70%）、授業への取り組み姿勢（30%）。講義への積極的な参加を希望する。

8. テキスト・参考文献

テキストは特に指定せず、必要に応じて講義プリントを配付することがある。その試験持ち込みは不可であるため、ノートを別に用意して講義を受講すること。参考文献は講義の中で随時紹介していくので、図書館を利用するほか、新書レベルの書籍は各自購入して読むように心がけてほしい。

9. 受講上の留意事項

授業に出ることは必要条件であって、けっして十分条件ではない。また、授業では「ノートに写す」ことも必要だが「ノートを作る」ことも重要である。板書，投影したものを単に写していくだけでは，本当にその講義の内容を理解したことにはならないということに気づいてほしい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は，博物館学芸員としての実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

選択英語 A (4)		講義	講師 松本 秀樹	
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの必修科目、 スポーツトレーナーコースの必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11110201 12210201 13210201	

1. 授業のねらい・概要

英語の4技能を使ったコミュニケーションに習熟することによって、様々な背景をもつ人々とも自然と交流し意思疎通がはかれるようになることをねらいとする。教材に登場する同世代の人物から英語圏各地の文化、風土とともに彼ら自身の現在の姿や将来のビジョンを知り、学生自身の将来像を考える機会とする。日頃の生活や将来の仕事の場面においても英語でコミュニケーションを取ろうとする態度が身に付くように具体的な場面を設定して生きた英語に慣れ親しみながら学べるようにする。また、異文化を理解し自身の発想を広げ、多角的に物事を見て考える姿勢を身に付ける。

2. 授業の進め方

2コマで1ユニット進むこととする。ユニットの前半は、トピックに関する内容についてウォーミングアップを行い、関連する語彙や表現を学ぶ。その後トピックについて動画により学習し、内容の要点を捉えた上でコミュニケーション活動に習熟し英語運用能力を高めるとともに、異文化理解を通して世界の中の自分を意識する機会とする。ユニットの後半は、英語圏に住む同世代のインタビューを視聴してリスニングやリーディングを行い英語の実践的総合力を向上させるとともに、文化・習慣についての理解を深め学生自身の将来像を考える機会を設定する。

3. 授業計画

1. Course orientation and overview	16. Unit 8 New Zealand Introduction
2. Unit 1 Los Angeles Introduction	17. Unit 8 Into the Peacefulness
3. Unit 1 Living the Dream	18. Unit 9 New Zealand Documentary
4. Unit 2 Los Angeles Documentary	19. Unit 9 An Interesting Walk with Sophie
5. Unit 2 Meeting Different Kinds of People	20. Unit 10 England Introduction
6. Unit 3 Scotland Introduction	21. Unit 10 Having a Big Influence on the World
7. Unit 3 A country Filled with Imagination and New Ideas	22. Unit 11 England Documentary
8. Unit 4 Scotland Documentary	23. Unit 11 Living Your Life to the Maximum
9. Unit 4 Being a Typical Scot, and Proud of It	24. Unit 12 The Bahamas Introduction
10. Unit 5 Canada Introduction	25. Unit 12 Developed Tourism Industry
11. Unit 5 Living in Harmony with Nature	26. Unit 13 The Bahamas Documentary
12. Unit 6 Canada Documentary	27. Unit 13 Making Steps to Achieve Your Goals
13. Unit 6 A Young Adventurer in Ottawa	28. Unit 14 Review Section II
14. Unit 7 Review Section I	29. Course Review
15. Mid-Term report	30. Course Summary

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業前には該当箇所の予習をして、授業終了後は学習した内容を復習して習熟に努めること。これらの学修に1時間を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験とレポート・小テストについては採点の上返却する。また、提出物等は講評し改善のためのアドバイスをを行う。

6. 授業における学修の到達目標

1. 英語の基本的な技能に習熟することによって、英語による意思の疎通を図ることができる。

2. 異文化について学び理解することによって、日常生活での自身の発想を広げ多角的なものの見方を身に付けることができる。

7. 成績評価の方法・基準

試験とレポート（50%）、提出物・小テスト・授業の参加度・積極性（50%）を総合して評価する。

8. テキスト・参考文献

森田彰, Bill Benfield 他 著, 『World Wide English Volume 1 世界で輝く若者たちの英語1』成美堂（2016）

9. 受講上の留意事項

英語をわかりやすく基礎から段階を踏んで授業を行うので、英語に自信がなくても安心して受講してほしい。授業には辞書または電子辞書を持参すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

選択英語 B (4)		講義	講師 松本 秀樹
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11110202 12210202 13210202

1. 授業のねらい・概要

選択英語 A (4) を継続・発展させた内容とする。

英語の 4 技能を使ったコミュニケーションに習熟することによって、様々な背景をもつ人々とも自然と交流し意思疎通がはかれるようになることをねらいとする。教材に登場する同世代の人物から英語圏各地の文化、風土とともに彼ら自身の現在の姿や将来のビジョンを知り、学生自身の将来像を考える機会とする。日頃の生活や将来の仕事の場面においても英語でコミュニケーションを取ろうとする態度が身に付くように具体的な場面を設定して生きた英語に慣れ親しみながら学べるようにする。また、異文化を理解し自身の発想を広げ、多角的に物事を見て考える姿勢を身に付ける。

2. 授業の進め方

2 コマで 1 ユニット進むこととする。ユニットの前半は、トピックに関する内容についてウォーミングアップを行い、関連する語彙や表現を学ぶ。その後トピックについて動画により学習し、内容の要点を捉えた上でコミュニケーション活動に習熟し英語運用能力を高めるとともに、異文化理解を通して世界の中の自分を意識する機会とする。ユニットの後半は、英語圏に住む同世代のインタビューを視聴してリスニングやリーディングを行い英語の実践的総合力を向上させるとともに、文化・習慣についての理解を深め学生自身の将来像を考える機会を設定する。

3. 授業計画

1. Course orientation and overview	16. Unit 8 South Africa Introduction
2. Unit 1 New York Introduction	17. Unit 8 The Rainbow Nation
3. Unit 1 The City That Never Sleeps	18. Unit 9 South Africa Documentary
4. Unit 2 New York Documentary	19. Unit 9 Life Is a Gift
5. Unit 2 A Passion for Hip Hop	20. Unit 10 Wales Introduction
6. Unit 3 Australia Introduction	21. Unit 10 A Small Country with a Big History
7. Unit 3 The Unique Continent	22. Unit 11 Wales Documentary
8. Unit 4 Australia Documentary	23. Unit 11. Enjoying New Experiences
9. Unit 4 A Girl with Big Dreams and High Hope	24. Unit 12 India Introduction
10. Unit 5 Northern Ireland Introduction	25. Unit 12 A Lively Country of Colors and Contrasts
11. Unit 5 A Country with Old History and Unique Nature	26. Unit 13 India Documentary
12. Unit 6 Northern Ireland Documentary	27. Unit 13 The Most Important Things in My Life
13. Unit 6 More Than Meets the Eye	28. Review Section II
14. Unit 7 Review Section I	29. Course Review
15. Mid-Term report	30. Course Summary

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業前には該当箇所の予習をして、授業終了後は学習した内容を復習して習熟に努めること。これらの学修に 1 時間を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

筆記試験・小テストについては採点の上返却する。また、レポートは講評し改善のためのアドバイスを行う。

6. 授業における学修の到達目標

1. 英語の基本的な技能に習熟することによって、英語による意思の疎通を図ることができる。
2. 異文化について学び理解することによって、日常生活での自身の発想を広げ多角的なものの見方を身に付けることができる。

7. 成績評価の方法・基準

試験とレポート（50%）、提出物・小テスト・授業の参加度・積極性（50%）を総合して評価する。

8. テキスト・参考文献

森田彰, Bill Benfield 他 著, 『World Wide English Volume 2 世界で輝く若者たちの英語2』成美堂（2016）

9. 受講上の留意事項

英語をわかりやすく基礎から段階を踏んで授業を行うので、英語に自信がなくても安心して受講してほしい。授業には辞書または電子辞書を持参すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

選択フランス語 A		講義	教授 加藤 芳孝	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目		科目ナンバリング	11110205 12210207

1. 授業のねらい・概要

フランスと聞くと何を思い浮かべますか。芸術？グルメ？ファッション？パリ 2024 年オリンピック・パラリンピック？テニス全仏オープン Roland Garros？では、フランス語はどうでしょう。優雅、おしゃれ、難しそう？世界で最も美しい響きを持つと言われるフランス語は、約 30 ヶ国で公用語として使用されている他、国連、EU、OECD、ユネスコ、国際オリンピック委員会を始めとした多くの国際機関で公用語の一つに採用されており、英語に次ぐ世界第二の公用語として大変有用な言語です。

本科目では、全くの初心者を対象に、会話を中心とした基本的な表現を習得することで、海外渡航した際に街中でコミュニケーションが取れる基礎的総合力を養うことをねらいとします。また、フランス語を通じてフランス文化・社会やフランス人の考え方・日常生活など新しい世界に触れることで、多面的な見方を身につけます。

2. 授業の進め方

まずは日常生活で使用する挨拶などの基礎的な表現を通じてフランス語の発音とリズムに慣れ、平行して基本的な文法や文章構成を学習します。自分自身に置き換えた言葉や表現を反復することで語彙を増やし、使えるフランス語を目指します。学習方法：テキストを活用した発音指導、聞き取り、会話練習が中心。

3. 授業計画

1. フランス語の魅力、習得のコツ、発音の特徴	16. 身の回りの物に関する語彙、目的語を伴う否定形
2. 4月のフランス、日常の挨拶から始めよう！	17. 家族に関する語彙、「何歳ですか？」
3. 「私の名前～です」、「フランス人ですか？」	18. 文法：動詞 avoir（持っている）の活用、否定の de、疑問文の作り方
4. 「それは～です」、数字 0～20 とその指の動作	19. 「その人は誰？」、「仕事は何してるの？」
5. 文法：主語人称代名詞、動詞 être（～です）の活用、国籍の表現	20. 「どんな人？」、人物を描写する（性格・外見）
6. 5月のフランス、「私は～です」、「～に住んでいます」	21. 国・～人に関する語彙、相手にインタビューする
7. 職業・身分の表現、場所の言い方	22. 文法：所有形容詞、疑問詞（1）、形容詞の性と数
8. 簡単な自己紹介、数字 21～30	23. 「私の携帯はどこ？」、「これは何ですか？」
9. 文法：oui と non、-er 型動詞の活用、エリジヨン	24. 部屋の中の物に関する語彙、物の位置を示す
10. 「～をください」、「はい、どうぞ」	25. 文法：定冠詞、「～は何？」・「何を～？」、縮約（1）
11. 「～語を話しますか？」、「いいえ、話しません」	26. 7・8月のフランス、数字 70～100
12. カフェでの飲み物・食べ物と注文、数字 30～69	27. 「それ大好き！」、「～がたくさんあるね」
13. 文法：名詞の性と数、不定冠詞、否定文	28. 動詞 aimer（好き）を使った表現、定冠詞の用い方
14. 6月のフランス、「アドレス教えて」	29. 相手の好みを聞く、好き嫌いの程度を言う
15. 「～を持っていますか？」、「兄弟がいますか？」	30. 復習。相手の関心を引く自己紹介

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

事前にテキストのレッスン該当箇所を自習用オンラインビデオで最低3回視聴しておくこと（必要時間 10 分程度）。授業後は再度オンラインビデオを使って、習った会話表現を次回の授業まで毎日最低5回繰り返すこと（必要時間 15 分程度／日）。初心者にとって短い時間（10～15 分／日）でも、“毎日”フランス語に接することが確実な習得につながります。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後、授業内ないしはオンラインにて、回答、解説、講評をフィードバックします。

6. 授業における学修の到達目標

自身に則した基本的な会話表現を身につけることで、相手に臆することなくフランス語で日常生活上最低限必要なコミュニケーションが取れるようになることを目標とします。

到達目標：1. 発音の会得と文法基礎の理解 2. 日常会話の習得・実践 3. フランス語で自分の意思を伝える

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（60%）、期末試験・課題（40%）に基づいて評価します。

8. テキスト・参考文献

テキスト：ニコラ・ガイヤール他著『新装カフェ・フランセ Nouveau Café Français』（朝日出版社 2022）

9. 受講上の留意事項

履修者は全くの初心者が前提で、発音や表現を一からゆっくり分かりやすく指導しますので積極的に参加してほしい。
授業出席と復習が肝要です。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当します。本授業は、金融機関、サービス業界における実務経験を活かして指導します。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

選択フランス語B		講義	教授 加藤 芳孝	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目		科目ナンバリング	11110206 12210208

1. 授業のねらい・概要

本科目は前期の『選択フランス語A』の履修者を対象に、学んだ基本的な日常会話や表現を復習、再確認することと併せて、相手に応じた異なる言い方や状況に則した幅広い表現ができるよう、語彙を増やし修辭技法を会得することをねらいとします。一方、読む力、書く力を身につけ発展させるため、基礎文法も体系的に学習します。

2. 授業の進め方

様々なシチュエーションを想定して、自分自身に置き換えた言葉やいくつかの異なる表現を反復して習得します。語彙や表現方法を豊かにし、動作も含めた実践的で相手に通じるフランス語習得を目指します。学習方法：テキストを活用した聞き取り、会話練習の他、音楽や映画などの視聴覚教材を使ってリスニング力、表現力を強化します。

3. 授業計画

1. 前期の復習	16. 時刻の表現と使用する前置詞
2. 「今日は何着てるの?」、「それ似合ってるよ」	17. 日常生活に関する動詞と表現
3. 洋服に関する語彙、色の表現、比較する	18. 文法：二通りの時刻表現、代名動詞の活用
4. 「いい天気ですね」、気候に関する表現	19. 「～知っている?」、「どうして?」
5. 文法：比較級、指示形容詞、非人称構文	20. 「仕事楽しい?」、「まあまあね」
6. 「サッカーするの?」、「時々ね」、頻度の副詞	21. ある人について情報を得る聞き方、アルバイトについて話す
7. 「朝ごはんは何食べるの?」、「カフェオレだけ」	22. 文法：目的語人称代名詞、疑問詞 (3)、不規則動詞の活用—connaître (知っている) と voir (見える)
8. スポーツをする表現、楽器を演奏する表現	23. 「お決まりになりましたか?」、「ボナペティ!」
9. 文法：部分冠詞、中性代名詞、si と non、動詞 prendre (取る) と faire (する) の活用	24. 「お味はいかがですか?」、「どってもおいしいです」
10. 「お昼行かない?」、「お腹すいた」	25. フランスの食事の流れについて、メニューの見方、注文の仕方
11. 「通勤時間どれくらい?」、「だいたい 30 分かな」	26. 料理の感想について述べる
12. 曜日にに関する語彙、場所を示す前置詞	27. 文法：複合過去 (1)、半過去
13. 誘い方、乗り物に関する語彙と時間	28. 「昨日何してたの?」、「大学に行ったよ」
14. 文法：不規則動詞の活用—aller (行く)、venir (来る)、mettre (置く)、vouloir (したい)、pouvoir (できる)、縮約 (2)、中性代名詞 y、疑問詞 (2)	29. 文法：複合過去 (2)、主語代名詞 on
15. 「たいてい朝 7 時に起きて、8 時に家を出ます」	30. 1～3月のフランス、ある一日の行動を話す

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

事前にテキストのレッスン該当箇所を自習用オンラインビデオで最低3回視聴しておくこと（必要時間 10 分程度）。授業後はオンラインビデオを使って、習った会話表現を次回の授業まで毎日最低5回繰り返すこと（必要時間 15 分程度／日）。初心者にとって短い時間（10～15 分／日）でも“毎日”フランス語に接することが確実な習得につながります。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後、授業内ないしはオンラインにて、回答、解説、講評をフィードバックします。

6. 授業における学修の到達目標

相手や状況に応じた多様な会話表現を身につけることで、相手と対等な立場に立ってフランス語で意思疎通が図れるようにします。

到達目標：1. 基本文法の習得 2. 多様な日常会話の習得、実践 3. フランス語で自分の意見を述べる

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（60％）、期末試験（40％）に基づいて評価します。

8. テキスト・参考文献

テキスト：ニコラ・ガイヤール他著『新装カフェ・フランセ Nouveau Café Français』（朝日出版社 2022）

9. 受講上の留意事項

『選択フランス語A』で学んだ基礎を確認しながら、更に豊かな表現に発展させていきますので、生きたフランス語に触れる機会となります。授業出席と復習が肝要です。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当します。本授業は、金融機関、サービス業界における実務経験を活かして指導します。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

教養ゼミ		演習	担当教員共通
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目, スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130201

1. ゼミのねらい・概要

本科目は、所属ゼミ生と担当教員、あるいはゼミ生相互の交流を深めるとともに、大学での学修の要諦である専門ゼミ、卒業研究への橋渡し、および本学在学中のキャリアアップの動機づけとしての役割を果たすことを目的に設けられた2年次対象の通年科目である。

本科目は下記の指針により実施されるが、各時限の具体的な進め方は各ゼミ担当教員の専門分野に基づいた運営方針に委ねられている。

- ①与えられた、あるいは自ら考えた課題をまとめるために必要な情報を収集・取捨選択し、それを口頭報告を行う際のレジュメ、レポートの作成へとつなげていくための能力を養う。
- ②学生生活において、日常的に求められる国語力を養う。
- ③就職活動を行う際に必要となる基礎的な数的理解力・一般常識に関する能力を養う。

2. ゼミ計画

15コマの各時限の内容の設定は各担当教員に委ねられているが、概ね以下のような流れのもとに実施される。

1. 履修指導(昨年度の反省と対応)	9. 一般常識涵養のための企画③—自然科学分野
2. ゼミ内の融和を図るための企画—グループ学習	10. キャリアアップのための指導②—全体ゼミ
3. キャリアアップのための指導①—全体ゼミ	11. レポート作成能力アップのための企画①—評論文
4. 国語力アップのための企画①—難読語	12. レポート作成能力アップのための企画②—随筆
5. 国語力アップのための企画②—四字熟語	13. レポート作成能力アップのための企画③—新聞記事
6. 国語力アップのための企画②—ことわざ	14. キャリアアップのための指導③—全体ゼミ
7. 一般常識涵養のための企画①—人文科学分野	15. 本年度の振り返りと次年度のプランニング
8. 一般常識涵養のための企画②—社会科学分野	

※1. ～15. の順番については、全体ゼミに外部講師をお願いする場合があること、また、担当教員の専門分野により講義内容に独自性があることから変更となることもある。

なお、柔道整復師コースおよび救急救命士コースのゼミについては、将来の国家試験受験を見越した対策や学外施設での実技指導等をこの時間を使って行うことも予定されているため、内容を変更して行う場合がある。その場合の対応についてはゼミ担当教員の指示にしたがうこと。

3. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

テキスト、あるいは科目担当教員からの指示事項について毎回2時間以上の予習・復習を行う。

4. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

授業時間中の課題、個別発表、グループ学習による成果、ならびに（試験を実施する場合は）試験に対しては、各ゼミ担当教員が適切な方法（個別の講評や添削、あるいは解答のポイントなどの説明）によって、フィードバックを実施する。

5. ゼミにおける学修の到達目標

専門ゼミ履修に必要とされる基礎的な能力を修得すること。所属ゼミ担当教員・ゼミ生との良好な人間関係が構築できること。

6. 成績評価の方法・基準

発表内容や試験などの評価（50%）に、ゼミに対する取り組み姿勢（50%）を加えて判定する。

7. テキスト・参考文献

テキスト：各担当教員によってゼミの運営方法が異なるので、担当教員に指示に基づいて購入を行うこと。指示を受けた場合には、必ず購入してゼミに臨むこと。

参考文献：ゼミ担当教員から適宜紹介される。

8. 受講上の留意事項

本科目は、前後期 30 回の同一時限開講コマの半分(残り半分はトップマネジメント講話)の 15 回分のコマより成り立っている。各時限のうち、いつの時間が本科目となり、いつの時間がトップマネジメント講話になるかは、講話をお願いする講師の都合に負うところが大きいのので、掲示板等で当該回が講話かゼミかをよく確認してほしい。

全体ゼミの場合には、授業開始 5 分前までに指定の教室(全体ゼミ会場)に集合し、各自に指定された座席に着座して授業開始を待つこと。一方、ゼミ別指導の回については、各ゼミに指定された教室に集合し、指導担当教員の指示に従うこと。

9. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

10. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

トップマネジメント講話		演習	全担当教員共通 講師応接 教授 中村光一 司会進行 教授 松下晋	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目 柔道整復師コースの必修科目 救急救命士コースの必修科目	科目ナンバリング	11130202 12130202 13130202	

1. 授業のねらい・概要

本科目は、前後期の30回の講義回数の中の15回(残り15回は教養ゼミを実施する)を使って行われる、全体ゼミ形式と指導担当教員によるゼミ別指導を組み合わせた通年科目である。

前者では、6回にわたって、群馬、埼玉、その他近県の優良企業や各種組織を運営する経営トップなどを講師に招き、マネジメントの現場の「生の声」を拝聴する機会(トップマネジメント講話)が設けられている。そこから、実際の経済社会の実情を知ることにより、「実社会ではどんな問題があるのか」「その問題にどんな解決策があるのか」などを学ぶ。このような経験を通じて、学生が自らの学問領域(具体的には専門ゼミ、卒業研究のゼミなど)で「今、何を学ぶべきか」「何を考えるべきか」などを意識し、今後の学修意欲を高めることが期待される。一方、後者については、聴講したトップマネジメント講話の各回の内容をレポートとしてまとめることで、3年次・4年次の学修に役立つレポート作成力の涵養を目指している。

2. 授業の進め方

前後期の30回のうちのいずれの回が本科目にあたり、いずれが教養ゼミの回となるかは、来校していただく講師のご都合等もあるので、別途指示する。トップマネジメント講話を含む全体ゼミの場合には、授業開始5分前までに指定の教室(全体ゼミ会場)に集合し、各自に指定された座席に着座して授業開始を待つこと。一方、ゼミ別指導の回については、各ゼミに指定された教室に集合し、指導担当教員の指示に従うこと。

3. 授業計画

1. トップマネジメント講話の概要説明(全体ゼミ)	9. 第4回 トップマネジメント講話レポート指導(各ゼミ)
2. 第1回 トップマネジメント講話(全体ゼミ)	10. 第5回 トップマネジメント講話(全体ゼミ)
3. 第1回 トップマネジメント講話レポート指導(各ゼミ)	11. 第5回 トップマネジメント講話レポート指導(各ゼミ)
4. 第2回 トップマネジメント講話(全体ゼミ)	12. 第6回 トップマネジメント講話(全体ゼミ)
5. 第2回 トップマネジメント講話レポート指導(各ゼミ)	13. 第6回 トップマネジメント講話レポート指導(各ゼミ)
6. 第3回 トップマネジメント講話(全体ゼミ)	14. トップマネジメント講話の総括指導(各ゼミ)①概要
7. 第3回 トップマネジメント講話レポート指導(各ゼミ)	15. トップマネジメント講話の総括指導(各ゼミ)②各回分
8. 第4回 トップマネジメント講話(全体ゼミ)	

※柔道整復師コースおよび救急救命士コースのゼミについては、将来の国家試験受験を見越した対策や学外施設での実技指導等をこの時間を使って行うことも予定されている。その場合の提出方法等についてはゼミ担当教員の指示に従うこと。

4. 準備学修(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間

全体ゼミ分については、あらかじめ指示された下調べ(来校される講師が所属されている企業・団体の概要等)を行う。この準備学習には2時間以上が必要である。各ゼミ分については、各ゼミ担当教員より指示された事項を行うが、レポート作成のためには、講話の内容の復習・整理は必要で、この学習には2時間以上が必要である。

5. 課題(試験やレポート等)に対するフィードバックの方法

各ゼミ担当教員の指導のもと作成されたレポートに対しては、各ゼミ担当教員が適切な方法(添削して返却する方法や講評を行う方法など)によって、フィードバックを実施する。

6. 授業における学修の到達目標

- (1) 講話の内容について、正確にメモをとることができる。
- (2) 指定された字数に見合った内容のレポートを作成することができる。

7. 成績評価の方法・基準

トップマネジメントのレポートの評価(50%)に、平常点(50%)を加味して判定する。なお、トップマネジメント講話のレポートの提出回数が4回を下回った場合には本科目の単位を付与しない。

8. テキスト・参考文献

テキストは特に指定しない。講話の際に配付資料等がある場合はその都度教室入り口で配付する。

9. 受講上の留意事項

以下に述べるのは、トップマネジメント講話受講に際しての留意事項であるが、受講マナーに関することは他の講義でも同様である。

〈講話に臨む姿勢〉

(1) 全体ゼミの場合には、定刻開始を行うため授業開始5分前までに指定の席に着くこと。なお、トップマネジメント講話開催の回は、メモ用紙(2枚複写)と配付資料(用意されている場合)を教室入口で各自1部取り、定められた席に着くこと。また、途中退出は特別な事情のある場合を除き認めない。

(2) 正しい姿勢で受講すること

帽子などはとる。荷物は机の下に置き、筆記具とメモ用紙と配付資料のみ机の上に置く。教室内は飲食禁止であるため、飲みかけの飲料水等は厳封してカバン等に収納すること。講話中は、メモを取るときと、提示された物を見るとき以外は講師を注視すること。机の上に顔を伏せて居眠りをするのは、絶対にしてはならない。

(3) 私語を慎むこと

私語をしている学生は、学籍番号・氏名を確認し、次回以降の受講を認めないことがある。また、携帯電話・スマートフォンの電源は切るかマナーモードにしてカバン等に収納しておくこと。時計のアラームも鳴らないよう処置しておく。

〈出欠の確認〉

(1) 出欠の確認は指定のメモ用紙(2枚複写)のうちの1枚目の提出により行う。受講者は、講話終了後ただちにメモ用紙を担当教員に提出すること。当該時間以後の提出は認めない。

〈メモの取り方〉

(1) メモは、トップマネジメント講話のレポートを作成するために重要であるばかりでなく、評価の対象となる提出物でもある。

(2) 講話の要点をできる限り正確に書きとめること。用紙はA4判2枚複写の指定のものを配付するので、そのうちの1枚を講話終了後に提出し、もう1枚はレポート作成の際に参照すること。

〈レポートの作成〉

(1) レポートは、「1. 講話の概要」、「2. 興味・関心を抱いたこと」という見出しで2つの項目をたて、それぞれ400字を目安に作成すること。

(2) 各講話については、講話の翌週の時間に指導担当教員のもとで指導を受けながら、レポートの作成を行う。レポート作成に必要な用紙は、共通の書式の各ゼミを通じて各人に配付する。

〈レポートの内容〉

諸君から提出されたレポートのいくつかには共通の問題があり、気をつけてそれを直すだけで質を高めることができる。

(1) 文章は全体のアウトラインを考えたのちに書き始める

たとえ400字の文章であっても、全体の流れが固まる前に書き始めたのではまとまりを持った内容のものとするのは難しい。配布された用紙の裏に大まかなフローをメモするなどして、構想がまとまった後に書き始める。

(2) 各文は完結させる

データを羅列しているだけのレポートが目立つが、レポートは文章になっていなければならない。どうしてもデータを挙げたい場合は、表にして本文とは別に書くといふ。

(3) わかりやすい文章を書く

時折、文の構造がねじれているものが見受けられる。主語と述語の関係を見直すこと。あまりに長い文は好ましくない。

(4) 段落分けて読みやすくする

1つの段落が10行以上にもわたるのは、段落としては大きすぎる。内容の異なることを述べる場合は必ず段落分けをする。段落の始まりは、改行して1字分空ける。

(5) 文体を統一する

「です・ます」調と「だ・である」調の混在した文章は読みづらいのみならず、文章全体のまとまりを欠く。すべて「だ・である」調で統一すること。

〈トップマネジメント講話欠席者のレポート作成時の扱い〉

(1) 都合により講話を欠席した場合でも、翌週の「講話レポート指導」には必ず出席し、指導担当教員の指示を受ける事。

10. 実務経験のある教員等による授業科目

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

選択英語 A (3)		講義	教授 加藤 芳孝	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11110201 12210201 13210201	

1. 授業のねらい・概要

英語を聞き、話し、読み、書く総合的能力の向上を図り、英語への苦手意識を無くし、相手に臆せず円滑なコミュニケーションが取れるよう英語に親しみ慣れることをねらいとします。様々な場面での会話や、日本とは異なる視点から書かれた文書講読を通じて、異文化多様性に触れる機会を得ることで視野を広げることに繋がります。

2. 授業の進め方

4コマで1ユニットを構成します。ユニットの内容は、1. 語彙と会話リスニング, 2. 様々な表現によるスピーキング, 3. 文法と練習問題, 4. 読解と作文です。まず基本的表現を習得した上で、自分自身に置き換えた会話を学生同士のロールプレイも交えて体得します。次に、様々な状況を想定し、臨機応変に対応できる実践的なコミュニケーションスキルを養います。読解は、速読の訓練と文法を介した熟読の両面から、文章の内容・意図を迅速かつ正確に把握する力をつけます。

3. 授業計画

1. Course Introduction and Overview	16. Unit 4:比較級・最上級
2. Unit 1:Meeting People / School Clubs	17. Unit 4:Teen Fashion
3. Unit 1:Greeting People / Making Introductions	18. Unit 5:A Helping Hand at Home
4. Unit 1:現在形 / 肯定文・否定文・疑問文	19. Unit 5:Complaining and Asking
5. Unit 1:A Strange College Club	20. Unit 5:人称代名詞・所有格・相関接続詞
6. Unit 2:Time to Eat / Enjoy Free Food	21. Unit 5:Make Your Home Green
7. Unit 2:Asking and Talking about a Meal	22. Unit 6:Going Places
8. Unit 2:過去形 / 肯定文・否定文・疑問文	23. Unit 6:Asking for and Giving Directions
9. Unit 2:Eat More and Lose Weight	24. Unit 6:助動詞
10. Unit 3:Living with Technology	25. Unit 6:Getting Around
11. Unit 3:Making and Responding to Invitations	26. Unit 7:Not Feeling So Good
12. Unit 3:現在進行形	27. Unit 7:A Patient Might Say
13. Unit 3:It's a YouTube World	28. Unit 7:連結動詞・使役動詞
14. Unit 4:Shoppng for Clothes	29. Unit 7:Natural Medicine for Your Cold
15. Unit 4:Receiving Customers / Customer Might Ask	30. Class Survey and Review of the Course

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

事前にテキストのレッスン該当箇所を自習用オンライン音源で聴くなどして、テキストの空欄を埋め、質問事項にも回答しておくこと（必要時間 30 分程度）。授業後はオンライン音源を使用するなどして、学習箇所を一通り復習すること（必要時間 20 分程度）。“毎日” 英語に接することが確実な習得につながります。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後、授業内ないしはオンラインにて、回答、解説、講評をフィードバックします。

6. 授業における学修の到達目標

基本的な会話表現を身につけることで、相手に臆することなく英語で日常生活上最低限必要なコミュニケーションが取れるようにします。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢・小テスト・課題（50%）、期末試験・課題（50%）に基づいて評価します。

8. テキスト・参考文献

テキスト：角山照彦他著『4技能を高める英語演習 Book1 New Connection Book 1』（成美堂 2022）

9. 受講上の留意事項

受講者の習熟度に応じた分かりやすい説明、段階を踏んだ指導に努めますので、特に、英語に苦手意識を持っている学生、あるいはもう一度基本から学び直したい学生に参加してほしい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当します。本授業は、金融機関、サービス業界における実務経験を活かして指導します。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

選択英語 A (1)		講義	教授 加藤 芳孝	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11110201 12210201 13210201	

1. 授業のねらい・概要

英語を聞き、話し、読み、書く総合的能力の向上を図り、英語への苦手意識を無くし、相手に臆せず円滑なコミュニケーションが取れるよう英語に親しみ慣れることをねらいとします。様々な場面での会話や、日本とは異なる視点から書かれた文書講読を通じて、異文化多様性に触れる機会を得ることで視野を広げることに繋がります。

2. 授業の進め方

4コマで1ユニットを構成します。ユニットの内容は、1. 語彙と会話リスニング, 2. 様々な表現によるスピーキング, 3. 文法と練習問題, 4. 読解と作文です。まず基本的表現を習得した上で、自分自身に置き換えた会話を学生同士のロールプレイも交えて体得します。次に、様々な状況を想定し、臨機応変に対応できる実践的なコミュニケーションスキルを養います。読解は、速読の訓練と文法を介した熟読の両面から、文章の内容・意図を迅速かつ正確に把握する力をつけます。

3. 授業計画

1. Course Introduction and Overview	16. Unit 4:比較級・最上級
2. Unit 1:Meeting People / School Clubs	17. Unit 4:Teen Fashion
3. Unit 1:Greeting People / Making Introductions	18. Unit 5:A Helping Hand at Home
4. Unit 1:現在形 / 肯定文・否定文・疑問文	19. Unit 5:Complaining and Asking
5. Unit 1:A Strange College Club	20. Unit 5:人称代名詞・所有格・相関接続詞
6. Unit 2:Time to Eat / Enjoy Free Food	21. Unit 5:Make Your Home Green
7. Unit 2:Asking and Talking about a Meal	22. Unit 6:Going Places
8. Unit 2:過去形 / 肯定文・否定文・疑問文	23. Unit 6:Asking for and Giving Directions
9. Unit 2:Eat More and Lose Weight	24. Unit 6:助動詞
10. Unit 3:Living with Technology	25. Unit 6:Getting Around
11. Unit 3:Making and Responding to Invitations	26. Unit 7:Not Feeling So Good
12. Unit 3:現在進行形	27. Unit 7:A Patient Might Say
13. Unit 3:It's a YouTube World	28. Unit 7:連結動詞・使役動詞
14. Unit 4:Shoppng for Clothes	29. Unit 7:Natural Medicine for Your Cold
15. Unit 4:Receiving Customers / Customer Might Ask	30. Class Survey and Review of the Course

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

事前にテキストのレッスン該当箇所を自習用オンライン音源で聴くなどして、テキストの空欄を埋め、質問事項にも回答しておくこと（必要時間 30 分程度）。授業後はオンライン音源を使用するなどして、学習箇所を一通り復習すること（必要時間 20 分程度）。“毎日” 英語に接することが確実な習得につながります。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後、授業内ないしはオンラインにて、回答、解説、講評をフィードバックします。

6. 授業における学修の到達目標

基本的な会話表現を身につけることで、相手に臆することなく英語で日常生活上最低限必要なコミュニケーションが取れるようにします。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢・小テスト・課題（50%）、期末試験・課題（50%）に基づいて評価します。

8. テキスト・参考文献

テキスト：角山照彦他著『4技能を高める英語演習 Book1 New Connection Book 1』（成美堂 2022）

9. 受講上の留意事項

受講者の習熟度に応じた分かりやすい説明、段階を踏んだ指導に努めますので、特に、英語に苦手意識を持っている学生、あるいはもう一度基本から学び直したい学生に参加してほしい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当します。本授業は、金融機関、サービス業界における実務経験を活かして指導します。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

選択英語 A (5)		講義	講師 村元 エリカ マリア	
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11110201 12210201 13210201	

1. 授業のねらい・概要

本コースでは、この分野の新たな知識を身につけ、興味に応じた言語的・文化的なトピックを探索し、現代社会において有用となるグローバルな思考力を養います。

2. 授業の進め方

選択英語 A は、英語 4 技能の修得を目標としたリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングのコースです。また、国際コミュニケーションのツールとして、現在をテーマとした様々な活動を展開しています。これらの能力は、日常や学校での生活場面はもちろんのこと、授業や国内外を問わず学内のルーティーンといった日常においても欠かせないものであり、人間理解を深めるための手段としても認識が高まっています。

3. 授業計画

このコースは以下のセクションで構成されます:

PART I: Introduction/ Getting to know each other	PART II: Textbook and/or Article Studies (Topics) PART III: Presentations		PART IV: Term Conclusion
1. Welcome: Intro of Teacher and Students / Course Orientation & Introduction / Syllabus Overview/ General tasks 2. Forum discussion – Self-introduction 3. Forum discussion – My career plans	4. Topic 1-Nice to meet you 5. (cont.) Topic 1-Reflect about you and what you do 6. (cont.) Topic 1- Explain about you and your goals 7. (cont.) Topic 1-Group project: Record a short video 8. Topic 2- Translation software and website-Positive or Negative? 9. (cont.) Topic 2-Evaluate the plus and minus of translation software and websites 10. (cont.) Topic 2-Choose the best sentence structure 11. (cont.) Topic 2-Check translations' accuracy 12. Presentation explanation day 13. Presentations - Day 1 14. Presentations - Day 2 15. Presentations - Day 3 16. Presentations - Day 4	17. Topic 3 - Writing emails 18. (cont.) Topic 3-Email format 19. (cont.) Topic 3-Writing your email 20. (cont.) Topic 3- Group project: Personal profile 21. Topic 4 - SDGs 22. (cont.) Topic 4-Identifying Global Issues 23. (cont.) Topic 4-Analyzing the problems 24. (cont.) Topic 4-Finding solutions 25. Presentation explanation day 26. Presentations - Day 1 27. Presentations - Day 2 28. Presentations - Day 3 29. Presentations - Day 4	30. Pick Up Loose Ends / Review Course / Achievement Test

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前期週 2 回型。遅刻・欠席しない様に、積極的に参加してください。授業で配布された詳細日程表に基づいて、次

回の講義で学習する範囲を予習してくる。自主的に課題を進めてください。なお、これらの準備学修には、1時間以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

教科書課題または授業外課題はすべて授業中に確認する。プレゼンテーションの講評を行う。筆記試験は採点し、返却する。

6. 授業における学修の到達目標

一般教養および専門科目に必要となる、英語の4技能の修得を通じて、幅広く実践的な英語を学修します。様々な場所、人物、物語、事例を通して、世界と文化、言語、社会における多様性について自身と結びつけて学んでいきます。

7. 成績評価の方法・基準

このコースに合格するためには、60%の合格点を取得する必要があります。評価は以下の通りです。

- (10%) フォーラムディスカッション（集団討議）
- (20%) リフレクションペーパー（コメント用紙）
- (20%) 課題(教科書課題および/または授業外課題)
- (40%) プレゼンテーション
- (10%) 自己評価・レポート

8. テキスト・参考文献

参加者と相談の上、クラスで発表する予定。

9. 受講上の留意事項

授業には、教科書、パソコンまたはタブレット、英和・和英辞書（電子辞書を含む）を持参すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

選択英語B(3)		講義	教授 加藤 芳孝	
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11110202 12210202 13210202	

1. 授業のねらい・概要

『選択英語A(3)』の継続との位置づけです。英語を聞き、話し、読み、書く総合的能力の向上を図り、英語への苦手意識を無くし、相手に臆せず円滑なコミュニケーションが取れるよう英語に親しみ慣れることをねらいとします。様々な場面での会話や、日本とは異なる視点から書かれた文書講読を通じて、異文化多様性に触れる機会を得ることで視野を広げることにもつながります。

2. 授業の進め方

4コマで1ユニットを構成します。ユニットの内容は、1. 語彙と会話リスニング、2. 様々な表現によるスピーキング、3. 文法と練習問題、4. 読解と作文です。まず基本的表現を習得した上で、自分自身に置き換えた会話を学生同士のロールプレイも交えて体得します。次に、様々な状況を想定し、臨機応変に対応できる実践的なコミュニケーションスキルを養います。読解は、速読の訓練と文法を介した熟読の両面から、文章の内容・意図を迅速かつ正確に把握する力をつけます。

3. 授業計画

1. Review of the 1st Semester and Goal-Setting	16. Unit 11:過去進行形
2. Unit 8:The Big Screen	17. Unit 11:Sports Hero
3. Unit 8:Apologizing / Talking about Movies	18. Unit 12:Rain or Shine
4. Unit 8:時刻表現	19. Unit 12:Describing Weather Conditions
5. Unit 8:The Wildest Job in Movies	20. Unit 12:単純未来形
6. Unit 9:How Do You Feel?	21. Unit 12:Safe at Home
7. Unit 9:Talking to People with Different Feelings	22. Unit 13:Eating Out
8. Unit 9:分詞形容詞 -ing, -ed	23. Unit 13:Ordering a Meal
9. Unit 9:Do Animals Have Feelings?	24. Unit 13:不定代名詞
10. Unit 10:All in Good Fun	25. Unit 13:Going to Restaurants around the World
11. Unit 10:Talking about Likes and Dislikes	26. Unit 14:School Life
12. Unit 10:動名詞・不定詞	27. Unit 14:Discussing Problems / Stating Your Goals
13. Unit 10:Make Your Life More Extreme	28. Unit 14:現在完了形
14. Unit 11:Game Time	29. Unit 14:Working for No Money
15. Unit 11:Talking about Injuries	30. Class Survey and Review of the Course

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

事前にテキストのレッスン該当箇所を自習用オンライン音源で聴くなどして、テキストの空欄を埋め、質問事項にも回答しておくこと（必要時間 30 分程度）。授業後はオンライン音源を使用するなどして、学習箇所を一通り復習すること（必要時間 20 分程度）。“毎日”英語に接することが確実な習得につながります。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後、授業内ないしはオンラインにて、回答、解説、講評をフィードバックします。

6. 授業における学修の到達目標

基本的な会話表現を身につけることで、相手に臆することなく英語で日常生活上最低限必要なコミュニケーションが取れるようにします。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢・小テスト・課題（50％），期末試験・課題（50％）に基づいて評価します。

8. テキスト・参考文献

テキスト：角山照彦他著『4技能を高める英語演習 Book1 New Connection Book 1』（成美堂 2022）

9. 受講上の留意事項

受講者の習熟度に応じた分かりやすい説明，段階を踏んだ指導に努めますので，特に，英語に苦手意識を持っている学生，あるいはもう一度基本から学び直したい学生に参加してほしい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当します。本授業は，金融機関，サービス業界における実務経験を活かして指導します。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

臨床柔道整復学Ⅰ		講義	教授 川崎 一郎
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12361101

1. 授業のねらい・概要

柔道整復師として、頭部・体幹部の損傷に対する理解は臨床的意味でも非常に重要である。この臨床柔道整復学Ⅰでは、頭部・体幹部の骨折・脱臼・軟部組織損傷に関して、各部位の発生機序、骨片転位、臨床症状、合併症、整復法、固定法、後療法について、理論的に学んでいく。加えて、成長期の側弯症・腰椎分離症、脳震盪についても学ぶことにより、より医療現場・スポーツ現場に対して応用可能な知識も身につける。本講義では各部位の臨床と機能解剖を結びつけて理解することにより、各外傷・障害の発生機序、症状および整復方法等を体系的に理解するとともに、臨床現場への応用につながる知識を身につけていくことを目指す。

2. 授業の進め方

主に Power Point を用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。必要に応じて DVD などのメディアを教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された教科書を補足的に用いる。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. 頸椎の骨折・脱臼
2. 胸郭・脊柱の解剖、構造	10. 胸椎・腰椎の骨折・脱臼
3. 肋骨骨折	11. 軟部組織損傷（頸部）
4. 胸骨骨折	12. 軟部組織損傷（胸部・腰部）
5. 顎関節脱臼	13. 頸椎椎間板ヘルニア、腰椎椎間板ヘルニア
6. 顎関節症	14. 側弯症、腰椎分離症、脊柱管狭窄症
7. 頭蓋骨骨折	15. 脳震盪
8. 顔面部の骨折	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、配布プリントやノートを使って復習しておく（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

各項目の要点をまとめて記述できるようになる。また、本講義で得た知識を通じて実技を実践できるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（15%）小テスト（15%）定期試験の結果（70%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- ①柔道整復学・理論編改訂7版 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②毎授業で資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用、飲食、帽子の着用は認めない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

選択英語B(1)		講義	教授 加藤 芳孝	
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11110202 12210202 13210202	

1. 授業のねらい・概要

『選択英語A(1)』の継続との位置づけです。英語を聞き、話し、読み、書く総合的能力の向上を図り、英語への苦手意識を無くし、相手に臆せず円滑なコミュニケーションが取れるよう英語に親しみ慣れることをねらいとします。様々な場面での会話や、日本とは異なる視点から書かれた文書講読を通じて、異文化多様性に触れる機会を得ることで視野を広げることにもつながります。

2. 授業の進め方

4コマで1ユニットを構成します。ユニットの内容は、1. 語彙と会話リスニング、2. 様々な表現によるスピーキング、3. 文法と練習問題、4. 読解と作文です。まず基本的表現を習得した上で、自分自身に置き換えた会話を学生同士のロールプレイも交えて体得します。次に、様々な状況を想定し、臨機応変に対応できる実践的なコミュニケーションスキルを養います。読解は、速読の訓練と文法を介した熟読の両面から、文章の内容・意図を迅速かつ正確に把握する力をつけます。

3. 授業計画

1. Review of the 1st Semester and Goal-Setting	16. Unit 11:過去進行形
2. Unit 8:The Big Screen	17. Unit 11:Sports Hero
3. Unit 8:Apologizing / Talking about Movies	18. Unit 12:Rain or Shine
4. Unit 8:時刻表現	19. Unit 12:Describing Weather Conditions
5. Unit 8:The Wildest Job in Movies	20. Unit 12:単純未来形
6. Unit 9:How Do You Feel?	21. Unit 12:Safe at Home
7. Unit 9:Talking to People with Different Feelings	22. Unit 13:Eating Out
8. Unit 9:分詞形容詞 -ing, -ed	23. Unit 13:Ordering a Meal
9. Unit 9:Do Animals Have Feelings?	24. Unit 13:不定代名詞
10. Unit 10:All in Good Fun	25. Unit 13:Going to Restaurants around the World
11. Unit 10:Talking about Likes and Dislikes	26. Unit 14:School Life
12. Unit 10:動名詞・不定詞	27. Unit 14:Discussing Problems / Stating Your Goals
13. Unit 10:Make Your Life More Extreme	28. Unit 14:現在完了形
14. Unit 11:Game Time	29. Unit 14:Working for No Money
15. Unit 11:Talking about Injuries	30. Class Survey and Review of the Course

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

事前にテキストのレッスン該当箇所を自習用オンライン音源で聴くなどして、テキストの空欄を埋め、質問事項にも回答しておくこと（必要時間 30 分程度）。授業後はオンライン音源を使用するなどして、学習箇所を一通り復習すること（必要時間 20 分程度）。“毎日”英語に接することが確実な習得につながります。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後、授業内ないしはオンラインにて、回答、解説、講評をフィードバックします。

6. 授業における学修の到達目標

基本的な会話表現を身につけることで、相手に臆することなく英語で日常生活上最低限必要なコミュニケーションが取れるようにします。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢・小テスト・課題（50%）、期末試験・課題（50%）に基づいて評価します。

8. テキスト・参考文献

テキスト：角山照彦他著『4技能を高める英語演習 Book1 New Connection Book 1』（成美堂 2022）

9. 受講上の留意事項

受講者の習熟度に応じた分かりやすい説明、段階を踏んだ指導に努めますので、特に、英語に苦手意識を持っている学生、あるいはもう一度基本から学び直したい学生に参加してほしい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当します。本授業は、金融機関、サービス業界における実務経験を活かして指導します。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

選択英語 B (5)		講義	講師 村元 エリカ マリア	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11110202 12210202 13210201	

1. 授業のねらい・概要

本コースでは、この分野の新たな知識を身につけ、興味に応じた言語的・文化的なトピックを探究し、現代社会において有用となるグローバルな思考力を養います。

2. 授業の進め方

選択英語 B は、英語 4 技能の修得を目標としたリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングのコースです。また、国際コミュニケーションのツールとして、現在をテーマとした様々な活動を展開しています。これらの能力は、日常や学校での生活場面はもちろんのこと、授業や国内外を問わず学内のルーティーンといった日常においても欠かせないものであり、人間理解を深めるための手段としても認識が高まっています。

3. 授業計画

このコースは以下のセクションで構成されます:

PART I: Introduction/ Getting to know each other	PART II: Textbook and/or Article Studies (Topics) PART III: Presentations		PART IV: Term Conclusion
1. Welcome: Intro of Teacher and Students / Course Orientation & Introduction / Syllabus Overview/ General tasks 2. Forum discussion – Self-introduction 3. Forum discussion – My career plans	4. Topic 1-AI and English 4 skills 5. (cont.) Topic 1 Evaluate AI applications for English 4 skills 6. (cont.) Topic 1-Check your English writing accuracy 7. (cont.) Topic 1-Group project: Write an essay in English 8. Topic 2-SDGs 9. (cont.) Topic 2 Identifying Local Issues 10. (cont.) Topic 2- Analyzing the problems 11. (cont.) Topic 2- Finding solutions 12. Presentation explanation day 13. Presentations - Day 1 14. Presentations - Day 2 15. Presentations - Day 3 16. Presentations - Day 4	17. Topic 3-Slide presentation 18. (cont.) Topic 3-Preparing your presentation 19. (cont.) Topic 3-Getting information 20. (cont.) Topic 3- Designing slides 21. Topic 4-Slide contents and visual 22. (cont.) Topic 4-Presentation attitude 23. (cont.) Topic 4-Sources and writing check 24. (cont.) Topic 4-Practice 25. Presentation explanation day 26. Presentations - Day 1 27. Presentations - Day 2 28. Presentations - Day 3 29. Presentations - Day 4	30. Pick Up Loose Ends / Review Course / Achievement Test

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

後期週 2 回型。遅刻・欠席しない様に、積極的に参加してください。授業で配布された詳細日程表に基づいて、次の講義で学習する範囲を予習してくる。自主的に課題を進めてください。なお、これらの準備学修には、1 時間以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

教科書課題または授業外課題はすべて授業中に確認する。プレゼンテーションの講評を行う。筆記試験は採点し、

返却する。

6. 授業における学修の到達目標

一般教養および専門科目に必要となる、英語の4技能の修得を通じて、幅広く実践的な英語を学修します。様々な場所、人物、物語、事例を通して、世界と文化、言語、社会における多様性について自身と結びつけて学んでいきます。

7. 成績評価の方法・基準

このコースに合格するためには、60%の合格点を取得する必要があります。評価は以下の通りです。

- (10%) フォーラムディスカッション（集団討議）
- (20%) リフレクションペーパー（コメント用紙）
- (20%) 課題(教科書課題および/または授業外課題)
- (40%) プレゼンテーション
- (10%) 自己評価・レポート

8. テキスト・参考文献

参加者と相談の上、クラスで発表する予定。

9. 受講上の留意事項

授業には、教科書、パソコンまたはタブレット、英和・和英辞書（電子辞書を含む）を持参すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

公務員試験対策ゼミB		講義	准教授 黒沢 賢一
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの教養選択科目、スポーツトレーナーコースの教養選択科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目 国際ビジネス学科の教養選択科目	科目ナンバリング	11220138 12220155 13220146 22200130

1. 授業のねらい・概要

公務員試験の教養試験分野の問題は大きく一般知能と一般常識(知識)に分けられるが、その合否を決するのは一般知能の問題である。一般知能はさらに判断推理、空間把握、数的推理、資料解釈などに分けられ、この授業では数的推理と資料解釈について、その問題の解き方を講義する。数的推理は小、中学校で勉強した算数、数学の知識をもとに答えを求めていくもので、資料解釈は与えられた図表から情報を読み取る問題である。特に数的推理については苦手意識を持つ学生が多く見受けられるが、授業では問題を解くために必要になる算数、数学の知識を復習しながら問題を解き進めていくので得点源にすることは十分可能である。試験に出題される問題はほぼ決まっているので、それを解くための解法パターンをひとつでも多く身につけていくことが大切である。合格ラインをこえるために必要な解法パターンはこの授業ですべて身につけることができるようにする。また数的推理と資料解釈の講義と並行して、授業では一般常識の主要科目である社会科学の試験に出るポイントも解説し、さらに小論文、作文、適性検査の対策法についても講義する。

科目名は公務員試験対策ゼミとなっているが、これらは就職試験にも役立つ知識であり、最近の地方公務員試験では、市町村を中心にSPIやSCOAを実施するところもあり、それらの内容にも配慮した授業内容にするので、民間企業への就職を考えている学生にも役立つ内容になる。

2. 授業の進め方

毎回の授業は、①一般知能テスト(数的推理、資料解釈の過去問を教材にした頻出問題を出題)→②解説講義→③一般常識のポイント解説講義という流れで進んでいく。小論文、作文、適性対策については講義形式をとる。

3. 授業計画

1. ガイダンス 〈数的推理〉	9. n進法・数列
2. 整数の性質	10. 図形の計量 〈資料解釈〉
3. 方程式・不等式・速さ	11. 実数・構成比・指数・増減率
4. 比・割合・濃度	〈小論文・作文・適性〉
5. 仕事算・ニュートン算	12. 小論文書き方講義
6. 平均算・文章題	13. 作文書き方講義
7. 集合算・覆面算・魔法陣	14. 適性対策講義
8. 場合の数・確率	15. まとめ講義

※数的推理、資料解釈のほかに社会科学分野の公務員試験に出題されるポイントも解説する。

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習は必要ないが、授業を受けた後は必ず一般知能テストで出題された問題について、授業中にとったノートとは別のノート(これを「課題ノート」と呼ぶ)に問題の解き方を詳細にまとめ直し、すべての問題について何も参照しないで解けるようになるまで、くり返し復習することが求められる。一般常識については、テキストの指定された範囲のポイントを確認するまで反復する。そのための復習時間としては2時間以上必要になる。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

テスト、課題ノート返却時に評価のポイントなどを指摘する。

6. 授業における学修の到達目標

- (1)公務員試験に出題される一般知能の解法の基礎が理解できるようになる。
- (2)公務員試験に出題される社会科学の知識を修得する。
- (3)公務員試験の小論文，作文の書き方と適性試験対策法が身につくようになる。

7. 成績評価の方法・基準

授業内で実施する確認テスト(50%)と課題ノートの提出(50%)によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- (1)黒沢賢一著『Point Master 社会科学の論点』（三恵社） 毎回使用するので必ず持参すること。
- (2)その他の受験教材については授業の中で紹介する。

9. 受講上の留意事項

毎回，授業のはじめに一般知能のテストをするが，できなくても気にする必要はない。解説講義を聞いて，くり返し復習してできるようになればいい。解説講義はただ聞いているだけでなく，説明の内容をしっかりとメモし，ポイントを聞き逃さないようにすることが大切である。

授業中の私語やスマートフォン，イヤホン等の使用，他の学生に迷惑となる教室内の秩序を乱す行為については厳しい態度で臨むので十分留意すること。

公務員試験合格を確実にしたいという方には，「社会科学の基礎B」も受講することをおすすめする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

化学基礎		講義	教授 田中 基晴	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの教養選択科目、スポーツトレーナーコースの教養選択科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの教養選択科目		科目ナンバリング	11220127 12220144 13220105

1. 授業のねらい・概要

私達の体は化学物質から構成されている。スポーツをするにも、救急救命をするにも、化学物質、化学物質間の相互作用、及び反応を知っていると、さまざまな処置や対応について深く理解することができる。理解できると興味が湧き、自ら学ぶ意欲が一層湧いてくるものである。授業は高校化学の復習が中心となるが、より実生活、スポーツに関連した化学を勉強することを目指している。

2. 授業の進め方

基本的には、教科書を中心にして講義（OHP and/or 板書）を進める。授業最後にその日のまとめを説明する。

3. 授業計画

1. はじめに一物質の基本粒子	9. 酸と塩基
2. 化学結合	10. 酸化還元反応
3. 物質と化学反応式	11. 典型元素の性質
4. 物質の状態変化	12. 遷移元素の性質
5. 気体の性質	13. 脂肪族化合物
6. 液体の性質	14. 芳香族化合物
7. 化学反応と熱	15. 高分子化合物と生活
8. 反応の速さと平衡	

4. 準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業前に教科書の予定範囲を読み、大事そうだと思うところや分からないところをノートに書きながら、予習して下さい。分からないところに印をつけて下さい。また、ネットでもよいので語句の意味を確認しておくこと。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

筆記試験

- 正解は貼りだす。
- 解説は、不正解問題を中心に行う。

6. 授業における学修の到達目標

化学物質の特性及び化学反応の仕組みを学び、スポーツや救急救命に役立てる。

7. 成績評価の方法・基準

1) 成績評価の基準

主にスポーツに携わる者として最低限必要な化学的知識についての理解到達度によって成績評価を行う。

2) 成績評価の方法

- 受講態度（出欠・遅刻・早退など）（30%）
- 筆記試験（70%）

8. テキスト・参考文献

テキスト：「高校の化学」が一冊でまるごとわかる 竹田淳一郎 ベレ出版 2018年出版

9. 受講上の留意事項

高校で学んだ「化学基礎」または「化学」を復習しておくこと。

10. [実務経験のある教員等による授業科目]の該当の有無

該当する。製薬会社における新薬開発の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

経営戦略論		講義	教授 大澤 秀一
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの選択必修科目	科目ナンバリング	11310203

1. 授業のねらい・概要

経営戦略論は、経営目標を達成し、市場競争に勝つための戦略を研究する学問です。優れた戦略は、目標が具体的かつ測定可能であること、自社が他社に対して競争優位であること、変化する内部及び外部環境に対応可能であることなどが求められます。これらの学習により、受講生が引き続き経営戦略論の視点でビジネスに興味を持ち、学び続けるための知識や思考力を習得することがねらいです。

2. 授業の進め方

授業は講義形態で行い、概ね以下の内容に沿って進めます。

3. 授業計画

1. 授業の概要説明	9. 組織戦略, 人材戦略
2. 経営戦略の定義	10. 財務戦略
3. 環境分析のフレームワーク	11. 広報戦略と I R 戦略
4. 競争戦略	12. ケーススタディ (1) 財
5. ポートフォリオ戦略	13. ケーススタディ (2) サービス
6. 成長戦略	14. ケーススタディ (3) 情報
7. イノベーション戦略	15. 総括
8. 国際戦略	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各授業の最初に前回授業の振り返りと、最後に次回授業の予習ポイントを説明します。自分で2, 3の論点を考え、毎回2時間程度の時間をかけて納得できるまで予習・復習をしてください。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

定期試験実施の際、出題の意図と解答のポイントを試験終了直後に説明します。

6. 授業における学修の到達目標

経営戦略論の基本的な概念を習得することが目標です。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取組姿勢(50%)と定期試験の結果(50%)によって評価します。

8. テキスト・参考文献

テキストは使用しません。必要に応じて参考文献などを適宜紹介します。

9. 受講上の留意事項

初回の授業で説明します。授業への主体的な参加を期待します。疑問や不明な点については、遠慮なく質問して授業中か授業直後には理解し、持ち越さないようにしましょう。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、シンクタンクや金融機関における実務経験を活かして指導します。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

人体構造学		講義	教授 西川 彰
科目カテゴリ	スポーツトレーナーコースの選択必修科目	科目ナンバリング	11301101

1. 授業のねらい・概要

スポーツに関わる専門職を志す者にとって人体の構造とその機能を学ぶことは、運動器に発生する障害の治療法または予防法を知る上でも大変重要である。この授業では、各部位別に骨格系および筋系といった運動器の構造を学ぶことから始め、さらにその運動に関わる筋と働きについて学習する。また、代表的なスポーツ障害（外傷）の発生との関わりについても理解を深める。

2. 授業の進め方

プレゼンテーションソフトを用いたスライドにより関連する写真やイラストを呈示しながら、さらに板書を組み合わせた講義形式で授業を進めていく。さらに、重要な部位については解剖図をスケッチし、その構造学的特徴を記入した「人体構造学レポート」を作成し提出課題とする。

3. 授業計画

1. ガイダンス 人体構造学の基本的知識	8. 股関節①（骨と筋）
2. 肩関節①（骨と筋）	9. 股関節②（機能と障害）
3. 肩関節②（機能と障害）	10. 膝関節①（骨と筋）
4. 肘関節①（骨と筋）	11. 膝関節②（機能と障害）
5. 肘関節②（機能と障害）	12. 足関節①（骨と筋）
6. 手関節①（骨と筋）	13. 足関節②（機能と障害）
7. 手関節②（機能と障害）	14. エクササイズと動きの分析
	15. まとめ

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業で学んだ重要語句や図表などをまとめた「人体構造学レポート」作成に取り組んだ上で、毎回の授業に臨むこと（30分程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポートについては添削、採点を行った上で返却する。また、定期試験については模範解答例を希望者に配布する。

6. 授業における学修の到達目標

本授業では、構造学的な特徴をただ暗記するだけでなく、その機能や病態との関連性などの統合的な理解が得られることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（レポート）（約30%程度）並びに定期試験の結果（約70%程度）より総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

必要に応じて授業中に紹介または配布する。

9. 受講上の留意事項

毎回の授業時には配布プリントを必ず持参すること。

講義回数の3分の1以上を欠席した場合は、定期試験の受験資格を失うこととする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、人体解剖トレーニングセミナーにおける実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

トレーニングの科学的基礎		講義	教授 小笠原 正志
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門選択科目、スポーツトレーナーコースの選択必修科目	科目ナンバリング	11321202

1. 授業のねらい・概要

トレーニングはアスリートの競技力向上を目的として発展し、これまで安全で効果的なプログラムが数多く開発されてきた。人生 100 年時代を迎え、アスリートのみならず広く一般にもトレーニングの必要性が叫ばれるようになり、ストレス解消、体力づくり、健康増進、介護予防、自己研鑽などその目的も多様化している。スポーツ指導者には、トレーニング目的、年齢、体力レベル、健康状態、発育発達段階など、クライアントの個別状況を考慮し、それに合致したトレーニングプログラムを構築する能力が求められている。そこで、本講義では、解剖学・運動生理学・バイオメカニクスといった基礎的な科目のなかから特にトレーニングに重要な項目をピックアップして解説し、適切なプログラムの構築とその指導を可能とする基本的な知識を獲得することを目的とする。

2. 授業の進め方

主に、Power Point を用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。必要に応じて動画を教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された教科書を補足的に用いる。また、各回に行う課題の実施により、講義の理解度を確認しながら展開していく。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. 神経系・ホルモン
2. エネルギー供給系	10. 筋肥大のメカニズム
3. 運動強度の変化とエネルギー供給系	11. トレーニングの原理原則
4. 運動時の心肺機能	12. トレーニングプログラムの立案
5. 酸素摂取量の変化	13. トレーニングの目標設定
6. 筋骨格系	14. ピリオダイゼーション
7. 筋線維の特性（速筋線維と遅筋線維）	15. 人生 100 年時代におけるトレーニングの意義
8. 筋の収縮様式・骨格と筋のてこ作用	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

テキストによる予習(30分程度)、前回のノートでの復習(30分程度)。

次回取り扱う範囲のトレーニングおよび生理学的・解剖学的背景について理解および把握しておくこと。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

各回に行う課題は次回の授業で解説する。期末試験については後日解答を掲示板等に掲示する。

6. 授業における学修の到達目標

様々なトレーニング方法の中から対象者に適したトレーニングプログラムを提供できる力を身につけていくことを目指す。その際に、対象者の体力レベルを適切に測定・評価していく力を併せて身につけていくことを目指す。

7. 成績評価の方法・基準

講義への参加意欲ならびに各回の課題への取り組み状況（50%）、および期末試験（50%）により総合的に評価する。ただし講義回数分の3分の1以上欠席した者は評価の対象としない。

8. テキスト・参考文献

小笠原正志, 健康生活とスポーツ, SIS, 2024

参考図書：ストレングス&コンディショニング第4版, ブックハウス HD

9. 受講上の留意事項

私語および携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

NSCA の CSCS 資格取得希望者を優先とする。トレーニングの基礎知識を有することが望ましい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は，企業における実務経験（地域住民の運動指導）を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

レジスタンストレーニングとコンディショニング		実習	教授 柳澤 修	
科目カテゴリ	スポーツトレーナーコースの選択必修科目、柔道整復師コースの専門基礎科目、救急救命士コースの教養選択科目		科目ナンバリング	11301201 12312201 13220211

1. 授業のねらい・概要

競技力を向上させるためには、筋腱複合体の機能を高めることが重要である。加えて、試合時に自身のパフォーマンスを最適な状態にするためには、身体のコンドショニングづくりが必要不可欠である。そこで本授業では、講義と実習を通じて、競技力向上に必要なレジスタンストレーニングおよびコンディショニング方法の基礎的知識を身につけることを目指す。

2. 授業の進め方

レジスタンストレーニングやコンディショニングに関する理論解説と実技を中心とした授業を行う。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. コアトレーニングとは
2. 身体の構造と機能	10. バランスボールトレーニングの実践
3. トレーニング科学の概論	11. プライオメトリクスとは
4. レジスタンストレーニングの理論	12. プライオメトリックスの実践
5. レジスタンストレーニングの実践（構造的エクササイズ）	13. 自重トレーニング
6. レジスタンストレーニングの実践（補助的エクササイズ）	14. コンディショニングとは
7. 持久性トレーニングの理論	15. コンディショニングの実践
8. 持久性トレーニングの実践	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

参考図書により、トレーニングする筋群の名称・機能について理解および把握しておく（30分程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

授業レポートに対して、その都度改善点を口頭および模範実技により説明する。

6. 授業における学修の到達目標

レジスタンストレーニングやコンディショニングに関する基礎知識を習得し、指導する選手のみならず自身のパフォーマンス向上にもつながる実践能力を身につけることを目指す。

7. 成績評価の方法・基準

授業内レポート（30%）と期末レポート（70%）にて評価する。成績評価にあたっては、授業回数の2/3以上の出席を前提とする。

8. テキスト・参考文献

NSCA ジャパン ストレngths&コンディショニング エクササイズ・バイブル、実業之日本社

9. 受講上の留意事項

実際に自分自身でトレーニングの習慣をもつことが望ましい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、国内トップアスリートを対象とした研究機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

トレーニングプログラム論		講義	教授 小笠原 正志
科目カテゴリー	スポーツトレーナーコースの選択必修科目	科目ナンバリング	11301203

1. 授業のねらい・概要

本講では、アスリートのパフォーマンス向上のためのトレーニングプログラムに焦点を当てる。一口にアスリートといっても、年齢、発育発達段階、性別、体格、スポーツ種目、競技レベルなど、トレーニングを取り巻く状況は各クライアントによって異なる。したがって、クライアントの実施するスポーツにおける生理学的・解剖学的・運動学的特性を十分に踏まえて、各個人に合わせた安全で効果的なトレーニングプログラムを作成し、指導する必要がある。

そこで、本講では、レジスタンストレーニング、パワートレーニング、プライオメトリックトレーニング、スピード向上トレーニング、持久力向上トレーニング、柔軟性向上トレーニングなどについて、エクササイズの様式、時間、強度、量、頻度が身体に及ぼす影響を学習することで、トレーニング理論や科学的根拠に基づき最適なプログラムを構築できる能力を獲得することを目的とする。

2. 授業の進め方

トレーニングプログラム計画のための方法論および測定・評価に関する知識について、主に Power Point を用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。必要に応じて動画を教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された資料を補足的に用いる。また、各回に行う課題の実施により、講義の理解度を確認しながら展開していく。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. スピード向上トレーニングのプログラム作成 (1) (スピード、アジリティ、スピード持久力の概念)
2. トレーニングプログラム総論	10. スピード向上トレーニングのプログラム作成 (2) (スプリントのスピード・アジリティ)
3. レジスタンストレーニングのプログラム作成 (1) (ニーズ分析・エクササイズの選択・実施頻度・順序)	11. 持久力向上トレーニングのプログラム作成 (1) (持久力の概念・有酸素性持久力のトレーニング効果)
4. レジスタンストレーニングのプログラム作成 (2) (負荷と回数・トレーニング量・休息时间)	12. 持久力向上トレーニングのプログラム作成 (2) (運動様式・頻度・強度・時間・トレーニングタイプ)
5. レジスタンストレーニングのプログラム作成 (3) (特殊なトレーニングシステム・動作速度)	13. 柔軟性向上トレーニングのプログラム作成
6. レジスタンストレーニングのプログラム作成 (4) (期分けと専門的エクササイズ)	14. ウォームアップ・クールダウンのプログラム作成
7. パワートレーニングのプログラム作成	15. トレーニング指導者 まとめ
8. プライオメトリックトレーニングのプログラム作成	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

参考図書による予習(30分程度)、前回のノートでの復習(30分程度)。

次回取り扱う範囲のトレーニングおよび生理学的・解剖学的背景について理解および把握しておくこと。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施やレポート実施の後、解答などを掲示板等に掲示する。

6. 授業における学修の到達目標

様々なトレーニング方法の中から対象者に適したトレーニングプログラムを提供できる力を身につけていくことを目指す。その際に、対象者の体力レベルを適切に測定・評価していく力を併せて身につけていくことを目指す。

7. 成績評価の方法・基準

講義への参加意欲ならびに各回の課題への取り組み状況（50％），および期末レポート（50％）により総合的に評価する。ただし講義回数の3分の1以上欠席した者は評価の対象としない。

8. テキスト・参考文献

講義資料は適宜配布する。

【参考図書】

ストレンクス&コンディショニング第4版，ブックハウスHD

ストレンクス&コンディショニングⅠ理論編，大修館書店

ストレンクス&コンディショニングⅡエクササイズ編，大修館書店

9. 受講上の留意事項

私語および携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

NSCAのCSCS資格取得希望者を優先とする。トレーニングの科学的基礎等のトレーニング系講義を受講し，知識を習得していることが望ましい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は，企業における実務経験（地域住民の運動指導）を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

トレーニング指導論		講義	教授 小笠原 正志
科目カテゴリー	スポーツトレーナーコースの選択必修科目	科目ナンバリング	11301204

1. 授業のねらい・概要

本講では、アスリートのパフォーマンス向上のためのトレーニングにおける指導上のポイントに焦点を当てる。一口にアスリートといっても、年齢、発育発達段階、性別、体格、スポーツ種目、競技レベルなど、トレーニングを取り巻く状況は各クライアントによって異なる。したがって、クライアントの実施するスポーツにおける生理学的・解剖学的・運動学的特性を十分に踏まえて、各個人に合わせた安全で効果的なトレーニングプログラムを作成し、そのねらいをクライアントに正しく理解してもらったうえで、継続的に実践するよう指導する必要がある。

そこで、本講では、レジスタンストレーニング、パワートレーニング、プライオメトリックトレーニング、スピード向上トレーニング、持久力向上トレーニングなどについて、何をどうやれば効果的なのか、どこがポイントなのか、起こりやすい誤りは何なのか、安全に遂行できる環境整備などを学習することで、トレーニング理論や科学的根拠に基づいた指導能力を獲得することを目的とする。

2. 授業の進め方

トレーニング指導の背景となる生理学的・解剖学的・運動学的特性を踏まえて、トレーニングの指導を主に Power Point を用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。必要に応じて動画を教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された資料を補足的に用いる。また、各回に行う課題の実施により、講義の理解度を確認しながら展開していく。

3. 授業計画

1. ガイダンス(一般的なトレーニングの概要)	9. プライオメトリックトレーニングの指導 (2) (下肢のプライオメトリクス)
2. トレーニング指導者の役割と資質	10. プライオメトリックトレーニングの指導 (3) (上肢・体幹のプライオメトリクス)
3. レジスタンストレーニングの指導 (1) (トレーニング機器・注意点・補助方法)	11. 持久力向上トレーニングの指導 (1) (トレーニング効果・目的・接地・シューズ選択)
4. レジスタンストレーニングの指導 (2) (ビックスリー エクササイズ実施上のポイント)	12. 持久力向上トレーニングの指導 (2) (インターバルトレーニング・レペティショントレーニング)
5. レジスタンストレーニングの指導 (3) (胸部・背部・上肢エクササイズ実施上のポイント)	13. スピード向上トレーニングの指導
6. レジスタンストレーニングの指導 (4) (下肢・体幹部エクササイズ実施上のポイント)	14. 動機づけを高める指導
7. パワートレーニングの指導	15. まとめ
8. プライオメトリックトレーニングの指導 (1) (伸張－短縮サイクル・目的・指導上の注意)	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

参考図書による予習(30分程度)、前回のノートでの復習(30分程度)。次回取り扱う範囲のトレーニングおよび生理学的・解剖学的背景について理解および把握しておくこと。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施やレポート実施の後、解答などを掲示板等に掲示する。

6. 授業における学修の到達目標

様々なトレーニング方法の中から対象者に適したトレーニングプログラムを提供できる力を身につけていくことを目指す。その際に、対象者の体力レベルを適切に測定・評価していく力を併せて身につけていくことを目指す。

7. 成績評価の方法・基準

講義への参加意欲ならびに各回の課題への取り組み状況（50%）、および期末レポート（50%）により総合的に評価する。ただし講義回数の3分の1以上欠席した者は評価の対象としない。

8. テキスト・参考文献

講義資料は適宜配布する。

【参考図書】

ストレンクス&コンディショニング第4版, ブックハウス HD

ストレンクス&コンディショニング I 理論編, 大修館書店

ストレンクス&コンディショニング II エクササイズ編, 大修館書店

9. 受講上の留意事項

私語および携帯電話の使用, 飲食, 帽子の着用は禁止とする。

NSCA の CSCS 資格取得希望者を優先とする。トレーニングの科学的基礎等のトレーニング系講義を受講し, 知識を習得していることが望ましい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は, 企業における実務経験（地域住民の運動指導）を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

運動処方論		講義	教授 小笠原 正志
科目カテゴリー	スポーツトレーナーコースの選択必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11301205 12220215

1. 授業のねらい・概要

人生百年時代を迎え、健康で長生きすることは本人の幸福だけではなく、社会全体の幸せにつながる。本講は、健康を脅かす大きな原因でもある生活習慣病を予防・改善する健康づくりのため、安全で効果的な運動を「運動処方」として提供するための基本的な仕組みを理解することを目的とする。運動は習慣化しなければ意味がない。運動による身体反応に関わる運動生理学・解剖学などの基礎科目の内容をふまえた上で、クライアントにとって運動が生活習慣のひとつとなるための教育的支援・環境的支援について学ぶ。

2. 授業の進め方

主に Power Point を用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。必要に応じて動画を教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された資料を補足的に用いる。また、各回に行う課題の実施により、講義の理解度を確認しながら展開していく。

3. 授業計画

1. ガイダンス・有酸素運動 無酸素運動とは 2. 運動強度の理解① エネルギー供給系 3. 運動強度の理解② 呼吸循環系 4. 運動強度の理解③ 運動強度の表し方 5. 運動と消費エネルギー・運動所要量 6. 生活習慣と生活習慣病の関連 7. 内臓脂肪型肥満と運動 8. 高血圧症と運動	9. 糖尿病と運動 10. 高尿酸血症・脂質異常症と運動 11. 筋力トレーニング 12. 高齢者と介護予防運動 13. 行動変容を促す技法 14. リスクマネジメント 15. まとめ
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の講義を受講するまでに、テキストを使って復習しておく。また次週講義内容に関する情報を入手し、予習しておく。なお、これらの準備学習には1時間程度が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

身体の特徴や機能ならびに運動処方に関する基礎知識を獲得し、自身の日常生活およびフィールドで実践・指導することができる。

7. 成績評価の方法・基準

講義への参加意欲ならびに各回の課題への取り組み状況（50%）、および期末レポート（50%）により総合的に評価する。ただし講義回数の3分の1以上欠席した者は評価の対象としない。

8. テキスト・参考文献

小笠原正志：健康生活とスポーツ，SIS，2024

9. 受講上の留意事項

私語および携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。トレーニングの科学的基礎等のトレーニング系講義を受講し，知識を習得していることが望ましい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、企業における実務経験（地域住民の運動指導）を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄記載の通り。

スポーツ実技（陸上競技）		実習	准教授 諏訪 利成
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門選択科目、 スポーツトレーナーコースの専門選択科目 教職科目 柔道整復師コースの教養選択科目 教職科目 救急救命士コースの教養選択科目 教職科目	科目ナンバリング	11322101 11531103 12220103 12531103 13220108 13531103

1. 授業のねらい・概要

多くのスポーツの原点と言える陸上競技について、基礎技術および指導法の習得を目指す。また、正しいランニング技術、トレーニング方法を学ぶことで、スポーツの素晴らしさを伝えられる指導者の育成を目的とする。

2. 授業の進め方

授業は実技を中心に屋外グラウンド、または体育館で行うが、技術理解を深めるために講義を行う場合もある。

3. 授業計画

1. ガイダンス～本講義の概要説明(教室にて) 2. ウォーミングアップの方法、ストレッチ 3. ランニング～基礎知識とランニングフォーム 4. ランニング～効率的走法の習得 5. 短距離走の技術～スタート準備と姿勢 6. 短距離走の技術～中間走の動きとゴール 7. 跳躍種目の技術～幅跳び 8. 跳躍種目の技術～高跳び	9. ハードル種目の技術～歩幅と抜き足技術 10. ハードル種目の技術～タイムトライアル 11. 投てき種目の技術～砲丸・ハンマー 12. 投てき種目の技術～やり・円盤 13. リレー種目の技術 14. 長距離種目の技術 15. まとめ
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

日頃から 20 分間ほど適度な運動を行っておく。また、実技内容をイメージできるよう写真やビデオ等で 30 分間ほどかけて事前に確認しておくことが望ましい。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

授業最終日、各自に対応する。

6. 授業における学修の到達目標

陸上競技の指導者として正しい知識を身につけて、指導現場で活かせるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

求められる実技がしっかり行えるか（50%）、また積極的に参加できているか（50%）を見て評価する。

8. テキスト・参考文献

随時指示する。

9. 受講上の留意事項

実技を行う際には、運動に適した服装で参加すること。受講希望者が多い場合、人数制限を行う場合がある。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

グローバル化の経済学		講義	教授 田中 秀臣
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門選択科目, スポーツトレーナーコースの専門選択科目	科目ナンバリング	11322218

1. 授業のねらい・概要

グローバル化（グローバル化）といわれる各国経済の国際的統合は、主にヒト、モノ、カネ、情報の国際間の移動として今日見ることが出来る。ヒトの移動は例えば、今日の日本でも政策的課題になっている外国人労働者の問題、または国際的紛争の激化などに伴って大量に発生している難民の問題、さらには海外旅行から商談のための一時的な国際間移動まで多様な広がりを持っている。またカネの移動はより複雑である。今日のモノやヒトの移動を数倍するカネの国際間の移動は、それらの移動やネットワークが妨げられた新型コロナ危機の中で、世界経済への不況の波及、世界経済の政策的対立である緊縮と反緊縮、それに関連する政治的ポピュリズムの動きなど、今日でも世界の人たちの注目を集めている。情報の国際間交流も多様で深い。一例では、インターネットの拡充とソフトウェアの進展によって、言語の敷居が低くなり、さまざまな国の文化的現象を消費しやすくなっている。またポストコロナの中で、世界の経済的ネットワークやサプライチェーンの再構築、そしてデジタル・トランスフォーメーション、また地球環境問題の行方がどうなるかについて注目を浴びている問題でもある。この講義では、これら多様な国際間の経済活動の進展をいくつかのトピックスに絞って解説していく。

2. 授業の進め方

特に教科書は用いないで毎回、Power Point などを利用して解説していく。初心者でも予備知識なくグローバル化経済の理解が深まるように講義は進行していくだろう。日々の時事的問題をできるだけ取り入れるので、授業計画は柔軟にその都度変更を加えていく。

3. 授業計画

1. ポスト・新型コロナ禍とウクライナ戦争以降のグローバル化を考える	9. 中国経済の中所得国の罠
2. 米中貿易戦争以後の国際貿易の変化	10. 北朝鮮と韓国の経済
3. イスラエル・ハマス戦争と中東の経済・政治	11. 米国大統領選と米国経済の動向
4. 経済格差は世界的にどうなるのか	12. ユーロ圏とイギリス経済
5. 世界の貧困問題	13. ロシア経済と資源の経済学
6. ピケティ「資本とイデオロギー」解説	14. 地球環境の経済学
7. 緊縮 vs 反緊縮	15. 仮想通貨・メタバース・AI の経済学
8. 難民問題（欧州、アフリカなどの事例）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業の前に指定された参考資料を各自よく学んでおくこと。目安として1時間程度の学習時間が必要。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後、レポートについては提出後に、標準的なレポートの書き方、求められたポイント、高得点のためのコツなどを解説する。

6. 授業における学修の到達目標

グローバル経済の動向と、日ごろからの時事的な問題を国際的・経済的観点からおさえることができる関心を養う。

7. 成績評価の方法・基準

授業中の取り組み姿勢を重視する（50%）。期末には試験またはレポートを提出させて総合的に評価（50%）していく。

8. テキスト・参考文献

教科書はなく適宜配布資料や power point で解説していく。

9. 受講上の留意事項

特にないが，熱意をもって講義を理解しようとする姿勢が重要である。また現実の経済の話題に常に注意を払ってほしい。疑問や議論があれば積極的に質問してほしい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

経済政策論		講義	教授 岡野 武志
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目	科目ナンバリング	11320206

1. 授業のねらい・概要

経済政策を考える際には、財政や金融、産業振興だけでなく国民の生活から環境問題に至るまで、幅広い領域を視野に入れる必要がある。この講義では日本の経済政策の枠組みを概観し、日本経済が直面している課題とその対応について、さまざまな視点から考察することで、社会で活躍する力量を高めることを目的とする。

2. 授業の進め方

事前に提供または指定された資料等を予習していることを前提に、授業では重要なポイントの解説や関連事例等についての考察を重視し、テーマについての質疑応答やディスカッション等も積極的に行う。また、理解の定着と考える力の向上を図るため、各回授業の終了後に小レポートを課し、その結果を成績評価にも反映させる。

3. 授業計画

1. イントロダクション / 経済政策の概観	9. 国際収支と外国為替
2. 歳入と歳出	10. ICT の発達と経済政策
3. 政府支出と公共事業	11. 地方自治と地方創生
4. 少子高齢化と社会保障	12. 自由化と民営化
5. 物価・雇用・賃金	13. 外部経済と規制・制度
6. 人口減少と働き方改革	14. ルールとプリンシプル
7. 科学技術政策とイノベーション	15. 総括 / 社会経済活動と経済政策
8. 経済成長と金融政策	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各回の授業を受講する前に事前に提供または指定された資料を予習し、関連する事項やニュース等を調べておくこと。授業終了後には授業で取り扱った内容を振り返りながら小レポートを作成・提出するとともに、関心を持った事項等について掘り下げて理解を深めること。これらの予習・復習等には、それぞれ2時間以上を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

小レポート及び期末レポートの趣旨や課題については授業の中で説明する。

6. 授業における学修の到達目標

日本経済の現状と課題を理解し、それらに対応する政策について自分なりの意見を持ち説明することができる。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（小レポートへの評価を含む：60%）と期末レポートの評価（40%）を総合して評価する。

8. テキスト・参考文献

教科書は指定せず、各回の授業に用いる資料は会場で表示する。参考文献等は必要に応じて授業内で紹介する。

9. 受講上の留意事項

新聞やTV番組、インターネット上の情報等を活用し、日頃から社会経済に関連する事項に関心を持つこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。この授業は金融機関、経営企画、調査研究（シンクタンク）等における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

日本経済論		講義	教授 岡野 武志
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目	科目ナンバリング	11320209

1. 授業のねらい・概要

この講義では、日本経済の特徴やこれまでの歩みを概観した上で、さまざまな視点から現状と課題について理解し、事例や統計などを参照しながら考察することで、社会で活躍する力量を高めることを目的とする。

2. 授業の進め方

事前に提供または指定された資料等を予習していることを前提に、授業では重要なポイントの解説や関連事例等についての考察を重視し、テーマについての質疑応答やディスカッション等も積極的に行う。また、理解の定着と考える力の向上を図るため、各回授業の終了後に小レポートを課し、その結果を成績評価にも反映させる。

3. 授業計画

1. イントロダクション / 日本経済の概観	9. サプライチェーンの変化と課題
2. 自然条件と産業	10. 中小企業とベンチャー企業
3. 殖産興業と戦後復興	11. 人的資本と DX 化
4. ものづくりと高度経済成長	12. 生産性とイノベーション
5. バブル崩壊と経済の停滞	13. 一極集中と地域活性化
6. 資金循環と資本構造	14. ESG 投資とガバナンス改革
7. 少子高齢化と社会保障	15. 総括 / 持続可能な経済について考える
8. 海外展開と国際収支	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各回の授業を受講する前に事前に提供または指定された資料を予習し、関連する事項やニュース等を調べておくこと。授業終了後には授業で取り扱った内容を振り返りながら小レポートを作成・提出するとともに、関心を持った事項等について掘り下げて理解を深めること。これらの予習・復習等には、それぞれ2時間以上を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

小レポート及び期末レポートの趣旨や課題については授業の中で説明する。

6. 授業における学修の到達目標

日本経済の現状と課題を理解し、経済の動向や出来事について自分なりの意見を持ち説明することができる。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（小レポートへの評価を含む：60%）と期末レポートの評価（40%）を総合して評価する。

8. テキスト・参考文献

教科書は指定せず、各回の授業に用いる資料は会場で表示する。参考文献等は必要に応じて授業内で紹介する。

9. 受講上の留意事項

新聞や TV 番組、インターネット上の情報等を活用し、日頃から社会経済に関連する事項に関心を持つこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。この授業は金融機関、経営企画、調査研究（シンクタンク）等における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

応用ソフトウェア		実習	准教授 黒澤 廣宣	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目、スポーツトレーナーコー スの専門選択科目		科目ナンバリング	11322207

1. 授業のねらい・概要

コンピュータを利用する上で、ソフトウェアはいろいろな機能を持ち、各方面で適切な用途に使われている。ここでは文書作成や表計算で現在最も多用されていると思われるマイクロソフト Word と Excel を用い、コンピュータリテラシで学んだ基礎を踏まえ実際の現場で即戦力となる考え方や技法を学修する。

2. 授業の進め方

課題や追加資料は Web で公開しており、個々の進捗を確認しながら進める。エンドユーザーコンピューティングスキル向上のため、毎回の問題解説及び演習に加え、関連する業務やコンピュータ知識、ネットワークやスマートフォン等の端末連携について言及することがある。

3. 授業計画

1. ガイダンス・基本的環境の構築	9. セル書式、見出し、ページオプション
2. Word の基礎復習	10. 条件付き書式、スパークライン
3. グラフ、文書パーツ	11. スタイル、データ
4. 校閲、組み込み、引用文献	12. Excel マクロ、フォーム
5. 変更履歴、参照、索引	13. 関数の応用 1 (VBA) (自動化)
6. 差し込み	14. 関数の応用 2 (VBA) (ユーザ定義関数)
7. Word マクロ、フォーム	15. 演習問題
8. Excel の基礎復習	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各回は公開されている情報から繰り返し復習することが可能である。回にもよるが 1～2 時間程度の時間を要することになる。不得手な箇所を繰り返し学習されたい。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

提出課題のフィードバック及び、講義内に個々の指導・アドバイスを行うことになる。

6. 授業における学修の到達目標

現場(企業や学校(レポートや研究))で使う Word や Excel を利用した効率的な表・データ加工・グラフ等、また複雑な手順の自動化や保護等活用する知識を身につける。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験は実施せず、提出課題(95%) (講義中に行う練習問題)の完成度、指示した提出方法(5%)から評価する。また欠席した場合も課題提出は必須であることに注意されたい。

8. テキスト・参考文献

コンピュータリテラシ A/B 教科書を必要に応じて持参する。教科書未記載部分(未記載や応用内容)は授業用 Web ページで補足説明を行う(初回授業時に URL 指示)。

9. 受講上の留意事項

特になし。本科目は卒業研究や論文作成時に有用な活用方法を多く含むことから早期の受講が望ましい。一部課題に開発言語 VBA (Visual Basic for Application) が含まれるが、本科目では言語の修得は含まれない(マクロ/関数利

用方法の記述や方法を提示し結果確認までとする)。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、企業における資料作成や仕事効率化の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

ストレッチ・スポーツマッサージの理論と実際		演習	講師 佐藤 康宏 准教授 牛島 詳力
科目カテゴリ	スポーツトレーナーコースの専門選択科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	11302101 12220102 13322102

1. 授業のねらい・概要

ストレッチ・スポーツマッサージは、スポーツ外傷・障害の治療、予防およびコンディショニングの一手段として活用される方法である。さまざまな医療現場およびスポーツ現場で活動していく上で、ストレッチ・スポーツマッサージの理論および技術を習得することは必須である。また、今後学習するスポーツリハビリテーションおよびトレーニング論などとも密接に関連する。この講義ではストレッチ・スポーツマッサージの基本的な知識、原理および作用を理解し、基本用語を学ぶことで、ストレッチ・スポーツマッサージのスキルの基盤作りを行ない、スポーツ、運動に関するすべての分野に対して応用していく能力を身につける。

2. 授業の進め方

主に、理論については Power Point を用いたスライドによる講義形式で授業を行う。実際に学生同士でペア・グループを作り、相手とコミュニケーションを取りながら、ストレッチ・スポーツマッサージ技術を実践の中で習得していく。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. 間欠圧迫法、揉捏法の習得（下腿部を例に）
2. ストレッチのメカニズムと基礎理論	10. 強擦（交差）法・叩打法の習得
3. パートナーストレッチ（ハムストリングス、殿筋群）	11. スポーツマッサージ（ハムストリングス、殿筋群）
4. パートナーストレッチ（股関節周囲、大腿四頭筋）	12. スポーツマッサージ（腰部、体幹部）
5. パートナーストレッチ（体幹部、肩甲骨、上肢）	13. スポーツマッサージ（胸郭、肩甲骨、頸部）
6. 自己抑制・相互抑制を利用したストレッチ	14. ストレッチ・マッサージ実践練習（下半身）
7. スポーツマッサージの基礎理論	15. ストレッチ・マッサージ実践練習（上半身）
8. 軽擦法の習得（下腿部を例に）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

柔道整復師コースならびに救急救命士コースの学生以外は原則として「人体構造学」を C 評価以上の成績で修了したものが受講できる。本講義受講期間中においては、配布テキスト、参考図書により、次回取り扱う筋群の名前、機能について理解および把握しておくこと（予習 30 分）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

実技試験に関して、終了時に改善点ならびに模範解答を口頭および実技で説明する。

6. 授業における学修の到達目標

ストレッチおよびスポーツマッサージに必要な基礎知識と筋機能について理解を深め、他人に対するストレッチ指導および最低限のスポーツマッサージを行えるようにする。併せて、自身のパフォーマンス向上も目指す。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（30%）、学習ノート記載（20%）、実技試験（50%）によって評価する。ただし、講義回数数の 5 分の 1 以上（3 回以上）欠席した者は評価の対象としない。

8. テキスト・参考文献

講義期間中において必要に応じて指定する。

9. 受講上の留意事項

私語および携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。また，実技時はストレッチ，スポーツマッサージの施術を受ける衣服での参加を基本とする。ジーパン，スカート，スーツの着用は禁止とする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は柔道整復師免許資格を有し，整形外科医院，接骨院、プロスポーツチームに勤務した実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツトレーニング論Ⅰ		講義	教授 小笠原 正志	
科目カテゴリ	スポーツトレーナーコースの専門選択科目 教職科目 柔道整復師コースの専門選択科目 教職科目	科目ナンバリング	11302102 11532105 12352101 12532105	

1. 授業のねらい・概要

健康体力づくりの目的でトレーニングを行ったり、競技などにおいて良い成績を残すために、数多く存在するトレーニング方法の中から、適切なトレーニング方法を選択することなど、トレーニング方法が重要視されてきている。そこで、本講義では運動不足が健康に与える影響、適切なトレーニング方法（運動の種類、強度、時間、頻度など）について目的に応じて解説し、適切な運動処方とその指導が可能となるための必要な基礎知識と基礎理論について学習する。

また、トレーニングの原理、原則について基礎から学び、「スポーツトレーニング論Ⅱ」や実技講義に向けての知識を獲得することを目的とする。

2. 授業の進め方

主に、Power Point を用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。必要に応じて動画を教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された教科書を補足的に用いる。また、各回に行う課題の実施により、講義の理解度を確認しながら展開していく。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. 筋肥大のメカニズム
2. 人生 100 年時代におけるトレーニングの意義	10. レジスタンストレーニングの基礎理論
3. トレーニングの原理原則	11. 下肢のレジスタンストレーニング
4. 体力の構造とトレーニング	12. 体幹部のレジスタンストレーニング
5. 骨格筋の構造	13. 上肢のレジスタンストレーニング
6. 身体の構造①（下肢）	14. レジスタンストレーニングとタンパク摂取
7. 身体の構造②（体幹部）	15. まとめ
8. 身体の構造③（上肢）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- ・予習：次週授業内容に関する情報を入手し、予習しておくこと。この準備学修には2時間程度が必要である。
- ・復習を兼ねて小テストやレポート課題を行うこともある。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

課題を提出の際、解答などを説明する。

6. 授業における学修の到達目標

スポーツトレーニングに関する基礎知識を獲得し、実践することができる。また、将来スポーツ指導者としての知識を習得する機会とする。

7. 成績評価の方法・基準

モラル、授業態度、取り組み等（50%）・課題レポート（50%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

小笠原正志, 健康生活とスポーツ, SIS, 2024

その他講義資料は必要に応じて配布する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用と飲食は認めない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、企業における実務経験（地域住民の運動指導）を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツトレーニング論Ⅱ		講義	教授 小笠原 正志	
科目カテゴリ	スポーツトレーナーコースの専門選択科目 教職科目 柔道整復師コースの専門選択科目 教職科目	科目ナンバリング	11302103 11532106 12352102 12532106	

1. 授業のねらい・概要

健康体力づくりの目的でトレーニングを行ったり、競技などにおいて良い成績を残すために、数多く存在するトレーニング方法の中から、適切なトレーニング方法を選択することなど、トレーニング方法が重要視されてきている。そこで、本講義では運動不足が健康に与える影響、適切なトレーニング方法（運動の種類、強度、時間、頻度など）について目的に応じて解説し、適切な運動処方とその指導が可能となるための必要な知識と理論について学習する。

また、スポーツ関連のクリニックやスポーツ現場における医療従事者、トレーニング指導者としてトレーニングの理論を学び、「トレーニング演習」などの実技中心講義に向けての知識を獲得することを目的とする。

2. 授業の進め方

主に、Power Point を用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。必要に応じて動画を教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された教科書を補足的に用いる。また、各回に行う課題の実施により、講義の理解度を確認しながら展開していく。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. SAQ トレーニング
2. トレーニングの原理原則	10. ストレッチング
3. 持久的トレーニングの理論	11. スポーツ外傷とスポーツ障害
4. 持久的トレーニングの方法	12. リハビリテーション
5. 持久的トレーニングと高地順化	13. 目標設定
6. 体幹トレーニング	14. 動機づけを高める方法
7. パワートレーニングの理論	15. まとめ
8. パワートレーニングの方法	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- ・予習：次週授業内容に関する情報を入手し、予習しておくこと。この準備学修には2時間程度が必要である。
- ・復習を兼ねて小テストやレポート課題を行うこともある。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

課題を提出の際、解答などを説明する。

6. 授業における学修の到達目標

スポーツトレーニングに関する基礎および応用知識を獲得し、自分のトレーニングを実践することができる。また、将来スポーツ指導者としての知識を習得する機会とする。

7. 成績評価の方法・基準

モラル、授業態度、取組み等（50%）・課題レポート（50%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

小笠原正志：健康生活とスポーツ，SIS，2024

その他講義資料は必要に応じて配布する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用と飲食は認めない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、企業における実務経験（地域住民の運動指導）を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

人体構造学実習		実習	教授 西川 彰
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門基礎科目	科目ナンバリング	12311201

1. 授業のねらい・概要

医療専門職を志す者にとって、人体の構造学（解剖学）は最も基盤となる学問である。この授業では、運動器（骨および骨格筋）の系統解剖学について学ぶ。さらに、その知識を基として体表面より皮下にある運動器の情報を知り、臨床上の診察に活かせる基礎的な触診技術が習得できるよう実習形式の授業も実施する。また、單元ごとに該当する演習問題にも取り組むことで、将来の資格試験合格に向けた知識の定着も図る。

2. 授業の進め方

初めにプレゼンテーションソフトを用いたスライドにより関連する写真やイラストを呈示しながら、さらに板書を組み合わせた講義形式の授業を行い、その後、体表面のランドマークとなる部位の触診法については学生同士が2人1組のペアとなり反復練習を実施しながら実習を進めていく。尚、構造学的特徴を記入した「人体構造学レポート」に加えて、実習内容をまとめた「触診実習レポート」を作成し提出課題とする。

3. 授業計画

1. ガイダンス 運動器①（骨および骨格筋の基礎）	8. 運動器⑧（下肢の骨・関節：下腿，足）
2. 運動器②（頭部の骨・関節）	9. 中間試験
3. 運動器③（体幹の骨・関節：脊柱）	10. 運動器⑨（体幹の筋）
4. 運動器④（体幹の骨・関節：胸郭）	11. 運動器⑩（上肢の筋：上肢帯，上腕）
5. 運動器⑤（上肢の骨・関節：上肢帯，上腕）	12. 運動器⑪（上肢の筋：前腕，手）
6. 運動器⑥（上肢の骨・関節：前腕，足）	13. 運動器⑫（下肢の筋：下肢帯，大腿）
7. 運動器⑦（下肢の骨・関節：下肢帯，大腿）	14. 運動器⑬（下肢の筋：下腿，足）
	15. まとめ

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業で学んだ重要語句や図表などをまとめた「人体構造学レポート」および単元別の演習問題、さらに解剖知識と触診技術を高めるための「触診実習レポート」の作成に取り組んだ上で、毎回の授業に臨むこと（1.5時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポートおよび演習問題については添削、採点を行った上で返却する。また、定期試験については正答と問題の要点を希望者に配布する。

6. 授業における学修の到達目標

本授業では、構造学的な特徴をただ暗記するだけでなく、その機能や病態との関連性などの統合的な理解を得ると同時に、運動器における触診法の基礎的技術を習得することを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（レポート）（約30%程度）並びに定期試験（中間試験，期末試験）の結果（約70%程度）より総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

全国柔道整復学校協会監修、『解剖学 第2版』，医歯薬出版，2008年
その他の参考資料は、必要に応じて授業中に紹介または配布する。

9. 受講上の留意事項

毎回の授業時にはテキスト並びに配布プリントを必ず持参すること。

講義回数の3分の1以上を欠席した場合は、定期試験の受験資格を失うこととする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、人体解剖トレーニングセミナーにおける実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

柔道整復学総論Ⅱ		講義	教授 川崎 一郎
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12351102

1. 授業のねらい・概要

柔道整復師は、「骨折、脱臼、打撲、捻挫等」といった運動器に対する急性の外傷性疾患に対して保存的治療を行うことを業務としている。この授業では、関節の損傷（捻挫・脱臼）や筋・腱の損傷などにおける基礎的知識（様々な分類法、局所の症状、合併症、治癒機序と予後など）とその治療法（一般的な整復法並びに初期処置法、後療法など）について理解する。また、インフォームド・コンセント（説明と同意）の基礎となる指導管理についても学習する。

2. 授業の進め方

主にPowerPointを用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。必要に応じてDVDなどのメディアを教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された教科書を補足的に用いる。

3. 授業計画

1. ガイダンス 関節の損傷①（概説、分類）	9. 血管系、リンパ系の損傷（分類、症状）
2. 関節の損傷②（靱帯および関節包の損傷）	10. 皮膚の損傷（受傷原因、治癒機序）
3. 関節の損傷③（関節軟骨およびその他の損傷）	11. 治療法①（脱臼の整復法、軟部組織損傷の初期処置）
4. 関節の損傷④（脱臼の分類）	12. 治療法②（後療法）
5. 関節の損傷⑤（脱臼の症状と合併症）	13. 指導管理①（環境、整復）
6. 筋の損傷（分類、合併症、治癒機序）	14. 指導管理②（固定、後療法）
7. 腱の損傷（分類、治癒機序）	15. まとめ
8. 末梢神経の損傷（分類、症状、治癒機序）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、配布プリントやノートを使って復習しておくこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

本授業では、運動器に対する急性の外傷性疾患を評価し治療する上で必要な専門的知識や技術の基礎となる総論的事項を習得することを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（15%）小テスト（15%）定期試験の結果（70%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- ①柔道整復学・理論編改訂7版社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②毎授業で資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用、飲食、帽子の着用は認めない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツリハビリテーション概論		講義	教授 川崎 一郎
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12351201

1. 授業のねらい・概要

スポーツ外傷・障害からの復帰に際して、医療機関等で行われるメディカルリハビリテーションに加えて、フィールドにおけるアスレティックリハビリテーションが必要となる。アスレティックリハビリテーションは、スポーツ外傷・障害が起こってから、スポーツ活動時に要求される運動能力を解剖機能系、呼吸器系、筋骨格系および代謝系を含めて元の競技スポーツに耐え得るだけのレベル以上に戻すとともに、さらには再発を予防する事を目的としている。実際のスポーツ現場では、様々な背景を有する競技選手（育成期から成人まで）を対象とするため、幅広い運動生理学的な基礎知識（呼吸循環器系、筋骨格系、代謝系、成長期の生理学的特徴）が必要となるとともに、スポーツリハビリテーションに従事する者の役割に対する理解も必要になる。この講義ではスポーツリハビリテーションの基本的な知識を上記の観点から理解し、スポーツリハビリテーションのスキルの基盤作りを体系的に行うとともに、スポーツ現場に生かすため知識を理解していく。

2. 授業の進め方

主に Power Point を用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。

3. 授業計画

1. スポーツリハビリテーション従事者の役割	9. スポーツリハビリテーションの実際の流れ
2. スポーツ外傷・障害の予防	10. 運動療法の基礎（関節可動域回復）
3. アスレティックリハビリテーションの定義	11. 運動療法の基礎（筋力回復）
4. メディカルリハビリテーションの概要	12. 運動療法の基礎（呼吸循環器系・代謝系）
5. アスレティックリハビリテーションの概要	13. 運動療法の基礎（神経筋協調性回復）
6. 重症外傷と救急処置	14. 物理療法の基礎（温熱療法・冷却療法）
7. コンディショニング	15. スポーツリハビリテーションのシミュレーション
8. 測定と評価	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、配布プリントやノートを使って復習しておくこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

柔道整復師およびトレーナーとしてスポーツ現場において実施するスポーツリハビリテーションに必要な最低限の知識および方法論の習得に努め、今後の授業である「スポーツ傷害」「スポーツリハビリテーション」へとつなげる。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（15%）小テスト（15%）定期試験の結果（70%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

必要に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用、飲食、帽子の着用は認めない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

臨床柔道整復学Ⅱ		講義	准教授 伊藤 新
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12361201

1. 授業のねらい・概要

臨床柔道整復学Ⅱで学ぶ肩周囲から前腕骨骨幹部までの骨折および脱臼は、評価や治療を誤ると重篤な機能障害を残すことが多い。そのため、基礎柔道整復学総論の知識を把握した上で、受傷機転、症状、治療法、合併症について理論的に学び、臨床現場への応用につながる知識を身につけていくことを目指す。

2. 授業の進め方

柔道整復学・理論編改訂7版の内容に沿った講義形式を基本とする。毎回の講義ではpower pointを用いたスライドによる授業を行い、分かりにくい、もしくは理解しにくい箇所は、画像および動画などを用いて説明する。

3. 授業計画

1. 鎖骨骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）	9. 肘頭骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）
2. 肩甲骨骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）	10. 橈骨単独骨折・前腕骨骨幹部骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）・小テスト
3. 上腕骨近位端部骨折（大結節・小結節骨折、骨折の分類について）	11. Monteggia脱臼骨折・Galeazzi脱臼骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）
4. 上腕骨外科頸骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）	12. 胸鎖・肩鎖関節脱臼（受傷機転、症状、治療法、合併症）
5. 上腕骨骨幹部骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）・小テスト	13. 肩関節脱臼（受傷機転、症状、治療法、合併症）
6. 上腕骨顆上骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）	14. 肘関節脱臼（受傷機転、症状、治療法、合併症）
7. 上腕骨外顆・内側上顆骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）	15. まとめ（臨床現場でよく遭遇することの多い外傷や国家試験によく出題されている内容についての説明）・小テスト
8. 橈骨近位端部骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、配布プリントやテキストを使用し復習しておくこと。なお、これらの準備学修には2時間以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

各項目の要点をまとめて記述できるようになる。また、本講義で得た知識を通じて実技を実践できるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

小テスト（30%）、定期試験の結果（70%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- ①柔道整復学・理論編改訂7版 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②柔道整復学・実技編改訂2版 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ③運動器疾患ワークブック 医歯薬出版
- ④必要に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

私語およびスマートホンの使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は整形外科における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

臨床柔道整復学Ⅲ		講義	准教授 伊藤 新
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12361202

1. 授業のねらい・概要

臨床柔道整復学Ⅲで学ぶ肩周囲から前腕骨骨幹部までの骨折および脱臼は、評価や治療を誤ると重篤な機能障害を残すことが多い。そのため、基礎柔道整復学総論の知識を把握した上で、受傷機転、症状、治療法、合併症について理論的に学び、臨床現場への応用につながる知識を身につけていくことを目指す。

2. 授業の進め方

柔道整復学・理論編改訂 6 版の内容に沿った講義形式を基本とする。毎回の講義では power point を用いたスライドによる授業を行い、分かりにくい、もしくは理解しにくい箇所は、画像および動画などを用いて説明する。

3. 授業計画

1. 橈骨遠位端伸展型骨折（受傷機転、症状）	9. 中手骨骨幹部・基部骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）
2. 橈骨遠位端伸展型骨折（治療法、合併症）	10. 基節骨頸部・基部骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）・小テスト
3. 橈骨遠位端屈曲型骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）	11. 基節骨骨幹部骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）
4. Barton 骨折・Chauffeur 骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）	12. 末節骨骨幹部骨折・中節骨骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）
5. 舟状骨骨折（受傷機転、症状）・小テスト	13. マレットフィンガー（受傷機転、症状、治療法、合併症）
6. 舟状骨骨折（治療法、合併症）その他の手根骨骨折	14. 手部・指部脱臼（受傷機転、症状、治療法、合併症）
7. Bennett 骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）	15. まとめ（臨床現場で遭遇することの多い外傷や国家試験によく出題されている内容についての説明）・小テスト
8. 中手骨頸部骨折（受傷機転、症状、治療法、合併症）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、配布プリントやテキストを使用し復習しておくこと。なお、これらの準備学修には、2 時間以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

各項目の要点をまとめて記述できるようになる。また、本講義で得た知識を通じて実技を実践できるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

小テスト（30%）、定期試験の結果（70%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- ①柔道整復学・理論編改訂 7 版社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②柔道整復学・実技編改訂 2 版社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ③運動器疾患ワークブック 医歯薬出版
- ④必要に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

私語およびスマートホンの使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は整形外科における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

柔道整復実技Ⅱ（上肢①）		講義	准教授 伊藤 新
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12371201

1. 授業のねらい・概要

柔道整復実技Ⅱ（上肢①）では、臨床柔道整復学Ⅱで学んだ知識を実技で実践する。肩周囲から前腕骨骨幹部までの骨折および脱臼の評価法や整復法、固定法などの目的や意義を理解し、実践することにより、座学で学んだ知識を深め、技術の習得を目指す。

2. 授業の進め方

グループ班を形成し、学生各々が術者や助手、患者などの役割となり、各外傷の評価法および治療法を実践し、授業を進行する。

3. 授業計画

1. 鎖骨骨折	9. 肘頭骨折
2. 肩甲骨骨折	10. 橈骨単独骨折・前腕骨骨幹部骨折
3. 上腕骨近位端部骨折	11. Monteggia 脱臼骨折・Galeazzi 脱臼骨折
4. 上腕骨外科頸骨折	12. 胸鎖関節脱臼・肩鎖関節脱臼
5. 上腕骨骨幹部骨折	13. 肩関節脱臼
6. 上腕骨顆上骨折	14. 肘関節脱臼
7. 上腕骨外顆骨折・内側上顆骨折	15. まとめ（臨床の現場でよく用いられている治療法と国家試験によく出題されるポイントを解説する）
8. 橈骨近位端部骨折	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各外傷の受傷機転や症状、治療法、合併症を運動器疾患ワークブックを中心に学習しておくこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

各外傷の評価法や、整復法および固定法を実践し、その目的と意義を理解する。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取組み姿勢（30%）、定期試験（レポート）の結果（70%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- ①柔道整復学・実技編改訂2版 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②運動器疾患ワークブック 医歯薬出版
- ③必要に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

- ①私語および携帯電話の使用、飲食、帽子の着用は禁止とする。
- ②実習着（ポロシャツ）を着用すること。
- ③アクセサリ（ピアス、指輪、ネックレス）ははずすこと。
- ④事前に実技で必要とするものを連絡するので必ず持参すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は整形外科における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

柔道整復実技Ⅲ（上肢②）		実習	准教授 伊藤 新
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12371202

1. 授業のねらい・概要

柔道整復実技Ⅲ（上肢②）では、臨床柔道整復学Ⅲで学んだ知識を実技で実践する。肩周囲から前腕骨骨幹部までの骨折および脱臼の評価法や整復法、固定法などの目的や意義を理解し、実践することにより、座学で学んだ知識を深め、技術の習得を目指す。

2. 授業の進め方

グループ班を形成し、学生各々が術者や助手、患者などの役割となり、各外傷の評価法および治療法を実践し、授業を進行する。

3. 授業計画

1. 橈骨遠位端部伸展型骨折（コットンローダー肢位での固定法）	9. 中手骨骨幹部・基部骨折
2. 橈骨遠位端部伸展型骨折（シュガートング固定）	10. 基節骨基部骨折
3. 橈骨遠位端部屈曲型骨折	11. 基節骨骨幹部骨折
4. Barton 骨折・Chauffeur 骨折	12. 末節骨骨幹部骨折・中節骨骨折
5. 舟状骨骨折	13. マレットフィンガー
6. 有鉤骨鉤部骨折	14. 手部・指部脱臼
7. Bennett 骨折	15. まとめ（臨床の現場でよく用いられている治療法と国家試験によく出題されるポイントを解説する）
8. 中手骨頸部骨折	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各外傷の受傷機転や症状、治療法、合併症を運動器疾患ワークブックを中心に学習しておくこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

各外傷の評価法や、整復法および固定法を実践し、その目的と意義を理解する。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（30%）、定期試験（レポート）の結果（70%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- ①柔道整復学・実技編改訂2版 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②運動器疾患ワークブック 医歯薬出版
- ③必要に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

- ①私語および携帯電話の使用、飲食、帽子の着用は禁止とする。
- ②実習着（ポロシャツ）を着用すること。
- ③アクセサリ（ピアス、指輪、ネックレス）ははずすこと。
- ④事前に実技で必要とするものを連絡するので必ず持参すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は整形外科における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

教養ゼミ		演習	講 師 佐藤 康宏 講 師 伊藤 新
科目カテゴリー	柔道整復師コースの必修科目	科目ナンバリング	12130201

1. テーマ

本ゼミでは、柔道整復師コース2年生に対し、将来の資格取得に向けた基礎的な学習指導およびキャリア指導等を実施するとともに大学生活全般をサポートする。

2. ゼミのねらい・概要

この授業では1年次での学習習慣を踏襲しつつも、3年次以降に予定されている「国家試験対策」「卒業研究」「臨床実習」といった科目への橋渡しとなるような内容にも取り組んでいく。主として、1年次と同様の基礎学力の充実のための「確認テスト」を実施しながら、医療現場やスポーツ現場における実習に参加するための「臨床実習講座」も取り組んでいく。また、担当する教員はクラス担任としてゼミを運営し、必要に応じて学生への個別面談も行う。

3. ゼミ計画

1. ガイダンス、履修指導	8. 確認テスト④（前期まとめ）履修指導
2. 臨床実習講座①（実習参加の準備、実習見学）	9. 臨床実習講座③（実習参加の準備、実習見学）
3. キャリアアップのための指導①（全体ゼミ）	10. キャリアアップのための指導②（全体ゼミ）
4. 確認テスト①（柔道整復学：総論、頭部・体幹）	11. 確認テスト⑤（柔道整復学：上肢）
5. 確認テスト②（解剖学：血管系）	12. 確認テスト⑥（解剖学：運動器系①）
6. 確認テスト③（解剖学：神経系）	13. 確認テスト⑦（解剖学：運動器系②）
7. 臨床実習講座②（症例報告による口頭発表）	14. キャリアアップのための指導③（全体ゼミ）
	15. 臨床実習講座④（症例報告による口頭発表）

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

確認テストはテキストの指定範囲の予習を行った上で授業に臨むこと（約2時間程度）。臨床実習講座における実習見学後の症例報告による口頭発表についてはpower pointを用いて事前に作成したものを提出すること（2時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

口頭発表については発表後に個々の講評を行う。確認テストでは正答と重要ポイントの解説を実施する。

6. ゼミにおける学修の到達目標

本授業では、実習見学を通して学んだ症例をまとめ、口頭で発表するプレゼンテーション能力の習得を目標とする。加えて、国家試験で出題される主要科目（解剖学、生理学、柔道整復学）に関する基礎学力の向上も目指す。

7. 成績評価の方法・基準

定期試験（総合試験）（60%）、確認テスト（40%）の2項目より総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

西川彰／小林直行 著、解剖学ワークブック、医歯薬出版
西川彰／小林直行 著、生理学ワークブック、医歯薬出版
小林直行 編、運動器疾患ワークブック、医歯薬出版
その他の参考資料は必要に応じて授業中に配布する。

9. 受講上の留意事項

毎回の授業時にはテキストおよび配布資料を必ず持参すること。
講義回数の3分の1以上を欠席した場合は不合格とする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本ゼミは、接骨院での臨床経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

教育史		講義	教授 平沢 信康	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの教養選択科目、スポーツトレーナーコースの教養選択科目		科目ナンバリング	11220111

1. 授業のねらい・概要

教育の理念や人間形成に関する思想のほとんどは、歴史の中にその源流を有するといって過言ではない。本講義では教育について制度的な変遷を解説するほか、主要な民族・国家および我が国において形成された教育思想/理念を歴史の相の下に概観し、考察する。著名な教育家についても紹介する。

講義を通じて、市民としての教養を高め、広く豊かな歴史的な視野と想像力を獲得することをねらいとする。他方、教員採用試験の受験を希望する受講者にとっては、教職教養の一部として受験準備の学習ともなりえる内容である。

2. 授業の進め方

基本的に、講義内容を示した講義要旨（レジュメ）を配信し、レクチャー形式で進める。発話と文字資料による学びを、PowerPoint を活用して画像をスクリーン上に紹介する視覚情報で補う。

新型コロナウイルスの感染が拡大するような場合は、遠隔授業に切り替えることがある。

3. 授業計画

1. 古代世界における文明の発祥と教育 — オリент文明とギリシャ文明を中心に	9. 近世日本の学校 — 官学「昌平坂学問所」と藩校
2. 古代ギリシャの都市国家と古代ローマ（帝国）における教育	10. 江戸時代における民間の教育機関 — 郷校・私塾・寺子屋
3. 古代中国における教育思想と制度 — 六芸、孔子教団と儒家思想および科举制度	11. 西洋近代の教育思想と制度 — 偉大な教育（思想）家を中心に
4. 古代日本の学校制度 — 律令国家体制における大学・国学と留学	12. 明治期日本の教育 — 中央集権型の近代国民国家の成立と学校教育制度：啓蒙主義・欧化主義から復古主義へ
5. 平安時代の教育 — 公家の学習・教育を中心に	13. 近代日本における教育の発展 — 国家主義の確立・隆盛・崩壊
6. 鎌倉・室町時代の教育 — 武家の学習・教育を中心に	14. 20 世紀における世界の教育改革運動
7. 中世社会と高等教育 — 西欧における「ユニヴェルシタス（大学）」の誕生を中心に	15. 第2次世界大戦後の日本の学制改革と「逆コース」および教育の量的拡大
8. 近世社会と教育 — ルネサンス・宗教改革・大航海時代	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

事前に講義要旨の pdf 版を配信するので、その該当ページを次回講義までにあらかじめ読んで予習（30 分程度）しておくこと。また講義終了後、配布プリント（レジュメ）の内容を復習（30 分程度）し、気になった人物や事項についてはインターネットで検索して学びを深めること。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回の講義終了時に提出してもらった「感想メモ帳」に書かれた小文に対して、誤字の添削を含めてコメントを付して次回冒頭に返却するので、注視されたい。優れた感想は全員でシェアすることもある。

また学期末試験の終了後、特に注意を喚起すべき事項（多かった誤答など）について指摘した講評を履修者全員に対して G メールで配信することでフィードバックする。

6. 授業における学修の到達目標

国内外の教育の歴史について理解を深め、以下について簡潔に説明できるようになることを目的とする。

- 1 有名な教育制度
- 2 高名な教育家たち

3 彼らが創始・主宰した教育施設・学校・学園・学舎（教育思想や教育方法を含めて）

7. 成績評価の方法・基準

学期末に実施する筆記試験と平常点とを総合して評価する。評点の配分割合については、期末試験（55%）、平常点（45%）とする。期末試験には十分復習をして臨んでほしい。

平常点については、各回講義の終了時に記してもらい「感想メモ帳」のコメント（質問を含む）の筆記内容および濃淡等により、講義に臨む関心・意欲および理解の程度を推し量って評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト：自作レジュメ（講義要旨）

参考書：柴田義松・斉藤利彦編著『教育学ポイント・シリーズ 教育史』（学文社、2005年）

9. 受講上の留意事項

高校時代に日本史や世界史を学ぶことのなかった諸君も、臆することなく積極的に履修してほしい。

教養を高め、人文社会系の視野を広げたい人の履修を歓迎する。

とくに教員志望者には教員採用試験の準備としても聴講を推奨したい。教職教養を意識した受講は大歓迎である。

受講者は、居眠りをしないように自らを戒めてほしい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

教育相談		講義	非常勤講師 音山 若穂
科目カテゴリー	教職科目	科目ナンバリング	11520206 12520206 13520206

1. 授業のねらい・概要

教育相談は、生徒が自己理解を深めたり好ましい人間関係を築いたりしながら、集団の中で適応的に生活する力を育み、個性の伸長や人格の成長を支援する教育活動である。生徒の発達の状況に即しつつ、個々の心理的特質や教育的課題を適切に捉え、支援するために必要な基礎的知識（カウンセリングの意義、理論や技法に関する基礎的知識を含む）を身に付けることを目的とする。

2. 授業の進め方

前半は講義形式で、教育相談の基本的な考え方や基礎理論の講義、生徒や学校をめぐるさまざまな今日的課題、学校内外における教育相談の実際について解説する。続いてカウンセリングの諸技法、特に開発的技法について、スキルを身に付けるための授業を行なう。さらに、以上の知識を活かしながら教育相談の計画の立て方と進め方についての演習を行なう。

3. 授業計画

1. 学校における教育相談の意義と課題 教育相談とカウンセリング【教育相談の意義と理論】	9. 生徒の諸課題に対する発達に応じた相談の進め方ー不登校ー 不登校の定義・実態【教育相談の展開】
2. 教育相談における校内での組織的取り組み【教育相談の展開】	10. 生徒の諸課題に対する発達に応じた相談の進め方ー不登校ー 不登校の基本的対応【教育相談の方法】
3. 地域の医療・福祉・心理等の専門機関との連携や意義【教育相談の展開】	11. カウンセリングの基礎技法ー構成的エンカウンターー【教育相談の方法】
4. 教育相談に関わる心理学の基礎的な理論・概念【教育相談の意義と理論】	12. カウンセリングの基礎技法ーストレスマネジメントー【教育相談の方法】
5. 学校教育におけるカウンセリングマインド 自己概念、自己肯定感・事故有用感【教育相談の方法】	13. カウンセリングの基礎技法ーピア・サポートー【教育相談の方法】
6. 生徒の不応答や問題行動等のアセスメント【教育相談の方法】	14. 教育相談の目標の立て方と進め方の実際ー生徒への対応ー【教育相談の方法・展開】
7. 生徒の諸課題に対する発達に応じた相談の進め方ーいじめー 今日のいじめの実態【教育相談の展開】	15. 教育相談の目標の立て方と進め方の実際ー保護者への対応ー【教育相談の方法・展開】
8. 生徒の諸課題に対する発達に応じた相談の進め方ーいじめー いじめ防止対策推進法【教育相談の展開】	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、配布資料等を使って復習しておく。さらに、課題についても振り返っておく。なお、これらの準備学修には、2時間以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎時間の課題については、確認後、次の授業時に解説を行なう。

6. 授業における学修の到達目標

教育相談についての基本的な考え方や技法について、教職者として常識レベルの知識を説明できる。初任者として担任に求められる指導法や対応法についても、理解し説明できる。

7. 成績評価の方法・基準

毎時間に提出を求めるミニレポート（60%）の提出状況、および期末レポート（40%）の提出状況および内容を合算し

で評価する。

8. テキスト・参考文献

テキストとして市販の書籍等は使用しない。(文部科学省サイトに公開されている，生徒指導提要のデジタルテキストを使用する。入手方法は初回講義で解説する)。また，参考文献は講義中に随時解説する。

9. 受講上の留意事項

相談技法についての簡単な演習（ワーク）の際は，積極的な参加が求められます。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

病理学概論		講義	教授 澁谷 正史 教授 西川 彰
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門基礎科目	科目ナンバリング	12321301

1. 授業のねらい・概要

病理学では、病気に陥った身体にどのような変化が生じているのかを明らかにし、それにより病気の原因を究明することを学びの基盤としている。さらに、病気の診断や治療、予防にも関わることから臨床医学や予防医学の根幹ともなる学問である。この授業では、疾病の基本（分類、症状、経過、予後など）と病因を学ぶことから始め、その後は、細胞傷害、循環障害、進行性病変、炎症、免疫異常（アレルギー）、腫瘍、先天性異常について順次学習を進めていく。また、単元ごとに該当する演習問題にも取り組むことで、将来の資格試験合格に向けた知識の定着も図る。

2. 授業の進め方

プレゼンテーションソフトを用いたスライドにより関連する写真やイラストを呈示しながら、さらに板書を組み合わせた講義形式で授業を進めていく。さらに、テキストに記載されている病理学的所見などのスケッチも加えた上で、「病理学レポート」を作成し提出課題とする。

3. 授業計画

1. ガイダンス 病理学とは	8. 進行性病変①（肥大と過形成、再生、化生）
2. 疾病の一般（疾病の意義と分類、経過、予後、転帰）	9. 進行性病変②（創傷治癒と異物処理、移植）
3. 病因（内因と外因）	10. 免疫異常、アレルギー
4. 細胞傷害①（退行性病変）	11. 腫瘍①（腫瘍の概念）
5. 細胞傷害②（代謝障害）	12. 腫瘍②（腫瘍の分類）
6. 循環障害①（血液の循環障害）	13. 先天性異常
7. 循環障害②（リンパ液の循環障害、脱水）	14. 運動器の病理
	15. まとめ

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業で学んだ重要語句や図表などをまとめた「病理学レポート」を作成した上で、それを基に単元別の演習問題にも取り組み毎回の授業に臨むこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポートおよび演習問題については添削、採点を行った上で返却する。また、定期試験については正答と問題の要点を希望者に配布する。

6. 授業における学修の到達目標

本授業では、病理学用語をただ暗記するだけでなく、病気の原因とそれによる身体の変化との関連性などの統合的な理解が得られることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（レポート）（約30%程度）並びに定期試験の結果（約70%程度）より総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

全国柔道整復学校協会監修、『病理学概論 第3版』、医歯薬出版、2012年
その他の参考資料は、必要に応じて授業中に紹介または配布する。

9. 受講上の留意事項

毎回の授業時にはテキスト並びに配布プリントを必ず持参すること。

講義回数の 3 分の 1 以上を欠席した場合は、定期試験の受験資格を失うこととする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、医療機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

内科学 I		講義	教授 加藤 政彦	
科目カテゴリ	柔道整復師コースの専門基礎科目 救急救命士コースの専門分野科目	科目ナンバリング		12321302 12351202

1. 授業のねらい・概要

診察の基本を学び、柔道整復師、救急救命士が臨床の現場で注意を払わなければならない症状・所見や各種検査、内科学的病態の概要を理解する。

2. 授業の進め方

テキストの範囲の内容を、適宜、スライドと配布資料を用いて授業する。授業の最後に最近の国家試験問題等を出題し解答を出席カードに記載して提出させる。テキストの内容に沿った講義形式を基本とするが、随時、新聞・雑誌の記事などから具体的な出来事を取り上げて診療の現場に即した説明も行う。

3. 授業計画

1. 診察概論、医療面接	9. 生命徴候
2. 視診（体格・体型、体位・姿勢、栄養・精神状態）	10. 感覚検査
3. 視診（異常運動、歩行、皮膚）	11. 反射検査（種類、意義、表在反射、腱反射）
4. 視診（頭部・顔面、頸部、胸部、腹部）	12. 反射検査（病的反射、クローヌス、自律神経反射）
5. 視診（背部・腰部、四肢）	13. 臨床症状（発熱、出血傾向、リンパ節腫脹など）
6. 打診、聴診（肺・心臓）	14. 臨床症状（関節痛、浮腫、肥満、やせ）
7. 聴診（腹部）、触診（皮膚・皮下組織、筋肉）	15. 検査法
8. 触診（骨・関節、胸部、腹部、リンパ節）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、テキストと配布資料を使って復習しておく。さらに、授業の最後に出された問題を復習しておく。この問題は次回の授業の初めに解答を解説する。なお、これらの準備学習には 90 分以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回、過去に実施された国家試験の問題を実践解答させる。問題解答の際、また定期試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

柔道整復師、救急救命士として必要な一般臨床医学の知識を理解する。さらに国家試験のレベルまで高める。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（30%）、定期試験（70%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト： 全国柔道整復学校協会監修，一般臨床医学 改訂第 3 版，医歯薬出版株式会社，2013 年

参考文献： 明治東洋医学学院編集委員会編，2024 第 22 回～第 31 回 徹底攻略！国家試験過去問題集 柔道整復師用，医学の日本社，2023 年

小関一英編，2023 年版救急救命士国家試験対策出題分野別国試験問題・解説集，晴れ書房，2022 年
適宜指定する教材

テキストは毎回の授業に必ず持参すること。また、参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

欠席回数が全講義回数の3分の1（6回）以上となった場合には受験資格を失う。

遅刻，欠席ならびに授業中の私語，許可の無い教室の出入り，授業に関係ない言動は慎むこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。医療機関における医師としての実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおりである。

内科学Ⅱ		講義	教授 加藤 政彦	
科目カテゴリ	柔道整復師コースの専門基礎科目 救急救命士コースの専門分野科目	科目ナンバリング		12321302 12351203

1. 授業のねらい・概要

診察の基本を学び、柔道整復師、救急救命士が臨床の現場で注意を払わなければならない症状・所見や各種検査、内科学的病態の概要を理解する。

2. 授業の進め方

テキストの範囲の内容を、適宜、スライドと配布資料を用いて授業する。授業の最後に最近の国家試験問題等を出題し解答を出席カードに記載して提出させる。テキストの内容に沿った講義形式を基本とするが、随時、新聞・雑誌の記事などから具体的な出来事を取り上げて診療の現場に即した説明も行う。

3. 授業計画

1. 呼吸器疾患（総論・各疾患）	9. 腎・尿路疾患①（総論・腎不全）
2. 循環器疾患（総論・各疾患）	10. 腎・尿路疾患②（糸球体疾患・間質の疾患など）
3. 消化器疾患①（総論・消化管疾患）	11. 神経疾患（総論）
4. 消化器疾患②（肝胆脾疾患・腹膜疾患）	12. 神経疾患（各疾患）
5. 代謝疾患（総論・糖尿病）	13. 感染症（総論）
6. 代謝疾患（脂質異常症・肥満症など）	14. 感染症（各疾患）
7. 内分泌疾患（総論・各疾患）	15. リウマチ・膠原病・アレルギー、環境要因による疾患
8. 血液・造血器疾患（総論・各疾患）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、テキストと配布資料を使って復習しておく。さらに、授業の最後に出された問題を復習しておく。この問題は次回の授業の初めに解答を解説する。なお、これらの準備学習には90分以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回、過去に実施された国家試験の問題を実践解答させる。問題解答の際、また定期試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

柔道整復師、救急救命士として必要な一般臨床医学の知識を理解する。さらに国家試験のレベルまで高める。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（30%）、定期試験（70%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト：全国柔道整復学校協会監修，一般臨床医学 改訂第3版，医歯薬出版株式会社，2013年

参考文献：明治東洋医学学院編集委員会編，2024 第22回～第31回 徹底攻略！国家試験過去問題集 柔道整復師用，医学の日本社，2023年

小関一英編，2023年版救急救命士国家試験対策出題分野別国試験問題・解説集，晴れ書房，2022年
適宜指定する教材

テキストは毎回の授業に必ず持参すること。また、参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

欠席回数が全講義回数の3分の1（6回）以上となった場合には受験資格を失う。

遅刻，欠席ならびに授業中の私語，許可の無い教室の出入り，授業に関係ない言動は慎むこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。医療機関における医師としての実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおりである。

スポーツ傷害と画像診断		講義	教授 川崎 一郎
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12351302

1. 授業のねらい・概要

骨折、脱臼や軟部組織損傷を評価するにあたり、その発生機序や臨床症状とともに、X 線画像や超音波画像、そして MRI 画像が重要な手掛かりとなる。本講義では、「代表的な運動器のスポーツ傷害を取り扱い、それらの傷害が X 線画像や超音波画像、そして MRI 画像にどのように描出されるのかを理解できるようにする」ことを目的とする。

2. 授業の進め方

パワーポイント、板書、ならびに配布資料を用いた講義形式となる。

3. 授業計画

1. X 線画像の基礎	9. 股関節のスポーツ傷害と画像評価
2. 超音波画像の基礎	10. 膝関節の解剖
3. MRI 画像の基礎	11. 膝関節のスポーツ傷害と画像評価
4. 肩関節の解剖	12. 足関節の解剖
5. 肩関節のスポーツ傷害と画像評価	13. 足関節のスポーツ傷害と画像評価
6. 肘・手関節の解剖	14. 脊椎の解剖
7. 肘・手関節のスポーツ傷害と画像評価	15. 脊椎のスポーツ傷害と画像評価
8. 股関節の解剖	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各関節の解剖をよく理解しておくこと。加えて、代表的なスポーツ傷害の概要を調べておくこと。なお、これらの準備学修には、2 時間程度が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答などを解説する。

6. 授業における学修の到達目標

X 線測定や超音波測定、そして MRI 測定に関する臨床的な基礎知識を習得する。加えて、代表的な運動器のスポーツ傷害についても理解できるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験（100％）で評価する。成績評価にあたっては、授業回数の 2/3 以上の出席を前提とする。

8. テキスト・参考文献

施術の適応と医用画像の理解 南江堂 （公社）全国柔道整復学校協会 細野昇・川口央修
その他の必要資料は授業中に適宜配布する。

9. 受講上の留意事項

授業に解剖学の教科書などを持参することが望ましい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツ傷害 I		講義	教授 川崎 一郎
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12361303

1. 授業のねらい・概要

医療現場ならびにスポーツ現場で遭遇することが多いであろう下肢の傷害は、治療を誤ると後遺症になり、選手はスポーツ復帰が遅れてしまいます。したがって、的確に傷害を評価し、治療することは重要である。本授業では、下肢のスポーツ傷害の特徴や発生機転、症状、治療法、合併症などを理論的に学び、臨床現場への応用につながる知識を身につけていくことを目指す。

2. 授業の進め方

主に Power Point を用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。必要に応じて DVD などのメディアを教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された教科書を補足的に用いる。

3. 授業計画

1. オリエンテーション 2. 股関節軟部損傷① 鼠径部痛症候群、弾発股（ばね股）、梨状筋症候群 3. 股関節軟部損傷② ペルテス病、大腿骨頭すべり症、単純性股関節炎 4. 股関節軟部損傷③ 変形性股関節症、大腿骨頭壊死症、股関節の拘縮 5. 大腿部の軟部組織損傷 大腿部打撲、大腿部の肉ばなれ、大腿部骨化性筋炎 6. 膝関節部の軟部組織損傷① 発育期の膝関節障害、半月板損傷 7. 膝関節部の軟部組織損傷② 靱帯損傷 8. 膝関節部の軟部組織損傷③ 腸脛靱帯炎、膝蓋大腿関節障害	9. 膝関節の軟部組織損傷④ 膝周囲の関節包、滑液包の異常、変形性膝関節症 10. 下腿部の軟部組織損傷① コンパートメント症候群、アキレス腱炎・アキレス腱周囲炎、アキレス腱断裂 11. 下腿部の軟部組織損傷② 腓骨筋腱脱臼、下腿部のスポーツ障害 12. 足部の軟部組織損傷① 足関節捻挫 13. 足部の軟部組織損傷② 足部の捻挫 14. 足部の軟部組織損傷③ 扁平足障害 15. 後足部の有痛性疾患 前足部の有痛性疾患
--	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、配布プリントやノートを使って復習しておく（1 時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

各項目の要点をまとめて記述できるようになる。また、本講義で得た知識を通じて実技を実践できるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（15%）小テスト（15%）定期試験の結果（70%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- ①柔道整復学・理論編改訂 7 版社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②毎授業で資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は認めない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

柔道整復演習Ⅱ		演習	教授 西川 彰
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12361306

1. 授業のねらい・概要

柔道整復師国家試験で出題される科目の中で出題率の高い「解剖学」の理解を深めることを目的とする。そのため、過去の国家試験問題の演習を通して出題傾向の高い項目や学習のポイントを理解すると同時に、配布するオリジナルプリント教材を用いてキーワードとなる重要語句の確認と暗記すべき項目の整理を行う。

2. 授業の進め方

関連する科目として「人体構造学Ⅰ・Ⅱ」「人体構造学実習」で学んだ学習内容から、特に国家試験での出題傾向の高い項目を取り上げて授業を実施する。また、国家試験問題の解説を記入した「国試問題レポート」を作成し提出課題とする。

3. 授業計画

1. ガイダンス 人体解剖学概説（細胞，組織，器官，発生）	8. 呼吸器
2. 運動器①（頭部・体幹）	9. 泌尿器・生殖器
3. 運動器②（上肢）	10. 内分泌器
4. 運動器③（下肢）	11. 神経系①（中枢神経）
5. 循環器	12. 神経系②（末梢神経）
6. 消化器①（消化管）	13. 感覚器
7. 消化器②（付属器官）	14. 体表解剖，映像解剖
	15. まとめ

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業時に配布する国家試験の過去問題に取り組んだ上で、毎回の授業に臨むこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポートについては添削，採点を行った上で返却する。また，定期試験については正答と問題の要点を希望者に配布する。

6. 授業における学修の到達目標

本授業では，柔道整復師国家試験の合格基準を満たす知識レベルまでの到達を目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（レポート）（約30％程度）並びに定期試験の結果（約70％程度）より総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

野村巖 監修，西川彰／小林直行 著，『解剖学ワークブック』，医歯薬出版，2014年
その他の参考資料は，必要に応じて授業中に紹介または配布する。

9. 受講上の留意事項

毎回の授業時にはテキスト並びに配布プリントを必ず持参すること。
講義回数の3分の1以上を欠席した場合は，定期試験の受験資格を失うこととする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は，人体解剖トレーニングセミナーにおける実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツリハビリテーションⅠ		実習	教授 川崎 一郎
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12371303

1. 授業のねらい・概要

スポーツリハビリテーションⅠでは、スポーツ傷害Ⅰで学んだ知識を実技で実践する。各傷害の評価法あるいは固定法、リハビリテーションなどの目的や意義を理解し実践することにより、座学で学んだ知識を深め、技術の習得を目指す。

2. 授業の進め方

グループ班を形成し、学生各々が術者や助手、患者などの役割となり、各外傷の評価法および治療法を実践し、授業を進行する。

3. 授業計画

1. 股関節軟部組織損傷の評価法 2. 股関節軟部組織損傷のリハビリテーション①（単径部痛症候群） 3. 股関節軟部組織損傷のリハビリテーション②（その他の股関節疾患） 4. 大腿部筋損傷の評価法と応急処置 5. 大腿部筋損傷のリハビリテーション①（ハムストリングスの肉はなれ） 6. 大腿部筋損傷のリハビリテーション②（大腿直筋の肉はなれおよび筋挫傷） 7. 膝関節靭帯損傷の評価法と応急処置 8. 膝関節靭帯損傷のリハビリテーション①（前十字靭帯損傷）	9. 膝関節靭帯損傷のリハビリテーション②（内側側副靭帯損傷） 10. 下腿部筋損傷およびスポーツ傷害の評価法と応急処置 11. 下腿部筋損傷およびスポーツ傷害のリハビリテーション 12. アキレス腱断裂の評価法・応急処置・固定法 13. アキレス腱断裂のリハビリテーション 14. 足関節捻挫の評価法・応急処置・固定法 15. 足関節捻挫のリハビリテーション
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各外傷の受傷機転や症状、治療法、合併症を毎授業で配布した資料を中心に学習しておくこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

各項目の要点をまとめて記述できるようになる。また、本講義で得た知識を通じて実技を実践できるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（30%）、定期試験の結果（70%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- ①柔道整復学・理論編改訂7版社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②必要に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

- ①私語および携帯電話の使用、飲食、帽子の着用は禁止とする。
- ②実習着（ポロシャツ）を着用すること。

- ③アクセサリー（ピアス，指輪，ネックレス）ははずすこと。
- ④事前に実技で必要とするものを連絡するので必ず持参すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

臨床実習Ⅰ		実習	教 授 川崎一朗 准教授 西川 彰 准教授 牛島詳力 講 師 伊藤 新 講 師 木下美聡
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12381301

1. 授業のねらい・概要

臨床実習Ⅰは、大学付属の臨床実習施設において、担当教員の指示の下、これまでに修得した知識を生かし、質の高い治療を提供するために必要な各疾患の評価法などについての過程を経験する。また、選手との接し方を学び、コミュニケーションの重要性や、医療人としての自覚・モチベーションを高めることを目的とする。

2. 授業の進め方

担当教員と行動を共にしながら参加観察し、術者の視点から患者の状態について考察する。事前にガイダンスを行い、臨床実習カルテの書き方や、医療機器の種類、効果等について説明する。また、その日に来院した患者の主訴や、受傷機転、治療方針、予後について意見交換を行い、レポート作成し理解を深める。

3. 授業計画

1. ガイダンス	16. 中間報告
2. 臨床実習①（服装、容姿、態度、マナー、話し方）	17. 臨床実習⑮（徒手筋力検査：肩部）
3. 臨床実習②（業務範囲と医療機関との連携、問診法）	18. 臨床実習⑯（徒手筋力検査：肘部・手部）
4. 臨床実習③（施術録の記入法）	19. 臨床実習⑰（徒手筋力検査：体幹部）
5. 臨床実習④（視診）	20. 臨床実習⑱（徒手筋力検査：股部）
6. 臨床実習⑤（触診解剖：肩関節、上腕部）	21. 臨床実習⑲（徒手筋力検査：膝部・足部）
7. 臨床実習⑥（触診解剖：肘関節部、手関節部）	22. 臨床実習⑳（物理療法機器の操作法：温熱療法）
8. 臨床実習⑦（触診解剖：頸部、胸部、腰部）	23. 臨床実習㉑（物理療法機器の操作法：局所浴療法）
9. 臨床実習⑧（触診解剖：股関節部、大腿部）	24. 臨床実習㉒（物理療法機器の操作法：電気療法）
10. 臨床実習⑨（触診解剖：膝関節部）	25. 臨床実習㉓（物理療法機器：適応疾患と禁忌）
11. 臨床実習⑩（触診解剖：下腿部、足関節、足部）	26. 臨床実習㉔（応急処置：RICE 処置）
12. 臨床実習⑪（関節可動域測定：肩関節）	27. 臨床実習㉕（応急処置：固定法 上肢）
13. 臨床実習⑫（関節可動域測定：肘関節・手関節）	28. 臨床実習㉖（応急処置：固定法 体幹）
14. 臨床実習⑬（関節可動域測定：体幹）	29. 臨床実習㉗（応急処置：固定法 下肢）
15. 臨床実習⑭（関節可動域測定：股関節）	30. まとめと復習

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前回の実習内容を確認し、レポートにまとめること。また、前回の実習で理解できない内容に関しては、次回の実習まで、文献を用いて調査すること（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポートは実習を終えた日から3日以内に提出すること。担当教員が添削し次回の実習日までに返却する。

6. 授業における学修の到達目標

担当教員の指導の下、一連の評価から治療に至る過程を把握し経験することで理解できるようになる（見学-模倣-実施）。

7. 成績評価の方法・基準

実習内容（50%）、実習記録・レポート等（50%）の臨床実習により、総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

必要に応じて授業前後に紹介または配布する。

9. 受講上の留意事項

- ①各自の課題を明確にした上で主体的に行う実習であるため、目的意識を持って取り組むこと。
- ②諸事情により臨床実習を欠席する場合は、事前に必ず担当教員に連絡すること。
- ③感染症を未然に予防のためにも、体調管理は徹底すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

臨床実習Ⅱ		実習	教 授 川崎一郎 准教授 西川 彰 准教授 牛島詳力 講 師 伊藤 新 講 師 木下美聡
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12381302

1. 授業のねらい・概要

臨床実習Ⅱは、大学付属の臨床実習施設において、担当教員の指示の下、これまでに修得した知識を生かし、質の高い治療を提供するために必要な各疾患に対する治療法について学ぶ。臨床実習Ⅰでは主に患者の評価法の実践とレポートにまとめて学んだが、臨床実習Ⅱでは、評価法から治療法までの過程を見学または経験する。さらに、各疾患の合併症や後遺症まで理解できるようにする。また、患者との接し方を学び、コミュニケーションの重要性や、医療人としての自覚・モチベーションを高めることを目的とする。

2. 授業の進め方

担当教員と行動を共にしながら参加観察し、術者の視点から選手の状態、治療方針について考察する。事前にガイダンスを行い、臨床実習カルテの書き方や、医療機器の種類、効果等について説明する。また、その日に来院した患者の主訴や、受傷機転、治療方針、予後について意見交換を行い、レポート作成する。臨床実習Ⅱでは、事例報告を設けており、代表的な疾患に対しての受傷機転、症状、評価法、治療法についてプレゼンテーションを行い、質疑応答し、理解を深める。

3. 授業計画

1. ガイダンス 2. 臨床実習①（腱反射検査：上肢） 3. 臨床実習②（腱反射検査：下肢） 4. 臨床実習③（形態測定：四肢長） 5. 臨床実習④（形態測定：周径） 6. 臨床実習⑤（徒手検査法：肩部） 7. 臨床実習⑥（徒手検査法：肘部，手部） 8. 臨床実習⑦（徒手検査法：体幹部） 9. 臨床実習⑧（徒手検査法：股部，下腿部，足部） 10. 臨床実習⑨（徒手検査法：膝関節部） 11. 臨床実習⑩（模擬患者で腱反射検査，形態測定のトレーニングを行う） 12. 臨床実習⑪（模擬患者で形態測定，徒手検査法上肢のトレーニングを行う） 13. 臨床実習⑫（模擬患者で徒手検査法体幹のトレーニングを行う） 14. 臨床実習⑬（模擬患者で徒手検査法膝関節部のトレーニングを行う） 15. 臨床実習⑭（模擬患者で徒手検査法股部，下腿部，足部のトレーニングを行う）	16. 中間報告 17. 臨床実習⑮（超音波診断装置の画像評価：肩部） 18. 臨床実習⑯（超音波診断装置の画像評価：肘部） 19. 臨床実習⑰（超音波診断装置の画像評価：手部） 20. 臨床実習⑱（超音波診断装置の画像評価：体幹） 21. 臨床実習⑲（超音波診断装置の画像評価：大腿部） 22. 臨床実習⑳（超音波診断装置の画像評価：膝部） 23. 臨床実習㉑（超音波診断装置の画像評価：下腿部） 24. 臨床実習㉒（超音波診断装置の画像評価：足部） 25. 臨床実習㉓（事例報告：これまでの臨床例である患者の受傷機転や病態についてプレゼンテーションを行う） 26. 臨床実習㉔（事例報告：これまでの臨床例である患者の評価法についてプレゼンテーションを行う） 27. 臨床実習㉕（事例報告：これまでの臨床例である患者の固定法についてプレゼンテーションを行う） 28. 臨床実習㉖（事例報告：これまでの臨床例である患者のリハビリテーションについてプレゼンテーションを行う） 29. 臨床実習㉗（事例報告：これまでの臨床例である患者で今後再受傷しないための予防法についてプレゼンテーションを行う） 30. まとめと復習
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前回の実習内容を確認し、レポートにまとめること。また、前回の実習で理解できない内容に関しては、次回の実習まで、文献を用いて調査すること（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポートは実習を終えた日から3日以内に提出すること。担当教員が添削し次回の実習日までに返却する。

6. 授業における学修の到達目標

担当教員の指導の下、一連の評価から治療に至る過程を把握し経験することで理解できるようになる（見学-模倣-実施）。

7. 成績評価の方法・基準

実習内容（50%）、実習記録・レポート等（50%）の臨床実習により、総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

必要に応じて授業前後に紹介または配布する。

9. 受講上の留意事項

- ①各自の課題を明確にした上で主体的に行う実習であるため、目的意識を持って取り組むこと。
- ②諸事情により臨床実習を欠席する場合は、事前に必ず担当教員に連絡すること。
- ③感染症を未然に予防のためにも、体調管理は徹底すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミ A		演習	准教授 黒沢 賢一	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130301	

1. テーマ

警察官、消防官、市町村職員などの公務員試験に合格するために必要な知識の分析・習得とそれぞれが受験する地域の特性とまちづくり研究。

2. ゼミのねらい・概要

警察官採用試験は都道府県単位で、消防官採用試験と市町村職員採用試験は市町村単位で行われる。本ゼミでは警察官、消防官、市町村職員をめざす学生を主な対象として、それぞれの試験に合格するために必要な知識を身につけさせ、同時にゼミ生一人ひとりがめざす試験が行われる都道府県、市町村にはどのような特色があり、またそこではどのようなまちづくり、地域づくりが行われているかを政治学、行政学、地方自治の専門的知識をもとに考察、分析していく。

3. ゼミ計画

1. ガイダンス（自己紹介、授業予定、注意事項）	9. 公務員試験分析 7（操作・手順）
2. 公務員試験分析 1（順序関係）	10. 公務員試験分析 8（図形の分割・構成）
3. 公務員試験分析 2（位置関係）	11. 公務員試験分析 9（軌跡と移動）
4. 公務員試験分析 3（対応関係）	12. 公務員試験分析 10（立体図形）
5. 公務員試験分析 4（推理）	13. 公務員試験分析 11（展開図）
6. 公務員試験分析 5（命題と論理・集合算）	14. まちづくり研究②（研究テーマの決定）
7. 公務員試験分析 6（真偽・暗号）	15. まとめ講義（前期の総括と後期予定）
8. まちづくり研究①（研究対象地域の決定と研究手法）	

※判断推理、空間把握のほかに社会科学分野の公務員試験に出題されるポイントも解説する。

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

警察官、消防官、市町村職員採用試験に合格するためには、毎日、勉強することが求められる。ゼミで紹介された知識や問題を復習し、その類題を解くためには最低でも毎回 2 時間は必要になる。このほか指定された教材を自力で解いていかなければならず、それぞれが選んだ地域のまちづくり研究のための時間も必要になる。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

確認テスト、課題ノート、提出課題の返却時に講評し、評価のポイントや改善点などを指摘する。

6. ゼミにおける学修の到達目標

警察官、消防官、市町村職員などの公務員試験の仕組みを理解し、それぞれの試験に合格するために必要な知識を身につけ、ゼミ生が合格をめざす地域の特性やまちづくりの特色がわかるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

授業内で実施する確認テスト(50%)と課題ノート・提出課題の内容(50%)によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- (1) 黒沢賢一著『Point Master 社会科学の論点』（三恵社） 毎回使用するので必ず持参すること。
- (2) 公務員試験受験のために必要になる教材は随時紹介する。
- (3) まちづくり研究については、ゼミ生それぞれの研究対象地域に合わせて個別に紹介する。

9. 受講上の留意事項

警察官、消防官、市町村職員などをめざす学生を歓迎するが、ここで学ぶ知識は民間企業への就職を考えている学生

にも役立つものである。

ゼミ中の私語やスマートフォン、イヤホン等の使用、他のゼミ生に迷惑となる教室内の秩序を乱す行為については、厳しい態度で臨むので十分注意すること。

ゼミ生には何よりも自主的に学ぶ姿勢が求められる。また公務員試験合格を確実にしたいという方には、「社会科学の基礎A」「公務員試験対策ゼミA」も受講することをおすすめする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本ゼミは、地方議会における実務経験(市議会議員)を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミ A		演習	教授 竹内 成生
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130301

1. テーマ

本ゼミでは心理指標と生理指標を用い、スポーツ・健康の生理心理学的評価をおこなう。

2. ゼミのねらい・概要

我々は日常行動の多くの場面で生理－心理的な制約や影響を受けている。例えば、過緊張場面では視野が狭まり、複雑かつ咄嗟な行動が困難になる。このような生理－心理的な関係性から最適パフォーマンスを発揮するための方法を探ることが可能である。更には競技スポーツだけでなく、健康スポーツに代表される健康行動の解釈や、行動傾向の改善においても生理心理学的な視点は有用である。本ゼミでは生理心理学的研究手法を用い、スポーツや健康に関する理解を深めることをねらいとする。また、問題提起－検査－実験－考察という一連の作業を通じて論理的思考と表現能力、客観的データの見方を養うものとする。

3. ゼミ計画

1. スポーツ・健康と生理心理学の概説	9. 心理分野の研究法実践1（目的を設定する）
2. 心理分野での研究方法の説明	10. 心理分野の研究法実践2（資料収集1：論文検索）
3. 心理検査の種類と説明	11. 心理分野の研究法実践3（資料収集1：AI活用）
4. 心理検査の実施	12. 心理分野の研究法実践4（問題点を整理する）
5. 心理検査の集計	13. 心理分野の研究法実践5（仮説を立てる）
6. 心理検査の解析と評価	14. 心理分野の研究法実践6（研究計画を知る）
7. 生理データの測定体験1（定位反応）	15. 前期のまとめ
8. 生理データの測定体験2（嘘発見・心的動揺）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

自身のテーマを早期に決定できるよう、興味に関連した文献を収集・熟読し、ポイントを整理しておくこと。また自身研究に関係する周辺知識の理解や実験・調査手法、とデータ処理の習得等を含め準備学習時間として2時間程度を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

生理データ取得・データ分析時に適宜、コメント・指導する。また、論文紹介やディスカッションにおいて各自に講評をフィードバックする。

6. ゼミにおける学修の到達目標

生理心理学的研究手法によるスポーツや健康に関する理解を深め、卒業研究に必要な論理的思考と表現能力、客観的なデータの見方を養うことを目標とする。なお、年間予定している主なテーマと到達目標は以下のとおりである。

- ・ 心理学分野の専門書、実験・調査論文などを用いて心理学とその検討方法の理解を深める。
- ・ 生理・心理学的検討において用いられる指標の紹介とデータの見方の基本を学習する。
- ・ 模擬データを実際に取得し、検査・実験方法とデータ処理を習得と解析手法の理解を深める。
- ・ 興味テーマに関する議論からテーマの絞り込みをおこなう。

各自、決定したテーマについて予備実験・検査を実施する。

7. 成績評価の方法・基準

発表内容（30%）、発表資料（30%）、受講態度・積極性（40%）を基準として総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキストは特に指定しない。しかし、心理学の基本ならびに周辺分野を広く網羅しており、事典・参考書として最適であることから、参考図書として以下の書籍を推奨する。

※鹿取 廣人・杉本 敏夫・鳥居 修晃（編） 心理学（第5版補訂版） 東京大学出版会（ISBN-13: 978-4130121170）

※山崎勝男（監修） スポーツ精神生理学 西村書店 （ISBN-13: 978-4890134298）

9. 受講上の留意事項

スポーツ・健康に関する生理心理学的評価方法を学び、スポーツ・健康活動に関するテーマを学生自ら率先して見出すことを期待する。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。障害を対象とした研究機関での実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミ A		演習	教授 田中 秀臣	
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナコースの必修科目	科目ナンバリング	11130301	

1. テーマ

文化（アイドル、マンガ、アニメ、音楽、映画など）やスポーツに関係するさまざまな話題を、経済学を利用して学んでいく。

2. ゼミのねらい・概要

専門ゼミの目的は、将来の就職や進学に役立つ世界を見る眼を養うことにある。ただそんなに難しいことをやることはしない。学生の皆さんに理解がしやすい文化的な話題（アイドル、マンガ、アニメ、音楽、映画、ファッション、食事）やまた野球、サッカー、駅伝、陸上、バレー、バスケットなどのスポーツに関する話題を簡単な経済学を通じて理解していくことがゼミのねらいである。経済学の基礎知識は特に必要ない。気楽な気持ちで毎回のゼミに出てほしい。学生側の希望があれば就職指導にも力をいれたい。

3. ゼミ計画

1. ゼミのすすめかた、目標	9. 大学スポーツの経済学入門
2. レジャーと文化とスポーツの経済学	10. プロスポーツの経済学
3. アイドルの経済学	11. オリンピックの経済効果
4. マンガの経済学	12. 就職問題への取り組み
5. アニメの経済学	13. K-POP と日本の男性アイドルの経済学
6. 世界と日本の音楽とクールジャパン戦略	14. ファッションとモードの経済学
7. グルメの経済学	15. 世界の貧困と文化
8. グルメの経済学応用	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

それぞれが自分の生活に合った準備をすればよく具体的な時間は特に指定しない。あえて目安をいえば、30分以内で構わない。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

第5回までに学生と個別に面談するなどの機会をもうけて直接に指導する。毎回、文化やスポーツ、時事問題への理解の度合いを確認し、学生に直接に指導する。講義時間中に学生からの感想を手短かに確認し、それを次の講義などに活用していく。

6. ゼミにおける学修の到達目標

卒業論文のための準備期間という意識をもち基礎的な項目の、一通りの理解と習得ができていること。

7. 成績評価の方法・基準

ゼミに対する取り組み（80％）を主軸に、たまに講義の感想などをきくのでそれも参照する（20％）

8. テキスト・参考文献

以下のテキストを利用する予定だが特に買わなくてもいい。

田中秀臣『AKB48の経済学』朝日新聞出版社

田中秀臣『日本経済復活が引き起こすAKB48の終焉』（主婦の友社）

田中秀臣『ご当地アイドルの経済学』（イーストプレス）

田中秀臣『偏差値40から良い会社に入る方法』東洋経済新報社

9. 受講上の留意事項

毎回の授業でわからない点はぜひ積極的に指導教官に伝えてほしい。またゼミの内容には直接に関係はしないが、個別の面談などやゼミの時間中に、各自の進路やまた全体的な就職・進路状況などについてのガイダンスやまた情報の提供を行う予定である。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミ A		演習	教 授 吉田 一康	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130301	

1. テーマ

国際取引法の基本事項を理解することをテーマとします。そのために、法律の基本から学び、また国際取引法とスポーツの関係に着目して、スポーツ仲裁や移籍規定などのスポーツ法についても説明し、国際的な視野を身に着けることを講義の目標とします。

2. ゼミのねらい・概要

現在、デパートやスーパーで買い物をするときに、商品の原産地や製造地を意識して見てみると分かると思いますが、今や「made in Japan」の商品の方が少ないかもしれません。多くの商品が、国際取引を通じて外国から輸入されたものです。「国際取引法」は、そのような国際取引に関する法律の総称です。

その国際取引法の基本事項を理解することをゼミの目標とします。また、海外旅行などに関する法律や、国際取引法とスポーツの関係に着目して、プロスポーツ選手などの海外チームへの移籍に関する規定やスポーツ仲裁などのスポーツ法についても説明します。就職対策として、面接対策や国際事情・常識問題などを行います。

3. ゼミ計画

1. 講義紹介・自己紹介など	9. 小試験
2. 法律とは（定義、強制力）	10. 旅行業法（海外旅行）
3. 小試験	11. 海外観光資源
4. 商法・会社法（会社の種類）	12. グループ学習（就職対策）
5. 労働法（使用者と労働者）	13. スポーツ法（定義、ドーピングなど）
6. グループ学習（就職対策）	14. 移籍規定（プロ野球、F I F A）
7. 国際取引法とは（定義、公法と私法）	15. 前期まとめ・小試験
8. 国際私法（準拠法とは）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各講義の内容に関係する参考文献の該当箇所を読んでくること（1時間程度）。講義後、授業内容や小試験の内容を復習して、解答を理解しておくこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

①各講義で行う練習問題の後に、解答及び説明を行います。 ②小試験後、解答及び説明を行います。

6. ゼミにおける学修の到達目標

①国際取引法の基本を理解して国際感覚を磨くこと。 ②スポーツ法の基本を理解すること。

7. 成績評価の方法・基準

平常点 70～80%（積極性、小試験など）＋ 授業への取り組み姿勢（授業への貢献度、発表など）20～30%

A 80 点以上 B 70～79 点 C 60～69 点 D（不可）60 点未満

8. テキスト・参考文献

毎回、必要資料を配布し、テキストは使用しませんので、特に購入する必要はありません。自習のための参考文献として下記のものを挙げます。

①佐野寛『国際取引法』（第4版）有斐閣 2014 年（2750 円）

②浦川道太郎他、日本スポーツ法学会監修『標準テキスト スポーツ法学』（第3版）エイデル研究所 2020 年（2750 円）

9. 受講上の留意事項

私語・態度不良など他の受講者の迷惑となる行為や、遅刻・中途退席などの目立つ受講者については、評価を減点又は受講を制限します。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、不動産会社等における法務の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

成長期スポーツ傷害		講義	講師 佐藤 康宏
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12351301

1. 授業のねらい・概要

発育発達期の子ども達のスポーツに関与する指導者は、「成長期」について十分な注意が必要であると考え。なぜなら、成長のスピードや時期には個人差があるということを十分に理解しなければならない。

本講義では、発育発達期の特徴を把握、成長途上の著しい身体変化に起因するスポーツ傷害の原因や、症状を正しく評価し、スポーツ指導者として留意すべき点、対処法について理解していく。

2. 授業の進め方

テキストの内容に沿った講義形式を基本とするが随時、過去の傷害症例や論文の先行研究から具体的例を取り上げて、パワーポイントで説明を行う。また、理解の定着を図るため、講義の途中でレポートを作成する。

3. 授業計画

1. ガイダンス テキストの内容と講義形式について	8. 成長期スポーツ傷害—IV 股関節部に発生する成長期スポーツ傷害
2. 「スポーツとは」「発育と成長とは」	9. 成長期スポーツ傷害—V 膝部に発生する成長期スポーツ傷害
3. 発育発達期の身体的特徴—I 身長・骨格・体重の発育	10. 成長期スポーツ傷害—VI 下腿部に発生する成長期スポーツ傷害
4. 発育発達期の身体的特徴—II スキヤモンの発育曲線とは 神経系の発達 神経・筋コントロール能力の発達	11. 成長期スポーツ傷害—VII 足部に発生する成長期スポーツ傷害
5. 成長期スポーツ傷害—I 肩部に発生する成長期スポーツ傷害	12. 5, 6 歳から 8 歳ごろにかけて (プレ・ゴールデンエイジ)
6. 成長期スポーツ傷害—II 肘部に発生する成長期スポーツ傷害	13. 9 歳から 12 歳ごろにかけて (ゴールデンエイジ)
7. 成長期スポーツ傷害—III 腰部に発生する成長期スポーツ傷害	14. 中学校期(13 歳ごろ)以降におけるトレーニング 性差に応じたトレーニング
	15. まとめ

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前回の授業内容を復習しておく。復習には前回は自分が作成したレポートを参考にする。なお、これらの準備学習には、1 時間以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポート提出の際、重要箇所について解説を行う。訂正箇所があった場合は後日、改めて提出日を設定する。

6. 授業における学修の到達目標

発育発達期の特徴を把握、成長途上の著しい身体変化に起因するスポーツ傷害の原因や症状を正しく評価し、スポーツ指導者として留意すべき点、予防法、対処法について理解する。

また、講義の一部によって、柔道整復師国家試験に出題させる範囲（例として骨端症や四肢軟部組織損傷）も含まれるので、その部分に関しても十分に理解する。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（40%）およびレポート審査（60%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト，参考文献，資料等は必要に応じて配布する。

9. 受講上の留意事項

受講の要件としては，各スポーツの競技特性について興味や関心があることが望ましい。成長期に限らずプロスポーツなどのケガや事故について，ニュースやインターネットなどで知ること重要である。

また，これまでの自分の成長過程で起こったケガについて，思い返すことも重要である。講義ではなるべく理解できるように説明するが，疑問や不明な点については，遠慮なく質問してもらいたい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は柔道整復師免許を有し，整形外科医院，接骨院に勤務した実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツリハビリテーションⅡ		実習	教授 川崎 一郎
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12371304

1. 授業のねらい・概要

スポーツリハビリテーションⅡでは、スポーツ傷害Ⅱで学んだ知識を実技で実践する。各傷害の評価法あるいは固定法、リハビリテーションなどの目的や意義を理解し実践することにより、座学で学んだ知識を深め、技術の習得を目指す。

2. 授業の進め方

グループ班を形成し、学生各々が術者や助手、患者などの役割となり、各外傷の評価法および治療法を実践し、授業を進行する。

3. 授業計画

1. ガイダンス 2. 肩関節周囲の解剖と触診 3. 腱板断裂・上腕二頭筋腱損傷の評価法と治療法 4. スポーツ障害①（ベネット損傷，SLAP 損傷，インピンジメント症候群）の評価法，治療法 5. スポーツ障害②（リトルリーガー肩），その他の疾患（動揺性肩関節，肩関節周囲炎）の評価法と治療法 6. 肘関節周囲の解剖と触診 7. 肘関節内側側副靱帯損傷の評価法と治療法，肘関節後外側回旋不安定症の評価法 8. 野球肘の評価法	9. 野球肘の治療法 10. 上腕骨外側上顆炎・内側上顆炎の評価法と治療法 11. 手関節周囲の解剖と触診 12. TFCC 損傷，手根不安定症，ド・ケルバン病の評価法と治療法 13. ステナール損傷の評価法，その他の靱帯損傷とロックリングフィンガーの評価法と治療法 14. 絞扼性神経障害（肩甲部，上肢部）の評価法と治療法 15. まとめ
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を，配布プリントやノートを使って復習しておく（1 時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際，解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

各項目の要点をまとめて記述できるようになる。また，本講義で得た知識を通じて実技を実践できるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

定期試験の結果（100％）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- ①柔道整復学・理論編改訂 7 版社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②必要に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

- ①私語および携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。
- ②実習着（ポロシャツ）を着用すること。
- ③アクセサリ（ピアス，指輪，ネックレス）ははずすこと。
- ④事前に実技で必要とするものを連絡するので必ず持参すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

体力測定法		講義	教授 小笠原 正志
科目カテゴリー	スポーツトレーナーコースの選択必修科目	科目ナンバリング	11301202

1. 授業のねらい・概要

体力は、健康の維持増進やアクティブな活動をするために必要な身体的および精神的能力である。一般的な体力の概念は、身体的要素の行動体力の機能面がピックアップされる。運動やトレーニングを処方する前に、そのクライアントの状態や能力といった身体的機能面を正確に知る必要がある。適切な運動プログラムの提供のために、複数の体力要素についての測定を行い、得られた測定値を評価基準と比較して適切に評価する必要がある。クライアントとの面談法や健康評価法、体力評価の選択と管理、初回面談の方法、スクリーニング、体力テストの実際、危険因子の予測・評価法等の知識を学ぶ。

2. 授業の進め方

主に、Power Point を用いたスライドおよび板書による講義、および演習形式で授業を行う。必要に応じて動画を教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された資料を補足的に用いる。また、演習形式の講義では実際に様々な体力テストを実施し、得られたデータを解析する。

授業後に重要事項を確認するための小テスト・レポート課題を行うこともある。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. 有酸素性能力の測定法と評価①（最大酸素摂取量・無酸素性作業閾値）
2. 人生 100 年時代における体力の意義	10. 有酸素性能力の測定法と評価②（最大酸素摂取量の推定法）
3. 子どもの発育発達に関する体力測定と評価	11. 最大筋力の測定法と評価
4. 新体力テストの測定と評価①（項目と方法の確認）	12. 無酸素性パワーの測定法と評価
5. 新体力テストの測定と評価②（成年年代・高齢期年代）	13. アジリティの測定法と評価
6. アスリートにおける体力測定と評価	14. 体力評価をどう活かす タレント発掘事業
7. 身体組成の測定法と評価①（体脂肪率の測定方法）	15. まとめ
8. 身体組成の測定法と評価②（BMI・ウエスト囲・周径囲）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- ・予習：次週授業内容に関する情報を入手し、予習しておくこと（30 分程度）。
- ・毎回授業後半に復習を兼ねて小テストやレポート課題を行う。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

演習講義でのレポート等の解答例を提示する。

6. 授業における学修の到達目標

トレーニングに関する基礎知識を獲得し、自身の競技生活に実践することができる。様々な対象に対して、体力テストの実施と、体力テストの結果から評価やフィードバックが出来るようにする。

7. 成績評価の方法・基準

講義への参加意欲ならびに各回の課題への取り組み状況（50%）、および期末レポート（50%）により総合的に評価する。ただし講義回数の 3 分の 1 以上欠席した者は評価の対象としない。

8. テキスト・参考文献

講義資料は適宜配布する。

【参考図書】

小笠原正志：健康生活とスポーツ，SIS，2024

ストレングス&コンディショニング第4版，ブックハウス HD

ストレングス&コンディショニング I 理論編，大修館書店

ストレングス&コンディショニング II エクササイズ編，大修館書店

9. 受講上の留意事項

私語および携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

NSCA の CSCS 資格取得希望者を優先とする。トレーニングの基礎知識を有することが望ましい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は，企業における実務経験（地域住民の運動指導）を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツ傷害Ⅱ		講義	教授 川崎 一朗
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12361304

1. 授業のねらい・概要

柔道整復師にとって医療現場、スポーツ現場に従事する際には、実際に骨折・脱臼のみならず多くの軟部組織損傷を扱うこととなる。このスポーツ傷害Ⅱでは、これまでに学習した上肢部の骨折・脱臼に加えて、主に医療現場およびスポーツ現場で発生が多い軟部組織損傷を学んでいく。具体的に、上肢部軟部組織損傷に関する病態・症状、鑑別・評価方法、応急処置、保存療法（または観血的療法）、およびリハビリテーションに関して知識を習得し、理論的に学んでいく。また、本講義では各部位の臨床と機能・解剖を結びつけて理解することにより、各外傷・障害を体系的に理解するとともに、スポーツリハビリテーションⅡと組み合わせていくことで、臨床現場およびスポーツ現場への応用につながる知識を総合的に身につけていくことを目指す。

2. 授業の進め方

主に Power Point を用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。必要に応じて DVD などのメディアを教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された教科書を補足的に用いる。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. 上腕骨外側上顆炎・内側上顆炎、パンナー病、変形性関節症
2. 肩関節周囲の機能・解剖	10. 前腕コンパートメント症候群， intersection syndrome,
3. 腱板断裂・上腕二頭筋腱損傷	11. 手関節周囲の機能・解剖
4. スポーツ障害①（ベネット損傷，SLAP 損傷，インピンジメント症候群）	12. 手関節捻挫，TFCC 損傷，手根不安定症，ド・ケルバン病，キーンベック病
5. スポーツ障害②（リトルリーガー肩），その他の疾患（動揺性肩関節，肩関節周囲炎）	13. マーデルング変形，ステナー損傷，その他の靭帯損傷，ロッキングフィンガー，ばね指，手指の変形
6. 肘関節周囲の機能・解剖	14. 絞扼性神経障害（肩甲部，上肢部）
7. 肘関節内側側副靭帯損傷・肘関節後外側回旋不安定症	15. まとめ
8. 野球肘	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、配布プリントやノートを使って復習しておく（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

各項目の要点をまとめて記述できるようになる。また、本講義で得た知識を通じて実技を実践できるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取り組み姿勢（15%）小テスト（15%）定期試験の結果（70%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- ①柔道整復学・理論編改訂7版社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
- ②毎授業で資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は認めない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

卒業研究		演習	准教授 西川 彰 講師 伊藤 新
科目カテゴリー	柔道整復師コースの必修科目	科目ナンバリング	12130401

1. テーマ

柔道整復学の領域における評価法や治療法の検討

2. ゼミのねらい・概要

最終学年での履修となるこの授業は、医療専門職を志す者にとって総仕上げとなるものである。これまでに学んできた「人体に関する構造や機能」「疾病や外傷の特徴とその治療法」「スポーツにおける障害とその予防」「スポーツ選手に対するトレーニング方法」などから自身で研究テーマを決定し、関係する論文の探索、被検者実験の実施、実験結果の検討等を順に行い、研究発表会を経た上で、最終的に卒業研究論文を作成する。さらに、それに関連する分野として、柔道整復学および内科学（一般臨床医学）、病理学、リハビリテーション医学の理解を深めることを目的に国試対策の指導も実施する。また、担当する教員はクラス担任としてゼミを運営し、必要に応じて学生への個別面談も行う。

3. ゼミ計画

〈前期〉	〈後期〉
1. ガイダンス 履修指導 2. 研究指導①（研究テーマの決定と先行研究の探索） 3. 研究指導②（研究計画書の作成） 4. 国試対策指導①（内科学：診察各論） 5. 国試対策指導②（柔道整復学：下肢の骨折） 6. 研究指導③（実験対象の選定と依頼） 7. 研究指導④（実験スケジュールの作成） 8. 国試対策指導③（内科学：主要な疾患） 9. 国試対策指導④（柔道整復学：下肢の脱臼） 10. 研究指導⑤（予備実験の実施） 11. 研究指導⑥（実験結果の検討） 12. 国試対策指導⑤（病理学：概論） 13. 国試対策指導⑥（柔道整復学：頭部・体幹の軟部組織損傷） 14. 研究指導⑦（中間発表会の準備） 15. 中間発表会	1. ガイダンス 履修指導 2. 研究指導⑧（第1回本実験の実施） 3. 研究指導⑨（第2回本実験の実施） 4. 国試対策指導⑦（病理学：運動器の病理） 5. 国試対策指導⑧（柔道整復学：上肢の軟部組織損傷） 6. 研究指導⑩（実験結果の検討） 7. 研究指導⑪（論文作成の手順） 8. 国試対策指導⑨（リハ医学：リハビリテーションの基礎） 9. 国試対策指導⑩（柔道整復学：下肢の軟部組織損傷） 10. 研究指導⑫（図表の作成） 11. 研究指導⑬（本文の作成） 12. 国試対策指導⑪（リハ医学：リハビリテーションの実際） 13. 国試対策指導⑫（柔道整復学：まとめ） 14. 研究指導⑭（論文の仕上げ） 15. 最終発表会

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

研究指導時には「研究レポート」を事前に作成して提出すること。また、国試対策指導時にはテキストの指定範囲の予習を行った上で授業に臨むこと（各1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポートについては添削、採点を行った上で返却する。また、定期試験については正答と問題の要点を希望者に配布する。

6. ゼミにおける学修の到達目標

本授業では、研究テーマに基づいて行った研究結果に考察を加えて論文にまとめると同時に、柔道整復学、内科学、病理学、リハビリテーション医学について柔道整復師国家試験の合格基準を満たす知識レベルまでの到達を目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

定期試験の結果（約 50%程度）、卒業研究成果物の内容（約 50%程度）の 2 項目より総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

小林直行 監修, 西川彰 ほか著,『絶対出る！柔道整復師国家試験重要問題 柔道整復学 上肢・体幹編』, 医歯薬出版, 2018 年

小林直行 監修, 伊藤新 ほか著,『絶対出る！柔道整復師国家試験重要問題 柔道整復学 下肢・総論編』, 医歯薬出版, 2018 年

（公社）全国柔道整復学校協会 監修,『一般臨床医学 改訂第 3 版』, 医歯薬出版, 2013 年

（公社）全国柔道整復学校協会 監修,『病理学概論 改訂第 3 版』, 医歯薬出版, 2012 年

（公社）全国柔道整復学校協会 監修,『リハビリテーション医学 改訂第 4 版』, 南江堂, 2019 年

その他の参考資料は、必要に応じて授業中に紹介または配布する。

9. 受講上の留意事項

毎回の授業時にはテキストおよび配布資料を必ず持参すること。

講義回数の 3 分の 1 以上を欠席した場合は、定期試験の受験資格および卒業研究論文の提出資格を失うこととする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本ゼミは、接骨院での臨床経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミ A		演習	講師 菅谷 美沙都
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130301

1. テーマ

現代社会におけるスポーツの文化的な価値を考える：スポーツマネジメント・スポーツ社会学的アプローチ
 キーワード：学校運動部活動，地域スポーツ，プロスポーツ，スポーツ施設，スポーツ政策

2. ゼミのねらい・概要

スポーツは現代社会において極めて重要な社会現象です。オリンピック，サッカーワールドカップ等から学校運動部活動まで，多くの人々がスポーツとの関わり（する・見る・支える）を持つようになりました。その関わりは，果たして人々の生活を豊かにするものなのでしょうか。多くの学生の皆さんは部活動に取り組んでいる（きた）と思いますが，部活動は誰のため，何のために実践しているのでしょうか。本ゼミでは，皆さんに身近な問題を取り上げ，現代社会におけるスポーツの社会文化的な価値についてスポーツ経営学・社会学的視点で分析・考察できるようになることを目指します。

専門ゼミ A では，スポーツ社会学の視点からスポーツの現代的課題に切り込んだ書籍を輪読し，スポーツを多様な視点から捉え，自ら問題提起ができる思考力を身につけます。

3. ゼミ計画

1. オリエンテーション，顔合わせ	9. テキスト輪読，発表，意見交換 2-①（第1章）
2. ゼミ生全員によるフリーディスカッション	10. テキスト輪読，発表，意見交換 2-②（第2章）
3. テキスト輪読，発表，意見交換 1-①（部活の「グレーゾーン」を見える化する）	11. テキスト輪読，発表，意見交換 2-③（第3章）
4. テキスト輪読，発表，意見交換 1-②（自主的だから過熱する）	12. テキスト輪読，発表，意見交換 2-④（第4章）
5. テキスト輪読，発表，意見交換 1-③（自主的なのに強制される）	13. テキスト輪読，発表，意見交換 2-⑤（第5章）
6. テキスト輪読，発表，意見交換 1-④（強いられる「全員顧問」の苦しみ）	14. テキスト輪読，発表，意見交換 2-⑥（第6章）
7. テキスト輪読，発表，意見交換 1-⑤（教員の働き方改革）	15. 前期のまとめ
8. テキスト輪読，発表，意見交換 1-⑥（過剰な練習、事故、暴力）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

テキストの該当箇所を熟読してゼミに臨むこと。発表時は，レジメの作成及び発表の構成，企画等を行うこと。これらの自主学修には2時間以上が必要です。

スポーツニュースやスポーツに関する諸問題に興味を持ち，自らの意見や見解を考えること。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

ゼミでの口頭発表の際，個別に講評（レジメ作成のポイントや改善点等）をコメントします。

6. ゼミにおける学修の到達目標

本ゼミでは，現代におけるスポーツ現象やスポーツに関する社会的問題に対して，スポーツ経営学及びスポーツ社会学の視点から理解し，自ら分析できるようになることを目的とします。

7. 成績評価の方法・基準

ゼミでの積極的な発言（40%）、課題への取り組み方（30%）、学習意欲（30%）等を総合的に評価します。

8. テキスト・参考文献

テキスト：1. 内田良「ブラック部活動」 東洋館出版社，2017 年
2. 島沢優子「スポーツ毒親」 文藝春秋，2022 年

9. 受講上の留意事項

ゼミはゼミ生の皆さんでつくるものです。他者の意見に耳を傾け、皆が気軽に意見を言い合える環境をつくっていきましょう。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当します。本ゼミは競技スポーツ組織における実務経験を活かして指導します。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミB		演習	講師 菅谷 美沙都
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130302

1. テーマ

現代社会におけるスポーツの文化的な価値を考える：スポーツマネジメント・スポーツ社会学的アプローチ
 キーワード：学校運動部活動，地域スポーツ，プロスポーツ，スポーツ施設，スポーツ政策

2. ゼミのねらい・概要

スポーツは現代社会において極めて重要な社会現象です。オリンピック，サッカーワールドカップ等から学校運動部活動まで，多くの人々がスポーツとの関わり（する・見る・支える）を持つようになりました。その関わりは，果たして人々の生活を豊かにするものなのでしょうか。多くの学生の皆さんは部活動に取り組んでいる（きた）と思いますが，部活動は誰のため，何のために実践しているのでしょうか。本ゼミでは，皆さんに身近な問題を取り上げ，現代社会におけるスポーツの社会文化的な価値についてスポーツ経営学・社会学的視点で分析・考察できるようになることを目指します。

専門ゼミBでは，各自卒業論文のテーマ設定を視野に入れ，スポーツ経営学の各実践領域における課題やトピックを議論します。また，「スポーツで社会課題を解決するビジネスモデル」をテーマに，グループでビジネスモデルを考案し，ゼミ内コンペを行います。さらに，量的調査の技法を学び，卒業研究での調査実施に向けた準備を進めていきます。

3. ゼミ計画

1. オリエンテーション，顔合わせ	9. プレゼンテーション②（4グループ，総評）
2. ゼミ生全員によるフリーディスカッション	10. 卒業研究のテーマの検討（資料収集）
3. 問題提起・ディスカッション（国際紛争，貧困，経済格差…社会課題とは）	11. 先行研究の分析，研究手法
4. 問題提起・ディスカッション（社会課題解決のためにスポーツで何ができる？）	12. アンケート調査の手法①（質問紙の構成，尺度項目）
5. スポーツで社会課題を解決するビジネスモデルの考案①（ミッション，市場分析，ターゲティング）	13. アンケート調査の手法②（データの入力方法）
6. スポーツで社会課題を解決するビジネスモデルの考案②（ビジネスモデルの検討）	14. アンケート調査の手法③（データの解析，まとめ方）
7. スポーツで社会課題を解決するビジネスモデルの考案③（社会還元）	15. まとめ
8. プレゼンテーション①（3グループ）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

卒業論文のテーマを検討するために，様々な文献や先行研究を調べることに。これらの自主学修には2時間以上が必要です。

スポーツニュースやスポーツに関する諸問題に興味を持ち，自らの意見や見解を考えること。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

ゼミでのプレゼンの際，個別に講評（発表内容，発表の仕方等）をコメントします。

6. ゼミにおける学修の到達目標

本ゼミでは，現代におけるスポーツ現象やスポーツに関する社会的問題に対して，スポーツ経営学及びスポーツ社会学の視点から理解し，自ら分析できるようになることを目的とします。

7. 成績評価の方法・基準

ゼミでの積極的な発言（40%）、課題への取り組み方（30%）、学習意欲（30%）等を総合的に評価します。

8. テキスト・参考文献

教科書は特に指定しません。適宜、資料・プリントを配布します。

9. 受講上の留意事項

ゼミはゼミ生の皆さんでつくるものです。他者の意見に耳を傾け、皆が気軽に意見を言い合える環境をつくっていきましょう。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当します。本ゼミは競技スポーツ組織における実務経験を活かして指導します。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミ A		演習	教授 大森 肇	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130301	

1. テーマ

身体運動に伴う応答を生理・生化学的に研究し、人々の健康増進やスポーツパフォーマンス向上に貢献する。

2. ゼミのねらい・概要

身体運動や体育・スポーツが我々人間にもたらす恩恵は図り知れない。その影響は末梢の諸器官に留まらず、中枢機能や心理的側面にも及ぶ。しかしながら、運動はただ闇雲に行えば良いというものではない。健康増進やスポーツパフォーマンス、子どもの教育などの目的に応じて、運動の種類、強度、持続時間、頻度、期間などの条件を適切に設定する必要がある。また、身体運動の科学における新たな創造に挑戦することは、社会への大きな貢献に繋がるものと考えている。本専門ゼミのねらいは、基礎知識の修得や実験実習を通じて、4年次「卒業研究」における基盤作りをすることにある。

3. ゼミ計画

1. 前期ガイダンス	9. 基礎知識の修得 8:運動時のホルモン分泌
2. 基礎知識の修得 1:運動生理学・運動生化学とは	10. 基礎知識の修得 9:運動と酸化ストレス
3. 基礎知識の修得 2:骨格筋の構造と機能	11. 運動実験実習 1:自転車駆動時の血糖変動
4. 基礎知識の修得 3:神経系による運動の調節	12. 運動実験実習 2:スプリント走時の血中乳酸変動
5. 基礎知識の修得 4:筋力と筋パワー	13. 運動実験実習 3:伸張性レジスタンス運動の負荷
6. 基礎知識の修得 5:筋の肥大と萎縮	14. 運動実験実習 4:遅発性筋痛・筋損傷の評価
7. 基礎知識の修得 6:栄養素の消化・吸収と代謝	15. 前期のまとめ
8. 基礎知識の修得 7:運動時の代謝	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

「基礎知識の修得」や「運動実験実習」はゼミ生における問題意識を喚起をする契機になる。改めて周りを見回すと、子どもの健全な成長、学生や社会人のストレス緩和、中高年の生活習慣病の克服、競技パフォーマンスの向上、世代を越えたスポーツ文化の醸成、サクセスフルエイジングなど、社会には解決すべき身体運動科学的な課題が溢れている。ゼミ生には各自の研究課題の発見に向けて、積極的な姿勢で臨んで欲しい。各回の予習・復習に2〜3時間程度の学修が必要になる。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

授業中のプレゼンテーション、ショートレポート、ディスカッションに対して、講評や個別コメントを行う。

6. ゼミにおける学修の到達目標

- 1) 「基礎知識の修得」を通じて4年次の「卒業研究」に関する周辺知識の基盤作りを行う。
- 2) 「運動実験実習」で生データに触れる経験と蓄積した「基礎知識」を併せて、実験結果の解釈力を向上させる。
- 3) 上記の学修を通じて、「卒業研究」における個別テーマの選定に取り組む。

7. 成績評価の方法・基準

参加状況・受講態度（50%）、提出物・発表の内容（50%）

8. テキスト・参考文献

運動生理学、運動生化学、身体運動科学に関連する専門書、学術論文、学術資料を紹介する。

9. 受講上の留意事項

ゼミ生に問われるのは、これまでの知識や経験ではなく、これからの学修意欲である。4年次の卒業研究に向けて真摯に取り組める人の受講を期待する。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

卒業研究		演習	教授 竹内 成生
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130401

1. テーマ

心理指標と生理指標を用い、スポーツ・健康の生理心理学的評価とその検討をおこなう。

2. ゼミのねらい・概要

我々は日常行動の多くの場面で生理－心理的な制約や影響を受けている。例えば、過緊張場面では視野が狭まり、複雑かつ咄嗟な行動が困難になる。このような生理－心理的な関係性はスポーツ場面において顕著であり、両者の関係性から最適パフォーマンスを発揮するための方法を探ることが可能である。更には競技スポーツだけでなく、健康スポーツに代表される健康行動の解釈や、行動の向上においても生理心理学的な視点は有用である。本ゼミでは生理心理学的研究手法を用い、スポーツや健康に関する理解を深めることをねらいとする。また、問題提起－検査・実験－考察という一連の作業を通じて論理的思考と表現能力、客観的データの見方を養うものとする。尚、テーマ選定は3年次の検討を受け、学生の興味を優先する。

3. ゼミ計画

〈前期〉	〈後期〉
1. スポーツ・健康と生理心理学の詳説	16. 卒業研究とは2（結果と考察を主として）
2. 卒業研究とは1（問題提起と検討手法を主として）	17. 卒業研究テーマ方針の最終決定（学生半数）
3. 卒業研究テーマ選定とその概要1（学生半数）	18. 卒業研究テーマ方針の最終決定（残り半数）
4. 卒業研究テーマ選定とその概要2（残り半数）	19. 後期進捗紹介・実験等1（発表学生5-6名）
5. 脳波・心理指標による検討方法1（概説）	20. 後期進捗紹介・実験等2（発表学生5-6名）
6. 脳波・心理指標による検討方法2（データ取得）	21. 後期進捗紹介・実験等3（発表学生5-6名）
7. 脳波・心理指標による検討方法3（データ整理）	22. 後期進捗紹介・実験等4（発表学生5-6名）
8. 脳波・心理指標による検討方法4（統計処理）	23. 取得データ解説1（基本集計詳説）
9. 脳波・心理指標による検討方法5（解説）	24. 取得データ解説2（統計処理詳説）
10. 前期進捗紹介・予備実験等1（発表学生5-6名）	25. 取得データ解説3（結果の解釈詳説）
11. 前期進捗紹介・予備実験等2（発表学生5-6名）	26. 後期進捗紹介・結果検討1（発表学生5-6名）
12. 前期進捗紹介・予備実験等3（発表学生5-6名）	27. 後期進捗紹介・結果検討2（発表学生5-6名）
13. 前期進捗紹介・予備実験等4（発表学生5-6名）	28. 後期進捗紹介・結果検討3（発表学生5-6名）
14. 卒業研究中間検討会	29. 後期進捗紹介・結果検討4（発表学生5-6名）
15. 前期内容の補足と今後の進捗について	30. 卒業研究全体に関する総評

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

自身の研究テーマに関する文献収集、実験・調査、解析・考察の計画的な実施に加え、卒業論文の作成、研究進捗発表、研究発表会を遂行する。本卒業研究の遂行にあたっては前期・後期を通じて週あたり3時間程度の時間を前提とする。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

研究進捗の口頭発表の際、個別に評価をフィードバックする。また、卒業論文と最終発表会の発表内容を基に評価内容や改善点を個別にフィードバックする。なお、最終評価の通知方法については事前に連絡する。

6. ゼミにおける学修の到達目標

心理学的研究手法によるスポーツや健康に関する理解を深め、3年次の専門ゼミで養った論理的思考と表現能力、客観的なデータの見方を元に研究を遂行、卒業論文としてまとめることを目標とする。なお、年間予定している主な進捗と各時点での検討方法は以下のとおりである。

- ・ 3 年次に決定したテーマに関係する実験・調査論文などの紹介と議論をおこなう。
- ・ 3 年次に引き続き、予備実験データの取得と解析を通じ、妥当性を検討する。
- ・ 実験・調査の中間報告をおこない、テーマを最終決定する。
- ・ テーマに変更が無い場合はデータの追加、変更・修正の場合はデータの新規取得をする。
- ・ 取得データをもとに議論をおこなう。
- ・ 各自テーマを卒業研究成果物としてまとめる。

7. 成績評価の方法・基準

卒業研究（論文）内容（60%）、卒業研究発表（20%）、授業態度・積極性（20%）を基準として総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキストは特に指定しない。しかし、心理学の基本ならびに周辺分野を広く網羅しており、事典・参考書として最適であることから、参考図書として以下の書籍を推奨する。また、無料の統計ツールである JS-Star や R (JASP) に関する理解を深め、具体的処理方法を学べることから統計処理の解説本も示しておく。

※鹿取 廣人・杉本 敏夫・鳥居 修晃（編） 心理学（第5版補訂版） 東京大学出版会（ISBN-13: 978-4130121170）

※山崎勝男（監修） スポーツ精神生理学 西村書店（ISBN-13: 978-4890134298）

※清水 優菜・山本 光 JASP で今すぐはじめる統計解析入門 講談社（ISBN-13: 978-4065292945）

9. 受講上の留意事項

スポーツ・健康に関する生理心理学的評価方法を学び、スポーツ・健康活動に関して、今後の糧となるようなテーマを自らが率先して見出すことを期待する。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。障害を対象とした研究機関での実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

卒業研究		演習	准教授 小松原 崇史
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130401

1. テーマ

卒業研究の作成

2. ゼミのねらい・概要

本ゼミでは、卒業研究の作成に向けた指導を行います。また、プレゼンテーションの作成方法を学びます。

3. ゼミ計画

〈前期〉	〈後期〉
1. 前期のガイダンス	1. 後期のガイダンス
2. 研究計画の立て方① よい研究とは何か	2. 研究発表の方法① よい発表とは何か
3. 研究計画の立て方② 研究のために準備すること	3. 研究発表の方法② 発表のために準備すること
4. 研究計画の立て方③ 参考文献の引用方法	4. 研究発表の方法③ パワーポイントの使用方法
5. 研究計画の立て方④ 研究で行ってはいけないこと	5. 研究発表の方法④ 発表で行わない方がいいこと
6. 前半のまとめ	6. 前半のまとめ
7. 研究テーマの発表①（第一グループ）	7. 卒業研究の発表①（第一グループ）
8. 研究テーマの発表②（第二グループ）	8. 卒業研究の発表②（第二グループ）
9. 研究テーマの発表③（第三グループ）	9. 卒業研究の発表③（第三グループ）
10. 研究テーマの発表④（第四グループ）	10. 卒業研究の発表④（第四グループ）
11. 研究テーマの発表⑤（第五グループ）	11. 卒業研究の発表⑤（第五グループ）
12. 研究テーマの発表⑥（第六グループ）	12. 卒業研究の発表⑥（第六グループ）
13. 研究テーマの発表⑦（第七グループ）	13. 卒業研究の発表⑦（第七グループ）
14. 研究テーマの発表⑧（第八グループ）	14. 卒業研究の発表⑧（第八グループ）
15. 前期のまとめ	15. 後期のまとめ

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

グループごとに、毎週 5 時間の準備が必要です。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

グループによる発表のあとに、コメントをします。

6. ゼミにおける学修の到達目標

卒業研究が完成すること。

7. 成績評価の方法・基準

卒業研究成果物（50%）およびゼミへの参加状況（50%）によって、評価します。

8. テキスト・参考文献

授業内で紹介します。

9. 受講上の留意事項

卒業研究に取り組むこと、また、ゼミを休まないようにすること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無
該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連
上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

卒業研究		演習	教授 田中 秀臣
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130401

1. テーマ

日本及び世界の経済問題，文化経済学，経済思想史のアプローチを取得すること。それらの知識をもとに各自が卒業論文のテーマを選び，年度を通じてその報告や仕上げを行う。

2. ゼミのねらい・概要

卒業研究の目的は，四年次の卒業研究において卒業成果を提出することにある。そのため授業では，各自が経済学の基礎の最終確認，それを各自の選んだテーマに結びつけて論文の形式で提出することが最終的なねらいになる。また多数の人間の前で自分の考え方を公表し，丁寧にまた簡潔に説明するプレゼンテーションの技術を学ぶこともこの卒業研究の大きな課題になる。そのため講義では，基本的な経済書，経済思想史，文化経済学の知識の再確認を行った上で，各自の選んだテーマにしたがって Power point を利用して説明してもらう。

3. ゼミ計画

〈前期〉	〈後期〉
1. 卒業論文の書き方	16. 卒業論文のまとめかた
2. 卒業論文のテーマ確定	17. 技術的な細目の指導
3. 卒業論文のテーマ概要発表	18. 卒業論文のテーマ再確認
4. 卒業論文のテーマ概要発表その2	19. 卒業論文概要最終報告その1
5. 卒業論文のプレゼン講座	20. 卒業論文概要最終報告その2
6. 卒業論文の注釈・引用などの仕方のチェック	21. 卒業論文概要最終報告その3
7. 卒業論文のテーマの概要発表その3	22. 格差と貧困の経済思想史
8. 卒業論文のテーマの概要発表その4	23. 文化の経済思想史
9. 経済思想史のテキスト講義	24. 現代の文化政策の問題
10. 経済思想史のテキスト講義：応用	25. 文化現象（アイドル，コミック市場）の分析
11. 経済格差と貧困	26. 卒業論文発表その1
12. 福祉と経済思想史	27. 卒業論文発表その2
13. 文化経済学の復習	28. 卒業論文発表その3
14. 文化経済学と経済思想史の接点	29. 卒業論文発表その4
15. 前期のまとめ	30. 卒業論文提出と諸注意

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

特に後期は卒業論文の概要や進展した内容のプレゼンテーションが続くため，目安として2時間以上の学習時間が必要と思われる。ただし運動部など部活動，学生によっては生活環境も異なるので，各自に配慮して無理ない学習時間でゼミを終えることができるように配慮したい。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

期末試験は行わない予定だが，レポートの代わりに各自の卒業論文の中間報告，そして最終的なゼミ内発表を行うので，その都度，報告終了時点でコメントや解説を行う。

6. ゼミにおける学修の到達目標

卒業論文の完成という大学生活四年間の集大成という意識をもち経済学の基礎的な項目の，一通りの理解と習得の確認を行った上で，自分の選んだ卒業論文のテーマにそれらの知識を応用し，論文の形式にまとめ，プレゼンテーションを行う技術を取得すること。

7. 成績評価の方法・基準

卒業論文の中間報告（20％）、最終報告（40％）を行うこと。また受講態度（40％）も重要である。

8. テキスト・参考文献

特にない。

9. 受講上の留意事項

卒業論文の作成がなによりも最重点になるので、各自もしくはチームを組む場合は、それぞれのチームが、各々の課題に積極的に取り組む必要がある。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

卒業研究		演習	教 授 吉田 一康	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130401	

1. テーマ

国際取引法の基本事項を理解することをテーマとします。そのために、法律の基本から学び、また国際取引法とスポーツの関係に着目して、スポーツ仲裁や移籍規定などのスポーツ法についても説明し、国際的な視野を身に着けることを講義の目標とします。

2. ゼミのねらい・概要

卒業研究では、国際取引法に関して、専門ゼミの1年間で学んだ内容などから、各自にできるだけ研究対象を絞ったテーマを選択します。そして、研究目標として何を訴えたいのか、それを訴えることにどのような意義があるのかを明らかにするかたちで、卒業論文を作成していきます。

前期は、卒業研究に関係する国際取引法やスポーツ法の各事項について学習して、後期は、論文指導の後、中間発表、最終発表を行います。

3. ゼミ計画

〈前期〉	〈後期〉
1. 論文の書き方（構成、引用方法など）	1. 卒業論文指導，一般常識問題
2. 各国法（大陸法と英米法など）	2. 卒業論文指導，一般常識問題
3. 小試験	3. 卒業論文指導，小試験
4. 知的財産法（特許権など）	4. 卒業論文指導，一般常識問題
5. 著作権（国際的観点）	5. 卒業論文の中間発表，一般常識問題
6. グループ学習（就職対策）	6. 卒業論文の中間発表，小試験
7. 民法とウィーン売買条約	7. 卒業論文の中間発表，一般常識問題
8. 申し込みと承諾	8. 卒業論文の中間発表，一般常識問題
9. 小試験	9. 卒業論文の中間発表，小試験
10. ドーピング	10. 卒業論文の最終発表，一般常識問題
11. スポーツの不法行為など	11. 卒業論文の最終発表，一般常識問題
12. グループ学習（就職対策）	12. 卒業論文の最終発表，一般常識問題
13. インターネット法	13. 卒業論文の最終発表，一般常識問題
14. ビジネス交渉	14. 卒業論文の最終発表，一般常識問題
15. 前期まとめ・小試験	15. まとめ（批評など），一般常識問題

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各講義の内容に関係する参考文献の該当箇所を読んでくこと（1時間程度）。講義後、授業内容や小試験の内容を復習して、解答を理解しておくこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

- ①小試験後、解答及び説明を行います。 ②卒業論文の発表後、講評を行います。

6. ゼミにおける学修の到達目標

- ①国際取引法・スポーツ法の基本を理解して国際感覚を磨くこと。 ②論文の作成方法・発表方法を理解すること。

7. 成績評価の方法・基準

平常点 70～80%（積極性，小試験など）＋ 授業への取り組み姿勢（授業への貢献度，発表など）20～30%

A 80点以上 B 70～79点 C 60～69点 D（不可）60点未満

8. テキスト・参考文献

毎回、必要資料を配布し、テキストは使用しませんので、特に購入する必要はありません。自習のための参考文献として下記のものを挙げます。

①佐野寛『国際取引法』（第4版）有斐閣 2014年（2750円）

②浦川道太郎他，日本スポーツ法学会監修『標準テキスト スポーツ法学』（第3版）エイデル研究所 2020年（2750円）

9. 受講上の留意事項

私語・態度不良など他の受講者の迷惑となる行為や、遅刻・中途退席などの目立つ受講者については、評価を減点又は受講を制限します。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、不動産会社等における法務の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

卒業研究		演習	准教授 八木 孝幸	
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130401	

1. テーマ

経営学における諸理論の研究

2. ゼミのねらい・概要

昨年度は、経営学についてより専門的に深く理解してもらった。そこで本年度はその知識を基にして、ゼミ生ひとり1人が興味を持ったテーマについて、より深く専門的に研究してもらおうという意図の下に開講される時間である。なお、この『卒業研究』の履修は、『専門ゼミ A・B』の単位修得済みの者のみ可能である。

3. ゼミ計画

ゼミ計画は概ね以下の通りであるが、所属ゼミ生の力量を見極めながら適宜計画の修正を行う予定である。

〈前期〉	〈後期〉
1. ガイダンス（履修指導など） 2. 各ゼミ生による卒業研究のテーマ設定 3. テキストの内容の解説とまとめ①（スポーツビジネスの定義） 4. テキストの内容の解説とまとめ②（日本におけるスポーツビジネスの展望） 5. テキストの内容の解説とまとめ③（企業によるスポーツ活用） 6. テキストの内容の解説とまとめ④（スポーツビジネスにおけるリスク） 7. テキストの内容の解説とまとめ⑤（スポーツ用品ビジネス） 8. テキストの内容の解説とまとめ⑥（スポーツ食品ビジネス） 9. テキストの内容の解説とまとめ⑦（スポーツメディアビジネス） 10. テキストの内容の解説とまとめ⑧（スポーツイベントビジネス） 11. テキストの内容の解説とまとめ⑨（スポーツ施設の建設とスタジアムの経営） 12. テキストの内容の解説とまとめ⑩（プロスポーツビジネス） 13. テキストの内容の解説とまとめ⑪（アスリートのマネジメントとエージェント） 14. テキストの内容の解説とまとめ⑫（世界のスポーツビジネス） 15. 前期まとめ	1. ガイダンス（履修指導など） 2. ゼミ生による卒業研究内容の中間発表と配布資料のまとめ①（産業組織の構造） 3. ゼミ生による卒業研究内容の中間発表と配布資料のまとめ②（スポーツ産業の位置づけとサービス&ホスピタリティ） 4. ゼミ生による卒業研究内容の中間発表と配布資料のまとめ③（スポーツ用品産業の特徴） 5. ゼミ生による卒業研究内容の中間発表と配布資料のまとめ④（マーケティングの歴史） 6. ゼミ生による卒業研究内容の中間発表と配布資料のまとめ⑤（スポーツマーケティング） 7. ゼミ生による卒業研究内容の中間発表と配布資料のまとめ⑥（スポーツ組織におけるガバナンス） 8. ゼミ生による卒業研究内容の最終発表と配布資料のまとめ①（本質を生かしたスポーツ産業） 9. ゼミ生による卒業研究内容の最終発表と配布資料のまとめ②（行動経済学とは） 10. ゼミ生による卒業研究内容の最終発表と配布資料のまとめ③（行動経済学とスポーツ） 11. ゼミ生による卒業研究内容の最終発表と配布資料のまとめ④（スポーツによる経験価値の創造） 12. ゼミ生による卒業研究内容の最終発表と配布資料のまとめ⑤（経験価値創造によるスポーツビジネスの革新） 13. ゼミ生による卒業研究内容の最終発表と配布資料のまとめ⑥（スポーツにおける組織と文化） 14. 卒業研究成果物提出と発表会に際しての諸注意 15. 総まとめ

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

当ゼミ前期においてはテキストを使用するので、毎回ゼミ計画を参考に事前に学修予定の箇所に対する2時間以上

の予習を期待する。また、ゼミ終了後にはまとめを含めて学修内容に対する2時間以上の復習を期待している。加えて、後期においては自身の卒業研究内容の発表のためのパワーポイント用のスライド等の事前作成が必要となる。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

前期においては、学修予定であるテキストの内容に解説を加えた後、用意した設問に解答する形でゼミ生自身の手でペーパーに要点をまとめてもらう予定である。なお、所属ゼミ生の人数にもよるが、後日、要点をまとめたペーパーを一旦提出してもらい、『卒業研究』担当教員が内容をチェックあるいは添削後、返却を行うことも考えている。

また、当『卒業研究』ではゼミ生の習熟度を測る目的で期末試験（あるいはレポート）を実施するが、後日、解答例等を掲示板に掲示する予定である。

6. ゼミにおける学修の到達目標

社会人となった際に、企業社会のシステムや、取引先及び所属組織のメカニズムなどが容易に理解できる程度の専門知識修得を目標としている。

7. 成績評価の方法・基準

課題（定期試験やレポート等）と卒業研究成果物の採点結果（50%）及び『卒業研究』に対する取り組み姿勢（50%）によって評価する。ただし、課題（定期試験やレポート等）と卒業研究成果物の採点結果か『卒業研究』に対する取り組み姿勢の評価のいずれかが59点以下になった場合は、不可とする。

8. テキスト・参考文献

〈テキスト〉

EY 新日本有限責任監査法人編『最新スポーツビジネスの基礎（第2版）』同文館出版、2021年。

〈参考文献〉

横山勝彦・八木匡・松野光範編『スポーツの組織文化と産業』晃洋書房、2012年。

9. 受講上の留意事項

座席表作成の都合上、所属ゼミ生は初回より必ず出席のこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

ミクロ経済学		講義	准教授 小松原崇史
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目	科目ナンバリング	11320204

1. 授業のねらい・概要

ミクロ経済学についての基本的な考え方を説明します。経済についての一般的な法則を見出そうとすることが、ミクロ経済学の目指していることです。本授業の履修にあたっては、「経済学基礎」を履修済みであることが望ましいです。

2. 授業の進め方

講義形式で授業を行います。授業の理解を深めるため、問題演習を行うことがあります。なお、理解度に応じて、以下の授業計画を変更する可能性があります。

3. 授業計画

1. ミクロ経済学とは	9. 寡占（寡占の例）
2. 生産の費用（経済学での費用とは）	10. 寡占（カルテル）
3. 生産の費用（生産と費用の関係）	11. 寡占（寡占の均衡）
4. 生産の費用（費用のさまざまな尺度）	12. 独占的競争（広告をめぐる論争）
5. 独占（独占の価格設定について）	13. 独占的競争（品質のシグナルとしての広告）
6. 独占（価格差別の分析）	14. 独占的競争（ブランドをめぐる論争）
7. 独占（価格差別の例）	15. 後半のまとめと復習
8. 前半のまとめと復習	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講後、その回の内容を復習してください。そのためには、毎週1，2時間程度が必要です。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

問題の解答を、試験終了後に、メールで伝達します。

6. 授業における学修の到達目標

目標は、ミクロ経済学の基本的な考え方を、理解できるようになることです。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験（100%）によって、成績を評価します。

8. テキスト・参考文献

参考書として、N・グレゴリー・マンキュー著『マンキュー経済学 I ミクロ編（第4版）』（東洋経済新報社，2019年）を使用します。

9. 受講上の留意事項

私語を厳禁とします。守れない学生に対しては直接注意を行い、改善が見られない場合には退出を求めます。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

マクロ経済学		講義	准教授 小松原崇史
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目	科目ナンバリング	11320203

1. 授業のねらい・概要

マクロ経済学についての基本的な考え方を説明します。各国の経済成長の可能性をさがることが、マクロ経済学の目指していることです。本授業の履修にあたっては、「経済学基礎」を履修済みであることが望ましいです。

2. 授業の進め方

講義形式で授業を行います。授業の理解を深めるため、問題演習を行うことがあります。なお、理解度に応じて、以下の授業計画を変更する可能性があります。

3. 授業計画

1. マクロ経済学とは 2. GDP（国内総生産）とは 3. GDP と国の豊かさ 4. 名目 GDP と実質 GDP 5. 経済成長とは 6. GDP の分解 7. GDP の三面等価 8. 前半のまとめと復習	9. 外国為替相場とは 10. 外国為替相場の表し方 11. 外国為替相場の決定要因 12. 消費者物価指数とは 13. 消費者物価指数の作り方 14. 消費者物価指数が社会に与える影響 15. 後半のまとめと復習
---	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講後、その回の内容を復習してください。そのためには、毎週 1，2 時間程度が必要です。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

問題の解答を、試験終了後に、メールで伝達します。

6. 授業における学修の到達目標

目標は、マクロ経済学の基本的な考え方を、理解できるようになることです。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験（100%）によって、成績を評価します。

8. テキスト・参考文献

参考書として、伊藤元重著『マクロ経済学 第2版』（日本評論社、2012 年）を使用します。

9. 受講上の留意事項

私語を厳禁とします。守れない学生に対しては直接注意を行い、改善が見られない場合には退出を求めます。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

なし。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツ実技（ソフトボール）		実習	教授 谷口 英規	
科目カテゴリー	「スポーツマネジメントコースの専門選択科目、スポーツトレーナーコースの専門選択科目、教職科目、柔道整復師コースの教養選択科目、救急救命士コースの教養選択科目」	ナンバリング		11322108
				11531104
				12220110
				12531104
				13220117
				13531104

1. 授業のねらい・概要

ソフトボールは、「投げる・打つ・走る」などの運動の基本動作から構成され、バランスのとれた運動能力を養うことができる。また、役割を区分しやすい競技であるため、自他の能力の活かし方を考え、チームスポーツで必要とされる協調性や責任感を養い、ソフトボールにおけるルールや安全面での配慮や留意事項等の知識を学習することにより、ソフトボールの指導方法や運営方法を身につけることを目的とする。

2. 授業の進め方

基本的な技術を習得するため、グラウンド・屋内練習場での実技が中心となる。また、天候によっては教室でルールや戦術といった講義形式で実施し、レポート提出を課す場合もある。

※授業の進行状況により内容等が変更になる場合もある。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. ゲーム①（短いイニングを役割決めて行う）
2. 投球の基礎技術（グラブの使い方、キャッチボール）	10. ゲーム②（短いイニングで基礎戦術を学ぶ）
3. 守備の基礎技術（グラブ操作、ゴロ捕球、フライ捕球）	11. 班別対抗戦①（ケースを決めて走・攻・守を行う）
4. 投手の基礎技術（ウィンドミル投法）	12. 班別対抗戦②（ケース毎に戦術を立てる）
5. ノックの基礎技術（内野手および外野手へのノック）	13. 班別対抗戦③（これまでの基礎技術を活かす）
6. チームでの守備連携（併殺プレー、シートノック）	14. 班別対抗戦④（スコアの書き方を学ぶ）
7. 打撃の基礎技術（トスバッティング、ティーバッティング）	15. 班別対抗戦⑤（まとめ）
8. 走塁の基礎技術（ベースランニング・打球判断）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

ソフトボールのルールを事前に調べ、自分の言葉で説明できるようにする為の準備学修に1時間以上必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポート提出の際、出題意図および回答を提出期限最終日に解説する。

6. 授業における学修の到達目標

ソフトボールの基礎技能を理解し、指導するうえで、必要な基本的な動作「投・捕・打・走」を身につけること。また、体育教員（中学校・高校）やスポーツ少年団などの各地域でのスポーツ指導者として、必要な知識（ルール・戦術）及び安全面の配慮などの留意事項等を学び、正しく安全に指導ができる力を身につけることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

技術の習熟度及び授業への取り組み（70%）、期末試験としてのレポート課題（30%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

ソフトボール 最強の戦術 メイツ出版 安藤美佐子（¥1,404）

ソフトボール 監督・コーチ入門 池田書店 宗方貞徳（¥1,296）

9. 受講上の留意事項

実技が中心のため運動に適した服装で出席すること。また、実技を行うことを考慮し受講者数を調整する場合もある。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無
該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連
上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

図形と画像の処理		講義	准教授 黒澤 廣宣
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目、スポーツトレーナーコースの専門選択科目	科目ナンバリング	11322216

1. 授業のねらい・概要

現代では図形や画像を駆使したマルチメディア表現が当たり前となっている。これはネット上のコンテンツだけではなくプレゼンテーションにおいても同様だが、はたしてこれらを十分に使いこなしているのだろうか。

本講義では、コンピュータを用いた図形や画像の処理技術に関する基礎的な理論や技術を学ぶとともに、画像の補正、レタッチ、合成からイラストレーション等の編集作業を通して、表現を行うために必要な基礎知識と技術を学ぶ。

2. 授業の進め方

講義は配布資料に基づき解説を行い、演習では画像加工ソフトウェアを用いる。

3. 授業計画

1. ガイダンス／講義の概要	9. 応用編／ロゴの作成 1 (技法)
2. デジタルデータと画像処理	10. 応用編／ロゴの作成 2 (応用)
3. 基本編／操作練習	11. 応用編／アイコンデザイン・技法
4. 基本編／選択範囲、反転、色、レイヤ	12. 応用編／アイコンデザイン・応用
5. 基本編／選択、移動、調整	13. 応用編／CG 1 (技法の組み合わせ)
6. 基本編／ペイント	14. 応用編／CG 2 (効果)
7. 基本編／サイズ、切り抜き、補正	15. まとめ
8. 応用編／写真の合成	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各回の課題は時間内に完成させることが目標だが精度を高める（違和感を減らす）には試行錯誤が必要となる。これら作業に 1 時間以上確保することが望ましい。尚、一部課題作成時に自身の写真を必要とする為、説明に従い条件に合うデータを準備されたい(合成写真の作成)。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

提出課題のフィードバック及び、講義内に個々の指導・アドバイスを行う。

6. 授業における学修の到達目標

画像処理ソフトウェアの役割を理解し、基礎的な画像加工、デザインが行える（もしくは作業を指示する）。

7. 成績評価の方法・基準

提出物 (95%)，指示した提出方法 (5%) から評価。

8. テキスト・参考文献

授業用 Web ページ (初回授業時に指示) に公開。

9. 受講上の留意事項

コンピュータ教室使用時に個人へ割り当てられている容量では保存しきれない為、課題保存用として 1GB 以上の空きがある USB メモリ等の外部媒体等を準備する必要がある。

演習開始前に、手順や注意事項等の説明を行うので、遅刻しないよう注意すること。また習熟度評価の為、事情により欠席した場合も課題提出は必須であることに注意されたい。手順が不明な場合は時間外でも適宜質問すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、企業における企画や提案、資料作成等の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

プレゼンテーション		講義	准教授 黒澤 廣宣
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目、スポーツトレーナーコースの専門選択科目	科目ナンバリング	11322211

1. 授業のねらい・概要

プレゼンテーションはマーケティングやリサーチ業務を行う中で、仕事を自分の思った通りに進めることや、業務を獲得する上で大切なイベントです。せっかく良い企画や分析を作成しても、プレゼンテーションが悪ければ台無しとなってしまいます。

プレゼンテーションとは、情報の送り手（企画立案者・報告者）が受け手（クライアントや上司）に対して、“情報”や“プラン”を正確にかつ効果的に伝達し、その結果として送り手の意図した方向へ受け手の判断や意思決定を行ってもらえるよう“説得”するコミュニケーションなのです。これは就職活動においても必須のスキルと言えます。

本科目では、資料を作成する技法だけに留まらず、その根本である考え方、発想の仕方から問題の検討と解決、ストーリー作り、表現方法を実践から学びます。また、グループに分かれての作業はオフィスワークの基本技能の習得、ディスカッション能力の向上へと繋がるでしょう。

2. 授業の進め方

講義では考え方を中心に進め、加えてツール(手法)の基本的な利用方法を学修します。演習ではグループに分かれ練習テーマ、課題テーマに取り組みます。

3. 授業計画

1. ガイダンス／講義の概要	9. 設計シート
2. 3つのスキル	10. プレゼンテーションツール
3. ロジカルシンキング	11. 検討
4. ブレインストーミング	12. グループ演習：調査／ブレインストーミング
5. 主張とニーズ	13. グループ演習：プランニング／シナリオ／資料
6. 情報収集	14. グループ演習：プレゼンテーション
7. シナリオライティング	15. まとめ
8. 組み立て	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

テキストは事前に読み終えて下さい。また、各回の復習、次回使用するデーマの準備等に1時間以上必要とします。グループ作業課題では編成されたグループ内で別途検討会を持つ必要があるかもしれません。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

提出課題のフィードバック及び、講義時間内に個々の指導・アドバイスを行うことになります。

6. 授業における学修の到達目標

相手の立場に立ってものを考え、『魅力的な(企画)提案』を行う能力を身につけることを目標としています。

7. 成績評価の方法・基準

成績は、提出物(30%)、履修態度(発言/作業貢献)等(30%)、発表評価(40%)を考慮して評価します。尚、発表評価のうち半分と作業貢献に関しては参加者評価としています。

8. テキスト・参考文献

授業用 Web ページ(初回授業時に指示)に準備します。

参考文献：ロジカルシンキング等の書籍を事前に一読されると、より効果的な結果を得られるでしょう。

9. 受講上の留意事項

ワークショップは履修者（参加者）が主体の場です。誰が教えてくれる場でもなく、ファシリテーター（進行役）の示唆により、参加者自身が主体となって、自らの体験や履修者同士の相互作用の中から学んだり創り出したりする場となります。履修者には、ただ受身で話を聞くだけではなく、自ら主体的にプログラムに「参加」する積極的な姿勢が不可欠です。前回からの継続作業や、グループワーク等、集団で作業することがありますので欠席や遅刻に注意して下さい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当します。本授業は、企業における企画提案の実務経験を活かし指導します。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおりです。

スポーツ用品市場論		講義	講師 菅谷 美沙都	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの選択必修科目 スポーツトレーナーコースの専門選択科目	科目ナンバリング	11312208	

1. 授業のねらい・概要

高度経済成長によって国民の暮らしが豊かになり、国民の余暇時間が増大し、スポーツやレジャーを楽しむ場所や機会は飛躍的に増大した。人々のスポーツとの関わり方の変化により、スポーツ産業は急速な発展を見せている。この授業では、スポーツ産業の一領域であるスポーツ用品産業について、我が国のスポーツ用品市場の動向やスポーツ用品産業の歩み、スポーツ用品業界のビジネスサイクル等を理解する。

なお、「スポーツ産業論」を受講していることが望ましい。

2. 授業の進め方

授業前半（第1回～第7回）は講義形式で行い、資料やレジュメを配布する。授業後半（第8回以降）は、テーマに沿ったグループワークを実施し、最終的にグループごとにプレゼンテーションを行う。

3. 授業計画

1. オリエンテーション（授業の進め方、成績と評価について等）	9. GW:新しいスポーツ用品の企画②（ポジショニングマップの作成・価格の設定）
2. スポーツ用品産業とは	10. GW:新しいスポーツ用品の企画③（流通チャネル・顧客満足）
3. 我が国のスポーツ用品産業の市場規模	11. プレゼンテーション①（7～8グループ）
4. スポーツ用品業界のビジネスサイクルと流通構造	12. プレゼンテーション②（7～8グループ）
5. スポーツ消費者を知る①（プロダクト・価格設定）	13. プレゼンテーション③（7～8グループ）
6. スポーツ消費者を知る②（スポーツ消費者の特性）	14. GW 及びプレゼンテーションの全体評価と振り返り
7. 中間レポート（スポーツ用品小売業の戦略）	15. まとめ
8. GW:新しいスポーツ用品の企画①（ブランドビジネス・ターゲティング）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

グループワークとプレゼンテーションにおいては、メンバーで議論を重ねてより良い企画を考案するよう努めること。これらの自主学修には2時間以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポート提出の直後、記述内容のポイントや評価の基準に関する説明を行う。また、プレゼンテーション実施時に口頭で評価を伝える。

6. 授業における学修の到達目標

スポーツ用品市場の動向、スポーツ用品に係るマーケティング戦略を理解する。

スポーツ用品メーカーの経営戦略を理解し、人々のニーズに合った新しいスポーツ用品を開発する企画力、提案力を養う。

7. 成績評価の方法・基準

中間レポート（40%）、グループワークへの取り組み姿勢（30%）、プレゼンテーション（30%）から総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

教科書は特に指定しない。適宜、資料・プリントを配布する。

参考文献：原田宗彦 編著「スポーツ産業論第7版」（杏林書院，2021）

仲澤眞・吉田政幸 編著「よくわかるスポーツマーケティング」（ミネルヴァ書房，2017）

9. 受講上の留意事項

プレゼンテーションではパワーポイントを使用するので，各自使えるようにしておくこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツ施設管理論		講義	講師 菅谷 美沙都
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの選択必修科目 救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11310202 13220207

1. 授業のねらい・概要

スポーツ施設の管理運営における基本と実践について理解する。

人々のスポーツ実践の主たる場は、運動・スポーツ施設であり、様々なスポーツ施設は人々のスポーツ活動の質と量を規定する性質を有する。本講義では、運動・スポーツ施設の基本的機能を理解し、スポーツ施設の効率的な管理運営、すなわちスポーツファシリティマネジメントの基礎理論を学ぶ。さらに、我が国におけるスポーツ施設の管理運営事例を取り上げ、スポーツ施設整備の在り方や管理運営の手法について理解を深める。

なお、「スポーツ産業論」を受講していることが望ましい。

2. 授業の進め方

隔回授業最後にリアクションペーパーを提出し、授業内容の理解度を確認する。適宜、スポーツ施設関連の新聞記事や資料を配布する。

3. 授業計画

1. オリエンテーション（授業の進め方、成績と評価について等）	9. クラブライセンス制度とスポーツ施設の問題
2. 我が国のファシリティマネジメントの現状	10. スポーツ施設管理運営における人的資源と危機管理
3. スポーツ施設の基本的な分類と体系	11. スタジアム・アリーナビジネスの手法
4. エリアサービス事業とは（ファシリティマネジメントの基礎知識）	12. スポーツ施設における指定管理者制度
5. スポーツ施設産業とスポーツ施設の運営	13. スポーツ施設におけるネーミングライツ
6. スポーツファシリティとサービス	14. スポーツ施設のバリアフリー化
7. 日本のスタジアム分析	15. まとめ
8. 生活圏のスポーツ施設	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

講義内容を確認し、疑問点を明確にしておくこと。また、今回の講義内容に関する時事問題（新聞記事などを事前に配布することもある）を自ら調べること。これらの自主学修には2時間以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポート提出の直後、記述内容のポイントや評価の基準に関する説明を行う。リアクションペーパーについては、記述内容のポイントや評価の基準に関する説明を次週の授業内で行う。

6. 授業における学修の到達目標

- ・スポーツ施設運営の基本を理解し、各施設の特徴や経営手法の違いを理解できる。
- ・我が国のスポーツ施設の現状や課題を検討し、より良いスポーツ施設のあり方についてファシリティマネジメントの視点から考究することができる。
- ・自分が普段利用（観戦含む）しているスポーツ施設の管理や運営について、授業で学んだ知識をもって分析できる態度を養う。

7. 成績評価の方法・基準

授業時におけるリアクションペーパー（50%）、最終レポート（40%）及び授業への取り組み方（10%）から総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

教科書は特に指定しない。適宜、資料・プリントを配布する。

参考文献：原田宗彦・間野義之 編著「スポーツファシリティマネジメント」（大修館書店，2011）

原田宗彦 編著「スポーツ産業論第7版」（杏林書院，2021）

9. 受講上の留意事項

特になし。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、スポーツ施設管理運営組織における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

運動学Ⅱ		講義	准教授 牛島 詳力
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門基礎科目	科目ナンバリング	12311401

1. 授業のねらい・概要

ここでの「運動学」とは人体を対象とした身体運動を主としている。人間が体を動かす際、骨が単独で作用するわけではない、必ず筋や神経などの機関が連携してひとつの動作が生まれる。そのことを理解したうえで、人間の身体に関わることを生業とするのであれば「身体運動」を学ぶことは必然的ではないかと考える。

本授業では解剖生理学を基礎とした上で、それぞれがどのように身体と関わっていくかをより深く学習し、医療従事者としての基本的知識を身につける。

2. 授業の進め方

授業では配布資料と板書を活用する。

3. 授業計画

1. ガイダンス 運動の表し方	9. 四肢と体幹の運動・下肢
2. 身体運動と力学	10. 歩行と異常歩行
3. 関節運動の面と軸・関節の分類	11. 運動発達・全身と歩行、上肢
4. 反射と随意運動	12. 運動学習
5. 姿勢	13. 運動発達・反射
6. 四肢と体幹の運動・体幹とその他	14. 運動機能の構造と機能
7. 四肢と体幹の運動・上肢	15. 運動感覚
8. 四肢と体幹の運動・上肢と下肢	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

事前に配布した資料に目を通し、わからない単語があれば事前に調べておくこと（およそ 30 分間）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

定期試験については正答と問題の要点を希望者に配布する。

6. 授業における学修の到達目標

「身体運動」の必要性を確認する。

「運動学」を通じて解剖生理学の理解を深める。

医療従事者としての基礎的な知識ならびに国家試験に対応した知識を身につける。

7. 成績評価の方法・基準

定期試験の結果（100％）より評価する、他の要素は含まれない。

8. テキスト・参考文献

テキスト：（社）全国柔道整復学校協会 監修、『運動学 改訂第3版』，医歯薬出版，2012年

参考文献：Oatis, C 「オーチスのキネシオロジー 身体運動の力学と病態力学」ラウンドフラット，2012年
その他、授業内容に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

毎回の授業時にはテキスト並びに配布プリントを必ず持参すること。

講義回数の3分の1以上を欠席した場合は、定期試験の受験資格を失うこととする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、接骨院やプロスポーツチームにおける実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

関係法規		講義	非常勤講師 西川 晃子	
科目カテゴリ	柔道整復師コースの専門基礎科目	科目ナンバリング	12331401	

1. 授業のねらい・概要

人が社会の中で生きていくためには、法律に従わないといけない。人間の生命に関わることであれば、さらに注意しなければならない。「法律を学ぶ」とは、物事の判断基準であり、柔道整復師の活動が他人に対して不利益にならぬようにするためのものである。その為には、内容の理解が必要不可欠となる。

本授業では法の意義や体系、柔道整復師免許、業務、施術所、他の医療従事者など様々な法律について学習し、職務に就いた際、活動を正しく円滑に行えることを目的に行う。

2. 授業の進め方

授業では配布資料とスライドを活用する。

3. 授業計画

1. ガイダンス 総則	9. 附則
2. 免許	10. 医療従事者の資格法（医師法，歯科医師法，保健師助産師看護師法，診療放射線技師法など）
3. 柔道整復師国家試験	11. 医療従事者の資格法（理学療法士および作業療法士法，義肢装具士法，薬剤師法など）
4. 業務	12. 医療法
5. 施術所	13. 医療法施行令
6. 雑側	14. 社会福祉関係法規
7. 罰則	15. 社会保険関係法規
8. 指定登録機関及び指定試験期間	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

事前に配布した資料に目を通し、わからない単語があれば事前に調べておくこと（およそ 30 分間）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

定期試験の正答と問題の要点を希望者に配布する。

6. 授業における学修の到達目標

「関係法規」の必要性を確認する。

法律の意味を理解する。

柔道整復師に関する法律ならびに国家試験に対応した知識を身につける。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（小テスト）（約 30％程度）並びに定期試験の結果（約 70％程度）より総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

（社）全国柔道整復学校協会 監修、『関係法規 2024 年版』，医歯薬出版，2024 年
その他，授業内容に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

授業開始 5 分前には着席しておくこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミ B		演習	教授 大森 肇	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130302	

1. テーマ

身体運動に伴う応答を生理・生化学的に研究し、人々の健康増進やスポーツパフォーマンス向上に貢献する。

2. ゼミのねらい・概要

身体運動や体育・スポーツが我々人間にもたらす恩恵は図り知れない。その影響は末梢の諸器官に留まらず、中枢機能や心理的側面にも及ぶ。しかしながら、運動はただ闇雲に行えば良いというものではない。健康増進やスポーツパフォーマンス、子どもの教育などの目的に応じて、運動の種類、強度、持続時間、頻度、期間などの条件を適切に設定する必要がある。また、身体運動の科学における新たな創造に挑戦することは、社会への大きな貢献に繋がるものと考えている。本専門ゼミのねらいは、基礎知識の修得・実験実習・先行研究の調査などを通じて、4年次「卒業研究」における基盤作りをすることにある。

3. ゼミ計画

1. 後期ガイダンス	9. 先行研究の調査8:論文の抄読（第6グループ）
2. 先行研究の調査1:学術論文の収集方法	10. 先行研究の調査9:論文の抄読（第7グループ）
3. 先行研究の調査2:学術論文の読み方	11. 先行研究の調査10:論文の抄読（第8グループ）
4. 先行研究の調査3:論文の抄読（第1グループ）	12. 研究課題の検討1:ブレインストーミング
5. 先行研究の調査4:論文の抄読（第2グループ）	13. 研究課題の検討2:ディスカッション
6. 先行研究の調査5:論文の抄読（第3グループ）	14. 研究課題の検討3:「卒業研究」テーマの探索
7. 先行研究の調査6:論文の抄読（第4グループ）	15. 年間のまとめ
8. 先行研究の調査7:論文の抄読（第5グループ）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

専門ゼミ A での「基礎知識の修得」や「運動実験実習」はゼミ生における問題意識の喚起を意図したものであった。社会には解決すべき身体運動科学的な課題が溢れている。子どもの健全な成長、学生や社会人のストレス緩和、中高年の生活習慣病の克服、競技パフォーマンスの向上、世代を越えたスポーツ文化の醸成、サクセスフルエイジングなど、課題は枚挙にいとまがない。専門ゼミ B では、各自の興味・関心に応じて先行研究を収集・抄読し、発表・討論に繋げる。各回の予習・復習に2～3時間程度の学修が必要になる。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

授業中のプレゼンテーション、ショートレポート、ディスカッションに対して、講評や個別コメントを行う。

6. ゼミにおける学修の到達目標

- 1) 4年次の「卒業研究」に関連する先行研究を収集する。
- 2) 「先行研究の抄読・発表」を通じて学術論文の読み方を学び、ディスカッション能力を高める。

7. 成績評価の方法・基準

参加状況・受講態度（50%）、提出物・発表の内容（50%）

8. テキスト・参考文献

運動生理学、運動生化学、身体運動科学に関連する専門書、学術論文、学術資料を紹介する。

9. 受講上の留意事項

ゼミ生に問われるのは、これまでの知識や経験ではなく、これからの学修意欲である。4年次の卒業研究に向けて真摯に取り組める人の受講を期待する。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミB		演習	准教授 黒沢 賢一	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130302	

1. テーマ

警察官，消防官，市町村職員などの公務員試験に合格するために必要な知識の分析・習得とそれぞれが受験する地域の特性とまちづくり研究。

2. ゼミのねらい・概要

警察官採用試験は都道府県単位で，消防官採用試験と市町村職員採用試験は市町村単位で行われる。本ゼミでは警察官，消防官，市町村職員をめざす学生を主な対象として，それぞれの試験に合格するために必要な知識を身につけさせ，同時にゼミ生一人ひとりがめざす試験が行われる都道府県，市町村にはどのような特色があり，またそこではどのようなまちづくり，地域づくりが行われているかを政治学，行政学，地方自治の専門的知識をもとに考察，分析していく。

3. ゼミ計画

1. ガイダンス(研究レポート執筆の注意事項)	9. 公務員試験分析7 (n進法・数列)
2. 公務員試験分析1 (整数の性質)	10. 公務員試験分析8 (図形の計量)
3. 公務員試験分析2 (方程式・不等式・速さ)	11. 公務員試験分析9 (実数・構成比)
4. 公務員試験分析3 (比・割合・濃度)	12. 公務員試験分析10 (指数・増減率)
5. 公務員試験分析4 (仕事算・ニュートン算・平均算)	13. 公務員試験分析11 (文章理解)
6. 公務員試験分析5 (集合算・覆面算・魔法陣)	14. まちづくり研究② (レポート考察)
7. 公務員試験分析6 (場合の数・確率)	15. まとめ講義 (後期の総括と来年度に向けた考察)
8. まちづくり研究① (レポート提出)	

※数的推理，資料解釈のほかに社会科学分野の公務員試験に出題されるポイントも解説する。

4. 準備学修(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間

警察官，消防官，市町村職員採用試験に合格するためには，毎日，勉強することが求められる。ゼミで紹介された知識や問題を復習し，その類題を解くためには最低でも毎回2時間は必要になる。このほか指定された教材を自力で解いていかなければならず，それぞれが選んだ地域のまちづくり研究のための時間も必要になる。

5. 課題(試験やレポート等)に対するフィードバックの方法

確認テスト，課題ノート，レポートの返却時に講評し，評価のポイントや改善点などを指摘する。

6. ゼミにおける学修の到達目標

警察官，消防官，市町村職員などの公務員試験の仕組みを理解し，それぞれの試験に合格するために必要な知識を身につけ，ゼミ生が合格をめざす地域の特性やまちづくりの特色がわかるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

授業内で実施する確認テスト(50%)と課題ノート，レポートの内容(50%)によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- (1) 黒沢賢一著『Point Master 社会科学の論点』(三恵社) 毎回使用するので必ず持参すること。
- (2) 公務員試験受験のために必要になる教材は随時紹介する。
- (3) まちづくり研究については，ゼミ生それぞれの研究対象地域に合わせて個別に紹介する。

9. 受講上の留意事項

警察官，消防官，市町村職員などをめざす学生を歓迎するが，ここで学ぶ知識は民間企業への就職を考えている学生

にも役立つものである。

ゼミ中の私語やスマートフォン、イヤホン等の使用、他のゼミ生に迷惑となる教室内の秩序を乱す行為については、厳しい態度で臨むので十分注意すること。

ゼミ生には何よりも自主的に学ぶ姿勢が求められる。また公務員試験合格を確実にしたいという方には、「社会科学の基礎B」「公務員試験対策ゼミB」も受講することをおすすめする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本ゼミは、地方議会における実務経験(市議会議員)を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミB		演習	教授 竹内 成生
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	13130302

1. テーマ

本ゼミでは心理指標と生理指標を用い、スポーツ・健康の生理心理学的評価をおこなう。

2. ゼミのねらい・概要

我々は日常行動の多くの場面で生理－心理的な制約や影響を受けている。例えば、過緊張場面では視野が狭まり、複雑かつ咄嗟な行動が困難になる。このような生理－心理的な関係性から最適パフォーマンスを発揮するための方法を探ることが可能である。更には競技スポーツだけでなく、健康スポーツに代表される健康行動の解釈や、行動傾向の改善においても生理心理学的な視点は有用である。本ゼミでは生理心理学的研究手法を用い、スポーツや健康に関する理解を深めることをねらいとする。また、問題提起－検査－実験－考察という一連の作業を通じて論理的思考と表現能力、客観的データの見方を養うものとする。

3. ゼミ計画

1. 心理分野の研究法実践 7（研究倫理を知る）	9. 生理心理学的検討 1（心理・生理的測定を行う）
2. 心理分野の研究法実践 8（研究計画を考える）	10. 生理心理学的検討 2（心理データの集計）
3. 心理分野の研究法実践 9（研究計画を作成する）	11. 生理心理学的検討 3（生理データの解析）
4. 心理分野の研究法実践 10（実験・調査する）	12. 生理心理学的検討 4（総合解析と解説）
5. 心理分野の研究法実践 11（データを集計する）	13. 卒業研究テーマの打合せ（学生半数）
6. 心理分野の研究法実践 12（データを解析する）	14. 卒業研究テーマの打合せ（残り学生半数）
7. 心理分野の研究法実践 13（結果を理解する）	15. 後期のまとめ
8. 心理分野の研究法実践 14（結果から考察する）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

自身のテーマを早期に決定できるよう、興味に関連した文献を収集・熟読し、ポイントを整理しておくこと。また自身研究に関係する周辺知識の理解や実験・調査手法、とデータ処理の習得等を含め準備学習時間として 2 時間程度を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

生理データ取得・データ分析時に適宜、コメント・指導する。また、論文紹介やディスカッションにおいて各自に講評をフィードバックする。

6. ゼミにおける学修の到達目標

生理心理学的研究手法によるスポーツや健康に関する理解を深め、卒業研究に必要な論理的思考と表現能力、客観的なデータの見方を養うことを目標とする。なお、年間予定している主なテーマと到達目標は以下のとおりである。

- ・ 心理学分野の専門書、実験・調査論文などを用いて心理学とその検討方法の理解を深める。
- ・ 生理・心理学的検討において用いられる指標の紹介とデータの見方の基本を学習する。
- ・ 模擬データを実際に取得し、検査・実験方法とデータ処理を習得と解析手法の理解を深める。
- ・ 興味テーマに関する議論からテーマの絞り込みをおこなう。

各自、決定したテーマについて予備実験・検査を実施する。

7. 成績評価の方法・基準

発表内容（30%）、発表資料（30%）、授業態度・積極性（40%）を基準として総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキストは特に指定しない。しかし、心理学の基本ならびに周辺分野を広く網羅しており、事典・参考書として最適であることから、参考図書として以下の書籍を推奨する。

※鹿取 廣人・杉本 敏夫・鳥居 修晃（編） 心理学（第5版補訂版） 東京大学出版会（ISBN-13: 978-4130121170）

※山崎勝男（監修） スポーツ精神生理学 西村書店 （ISBN-13: 978-4890134298）

9. 受講上の留意事項

スポーツ・健康に関する生理心理学的評価方法を学び、スポーツ・健康活動に関するテーマを学生自ら率先して見出すことを期待する。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。障害を対象とした研究機関での実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミ B		演習	教授 田中 秀臣	
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナコースの必修科目	科目ナンバリング	11130302	

1. テーマ

日本及び世界の経済問題を、さまざまな文化的現象（アイドル、音楽、ゲーム、映像コンテンツ、食など）やスポーツなどを通して理解をふかめていくこと。またそれらを将来の自分たちの進路（就職や進学）に生かすこと。

2. ゼミのねらい・概要

専門ゼミの目的は、四年次の卒業研究において卒業成果を提出するための基礎訓練にある。専門ゼミ A に引き続いて、そのため授業では、各自が経済学の基礎の学ぶこと、そしてその前提に立って現実の経済問題や、さまざまな文化現象やスポーツの話題を気楽に楽しく話題にしていく。専門ゼミ B では、特に経済の現代的なテーマである「娯楽」「食」「スポーツ」などを、各国の経済事情とからめて、基本的に講義形式を採用し、そこに学生たちとの討論を交えていく。

3. ゼミ計画

1. ゼミのすすめかたの再確認 2. アイドルの経済学応用編 3. 食とグルメの経済学 4. 日本と世界の音楽市場 5. K-POP の世界成功戦略を考える 6. マーベル映画（アベンジャーズなど）の経済学 7. 日本のマンガと世界のコミック市場 8. 将来の若者の就職事情	9. スポーツの経済学入門の復習 10. ワールドカップの経済学 11. 最近の日本経済 12. 最近の世界経済 13. 美術市場の経済学 14. アニメ市場の経済学 15. ゲームやEスポーツの経済学
--	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

それぞれが自分の生活に合った準備をすればよく具体的な時間は特に指定しない。あえて目安をいえば、30分以内で構わない。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

第5回までに学生と個別に面談するなどの機会をもうけて直接に指導する。毎回、文化やスポーツ、時事問題への理解の度合いを確認し、学生に直接に指導する。講義時間中に学生からの感想を手短かに確認し、それを次回の講義などに活用していく。

6. ゼミにおける学修の到達目標

卒業論文のための準備期間という意識をもち経済学の基礎的な項目の、一通りの理解と習得ができていること。

7. 成績評価の方法・基準

ゼミに対する取り組み（80%）を主軸に、たまに講義の感想などをきくのでそれも参照する（20%）

8. テキスト・参考文献

以下のテキストを利用する予定だが特に買わなくてもいい。

田中秀臣『AKB48の経済学』朝日新聞出版社

田中秀臣『日本経済復活が引き起こすAKB48の終焉』（主婦の友社）

田中秀臣『ご当地アイドルの経済学』（イーストプレス）

田中秀臣『偏差値40から良い会社に入る方法』東洋経済新報社

9. 受講上の留意事項

毎回の授業でわからない点はぜひ積極的に指導教官に伝えてほしい。またゼミの内容には直接に関係はしないが、個別の面談などやゼミの時間中に、各自の進路やまた全体的な就職・進路状況などについてのガイダンスやまた情報の提供を行う予定である。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミB		演習	教 授 吉田 一康	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130302	

1. テーマ

国際取引法の基本事項を理解することをテーマとします。そのために、法律の基本から学び、また国際取引法とスポーツの関係に着目して、スポーツ仲裁や移籍規定などのスポーツ法についても説明し、国際的な視野を身に着けることを講義の目標とします。

2. ゼミのねらい・概要

現在、デパートやスーパーで買い物をするときに、商品の原産地や製造地を意識して見てみると分かると思いますが、今や「made in Japan」の商品の方が少ないかもしれません。多くの商品が、国際取引を通じて外国から輸入されたものです。「国際取引法」は、そのような国際取引に関する法律の総称です。

その国際取引法の基本事項を理解することをゼミの目標とします。また、海外旅行などに関する法律や、国際取引法とスポーツの関係に着目して、プロスポーツ選手などの海外チームへの移籍に関する規定やスポーツ仲裁などのスポーツ法についても説明します。就職対策として、面接対策や国際事情・常識問題などを行います。

3. ゼミ計画

1. 前期の復習など	9. 小試験
2. 国際裁判管轄（裁判を行う権限）	10. インコタームズ（定型取引条件）
3. 小試験	11. 国際海上運送
4. 輸出通関（通関士）	12. グループ学習（就職対策）
5. 輸入通関（関税，ワシントン条約）	13. 各国の食事のタブー
6. グループ学習（就職対策）	14. 国際投資（M&A）
7. 国際商事仲裁（調停と仲裁）	15. 後期まとめ・小試験
8. スポーツ仲裁（スポーツ仲裁裁判所）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各講義の内容に関係する参考文献の該当箇所を読んでくること（1時間程度）。講義後、授業内容や小試験の内容を復習して、解答を理解しておくこと（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

①各講義で行う練習問題の後に、解答及び説明を行います。 ②小試験後、解答及び説明を行います。

6. ゼミにおける学修の到達目標

①国際取引法の基本を理解して国際感覚を磨くこと。 ②スポーツ法の基本を理解すること。

7. 成績評価の方法・基準

平常点 70～80%（積極性，小試験など）＋ 授業への取り組み姿勢（授業への貢献度，発表など）20～30%

A 80 点以上 B 70～79 点 C 60～69 点 D（不可）60 点未満

8. テキスト・参考文献

毎回、必要資料を配布し、テキストは使用しませんので、特に購入する必要はありません。自習のための参考文献として下記のものを挙げます。

①佐野寛『国際取引法』（第4版）有斐閣 2014 年（2750 円）

②浦川道太郎他，日本スポーツ法学会監修『標準テキスト スポーツ法学』（第3版）エイデル研究所 2020 年（2750 円）

9. 受講上の留意事項

私語・態度不良など他の受講者の迷惑となる行為や、遅刻・中途退席などの目立つ受講者については、評価を減点又は受講を制限します。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、不動産会社等における法務の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

外傷予防トレーニング指導実習Ⅰ		実習	准教授 牛島 詳力	
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12371203	

1. 授業のねらい・概要

スポーツなど身体活動が原因で発生する外傷について、原因となる運動力学や病態生理学的知識を中心に、柔道整復師が取り扱うことができる骨折、脱臼、捻挫、打撲、挫傷からのリハビリテーション、ならびに再受傷を予防するための運動療法のプログラム作成のための基礎的な知識を身に着ける。

2. 授業の進め方

テキストで紹介される予防法について「なぜ、それを行うのか？」が理解できるよう、外傷予防の様々な要素を項目別に、講義とその項目を理解するための基本的な実技実習にて学ぶ。理解の定着を図る目的で中間試験も課する。

3. 授業計画

1. 外傷の原因（組織にかかるストレス）	9. 位置覚・運動覚と外傷予防
2. 外傷発生の予防における注意点	10. 筋の能力と外傷予防1（筋力・筋持久力）
3. 再受傷の予防における注意点	11. 筋の能力と外傷予防2（筋パワー）
4. 外傷予防におけるスポーツ心理学	12. Open & Closed Kinetic Chain
5. 組織の修復課程と外傷予防	13. バランス能力と外傷予防
6. 関節可動域と外傷予防1（ストレッチング）	14. 競技復帰時における外傷予防（中間試験2）
7. 関節可動域と外傷予防2（関節包内運動）	15. 全身持久力と外傷予防
8. 神経―筋協調と外傷予防（中間試験1）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

講義までに前回の授業までの内容について復習しておく、また基礎医学（解剖学・生理学・基礎運動学）知識の再確認も並行して復習しておくこと、これらの準備学習には2時間以上を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

外傷の発生ならびに再受傷を予防するプログラムがどのように構築されているか、を理解できるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

中間試験1（25%）、中間試験2（25%）、定期試験（40%）、授業への取り組み姿勢（10%）の合計で評価する。「授業への取り組み姿勢」については教員の主観的な評価も含まれる。

8. テキスト・参考文献

テキスト：小林直行、高橋康輝（2019）競技者の外傷予防、医歯薬出版社

参考文献：Kisner & Collby（2016）最新運動療法大全Ⅰ、第6版、ガイアブックス社

Prentice（1999）Rehabilitation Techniques in Sports Medicine 3rd edition, McGraw-Hill

Houglum（2000）Therapeutic Exercise for Athletic Injuries, Human Kinetics

9. 受講上の留意事項

基礎医学科目（解剖学、生理学、柔道整復学総論）を履修しそれぞれ70点以上の評価を得ていることが望ましいが、そうでない場合も理解できるように説明する。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。MLB 球団はじめ，国内外のスポーツチームにおける実務経験をもとに指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

外傷予防トレーニング指導実習Ⅱ		実習	准教授 牛島 詳力
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12371204

1. 授業のねらい・概要

スポーツなど身体活動が原因で発生する外傷について、外傷予防トレーニング実習Ⅰで学んだ知識をもとに、柔道整復師が取り扱うことができる骨折、脱臼、捻挫、打撲、挫傷からのリハビリテーション、ならびに再受傷を予防するための運動療法のプログラムとして、またスポーツ外傷を未然に防ぐためのエクササイズを部位別、項目別に学ぶ。

2. 授業の進め方

テキストで紹介される予防法をもとに、あらゆる種目、業種で起こる外傷に対し、予防のための様々な技術を部位別、項目別に実技実習にて学ぶ。実際にプログラムが作成できるようになるための演習としてレポートも課する。

3. 授業計画

1. 外傷予防プログラム作成 (レポート課題概要発表)	9. 下肢(股関節・膝関節)外傷の予防(筋の能力)
2. 頸部・上背部の外傷予防	10. 下肢の動的アライメント不良のリスク
3. 肩の外傷予防1(可動域の改善)	11. 下肢の動的アライメント改善の訓練
4. 肩の外傷予防2(動的安定化機構の改善)	12. 下腿・足部の外傷予防法1(可動域・筋力)
5. 肘・前腕の外傷予防	13. 下腿・足部の外傷予防法2(バランス能力ほか)
6. 腰部外傷の予防1(可動域改善)	14. 発育・発達と外傷予防(レポート課題提出)
7. 腰部外傷の予防2(体幹の安定化・協調と分離)	15. 高齢者における外傷予防
8. 下肢(股関節・膝関節)外傷の予防(可動域改善)	

4. 準備学修(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間

各講義までに外傷予防トレーニング実習Ⅰの内容について復習しておく、また基礎医学(解剖学・生理学・基礎運動学)知識の再確認も並行して復習しておくこと、これらの準備学習には2時間以上を要する。

5. 課題(試験やレポート等)に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

外傷の発生ならびに再受傷を予防するための基本的なエクササイズメニューを作成できるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

レポート課題(45%)、定期試験(45%)、授業への取り組み姿勢(10%)の合計で評価する。「授業への取り組み姿勢」については教員の主観的な評価も含まれる。

8. テキスト・参考文献

テキスト：小林直行、高橋康輝(2019) 競技者の外傷予防、医歯薬出版社

参考文献：Kisner & Collby (2016) 最新運動療法大全Ⅰ、第6版、ガイアブックス社

Kisner & Collby (2016) 最新運動療法大全Ⅱ、第6版、ガイアブックス社

Prentice (1999) Rehabilitation Techniques in Sports Medicine 3rd edition, McGraw-Hill

Houglum (2000) Therapeutic Exercise for Athletic Injuries, Human Kinetics

Voss, Ionta & Myers (1985) Proprioceptive Neuromuscular Facilitation 3rd edition, Lippincott Williams & Wilkins

Hedin (2012) PNF 原著第 2 版, 基本的手技と機能的訓練, 医歯薬出版

9. 受講上の留意事項

外傷予防トレーニング実習 I を履修し 70 点以上の評価を得ていることが望ましいが, そうでない場合も理解できるように説明する。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。MLB 球団はじめ, 国内外のスポーツチームにおける実務経験をもとに指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

フレッシュャーズゼミ A		演習	講師 清家 洋
科目カテゴリー	救急救命士コースの必修科目	科目ナンバリング	13130101

1. テーマ

救急医療、救急・救助、災害対応、その他救急救命士にかかわりのある幅広いテーマを取り扱う。

2. 授業のねらい・概要

このゼミでは、学生と教員が双方向の議論を通じて卒業後のキャリアビジョンを共に探求し、卒業後の社会生活に向けた準備を進めることを目的とする。救急救命士として社会で活躍するためには、救急活動に関する専門的技術力のみならず、高い人間性、論理的思考能力、コミュニケーションスキル等が不可欠である。本授業では、これらの能力の醸成を図るとともに、救急救命士免許取得に向けた基礎知識の習得にも焦点を当てる。

3. ゼミ計画

1. ガイダンス	9. プレゼンテーションの重要性
2. キャリアナビ①（座学）	10. 基礎学習②（人体の構造と機能②）
3. 基礎学習①（人体の構造と機能①）	11. グループワークとプレゼンテーションの方法
4. キャリアナビ②（面談：学生約 10 人）	12. 基礎学習③（人体の構造と機能③）
5. キャリアナビ③（面談：学生約 10 人）	13. グループ討議①（課題検討）
6. キャリアナビ④（面談：学生約 10 人）	14. グループ討議②（発表準備）
7. キャリアナビ⑤（面談：学生約 10 人）	15. 検討結果発表
8. 中間試験	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習・復習に、週 7 時間以上を要する。また、第 15 回目のゼミで行う「検討結果発表」に向けた諸準備に相当の時間を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

口頭や資料提示等により、個別または授業中の講義を通じて行う。

6. ゼミにおける学修の到達目標

救急救命士としてのキャリアデザインを考え、将来の目標を明確化する。また、救急救命士国家試験受験に向けた基礎を築く。

7. 成績評価の方法・基準

ゼミへの取り組み姿勢（30%）、中間試験の結果（30%）及び「検討結果発表」（40%）により成績評価を行う。

8. テキスト・参考文献

改訂第 10 版救急救命士標準テキスト
適宜指定する資料

9. 受講上の留意事項

3 分の 1 以上を欠席した場合は不合格とする。また、取り組み姿勢が著しく消極的であると認められた場合は教員が注意を行い、これを是正しない場合は、当該授業を欠席扱いとする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、公的機関等での実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

フレッシュャーズゼミ B		演習	講師 清家 洋
科目カテゴリー	救急救命士コースの必修科目	科目ナンバリング	13130102

1. テーマ

救急医療、救急・救助、災害対応、その他救急救命士にかかわりのある幅広いテーマを取り扱う。

2. 授業のねらい・概要

このゼミでは、学生と教員が双方向の議論を通じて卒業後のキャリアビジョンを共に探求し、卒業後の社会生活に向けた準備を進めることを目的とする。救急救命士として社会で活躍するためには、救急活動に関する専門的技術力のみならず、高い人間性、論理的思考能力、コミュニケーションスキル等が不可欠である。本授業では、これらの能力の醸成を図るとともに、救急救命士免許取得に向けた基礎知識の習得にも焦点を当てる。

3. ゼミ計画

1. ガイダンス	9. 論理的思考の重要性
2. キャリアナビ⑥（全体討議）	10. 基礎学習⑤（人体の構造と機能⑤）
3. 基礎学習④（人体の構造と機能④）	11. グループワークとプレゼンテーションの方法
4. キャリアナビ⑦（面談：学生約 10 人）	12. 基礎学習⑥（人体の構造と機能⑥）
5. キャリアナビ⑧（面談：学生約 10 人）	13. グループ討議③（課題検討）
6. キャリアナビ⑨（面談：学生約 10 人）	14. グループ討議④（発表準備）
7. キャリアナビ⑩（面談：学生約 10 人）	15. 検討結果発表
8. 中間試験	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習・復習に、週 7 時間以上を要する。また、第 15 回目のゼミで行う「検討結果発表」に向けた諸準備に相当の時間を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

口頭や資料提示等により、個別または授業中の講義を通じて行う。

6. ゼミにおける学修の到達目標

救急救命士としてのキャリアデザインを考え、将来の目標を明確化する。また、救急救命士国家試験受験に向けた基礎を築く。

7. 成績評価の方法・基準

ゼミへの取り組み姿勢（30%）、中間試験の結果（30%）及び「検討結果発表」（40%）により成績評価を行う。

8. テキスト・参考文献

改訂第 10 版救急救命士標準テキスト
適宜指定する資料

9. 受講上の留意事項

3 分の 1 以上を欠席した場合は不合格とする。また、取り組み姿勢が著しく消極的であると認められた場合は教員が注意を行い、これを是正しない場合は、当該授業を欠席扱いとする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、公的機関等での実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

解剖学		講義	教授 加藤 政彦	
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門基礎分野	科目ナンバリング	13311101	

1. 授業のねらい・概要

医学の基礎である人体の構造を、マクロで観た人体の成り立ちや構造と、ミクロで観た各器官の成り立ちや構造の方面から理解する。加えて、正常な器官の生理機能も学修する。

2. 授業の進め方

テキストの範囲の内容を、適宜、スライドと配布資料を用いて授業する。基礎医学分野の科目となるため、より理解を深めるよう、適宜、器官の模型・生体・画像などを使用した説明を行う。

3. 授業計画

1. 人体を構成する要素 人体の位置、方向、運動に関連する用語、体表から見た構造と名称について理解する。 解剖の種類・組織・細胞の構成・細胞小器官について理解を深める。 2. 体表からみる人体の構造 人体を構成する4つの組織（上皮組織・支持組織・筋組織・神経組織）について理解する。 3. 神経系 人の思考・感情や恒常性の維持を司る、「神経系」の構造・機能を理解し、重要性の理解を深める。 4. 感覚系 器官の役割・構造・機能を理解する。 5. 呼吸器系 人の生命維持に不可欠な「呼吸系」に属する臓器・構造・機能を理解する。 6. 循環器系 人の生命維持に不可欠な「循環系」に属する臓器・構造・機能を理解し、呼吸系との関連性についても理解を深める。 7. 消化器系①（胃・十二指腸・大腸） 8. 消化器系②（肝・胆・膵） 人が日常活動するために必要なエネルギーを食物から得て、消化し分解する、「消化系」に焦点を当て、属する臓器の構造・機能を理解する。	9. 泌尿器系 人体内で代謝され生じた老廃物を排泄する、「泌尿系」に属する器官の構造・機能を理解する。 10. 生殖系 生殖系に属する器官の役割・構造・機能について理解する。 11. 内分泌系 内分泌の役割・構造・機能を理解する。また、ホルモンについても理解を深める。 12. 血液系 器官に含まれている成分や機能について理解し、循環器系との関係性についても理解を深める。 13. 免疫系 免疫系の役割・構造・機能について理解し、液性免疫・細胞性免疫の違いについても理解を深める。 14. 筋・骨格系、皮膚系 動作に関係する組織や器官の役割・構造・機能、皮膚の役割・構造・機能・機能について理解する。 15. まとめ 第1回～14回までのまとめと確認試験を行う。
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、テキストと配布資料を使って復習しておく。さらに、授業の最後に出された問題を復習しておく。この問題は次回の授業の初めに解答を解説する。なお、これらの準備学習には90分以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回、過去に実施された国家試験の問題を実践解答させる。問題解答の際、また定期試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 人体の構造と機能を理解する。
- 2) 心身の発達に関する知識を系統的に修得する。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（30%）、定期試験（70%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト：五味敏昭，岸 清 編，解剖学 改訂3版，中外医学社，2018年

救急救命士標準テキスト編集委員会，救急救命士標準テキスト 改訂第10版，へるす出版，2020年

参考文献：小関一英編，2023年版救急救命士国家試験対策出題分野別国試験問題・解説集，晴れ書房，2022年
適宜指定する教材

テキストは毎回の授業に必ず持参すること。また，参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

欠席回数が全講義回数¹の3分の1（6回）以上となった場合には受験資格を失う。

遅刻，欠席ならびに授業中の私語，許可の無い教室の出入り，授業に関係ない言動は慎むこと。

自然科学・高校の生物学の履修しておくことが望ましい。

本科目の単位を取得してからでないと，専門分野への履修申請を行うことができない科目がある。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。医療機関における医師としての実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

救急医療行政		講義	教授 千明 政好
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	133301

1. 授業のねらい・概要

本授業は、社会保障・社会福祉と医療体制の仕組み・問題点・課題点の理解を深めるとともに、救急救命士としての関わりを探究する。

2. 授業の進め方

テキストに加え、授業内容に沿った動画や資料を活用して説明を行うとともに、グループワークなどのアクティブラーニングによる授業展開を行う。

3. 授業計画

1. 社会保障・社会福祉の概要 わが国の社会保障・社会福祉の概要を把握する。 2. 社会保障とその仕組み わが国の社会保障とその理念、社会保障制度、社会保障給付費の現状・将来の見通し等について理解を深める。 3. 社会保険制度 わが国の医療保険制度、介護保険制度、年金保険制度について理解を深める。 4. 社会福祉と公的扶助（国家扶助） わが国の社会福祉の仕組みと「国家扶助」について理解を深める。 5. 社会福祉と公的扶助（児童福祉） わが国の社会福祉の仕組みと「児童福祉」について理解を深める。 6. 社会福祉と公的扶助（高齢者福祉・障害者福祉） わが国の社会福祉の仕組みと「高齢者福祉」・「障害者福祉」について理解を深める。 7. 医療行政（医療供給体制） わが国の医療供給体制について理解を深める。 8. 医療行政（医療機関） わが国の医療機関の仕組みと現状・将来の見通しについて理解を深める。	9. 医療行政（救急医療） 医療計画の一つである「救急医療」についての理解を深める。 10. 医療行政（災害医療） 医療計画の一つである「災害医療」についての理解を深める。 11. 医療行政（へき地医療・周産期医療・精神科医療） 医療計画の一つである「へき地医療」・「周産期医療」・「精神科医療」についての理解を深める。 12. 医療行政（地域医療構想） 地域医療構想の進め方について、グループ単位での検討を行う。 13. 医療行政（群馬県における現状と課題） 群馬県における医療行政の現状と課題について理解を深める。 14. 医療行政（発表会） 一連の授業の内容を踏まえてスライド資料を取りまとめ、グループ単位で口頭発表を行う。 15. 医療従事者・総括 医師、看護師、救急救命士等の医療従事者について理解を深めるとともに、我が国の社会保障・社会福祉と医療体制における問題点・課題点に対して救急救命士がいかに関わるべきかについて考察を行い、一連の授業の総括を行う。
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

1) 予習（50分）

適宜提示する事項について事前学習・課題作成を行い、授業時に提出する。

2) 復習（40分）

授業内容の振り返りを行い、授業で使用了資料の整理等を行う。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

口頭や資料提示等により、個別または授業中の講義を通じて行う。

6. 授業における学修の到達目標

わが国の社会保障・社会福祉と医療体制の仕組み・問題点・課題点について正しく理解し、その問題点・課題点に対して救急救命士がいかに関わるべきかについて、探求し続ける資質を身に付ける。

7. 成績評価の方法・基準

成績評価は、課題の提出状況（20%）、授業への取り組み姿勢・発表力・質疑への応答力（20%）、課題レポートの内容（60%）により総合的に行う。

8. テキスト・参考文献

改訂第10版救急救命士標準テキスト（へるす出版）
適宜指定する資料

9. 受講上の留意事項

本科目は、本コースの全学生が履修しなければならない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、救急医療行政に関わる公的機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

医学概論		講義	教授 加藤 政彦
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門分野科目	科目ナンバリング	13341101

1. 授業のねらい・概要

本授業は、これまでの医学や医療の歴史を通して、医学とは何かを理解し、人の生、自己意思、命の尊さ、研究倫理や死の概念といった生命倫理についても理解を深め、さらに医学分野に特化した健康と病気の定義、予防医学や最新の医学についても理解する。

2. 授業の進め方

テキストの範囲の内容を、適宜、スライドと配布資料を用いて授業する。授業の最後に最近の国家試験問題等を出題し解答を出席カードに記載して提出させる。テキストの内容に沿った講義形式を基本とするが、随時、新聞・雑誌の記事などから具体的な出来事を取り上げて診療の現場に即した説明も行う。

3. 授業計画

1. 医学とは何か 医学概論についての理解を深める。 2. 近代医学 人と病気の関連性を理解し、近年医学における概要や位置づけについて理解を深める。 3. 医療の倫理学 医学や医療に携わる上で必要となる倫理観についての理解を深める。 4. 先天異常と出生前診断 先天異常と出生前診断について理解し、生命の誕生に関する諸問題を深める。 5. 子供の事故 子供の事故の現状を理解し、その問題点について理解を深める。 6. 小児の虐待 小児の虐待の現状と救急隊員が関わる意義について学習する。 7. 小児の感染症 小児に特有の感染症について理解する。 8. 小児救急 小児の救急疾患と、その対応について理解を深める。	9. 緩和医療と安楽死 終末期医療の実際と尊厳死・安楽死について理解し、人の「生」と「死」についての倫理観について理解を深める。 10. 血液事業と輸血 本邦の献血から輸血までの流れを理解し、その意義について理解する。 11. 予防医学 ワクチンによる感染症予防について学習する。 12. 脳死・臓器移植 植物状態と脳死の違いや、臓器移植に伴う法律や実施手順を理解する。特に、救急現場での臓器移植についての理解を深める。 13. 周産期・新生児医療 周産期および新生児医療についての理解を深める。 14. アレルギー・免疫 アレルギー・免疫疾患とその救急対応について学習する。 15. 現代医学 新興感染症・がん・最新医学（iPS細胞等）の現況を学ぶ。
---	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、テキストと配布資料を使って復習しておく。さらに、授業の最後に出された問題を復習しておく。この問題は次回の授業の初めに解答を解説する。なお、これらの準備学習には90分以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回、過去に実施された国家試験の問題を実践解答させる。問題解答の際、また定期試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 医学の歴史から、人と病気の関連性を理解する。
- 2) 予防医学の観点から、現代における「健康と病気の定義」について理解する。
- 3) 「ヒポクラテスの誓い」に提言されている内容から、様々な生命倫理学の諸問題を理解する。
- 4) 人の「死」という概念を医学的に理解できる。
- 5) 人の命や健康を重んじた言動や行動が、「救急処置演習や実習」で実施できるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（30%）、定期試験（70%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト： 北村 諭著，医学概論 改訂7版，中外医学社，2020年

救急救命士標準テキスト編集委員会，救急救命士標準テキスト 改訂第10版，へるす出版，2020年

参考文献： 小関一英編，2023年版救急救命士国家試験対策出題分野別国試験問題・解説集，晴れ書房，2022年
適宜指定する教材

テキストは毎回の授業に必ず持参すること。また，参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

欠席回数が全講義回数の3分の1（6回）以上となった場合には受験資格を失う。

遅刻，欠席ならびに授業中の私語，許可の無い教室の出入り，授業に関係ない言動は慎むこと。

医学系授業の基礎となり，医療従事者であれば常に考え，身につけなければならない学習内容である。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。医療機関における医師としての実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

救急処置演習 A-I		演習	准教授 古川 慎太郎 講師 清家 洋
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門分野	科目ナンバリング	13391101

1. 授業のねらい・概要

本授業は、人の命の尊さや大切さを理解するとともに応急処置要領を修得し、災害現場や救護ボランティア現場において即戦力となる人材を養成することをねらいとする。

2. 授業の進め方

応急処置に関する知識と技術を確実に修得させるために、シミュレーション型実技訓練に重点を置いて演習を展開する。また、座学を並行して行い、演習に必要な知識の修得を図る。

3. 授業計画

1. オリエンテーション 教員紹介、授業進行、班編成、実習室の使い方、規律、団体行動の必要性 救急救命士の役割と将来像・応急手当の目的について 2. 環境観察 河川、運動場、道路など実際に赴き、環境観察の要点を理解する。 3. 環境観察～傷病者観察 環境観察・傷病者観察に必要な知識・技術を習得する。 4. 環境観察要領、傷病者観察要領 訓練人形を用いて心肺蘇生法(BLS・成人)質の評価をし、技術を習得する。 5. 感染対策、小児・乳児の蘇生について理解する。 6. 人工呼吸ポケットマスク・BVM の取り扱い 人工呼吸を含めた心肺蘇生法(BLS・小児・乳児)質の評価を行う。 7. AED の種類・除細動と蘇生について理解する。 8. 心肺蘇生法一連の活動のスキルチェックを行う。 9. 救急要請～口頭指導(心肺停止・急病人)について理解する。 10. 窒息を疑う場合の取りつき方法(成人・小児・乳児) 気道異物、手動的異物除去：腹部突き上げ法、背部叩打法、胸部突き上げ法を習得する。 11. 気道の解剖、接触～気道確保・初期評価について理解する。 12. 傷病者への取りつき・外見の評価と気道に関する観察について習得する。 13. 循環・意識について理解する。 14. 傷病者への取りつき・循環に関する観察と意識状態に関する観察 皮膚の状態と体温に関する観察を習得する。 15. 第1回～14回までの実技確認試験	16. 第1回～14回までの筆記試験 17. 現場活動者の情報共有について理解する。 18. 外傷傷病者への取りつき・状況評価と安全確保 軽症傷病者へのアプローチ：直接圧迫止血三角巾と間接止血ターニケットを習得する。 19. 外傷傷病者に対するアプローチと創傷処置について理解する。 20. 創部の観察と三角巾を用いた被服止血を習得する。 21. 骨折固定処置・災害時に活用できるものについて理解する。 22. 骨折の固定法・シーネを用いた上肢の固定、三角巾を用いた上肢の固定を習得する。 23. 救急要請と口頭指導(ケガの応急手当)について理解する。 24. 外傷傷病者への取りつき・受傷機転の把握 骨折の固定法、シーネを用いた下肢の固定について理解する。 25. スポーツ現場・日常生活で起こる外傷に対する初期評価と頸椎保護について理解する。 26. 外傷傷病者への取りつき・初期評価と頸椎保護、ネックカラーによる頸椎固定を習得する。 27. 全身固定について理解する。 28. 外傷傷病者への取りつき・バックボードの特性について、バックボードを利用した全身固定を習得する。 29. 第17回～28回までの実技確認試験 30. 第17回～28回までの筆記試験
--	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

カリキュラムに応じた予習・復習内容（課題レポート、小テストの見直し、ノート整理）を適宜提示する。これには週3時間以上を要する。実技については、次の授業までに訓練し修得する。これには相当数の時間を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

1) 小テスト

誤った問題についてはレポートにまとめ、次の授業時に提出しフィードバックを行う。

2) 課題

- a) 教員は学生が提出した課題を評価し、フィードバックを行う。
- b) 課題で重要な部分は、次の授業始めにその内容を口頭で説明する。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 救急救命士資格を目指す学生として、倫理感・規律・礼儀を身につける。
- 2) 救急現場の「危険」と「安全」を理解し、危険時には正しい判断ができる。
- 3) 応急処置の実施方法を理解する。

7. 成績評価の方法・基準

成績評価の基準として、処置により病態の改善を予見するなど適切な思考判断を下し得る知力、技術の獲得ができたかを以下の方法で評価する。

1) 成績評価項目

- a) 事前の授業の準備と理解の評価
- b) 授業態度・主体的な授業への取り組みと講義の理解度の評価
- c) 授業後の内容の整理と課題の提出の評価
- d) 講義内容の理解度を試験で検討

2) 成績評価の方法

- a) 授業内容の整理・提出（20%）
 - イ 事前の授業の準備と理解
 - ロ 授業態度・主体的な授業への取り組み姿勢
- b) 実技試験
 - イ 受験資格として80%以上の出席かつ、全ての課題が期限までに提出され合格している事が必要である。
 - ロ 可否を判定する。不合格のまま単位が出されることはない。
 - ハ 追試験の該当・手続きについては履修要項を参照し（但し追試験料は不要）、該当しない欠席については試験放棄とみなす。
 - ニ 再試験は必要に応じて1回のみ実施する（但し再試験料は不要）。
- c) 筆記試験（80%）
 - イ 受験資格として80%以上の出席かつ、全ての課題が期限までに提出され合格している事が必要である。
 - ロ 中間試験は必要に応じて実施する。
 - ハ 中間試験・期末試験結果それぞれの点数の60%以上を合格とする。
 - ニ 追試験の該当・手続きについては履修要項を参照し、該当しない欠席については試験放棄とみなす。
 - ホ 再試験は、中間試験・期末試験それぞれ必要に応じて1回のみ実施し、60%以上を合格とする。
 - ヘ 再試験の手続きについては履修要項を参照。

8. テキスト・参考文献

改訂第10版 救急救命士標準テキスト（へるす出版）

改訂6版 救急蘇生法の指針2020 市民用・解説編（へるす出版）

適宜指定するテキスト

9. 受講上の留意事項

- 1) 医学系授業の基礎となり、医療従事者であれば常に考え、身につけなければならない学習内容である。
- 2) 救急救命士としての資質を習得するために必要な団体行動、集団生活における時間管理・規律、礼儀、倫理感を養う。
- 3) 以下に該当する場合は、退出を命じ当日授業を欠席扱いとする。
 - a) 実習に相応しい身だしなみ（アイロンがけした制服、黒色または紺色の T シャツ、黒色または紺色の靴下、汚れていない内履、及び名札の着用）が履行できない場合。
 - b) 長い爪、髭、過度に明るく染色した頭髪、アクセサリーの着用等、社会通念上医療従事者として救急活動に従事する上で、相応しくないと認められる場合。
 - c) 使用するテキストや資料、個人資器材（腕時計、聴診器、ペンライト、ゴーグル）、その他授業に持参するよう指示した物品を忘れた場合。
 - d) スマートフォンなど音の出る電子機器については、電源を切ることを原則とし、これに従わない場合。
 - e) 居眠りや落ち着きのない言動等、授業の円滑な進行を妨げると教員が判断した場合。
 - f) 授業開始 10 分前までに事前連絡がない遅刻、及び 30 分以上の遅刻。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、公的機関等における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

蘇生処置演習		演習	准教授 古川 慎太郎 講師 清家 洋
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門分野	科目ナンバリング	13391102

1. 授業のねらい・概要

本授業は、人の命の尊さや大切さを理解するとともに応急処置要領を修得し、災害現場や救護ボランティア現場において即戦力となる人材を養成することをねらいとする。

2. 授業の進め方

応急処置に関する知識と技術を確実に修得させるために、シミュレーション型実技訓練に重点を置いて演習を展開する。また、座学を並行して行い、演習に必要な知識の修得を図る。

3. 授業計画

1. ガイダンス・意識のある傷病者へのアプローチとバイタル測定について理解する。	16. 第1回～14回までの筆記試験
2. 初期評価、ABCDアプローチを習得する。	17. 経鼻エアウェイ・経口エアウェイを使用する際に必要な知識・気道の解剖について理解する。
3. 聴診器の使用方法について理解する。	18. 酸素ボンベ、酸素投与の取り扱いについて理解を深める。
4. バイタル測定：SpO ₂ 、体温、瞳孔（ペンライトの取り扱い）を習得する。	19. 消防における救急業務について理解する。
5. 心電図と心音、呼吸音について理解する。	20. 器具を用いた気道確保（経鼻エアウェイ・経口エアウェイ）を習得する。
6. 血圧の測定、自動、手動を取得する。	21. 異物除去、吸引器について理解する。
7. 体位管理の重要性について理解する。	22. スキルチェックスキルチェック（経鼻エアウェイ・経口エアウェイ）を行う。
8. 心電図の測定方法、呼吸音・心音の聴診を習得する。	23. 喉頭鏡・マギール鉗子を用いた異物除去について理解する。
9. 搬送方法（ボディメカニクス）について理解する。	24. 口腔内確認要領（指拭）、電動式吸引器を用いた異物除去を習得する。
10. 問診、体位管理について習得する。	25. チームビルディングの重要性について理解する。
11. 傷病者への接遇について理解する。	26. 器具を用いた異物除去要領 喉頭鏡とマギール鉗子を用いた異物除去を習得する。
12. 徒手搬送：1人での搬送法、2人での搬送法を習得する。	27. 救急隊活動におけるコミュニケーションについて理解する。
13. 様々なボランティアと救急救命士養成課程学生に求められる知識と技術について理解する。	28. 救急隊活動：異物窒息に対する活動を習得する。
14. 意識がある傷病者へのアプローチを習得する。	29. 第17回～28回までの実技確認試験
15. 第1回～14回までの実技確認試験	30. 第17回～28回までの筆記試験

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

カリキュラムに応じた予習・復習内容（課題レポート、小テストの見直し、ノート整理）を適宜提示する。これには週3時間以上を要する。実技については、次の授業までに訓練し修得する。これには相当数の時間を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

1) 小テスト

誤った問題についてはレポートにまとめ、次の授業時に提出しフィードバックを行う。

2) 課題

- 教員は学生が提出した課題を評価し、フィードバックを行う。
- 課題で重要な部分は、次の授業始めにその内容を口頭で説明する。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 生体の死に至る機構を理解し、説明できる。
- 2) 蘇生に必要な解剖学的な知識を取得し、説明できる。
- 3) 死に至る病態について理解し、説明できる。
- 4) 蘇生に必要な病態生理について理解し、説明できる。
- 5) BLS, ALS について説明できる。
- 6) 心肺蘇生の意義について説明できる。

7. 成績評価の方法・基準

成績評価の基準として、処置により病態の改善を予見するなど適切な思考判断を下し得る知力、技術の獲得ができたかを以下の方法で評価する。

1) 成績評価項目

- a) 事前の授業の準備と理解の評価
- b) 授業態度・主体的な授業への取り組みと講義の理解度の評価
- c) 授業後の内容の整理と課題の提出の評価
- d) 講義内容の理解度を試験で検討

2) 成績評価の方法

- a) 授業内容の整理・提出（20%）
 - イ) 事前の授業の準備と理解
 - ロ) 授業態度・主体的な授業への取り組み姿勢
- b) 実技試験
 - イ) 受験資格として 80%以上の出席かつ、全ての課題が期限までに提出され合格している事が必要である。
 - ロ) 合格を判定する。不合格のまま単位が出されることはない。
 - ハ) 追試験の該当・手続きについては履修要項を参照し（但し追試験料は不要）、該当しない欠席については試験放棄とみなす。
 - ニ) 再試験は必要に応じて1回のみ実施する（但し再試験料は不要）。
- c) 筆記試験（80%）
 - イ) 受験資格として 80%以上の出席かつ、全ての課題が期限までに提出され合格している事が必要である。
 - ロ) 中間試験は必要に応じて実施する。
 - ハ) 中間試験・期末試験結果それぞれの点数の 60%以上を合格とする。
 - ニ) 追試験の該当・手続きについては履修要項を参照し、該当しない欠席については試験放棄とみなす。
 - ホ) 再試験は、中間試験・期末試験それぞれ必要に応じて1回のみ実施し、60%以上を合格とする。
 - ヘ) 再試験の手続きについては履修要項を参照。

8. テキスト・参考文献

改訂第 10 版救急救命士標準テキスト(へるす出版)

改訂 6 版 救急蘇生法の指針 2020 市民用・解説編(へるす出版)

適宜指定するテキスト

9. 受講上の留意事項

- 1) 医学系授業の基礎となり、医療従事者であれば常に考え、身につけなければならない学習内容である。
- 2) 救急救命士としての資質を習得するために必要な団体行動、集団生活における時間管理・規律、礼儀、倫理感を養う。
- 3) 以下に該当する場合は、退出を命じ当日授業を欠席扱いとする。
 - a) 実習に相応しい身だしなみ（アイロンがけた制服、黒色または紺色の T シャツ、黒色または紺色の靴下、汚れていない内履、及び名札の着用）が履行できない場合。
 - b) 長い爪、髭、過度に明るく染色した頭髮等、社会通念上医療従事者として救急活動に従事する上で、相応しくないと認められる場合。

- c) 使用するテキストや資料，個人資器材（腕時計，聴診器，ペンライト，ゴーグル），その他授業に持参するよう指示した物品を忘れた場合。
- d) スマートフォンなど音の出る電子機器については，電源を切ることを原則とし，これに従わない場合。
- e) 居眠りや落ち着きのない言動等，授業の円滑な進行を妨げると教員が判断した場合。
- f) 授業開始 10 分前までに事前連絡がない遅刻，及び 30 分以上の遅刻。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は，公的機関等における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

救助学演習		演習	教授 加古 嘉信 講師 古川 慎太郎
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門分野科目	科目ナンバリング	13391103

1. 授業のねらい・概要

救助活動に必要な基礎知識・技術，協調性，判断力，行動力等を修得することをねらいとする。

2. 授業の進め方

屋外または屋内での実動訓練を中心に授業を展開する。授業への取り組み姿勢に応じたグループ分けを行い，安全かつ効率的な授業展開を行う。なお，安全管理や部隊活動に係る留意事項について繰り返し指摘される学生については，危険を伴う訓練には参加させない（見学のみとする）。

3. 授業計画

1. オリエンテーション（授業の目的・進め方）	16. 降下①（座席懸垂：基本反復①）
2. 救助資器材の特徴①（安全帯）	17. 降下②（座席懸垂：基本反復②）
3. 救助資器材の特徴②（担架）	18. 降下③（座席懸垂：基本反復③）
4. 救助資器材の特徴③（はしご）	19. 降下④（座席懸垂：基本反復④）
5. 救助資器材の特徴④（情報通信機器）	20. 降下⑤（座席懸垂：基本反復⑤）
6. 救助活動の力学①（ロープ・スリング）	21. 要救助者へのアプローチ・搬送①（留意事項）
7. 救助活動の力学②（摩擦）	22. 要救助者へのアプローチ・搬送②（高低差①）
8. 救助活動の力学③（倍力：基本）	23. 要救助者へのアプローチ・搬送③（高低差②）
9. 救助活動の力学④（倍力：応用）	24. 要救助者へのアプローチ・搬送④（高低差③）
10. 救助活動の力学⑤（てこ）	25. 要救助者へのアプローチ・搬送⑤（閉鎖空間①）
11. ロープの設定①（支持点・支点の作成）	26. 要救助者へのアプローチ・搬送⑥（閉鎖空間②）
12. ロープの設定②（懸垂ロープの設定）	27. 要救助者へのアプローチ・搬送⑦（閉鎖空間③）
13. 確保①（確保の目的と基本要素）	28. 想定訓練①（高低差）
14. 確保②（確保の実践①）	29. 想定訓練②（閉鎖空間）
15. 確保③（確保の実践②）	30. 想定訓練③（総合）

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

適宜提示する事項に関する事前学習，授業内容の振り返り，資料整理，自主練習等を行う必要があり，各授業につき90分程度を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

口頭や資料提示等により，個別または授業中の講義を通じて行う。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 救助活動における安全管理の重要性について理解を深め，現場活動に必要な基本知識・技術を習得する。
- 2) 部隊活動を行う上で不可欠な規律を身に付ける。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（60％）および第28～30回の授業で実施する想定訓練における活動状況（40％）により評価する。
なお，平常点は，授業態度・積極性・協調性・判断力・行動力等を踏まえて総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

適宜指定する資料

9. 受講上の留意事項

本科目は、本コースの全学生が履修しなければならない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、公的救助機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

災害マネジメント演習		演習	教授 加古 嘉信 講師 古川 慎太郎
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門分野科目	科目ナンバリング	13391104

1. 授業のねらい・概要

災害に備え、また発災時に迅速・的確に対応するためには、P（計画）・D（訓練）・C（評価）・A（改善）サイクルを意識した取り組みの推進が重要である。本授業では、災害による被害の軽減を主眼としたPDCAサイクルの意義を体感的に理解し、またその実践方策を修得することをねらいとする。本授業を受講した学生が将来、わが国における防災・減災に関する取り組み推進の中心的存在として活躍することを目指す。

2. 授業の進め方

過去の災害の実例等を踏まえ、グループワークやシミュレーション訓練を中心としたアクティブラーニングによる授業展開を行う。授業への取り組み姿勢に応じたグループ分けを行い、安全かつ効率的に授業を展開する。なお、安全管理や部隊活動に係る留意事項について繰り返し指摘される学生については、危険を伴う訓練には参加させない（見学のみとする）。

3. 授業計画

1. オリエンテーション（授業の目的・進め方）	16. 災害対応オペレーションの実践①（参集・立ち上げ）
2. 災害マネジメント概論	17. 災害対応オペレーションの実践②（情報収集）
3. 災害現場におけるマネジメント①（基本的考え方）	18. 災害対応オペレーションの実践③（情報分析）
4. 災害現場におけるマネジメント②（指揮階層）	19. 災害対応オペレーションの実践④（情報共有）
5. 災害現場におけるマネジメント③（指揮統制）	20. 災害対応オペレーションの実践⑤（記録）
6. 災害現場におけるマネジメント④（連絡調整）	21. 災害対応オペレーションの実践⑥（資料化）
7. 災害現場におけるマネジメント⑤（安全管理）	22. 災害対応オペレーションの実践⑦（リソース配置）
8. 災害現場におけるマネジメント⑥（情報伝達）	23. グループ討議①（災害対応オペレーションの課題）
9. 災害現場におけるマネジメント⑦（状況評価）	24. グループ討議②（①により抽出した課題への対策）
10. 災害現場におけるマネジメント⑧（総合）	25. 避難所運営①（基本機能と運営上の留意事項）
11. 災害対応オペレーションの基本①（構成要素）	26. 避難所運営②（図上演習）
12. 災害対応オペレーションの基本②（情報収集・分析）	27. 総合演習①（ブロンズエリア）
13. 災害対応オペレーションの基本③（情報共有・記録）	28. 総合演習②（シルバーエリア）
14. 災害対応オペレーションの基本④（資料化）	29. 総合演習③（ゴールドエリア）
15. 災害対応オペレーションの基本⑤（リソース配置）	30. 総合演習④（総括）

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

適宜提示する事項に関する事前学習，授業内容の振り返り，資料整理，自主練習等に週 90 分以上を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

口頭や資料提示等により，個別または授業中の講義を通じて行う。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 災害対策におけるPDCAサイクルの意義・重要性について理解を深める。
- 2) 災害発生時における指揮統制・連絡調整，情報伝達，状況評価のあり方について理解を深める。
- 3) 災害現場における安全管理の重要性について理解を深める。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（60％）および第 27 回～第 30 回の授業で実施する総合演習における活動状況（40％）により評価する。
なお，平常点は，授業態度・積極性・協調性・判断力・行動力等を踏まえて総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

適宜指定する資料

9. 受講上の留意事項

本科目は、本コースの全学生が履修しなければならない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、公的救助機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

救助・防災演習①		演習	教授 加古 嘉信 講師 古川 慎太郎
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門分野科目	科目ナンバリング	13391105

1. 授業のねらい・概要

救助・防災活動を行うための基礎知識・技術、規律、協調性、判断力、行動力等を修得することをねらいとする。

2. 授業の進め方

屋外または屋内での実動訓練を中心に授業を展開する。授業への取り組み姿勢に応じたグループ分けを行い、安全かつ効率的な授業展開を行う。なお、安全管理や部隊活動に係る留意事項について繰り返し指摘される学生については、危険を伴う訓練には参加させない（見学のみとする）。

3. 授業計画

1. オリエンテーション（授業の目的・進め方）	9. 救助用ロープ等の基礎知識
2. 規律訓練①（礼式の基本）	10. ロープ結索の基本①（結合・結節）
3. 規律訓練②（編成・隊形・整頓）	11. ロープ結索の基本②（結着）
4. 規律訓練③（停止間の動作）	12. 要救助者へのアプローチ・搬送①（基本的留意事項）
5. 規律訓練④（行進間の動作）	13. 要救助者へのアプローチ・搬送②（高低差）
6. 規律訓練⑤（方向変換・隊形変換等）	14. 想定訓練①（高低差）
7. 規律訓練⑥（総合）	15. 想定訓練②（総合）
8. 効果測定	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

適宜提示する事項に関する事前学習、授業内容の振り返り、資料整理、自主練習等を行う必要があり、各授業につき90分程度を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

口頭や資料提示等により、個別または授業中の講義を通じて行う。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 救助・防災活動における安全管理の重要性について理解を深め、現場活動に必要な基本知識・技術を習得する。
- 2) 救助・防災活動を行う上で不可欠な規律を身に付ける。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（60%）および第14回・第15回の授業で実施する想定訓練における活動状況（40%）により評価する。
なお、平常点は、授業態度・積極性・協調性・判断力・行動力等を踏まえて総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

適宜指定する資料

9. 受講上の留意事項

本科目は、本コースの全学生が履修しなければならない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、公的救助機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツ実技(水難救助)		実習	教授 古川 慎太郎
科目カテゴリー	救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	13220110

1. 授業のねらい・概要

水難事故の危険性を正しく理解し、特に、静水域（プール）における危険予測、自己防衛法（セルフレスキュー）、救助方法（バイスタンダーレスキュー）を理解・習得し、他機関との連携要領を理解する。初歩的な安全管理知識・技術、救助知識・技術の修得を図る。

2. 授業の進め方

各種泳法の修得、各種救助法の修得、各種処置要領の修得のための座学を行い、プール環境にて実技を行う。

3. 授業計画

1. 水難事故総論 水難救助実習の目的、水難事故概要、件数、要因、バディシステムについて 2. 水難事故におけるチェーンオブサバイバル 予防、早期通報、救助、一次救命処置、二次救命処置 3. 公的機関による水難救助について クロール・平泳ぎについて 4. 基本泳法 背泳ぎ、エレメンタリーバックストロークについて 5. セルフレスキュー サバイバルフローティング、背浮きについて 6. セルフレスキュー スカーリング、立ち泳ぎについて 7. 着衣泳法・PFD 着脱要領 8. バイスタンダーレスキュー レベル1 要領について、リーチングアシスト、スローイングアシスト	9. バイスタンダーレスキュー レベル2 要領について、入水法、水中歩行 10. 水中での頸椎保護 スパイナルケア：EAR、バイスグリップ 11. 陸上及び水中での頸椎保護 受傷機転の確認、全身固定 12. 搬送要領 1 人法による搬送、複数人による搬送方法 13. 基本泳法実技試験 各種目 50m 完泳(クロール、背泳ぎ、平泳ぎ、エレメンタリーバックストローク) 14. セルフレスキュー セルフレスキュー(サバイバルフローティング、背浮き、スカーリング、立ち泳ぎ)5 分間 実技試験 15. 総合想定訓練・筆記試験 第1回～15 回の総復習をシミュレーション演習でまとめる
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

適宜提示する事項に関する事前学習、授業内容の振り返り、資料整理、自主練習等を行う必要があり、各授業につき 30 分～90 分程度を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

口頭や資料提示等により、個別または授業中の講義を通じて行う。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 水難救助活動における安全管理の重要性について理解を深める。
- 2) 静水域（プール）での救助活動を行う上で、必要となる基礎知識・技術を身に付ける。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（50％）および授業で実施する試験・想定訓練における活動状況（50％）により評価する。
なお、平常点は、授業態度・積極性・協調性・判断力・行動力等を踏まえて総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

改訂第 10 版 救急救命士標準テキスト(へるす出版)
適宜指定する資料

9. 受講上の留意事項

- 1) 安全管理の徹底を要する実技項目があるため、教員の指示に従って統率の取れた行動をとれる学生のみが受講すること。
- 2) 以下に該当する場合は、当日授業を欠席扱いとする。
 - a) 実習に相応しい身だしなみ（アイロンがけした制服，黒色または紺色の T シャツ，黒色または紺色の靴下，汚れていない内履，及び名札の着用）が履行できない場合。
 - b) 長い爪，髭，過度に明るく染色した頭髮，アクセサリーの着用等，社会通念上医療従事者として活動に従事する上で，相応しくないと認められる場合。
 - c) 使用するテキストや資料，個人資器材，その他授業に持参するよう指示した物品を忘れた場合。
 - d) スマートフォンなど音の出る電子機器については，電源を切ることを原則とし，これに従わない場合。
 - e) 居眠りや落ち着きのない言動等，授業の円滑な進行を妨げると教員が判断した場合。
 - f) 授業開始 10 分前までに事前連絡がない遅刻，及び 30 分以上の遅刻。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は，公的機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

簿記論		講義	准教授 岩下 尚義
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの選択 必修科目, スポーツトレーナーコースの専門選択科目	科目ナンバリング	11312102

1. 授業のねらい・概要

簿記論とは、会計学の中で、会計処理や手続きのルールを中心に学ぶ科目である。簿記の計算を身につけることで、ビジネスの言語とも呼ばれる「会計」の知識をより実践的なものにできる。なお、本授業は簿記の検定試験を直接対策するものではない。まず簿記の基本や考え方をじっくり身につけ、その後の検定試験やビジネス・実務の場で躓かないような「土台」を築くことを目的としている。

本授業では、初めて簿記を学ぶ学生を対象に、仕訳から決算書の作成までの一連の手続きをわかりやすく説明する。

2. 授業の進め方

テキストの内容に沿った講義形式を基本とするが、授業の進捗状況に応じて各回の授業内容が多少前後することがある。また、理解の定着を図るため、適宜、演習問題を解いていく。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. 決算整理 ①（棚卸）
2. 勘定科目と帳簿	10. 決算整理 ②（貸倒引当金）
3. 貸借対照表 ①（資産）	11. 決算整理 ③（減価償却）
4. 貸借対照表 ②（負債）	12. 決算整理 ④（経過勘定・その他）
5. 貸借対照表 ③（純資産）	13. 精算表の作成
6. 損益計算書 ①（収益）	14. 財務諸表の作成
7. 損益計算書 ②（費用）	15. まとめの演習
8. 試算表の作成	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回テキストの該当箇所を事前に読むことが望ましい。また、復習が大切である。簿記は「習うより慣れろ」とよく言われる。テキストやレジュメを読むだけでなく、実際に仕訳や計算を行い、手を動かす復習を心がけてほしい。これらの準備学修には2時間程度が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

簿記の一連の手続きを理解して、簡単な精算表や財務諸表が作成できるようにすることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

定期試験の結果（80%）及び授業への取り組み姿勢（20%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

テキストとして宇田川敏正著(2021)『改訂版 簿記の教科書 1年生』新星出版社を使用するほか、テキストの概要をまとめたレジュメを配付するので、毎回の授業に必ず持参すること。

なお、日商簿記3級以上を取得している学生は、配付するレジュメだけで十分だと考えられるため、テキストを購入する必要はない。

9. 受講上の留意事項

受講者は、毎回の授業に必ず電卓を持参すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、税理士としての実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

会計学基礎		講義	准教授 岩下 尚義	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの選択必修科目、スポーツトレーナーコースの専門選択科目	科目ナンバリング	11312103	

1. 授業のねらい・概要

会計は「ビジネスの共通言語」と呼ばれることがある。会計の世界を知ることが、会計学だけでなく経営学や社会経済の世界を知ることにも通じる。よって、本授業は会計に携わる職業を目指す人に限定せず、すべての学生を対象としている。会計学は簿記論や財務諸表論、管理会計や税務会計など、様々な専門分野があるが、本授業では初めて会計を学ぶ人を対象に、分野を限定せず、会計の世界の「全体像」を分かりやすく丁寧に説明する。

2. 授業の進め方

講義形式で行う。具体的には、テキストの内容に沿って、テキスト内容をまとめたレジュメを配布しながら実施する。また、実際にビジネスや社会で活用できる思考を構築するため、新聞・雑誌などから具体的な事象も取り上げる。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. 第7章 原価計算
2. 序章 会計を学ぼう	10. 第8章 業績管理会計
3. 第1章 財務諸表概論	11. 第9章 意思決定会計
4. 第2章 簿記	12. 第10章 税務会計
5. 第3章 貸借対照表の構造	13. 第11章 監査制度
6. 第4章 損益計算書の構造	14. 第12章 国際会計
7. 第5章 財務諸表分析①	15. 第13章 コンピュータ会計、まとめ
8. 第6章 財務諸表分析②	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回テキストの該当箇所を事前に読むことが望ましい。また、毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を復習しておくこと。これらの準備学修には1時間程度が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際は、解答のポイントや出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

会計の基本的な考え方や全体像を理解することを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

平常点 50%（授業への取組み姿勢など）および期末テストの結果 50%の割合で評価をする。

8. テキスト・参考文献

テキストは、鶴日二郎・山口幸三[編著]（2021）『はじめまして会計学』中央経済社を使用するほか、テキストの概要をまとめたレジュメを配布する。なお、本テキストは改訂される可能性があるが、授業では最新版を使用する。

9. 受講上の留意事項

本授業の内容は、会計学の出発点に該当する。毎回授業に参加することが本講義はじめ今後履修する会計学の各科目に関し、苦手意識を生まない対策になる。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、税理士としての実務経験も活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミ A		演習	准教授 八木 孝幸	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130301	

1. テーマ

経営学における諸理論の研究

2. ゼミのねらい・概要

入学以来、1 年次には『経営学基礎』を、2 年次には経営学関連の専門科目を履修したことのある学生諸君も多いことだろう。しかし、回数や時間が制限されている必修科目や専門選択科目といった講義を通じてでは経営学の諸理論について、その代表的な理論の概略説明だけで予定していた時間が終了してしまうことも多々ある。

そこで当ゼミでは、講義形式ではなくゼミ形式によって、「学生諸君に経営学についてより専門的に深く理解してもらおう」という意図の下で開講されるゼミである。なお、当ゼミ履修に関して特に制限はないが、『経営学基礎』の単位修得済みであることが望ましい。

3. ゼミ計画

ゼミ計画は概ね以下の通りであるが、所属ゼミ生の力量を見極めながら適宜計画の修正を行う予定である。

1. ガイダンス（履修指導など）	10. テキストの内容の解説とまとめ⑨（CSR）
2. テキストの内容の解説とまとめ①（市民生活と企業）	11. テキストの内容の解説とまとめ⑩（企業の利害関係者）
3. テキストの内容の解説とまとめ②（私企業と公企業）	12. テキストの内容の解説とまとめ⑪（人事異動）
4. テキストの内容の解説とまとめ③（株式会社制度）	13. テキストの内容の解説とまとめ⑫（コンフリクト・マネジメント）
5. テキストの内容の解説とまとめ④（企業統治）	14. テキストの内容の解説とまとめ⑬（企業組織と経営理念）
6. テキストの内容の解説とまとめ⑤（企業の組織構造）	15. 本ゼミの前期まとめ
7. テキストの内容の解説とまとめ⑥（日本的組織）	
8. テキストの内容の解説とまとめ⑦（経営戦略）	
9. テキストの内容の解説とまとめ⑧（企業の合併・買収）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

当ゼミではテキストを使用するので、各回ともゼミ計画を参考に事前に学習予定の箇所に対する 2 時間以上の予習を期待する。またゼミ終了後には、まとめを含めた学習内容の復習を 2 時間以上期待している。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

当ゼミでは、各回とも学習予定であるテキストの内容について解説を加えた後、用意した設問に解答する形でゼミ生自身の手でペーパーに要点をまとめてもらう予定である。なお、所属ゼミ生の人数にもよるが、後日、要点をまとめたペーパーを一旦提出してもらい、ゼミ担当教員が内容をチェックあるいは添削後、返却を行うこともある。

また当ゼミでは、ゼミ生の習熟度を測る目的で期末試験（あるいはレポート）を実施するが、後日、解答などを掲示板に掲示する予定である。

6. ゼミにおける学修の到達目標

社会人となった際に、企業社会のシステムや、取引先及び所属組織のメカニズムなどが容易に理解できる程度の専門知識修得を目標としている。

7. 成績評価の方法・基準

課題（定期試験やレポート等）の結果（50%）及びゼミに対する取り組み姿勢（50%）によって評価する。ただし、課題（定期試験やレポート等）の結果がゼミに対する取り組み姿勢の評価のいずれかが 59 点以下になった場合は、不可とする。

8. テキスト・参考文献

〈テキスト〉

小山巖也・出見世信之・谷口勇仁『問いからはじめる現代企業（有斐閣ストゥディア）』有斐閣，2018 年。

〈参考文献〉

必要に応じて適宜指示をする。

9. 受講上の留意事項

座席表作成の都合上，所属ゼミ生は初回より必ず出席のこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミB		演習	准教授 八木 孝幸	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130302	

1. テーマ

経営学における諸理論の研究

2. ゼミのねらい・概要

入学以来、1年次には『経営学基礎』を、2年次には経営学関連の専門科目を履修したことのある学生諸君も多いことだろう。しかし、回数や時間が制限されている必修科目や専門選択科目といった講義を通じてでは経営学の諸理論について、その代表的な理論の概略説明だけで予定していた時間が終了してしまうことも多々ある。

そこで当ゼミでは、講義形式ではなくゼミ形式によって、「学生諸君に経営学についてより専門的に深く理解してもらおう」という意図の下で開講されるゼミである。なお、当ゼミ履修に関して特に制限はないが、『経営学基礎』の単位が修得済みであることが望ましい。

3. ゼミ計画

ゼミ計画は概ね以下の通りであるが、所属ゼミ生の力量を見極めながら適宜計画の修正を行う予定である。

1. ガイダンス（履修指導など）	9. テキストの内容の解説とまとめ⑧（組織プロセス）
2. テキストの内容の解説とまとめ①（組織とは何か）	10. テキストの内容の解説とまとめ⑨（革新的人的資源）
3. テキストの内容の解説とまとめ②（組織の目的）	11. テキストの内容の解説とまとめ⑩（流動的環境における組織）
4. テキストの内容の解説とまとめ③（組織におけるコミュニケーション）	12. テキストの内容の解説とまとめ⑪（組織と環境）
5. テキストの内容の解説とまとめ④（組織における調整）	13. テキストの内容の解説とまとめ⑫（経営戦略と組織学習）
6. テキストの内容の解説とまとめ⑤（組織の貢献意欲）	14. テキストの内容の解説とまとめ⑬（組織とイノベーション）
7. テキストの内容の解説とまとめ⑥（合理的システムの設計）	15. 本ゼミの後期まとめ
8. テキストの内容の解説とまとめ⑦（自主的システムの創発）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

当ゼミではテキストを使用するので、各回ともゼミ計画を参考に学修予定の箇所に対する2時間以上の予習を期待する。またゼミ終了後には、まとめを含めた学修内容の復習を2時間以上期待している。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

当ゼミでは、各回とも学修予定であるテキストの内容について解説を加えた後、用意した設問に解答する形でゼミ生自身の手でペーパーに要点をまとめてもらう予定である。なお、所属ゼミ生の人数にもよるが、後日、要点をまとめたペーパーを一旦提出してもらい、ゼミ担当教員が内容をチェックあるいは添削後、返却を行うことも考えている。

また当ゼミでは、ゼミ生の習熟度を測る目的で期末試験（あるいはレポート）を実施するが、後日、解答例等を掲示板に掲示する予定である。

6. ゼミにおける学修の到達目標

社会人となった際に、企業社会のシステムや、取引先及び所属組織のメカニズムなどが容易に理解できる程度の専門知識修得を目標としている。

7. 成績評価の方法・基準

課題（定期試験やレポート等）の結果（50%）及びゼミに対する取り組み姿勢（50%）によって評価する。ただし、課題（定期試験やレポート等）の結果がゼミに対する取り組み姿勢の評価のいずれかが59点以下になった場合は、不

可とする。

8. テキスト・参考文献

〈テキスト〉

高尾義明『はじめての経営組織論（有斐閣ストゥディア）』有斐閣，2019 年。

〈参考文献〉

必要に応じて適宜指示をする。

9. 受講上の留意事項

座席表作成の都合上，所属ゼミ生は初回より必ず出席のこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミ A		演習	教授 柳澤 修
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130301

1. テーマ

自然科学や社会科学のアプローチを用いて、「勝ち続ける」「機能している」競技スポーツ集団の条件を探る。

2. ゼミのねらい・概要

主にスポーツ医科学、認知科学、そして社会心理学のアプローチを用いて、競技スポーツ集団の“チームパフォーマンス向上”に寄与する要因を探る。専門ゼミ A では、スポーツ医科学や認知科学の手法を用いて、体力・動作データならびに競技データ（選手のパフォーマンスデータやゲーム分析など）を評価し、「競技力向上」や「個人スキルの熟達」、「障害予防」などに繋がる因子を検討する。

3. ゼミ計画

1. ガイダンス（ゼミの概要や進め方、注意事項について）	9. 文献検討と意見交換（競技力向上）
2. 基礎知識の習得①：スポーツアナリスト	10. 文献検討と意見交換（スポーツ障害予防）
3. 基礎知識の習得②：体力データの測定と活用	11. 文献検討と意見交換（ゲーム分析）
4. 基礎知識の習得③：動作データの測定と活用	12. 文献検討と意見交換（熟達）
5. 基礎知識の習得④：スキルデータの測定と活用	13. プレゼンテーション（グループ A）
6. 基礎知識の習得⑤：セイバーメトリクス	14. プレゼンテーション（グループ B）
7. 基礎知識の習得⑥：ゲーム分析	15. プレゼンテーション（グループ C）
8. 基礎知識の習得⑦：データ解釈と認知バイアス	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

プレゼンテーションの準備として、文献内容の整理やパワーポイント資料の作成などに5時間程度が必要であろう。復習としては、各回で扱ったテーマのポイントを整理し、自身の「卒業研究」のテーマに活かせるようにしてほしい（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

授業中のプレゼンテーションや提出物に対しては個別にコメントを行う。

6. ゼミにおける学修の到達目標

基本的概念の理解とともに、4年次の卒業研究に活かせる専門的知識やデータの評価方法を身に付ける。

7. 成績評価の方法・基準

受講態度（50%）ならびに提出物・プレゼンテーションの内容（50%）で総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

ゼミ内容に関係する専門テキストや学術論文を授業中に適宜紹介・配布する。

9. 受講上の留意事項

- ・学術的な問いを積極的に解明しようとする姿勢を求める。
- ・受講マナー（授業中の私語やスマートフォン使用、他者への迷惑行為などは厳禁）については十分注意すること。
- ・グループで実施する課題についてはお互いに協力して取り組むこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本ゼミは、国内トップアスリートを対象とした研究機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

専門ゼミ B		演習	教授 柳澤 修	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの必修科目、スポーツトレーナーコースの必修科目	科目ナンバリング	11130302	

1. テーマ

自然科学や社会科学のアプローチを用いて、「勝ち続ける」「機能している」競技スポーツ集団の条件を探る。

2. ゼミのねらい・概要

主にスポーツ医学、認知科学、そして社会心理学のアプローチを用いて、競技スポーツ集団の“チームパフォーマンス向上”に寄与する要因を探る。専門ゼミ B では、認知科学と社会心理学の手法を用いて、リーダーシップやチームワークをキーワードに「スポーツチームが機能する組織条件」を探究する。

3. ゼミ計画

1. ガイダンス (ゼミの概要や進め方, 注意事項について)	9. 文献検討と意見交換 (リーダー像の形成)
2. 基礎知識の習得①: リーダーシップ (キャプテンシー)	10. 文献検討と意見交換 (リーダーシップ)
3. 基礎知識の習得②: リーダーシップの認知	11. 文献検討と意見交換 (フォロワーシップ)
4. 基礎知識の習得③: リーダーシップの評価法	12. 文献検討と意見交換 (チームワーク)
5. 基礎知識の習得④: フォロワーシップ	13. プレゼンテーション (グループ A)
6. 基礎知識の習得⑤: チームワーク	14. プレゼンテーション (グループ B)
7. 基礎知識の習得⑥: チームビルディング	15. プレゼンテーション (グループ C)
8. 基礎知識の習得⑦: 常勝スポーツ集団の事例検討	

4. 準備学修 (予習・復習等) の具体的な内容及びそれに必要な時間

プレゼンテーションの準備として、文献内容の整理やパワーポイント資料の作成などに 5 時間程度が必要であろう。復習としては、各回で扱ったテーマのポイントを整理し、自身の「卒業研究」のテーマに活かせるようにしてほしい (1 時間程度)。

5. 課題 (試験やレポート等) に対するフィードバックの方法

授業中のプレゼンテーションや提出物に対しては個別にコメントを行う。

6. ゼミにおける学修の到達目標

基本的概念の理解とともに、4 年次の卒業研究に活かせる専門的知識やデータの評価方法を身に付ける。

7. 成績評価の方法・基準

受講態度 (50%) ならびに提出物・プレゼンテーションの内容 (50%) で総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

ゼミ内容に関係する専門テキストや学術論文を授業中に適宜紹介・配布する。

9. 受講上の留意事項

- ・学術的な問いを積極的に解明しようとする姿勢を求める。
- ・受講マナー (授業中の私語やスマートフォン使用, 他者への迷惑行為などは厳禁) については十分注意すること。
- ・グループで実施する課題についてはお互いに協力して取り組むこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本ゼミは、国内トップアスリートを対象とした研究機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

教養ゼミ		演習	教授 加古 嘉信 講師 古川 慎太郎 講師 清家 洋
科目カテゴリー	救急救命士コースの必修科目	科目ナンバリング	13130201

1. テーマ

救急医療，救急・救助，災害対応，その他救急救命士にかかわりのある幅広いテーマを取り扱う。

2. ゼミのねらい・概要

救急救命士としてのキャリアデザインを考える。また，救急救命士国家試験受験に向けた準備を進める。

3. ゼミ計画

1. ガイダンス（授業の進め方）	9. 国家試験対策①（必修問題への対策）
2. 学力測定	10. 国家試験対策②（通常問題への対策）
3. 国家試験，就職試験，卒業研究に向けた心構え	11. 学修・就職に関する個別指導④（学生 10～12 名）
4. 消防における救急活動等の実際	12. 学修・就職に関する個別指導⑤（学生 10～12 名）
5. 学修・就職に関する個別指導①（学生 10～12 名）	13. 学修・就職に関する個別指導⑥（学生 10～12 名）
6. 学修・就職に関する個別指導②（学生 10～12 名）	14. 国家試験模試①（必修問題：50 問）
7. 学修・就職に関する個別指導③（学生 10～12 名）	15. 国家試験模試②（通常問題：50 問）
8. 中間試験	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習・復習，中間試験・国家試験模試①②に向けた学習に，週 14 時間以上を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

口頭や資料提示等により，個別または授業中の講義を通じて行う。

6. 授業における学修の到達目標

救急救命士としてのキャリアデザインを考え，将来の目標を明確化する。また，救急救命士国家試験受験に向けた基礎を築く。

7. 成績評価の方法・基準

中間試験の結果（30%），国家試験模試の結果（50%）により成績評価を行う。

8. テキスト・参考文献

救急救命士国家試験対策出題分野別国試問題・解説集 A・B 問題編（2025 年版）（著：小関一英，晴れ書房）

救急救命士国家試験対策出題分野別国試問題・解説集 C・D 問題編（2025 年版）（著：小関一英，晴れ書房）

9. 受講上の留意事項

3 分の 1 以上を欠席した場合は不合格とする。また，中間試験の得点率が 55%未満の場合，国家試験模試①の合計得点率が 55%未満の場合，国家試験模試②の合計得点率が 45%未満の場合は，それぞれ翌週に，別問題で構成する追加試験・模試（問題の出題分野は同一）を行い，この結果において前記の基準に達しない場合は不合格とする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は，公的機関等での実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツ実技(山岳救助)		実習	教授 加古 嘉信 准教授 古川 慎太郎
科目カテゴリー	救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	13220203

1. 授業のねらい・概要

本授業は日本国土の7割以上を占め、清流の生み、人の生活との深いかわりを持つ山岳の環境学と、登山における行動学や医学的な観点を学び、山岳における初歩的な安全管理知識・技術、救助知識・技術の修得を図る。

2. 授業の進め方

基礎知識を修得するための座学、山岳環境における救助実技を中心とした授業展開を行う。

3. 授業計画

1. 山岳救助学総論 我が国の山岳環境の特徴、関係、事故について理解を深める。 2. 運動生理学 登山による呼吸系、循環、神経と筋・骨格などの生理学について理解を深める。 3. 動作論 歩く・跳ぶ・登る・下るといった登山動作について修得し、実践でも理解を深める。 4. 山岳心理論 山岳環境で起こる気象変化や体調変化による心理の変化を修得し、セルフメンタルケアも理解する。 5. リスク論 登山前や中に行われる「メディカルチェック」について修得し、山岳におけるセルフコントロールの理解を深める。 6. 山岳環境保全論 山岳の環境保全について修得し、人と環境の相互性について理解を深める。 7. 山岳環境適応論 山岳環境の生体影響について修得し、自然との環境適応について理解を深める。 8. 山岳行動論 登山・下山を行動学的な視点で動作的アプローチをし、行動評価の作成について理解を深める。	9. 山岳行動論 登山によるカロリー消費量について修得し、けがや事故を起こさない方法も理解する。 10. クライシス論 登山による疲労回復のための休憩について修得し、適切な方法や休憩時間について理解を深める。 11. エマージェンシー論 遭難時の適切な判断と行動について理解を深める。 12. 山岳救命学総論 登山中に発症する疾患と、主な原因について修得し、登山の可否助言、予防法や緊急搬送について理解を深める。 13. 山岳外傷論 登山中に起こる事故に伴う外傷について修得し、適切な予防法と対応法について理解を深める。 14. 山岳疾病論 登山で起こる疾患について修得し、適切な予防法、観察法と対応法について理解を深める。 15. 山岳特殊疾病論 山岳で起こる特殊疾患の特徴、原因、発症機序と症状について修得し、適切な観察法や対応方法について理解を深める。
--	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

適宜提示する事項に関する事前学習、授業内容の振り返り、資料整理、自主練習等を行う必要があり、各授業につき30分～90分程度を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

口頭や資料提示等により、個別または授業中の講義を通じて行う。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 山岳救助活動における安全管理の重要性について理解を深める。
- 2) 山岳救助活動を行う上で必要となる基礎知識・技術を身に付ける。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（50%）および授業で実施する想定訓練における活動状況（50%）により評価する。

なお、平常点は、授業態度・積極性・協調性・判断力・行動力等を踏まえて総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

適宜指定する資料

9. 受講上の留意事項

- 1) 安全管理の徹底を要する実技項目があるため、教員の指示に従って統率の取れた行動をとれる学生のみが受講すること。
- 2) 以下に該当する場合は、当日授業を欠席扱いとする。
 - a) 実習に相応しい身だしなみ（アイロンがけした制服、黒色または紺色のTシャツ、黒色または紺色の靴下、汚れていない内履、及び名札の着用）が履行できない場合。
 - b) 長い爪、髭、過度に明るく染色した頭髮、アクセサリーの着用等、社会通念上医療従事者として活動に従事する上で、相応しくないと認められる場合。
 - c) 使用するテキストや資料、個人資器材、その他授業に持参するよう指示した物品を忘れた場合。
 - d) スマートフォンなど音の出る電子機器については、電源を切ることを原則とし、これに従わない場合。
 - e) 居眠りや落ち着きのない言動等、授業の円滑な進行を妨げると教員が判断した場合。
 - f) 授業開始 10 分前までに事前連絡がない遅刻、及び 30 分以上の遅刻。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、公的機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

特別支援教育論		講義	非常勤講師 清水 秀俊
科目カテゴリー	教職科目	科目ナンバリング	11520202

1. 授業のねらい・概要

特別支援教育についての基本的知識を修得し、特別支援教育をめぐる諸問題に関心を深め課題意識を持つようにすることをねらいとする。

また、本授業を通して、障害の有無にかかわらず、様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の実現をめざそうとする態度を培うことを期待する。

まず、特別支援教育の理念、歴史や制度、教育課程、自立活動についての基本的事項を説明する。次に、特別支援教育の現状と課題について概説する。次いで、各障害の理解と指導・支援について具体例（体育指導の工夫など）を示しながら説明する。さらに、校内支援体制および家庭や関係機関との連携の必要性について述べる。終わりに、障害者とスポーツ・芸術について言及する。

2. 授業の進め方

基本的には、配布プリント（授業レジュメ）をもとに講義形式で進めるが、授業に関連する新聞記事・テレビ番組・動画、特別支援学校や障害者団体のホームページなどを適宜紹介し、受講生が関心を深めることができるようにする。

また、毎回小レポートや予習復習メモを提出させるなどして、受講生の感想や意見などを把握し、優れた感想等を次の授業で紹介するなどして、学修への意欲向上を図る。

3. 授業計画

1. 特別支援教育の理念と基本的考え	9. 視覚障害の理解と指導・支援
2. 特別支援教育の歴史と制度	10. 聴覚障害の理解と指導・支援
3. 特別支援教育の教育課程	11. 知的障害の理解と指導・支援
4. 自立活動の理念と指導	12. 肢体不自由の理解と指導・支援
5. 特別支援教育の現状と課題	13. 病弱・身体虚弱および重度・重複障害の理解と指導・支援
6. 発達障害の理解と指導・支援①（学習障害および注意欠陥多動性障害）	14. 校内支援体制および家庭や関係機関との連携
7. 発達障害の理解と指導・支援②（自閉スペクトラム症）	15. 障害者とスポーツ・芸術
8. 情緒障害および言語障害の理解と指導・支援	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業レジュメやテキストを読んだり、授業に関連する事項について自主的に文献やインターネットなどで調べたりして予習復習メモにまとめ、2時間以上の予習復習を行う。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回の授業終了時に提出する小レポートに対してコメントを付して返却したり、優れた感想・意見などを次の授業冒頭に紹介したりする。また、期末試験実施の後、解答などを掲示板に掲示する。

6. 授業における学修の到達目標

1. 特別支援教育の理念と基本的考え、歴史や制度、教育課程などについての基本的知識を修得する。
2. インクルーシブ教育と特別支援教育との関係性について理解できる。
3. 各障害の定義や特性について理解できる。
4. 障害のある児童生徒の教育的ニーズに応じた多様な指導・支援の場や方法について理解できる。
5. 特別支援教育を推進するうえでの校内支援体制および家庭や関係機関との連携の必要性について理解できる。
6. 特別支援教育における体育指導の工夫について理解できる。

7. 成績評価の方法・基準

試験の結果（５０％），小レポートの内容（３０％），授業への取り組み姿勢（２０％）。

8. テキスト・参考文献

テキスト：

中学校学習指導要領（平成２９年３月告示 文部科学省）

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（平成２９年４月告示 文部科学省）

参考文献：

高等学校学習指導要領（平成３０年３月告示 文部科学省）

特別支援学校高等部学習指導要領（平成３１年２月告示 文部科学省）

9. 受講上の留意事項

特になし

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、特別支援学校および特別支援学級における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

生化学・微生物学		講義	教授 田中 基晴
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	13311201

1. 授業のねらい・概要

本科目は、救急救命士国家試験受験指定科目に設定されている。本授業では、生命現象を化学的に理解するために生化学と、感染症の原因となる微生物について学修する。

2. 授業の進め方

解剖学、生理学や病理学と同様に基礎医学分野の科目となるため、理解を深めるよう画像を使用した説明を行う。

3. 授業計画

1. 生化学序論 1) 生体の構成物質と細胞器官 2) 異化と同化 2. 生化学（生体エネルギーとは？） 生体の構成物質、細胞小器官及び生体エネルギー産生についての理解を深める。 3. 生化学（たんぱく質代謝の理解） たんぱく質の種類、代謝経路とその障害についての理解を深める。 4. 生化学（糖質代謝の理解） 糖質の種類、代謝経路とその障害についての理解を深める。 5. 生化学（脂質代謝の理解） 脂質の種類、代謝経路とその障害についての理解を深める。 6. 生化学（核酸、遺伝子の理解） 核酸、遺伝子の構造、機能についての理解を深める。 7. 生化学（ビタミンの理解） 各種ビタミンの機能についての理解を深める。 8. 生化学（内分泌系の理解） 個体の恒常性とその調節機能についての理解を深める。	9. 生化学（免疫、アレルギーの理解） 生体防御機能についての理解を深める。 10. 微生物序論 1) 微生物とは 2) 微生物の大きさや種類 3) 細菌の構造と機能 11. 微生物学（細菌の理解） 「細菌」についての種類・分類・特徴・構造・機能についての理解を深める。 11. 微生物学（細菌の理解） 「細菌」についての種類・分類・特徴・構造・機能についての理解を深める。 12. 微生物学（ウイルスの理解） 「ウイルス」とその他の微生物についての理解を深める。 13. 微生物学（感染の理解） 感染症分類、感染の成り立ち、経路、耐性菌・菌交代現象及び日和見感染についての理解を深める。 14. 微生物（食中毒の理解） 食中毒を起こす病原微生物についての理解を深める。 15. 生化学・微生物（感染症防御システムの理解） 病原性微生物に対する生体防御システムの仕組みについての理解を深める。
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- 1) 予習（必要時間：約 50 分）
 - a) 第1回の授業以外第2回から前週の授業で予習内容を伝える。教員は次の授業に関して下記のイ) -ロ) に示す 2 項目を学生に提示する。
 - イ) 学習概要
 - ロ) 受講するにあたり必要な専門用語の説明
- 2) 復習（必要時間：40 分）
 - a) 授業内容整理

定期的に小テストを実施し、知識の確認を行う。

5. 課題（試験等）に対するフィードバックの方法

- 1) 筆記試験

- a) 正解は貼りだす。
- b) 解説は、不正解問題を中心に行う。

6. 授業における学修の到達目標

救急救命士に必要な生化学，微生物学の基本的知識を身につけるとともに国家試験問題を解答・解説できるレベルへの到達を目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

1) 成績評価の基準

主に救急救命士に必要な生化学，微生物学の基本的知識の習得に関して、その到達度によって成績評価を行う。

2) 成績評価の方法

受講態度（出欠・遅刻・早退等）（30 %），筆記試験（70 %）。

8. テキスト・参考文献

テキスト：改訂第 10 版救急救命士標準テキスト

テキスト：運動・からだ図鑑 生化学の基本：オールカラー 一條秀憲 マイナビ出版 2023 年

9. 受講上の留意事項

事前に高校の生物学を復習しておくこと。また，解剖生理学, 自然科学を履修しておくことが望ましい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。製薬会社における新薬開発の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

脳神経外科学・眼科学・耳鼻咽喉科学・口腔外科学		講義	教授 加藤 政彦 教授 千明 政好 非常勤講師 山口 貴子
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門分野科目	科目ナンバリング	13361201

1. 授業のねらい・概要

救急医療において必要な代表的頭部及び顔面に関連する病態生理をはじめ、各症候学について理解を深め、各疾患についても知識を修得する。

- 1) 中枢神経系（脳および脊髄）の解剖とそれぞれが係わる機能の概要、頭蓋内病変によって生じる症状と神経学的所見を述べることができる。頭蓋内圧亢進を生じる疾患とそれぞれの疾患の特徴、頭蓋内圧亢進によって生じる症状とその病態ならびに救急現場における見落としてならない所見を説明することができる。
- 2) 感覚器が集中する頭頸部領域に発生する疾患は多岐におよぶため、それらの特徴を理解するとともに、疾患の適切な知識を修得する。

2. 授業の進め方

テキストの範囲の内容を、適宜、スライドと配布資料を用いて授業する。授業の最後に最近の国家試験問題等を出題し解答を出席カードに記載して提出させる。テキストの内容に沿った講義形式を基本とするが、随時、新聞・雑誌の記事などから具体的な出来事を取り上げて診療の現場に即した説明も行う。

3. 授業計画

1. 頭部の解剖生理の理解 救急症候や疾病を学ぶために必要な頭部の解剖・生理についての知識を整理する。 2. 脳神経系の構造と機能の理解 中枢神経系の特殊性、神経機能と脳の解剖学的関係について理解する。 3. 中枢神経系の特異な徴候 意識障害・頭痛・けいれんの分類、特徴の理解を深めるとともに、評価スケール（Japan Coma Scale, Glasgow Coma Scale）を学習する。 4. 脳腫瘍 代表的な脳腫瘍の種類と症状や治療について、理解する。 5. 出血性の脳卒中・脳血管障害 病態による分類と代表的疾患（くも膜下出血・高血圧性脳出血）の症状や治療について理解する。 6. 虚血性の脳卒中・脳血管障害 病態による分類と代表的疾患（脳梗塞）の症状や治療について理解する。 7. 頭部外傷、水頭症 病態による分類と代表的疾患（頭蓋骨骨折、急性硬膜外血腫・急性硬膜下血腫・脳挫傷など）の症状、重症度・緊急度判断や治療について理解する。	8. 脊髄・脊椎疾患、末梢神経外科 脊髄血管障害・脊髄炎、末梢神経障害について理解する。 9. 耳鼻咽喉科に関する疾患 良性発作性頭位めまい症・メニエール病・突発性難聴を中心に各々の特徴、病態や症状について理解する。 10. 眼の疾患 急性緑内障発作、白内障、眼外傷を中心に各々の特徴、病態や症状について理解する。 11. 口腔の疾患 口腔外傷に焦点を当てて、発生機序、症候や処置についての理解をする。 12. 顔面・頸部の解剖生理の理解 救急症候や疾病を学ぶために必要な顔面・頸部の解剖・生理についての知識を整理する。 13. 咽喉頭・食道の疾患 呼吸器系や消化器系疾患との関連性を含めて、咽喉頭・食道の疾患の理解をする。 14. 気道確保 傷病者にとって侵襲及び非侵襲的な気道確保の種類と特徴についての理解を深める。 15. 第10回～14回までのまとめを行う。
--	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、テキストと配布資料を使って復習しておく。さらに、授業の最後に出された問題を復習しておく。この問題は次回の授業の初めに解答を解説する。なお、これらの準備

学習には 90 分以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回、過去に実施された国家試験の問題を実践解答させる。問題解答の際、また定期試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 脳神経の解剖機能を救急医療における脳神経疾患と病態を理解する。
- 2) 眼科・耳鼻咽喉科・口腔外科領域の臓器の特徴や病態を理解し、疾患に遭遇した際の適切な対応を修得する。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（30%）、定期試験（70%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト： 生塩之敬，種子田護，山田和雄編，ニュースタンダード脳神経外科学 第4版，三輪書店，2017 年
救急救命士標準テキスト編集委員会，救急救命士標準テキスト 改訂第10版，へるす出版，2020 年
参考文献： 小関一英編，2023 年版救急救命士国家試験対策出題分野別国試験問題・解説集，晴れ書房，2022 年

テキストは毎回の授業に必ず持参すること。また，参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

欠席回数が全講義回数の 3 分の 1（6 回）以上となった場合には受験資格を失う。

遅刻，欠席ならびに授業中の私語，許可の無い教室の出入り，授業に関係ない言動は慎むこと。

救急処置演習 A-II，外傷救急処置演習の基礎となる。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。医療機関における医師としての実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

産婦人科学・精神医学		講義	教授 加藤 政彦 教授 千明 政好
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門分野科目	科目ナンバリング	13361202

1. 授業のねらい・概要

本授業は、女性特有の疾患に関する、不正出血および妊娠に関する病態生理の体系的な理解と知識の習得および、臨床現場での適切な対応が行える知識を修得する。また、精神疾患の公衆衛生、臨床および社会資源などについても理解を深める。

2. 授業の進め方

テキストの範囲の内容を、適宜、スライドと配布資料を用いて授業する。授業の最後に最近の国家試験問題等を出題し解答を出席カードに記載して提出させる。テキストの内容に沿った講義形式を基本とするが、随時、新聞・雑誌の記事などから具体的な出来事を取り上げて診療の現場に即した説明も行う。

3. 授業計画

1. 妊娠・分娩救急疾患①（正常妊娠） 「正常妊娠」についての理解を深める。 2. 妊娠・分娩救急疾患②（正常分娩） 「正常分娩」についての理解を深める。 3. 妊娠・分娩救急疾患③（異常妊娠） 「異常妊娠」を知るために、正常妊娠との病態的な違いを比較しながら理解を深める。 4. 妊娠・分娩救急疾患④（異常分娩） 「異常分娩とは何か？」を知るために、正常分娩との病態的な違いを比較しながら理解を深める。さらに、「分娩時の異常」についても学ぶ。 5. 妊娠・分娩救急疾患⑤（産科救急） 妊婦・産褥期の救急疾患と妊婦搬送時の注意とその介助についての理解を深める。 6. 妊娠・分娩救急疾患⑥（外傷・心肺蘇生） 妊婦外傷の初期診療と心配蘇生法について学習する。 7. 周産期・新生児医療 周産期医療と新生児の生理、蘇生法などについて理解する。 8. 診断学（精神科診断） 臨床現場でどの様に精神疾患患者を診断しているかの理解を深める。	9. 処置論（精神科における処置と治療） 臨床現場でどの様に精神疾患患者に処置と治療が行われているかの理解を深める。 10. 疾病学（統合失調症） 統合失調症の病態、症状、観察、対応、重症度・緊急度判断、病院選定についての理解を深める。 11. 疾病学（気分障害） 気分障害の病態、症状、観察、対応、重症度・緊急度判断、病院選定についての理解を深める。 12. 疾病学（神経症性障害・睡眠障害） 神経症性障害・睡眠障害の病態、症状、観察、対応、重症度・緊急度判断、病院選定についての理解を深める。 13. 疾病学（器質性精神障害） 器質性精神障害の病態、症状、観察、対応、重症度・緊急度判断、病院選定についての理解を深める。 14. 疾病学（児童思春期の精神障害） 統合失調症の病態、症状、観察、重症度・緊急度判断、病院選定についての理解を深める。 15. 確認試験 第8回～第14回までのまとめ試験を行う。
---	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、テキストと配布資料を使って復習しておく。さらに、授業の最後に出された問題を復習しておく。この問題は次回の授業の初めに解答を解説する。なお、これらの準備学習には90分以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回、過去に実施された国家試験の問題を実践解答させる。問題解答の際、また定期試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

授業における学修の到達目標

- 1) 女性特有の疾患に関与する不正出血および妊娠に関する病態生理の体系的な理解と知識の習得を目的とする。
- 2) 臨床現場で、適切な対応が行える知識の習得を目的とする。
- 3) 精神疾患の公衆衛生、臨床、社会資源などについて理解し、修得を目的とする。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（30%）、定期試験（70%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト：Advanced Life Support Group（著）、新井隆成（翻訳）、病院前救護のための産科救急トレーニング，中外医学社，2014 年

細野茂春監修，NCPR 新生児蘇生法テキスト第 4 版，メジカルビュー社，2021 年

参考文献：小関一英編，2023 年版救急救命士国家試験対策出題分野別国試験問題・解説集，晴れ書房，2022 年
適宜指定する教材

テキストは毎回の授業に必ず持参すること。また、参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

欠席回数が全講義回数の 3 分の 1（6 回）以上となった場合には受験資格を失う。

遅刻，欠席ならびに授業中の私語，許可の無い教室の出入り，授業に関係ない言動は慎むこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。医療機関における医師としての実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

小児科学		講義	教授 加藤 政彦
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門分野科目	科目ナンバリング	13361203

1. 授業のねらい・概要

診察の基本を学び、救急救命士が臨床の現場で注意を払わなければならない症状・所見や各種検査、小児科学的病態の概要を理解する。

2. 授業の進め方

テキストの範囲の内容を、適宜、スライドと配布資料を用いて授業する。授業の最後に最近の国家試験問題等を出題し解答を出席カードに記載して提出させる。テキストの内容に沿った講義形式を基本とするが、随時、新聞・雑誌の記事などから具体的な出来事を取り上げて診療の現場に即した説明も行う。

3. 授業計画

1. 小児の疾病 1 先天異常	9. 小児の疾病 9 神経
2. 小児の疾病 2 新生児	10. 小児の疾病 10 出生前診断
3. 小児の疾病 3 呼吸器・循環器	11. 小児の疾病 11 感染症の歴史と新型コロナ感染症
4. 小児の疾病 4 代謝・内分泌	12. 小児の疾病 12 小児救急
5. 小児の疾病 5 消化器	13. 小児の疾病 13 事故
6. 小児の疾病 6 アレルギー、感染免疫	14. 小児の疾病 14 虐待
7. 小児の疾病 7 悪性新生物、血液	15. 小児の疾病 15 予防接種
8. 小児の疾病 8 腎臓	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、テキストと配布資料を使って復習しておく。さらに、授業の最後に出された問題を復習しておく。この問題は次回の授業の初めに解答を解説する。なお、これらの準備学習には 90 分以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回、過去に実施された国家試験の問題を実践解答させる。問題解答の際、また定期試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

救急救命士として必要な一般臨床医学の知識を理解する。さらに国家試験のレベルまで高める。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（30%）、定期試験（70%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト： 外間 登美子 編，小児科学 改訂 3 版，中外医学社，2005 年

救急救命士標準テキスト編集委員会，救急救命士標準テキスト 改訂第 10 版，へるす出版，2020 年

参考文献： 細野茂春監修，NCPR 新生児蘇生法テキスト第 4 版，メジカルビュー社，2021 年

小関一英編，2023 年版救急救命士国家試験対策出題分野別国試験問題・解説集，晴れ書房，2022 年
適宜指定する教材

テキストは毎回の授業に必ず持参すること。また，参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

欠席回数が全講義回数の3分の1（6回）以上となった場合には受験資格を失う。

遅刻，欠席ならびに授業中の私語，許可の無い教室の出入り，授業に関係ない言動は慎むこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。医療機関における医師としての実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

救急処置演習 A-II		演習	教 授 千明 政好 准教授 古川 慎太郎 講 師 清家 洋	
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門分野科目	科目ナンバリング	13391201	

1. 授業のねらい・概要

本授業は、救急救命士の資格を取得するために必要な観察結果に基づく判断、及び救急救命処置の理解を目的とした演習を行う。また、救急救命処置に必要な資器材の取扱方法の習熟についても実習を行う。

2. 授業の進め方

救急救命処置に関する知識と技術を確実に修得させるために、シミュレーション型実技訓練に重点を置いて演習を展開する。また、座学を並行して行い、演習に必要な知識の修得を図る。

3. 授業計画

1. オリエンテーション（教員紹介） 救急隊活動要領について理解する。	16. 第1回～14回までの筆記試験
2. 観察資器材 聴診器の取り扱い、血圧測定、瞳孔観察、バイタル測定について習得する。	17. 救急資器材 吸引器の使用方法について習得する。
3. BVM BVMの取り扱いについて習得する。	18. 器具を用いた異物除去 喉頭鏡とマギール鉗子を用いた異物除去要領を習得する。
4. 観察資器材 除細動器モニターの使用について習得する。	19. 救急隊活動 救急隊活動 CPA とりつきについて理解を深め、習得する。
5. 救急隊活動 CPA とりつきについて習得する。	20. 救急隊活動 異物除去プロトコルについて理解を深め、異物窒息を疑う傷病者への活動を習得する。
6. 救急隊活動 除細動プロトコルについて理解し、実践する。	21. 救急隊活動 窒息 CPA 活動異物窒息が原因である心肺停止傷病者への活動要領を理解する。
7. 器具を用いた気道確保 経鼻エアウェイについて習得する。	22. 救急隊活動 除細動と異物除去対応の流れに沿って実践する。
8. 器具を用いた気道確保 経口エアウェイについて習得する。	23. 救急資器材 自動心マッサージ機について理解を深め、実際に使用する。
9. 搬送資器材 サブストレッチャーの使用方法について理解を深める。	24. 搬送と自動心マッサージ機 心肺停止傷病者に対する搬送と組み合わせた心肺蘇生法を習得する。
10. 搬送資器材 メインストレッチャーの使用方法について理解を深める。	25. 車内収容と車内活動 一連の流れの中で車内収容・車内活動を実施する。
11. 車内収容と車内活動 車内収容を実施し、注意点などを理解する。	26. 医療機関選定 心肺停止傷病者の病院連絡について理解し、実施する。
12. 医療機関選定 病院連絡について理解し、実践する。	27. 救急隊活動 異物窒息を疑う傷病者に対する一連の活動
13. 救急隊活動 除細動と CPR を組み合わせた隊連携について反復訓練を行う。	28. まとめ 異物窒息を疑う傷病者に対する一連の活動
14. 救急隊活動 除細動と CPR を組み合わせた隊連携について反復訓練を行う。	29. 第17回～28回までの実技確認試験
15. 第1回～14回までの実技確認試験	30. 第17回～28回までの筆記試験

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

カリキュラムに応じた予習・復習内容（課題レポート、小テストの見直し、ノート整理）を適宜提示する。これには週3時間以上を要する。手技については、次の授業までに訓練し修得する。これには相当数の時間を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

1) 小テスト

誤った問題についてはレポートにまとめ、次の授業時に提出しフィードバックを行う。

2) 課題

- a) 教員は学生が提出した課題を評価し、フィードバックを行う。
- b) 課題で重要な部分は、次の授業始めにその内容を口頭で説明する。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 救急救命処置に関する知識と技術を確実に修得する。
- 2) 傷病者観察の結果に基づいた適切な処置が行える技術を修得する。
- 3) 救急資器材の準備及び操作の際に、清潔操作を確実に実施できる。

7. 成績評価の方法・基準

成績評価の基準として、処置により病態の改善を予見するなど適切な思考判断を下し得る知力、技術の獲得ができたかを以下の方法で評価する。

1) 成績評価項目

- a) 事前の授業の準備と理解の評価
- b) 授業態度・主体的な授業への取り組みと講義の理解度の評価
- c) 授業後の内容の整理と課題の提出の評価
- d) 講義内容の理解度を試験で検討

2) 成績評価の方法

- a) 授業内容の整理・提出（20%）
 - イ) 事前の授業の準備と理解
 - ロ) 授業態度・主体的な授業への取り組み姿勢
- b) 実技試験
 - イ) 受験資格として 80%以上の出席かつ、全ての課題が期限までに提出され合格している事が必要である。
 - ロ) 可否を判定する。不合格のまま単位が出されることはない。
 - ハ) 追試験の該当・手続きについては履修要項を参照し（但し追試験料は不要）、該当しない欠席については試験放棄とみなす。
 - ニ) 再試験は必要に応じて1回のみ実施する（但し再試験料は不要）。
- c) 筆記試験（80%）
 - イ) 受験資格として 80%以上の出席かつ、全ての課題が期限までに提出され合格している事が必要である。
 - ロ) 中間試験は必要に応じて実施する。
 - ハ) 中間試験・期末試験結果それぞれの点数の 60%以上を合格とする。
 - ニ) 追試験の該当・手続きについては履修要項を参照し、該当しない欠席については試験放棄とみなす。
 - ホ) 再試験は、中間試験・期末試験それぞれ必要に応じて1回のみ実施し、60%以上を合格とする。
 - ヘ) 再試験の手続きについては履修要項を参照。

8. テキスト・参考文献

改訂第10版 救急救命士標準テキスト（へるす出版）
改訂6版 救急蘇生法の指針2020 市民用・解説編（へるす出版）
改訂第2版補訂版 JPTEC ガイドブック（へるす出版）
適宜指定するテキスト

9. 受講上の留意事項

- 1) 医学系授業の基礎となり、医療従事者であれば常に考え、身につけなければならない学習内容である。
- 2) 救急救命士としての資質を習得するために必要な団体行動、集団生活における時間管理・規律、礼儀、倫理感を養う。
- 3) 以下に該当する場合は、退出を命じ当日授業を欠席扱いとする。
 - a) 実習に相応しい身だしなみ（アイロンがけした制服、黒色または紺色の T シャツ、黒色または紺色の靴下、汚れていない内履、及び名札の着用）が履行できない場合。
 - b) 長い爪、髭、過度に明るく染色した頭髪、アクセサリーの着用等、社会通念上医療従事者として救急活動に従事する上で、相応しくないと認められる場合。
 - c) 使用するテキストや資料、個人資器材（腕時計、聴診器、ペンライト、ゴーグル）、その他授業に持参するよう指示した物品を忘れた場合。
 - d) スマートフォンなど音の出る電子機器については、電源を切ることを原則とし、これに従わない場合。
 - e) 居眠りや落ち着きのない言動等、授業の円滑な進行を妨げると教員が判断した場合。
 - f) 授業開始 10 分前までに事前連絡がない遅刻、及び 30 分以上の遅刻。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、公的機関等における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

外傷救急処置演習		演習	准教授 古川 慎太郎 講師 清家 洋
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門分野	科目ナンバリング	13391202

1. 授業のねらい・概要

本授業は、救急救命士の資格を取得するために必要な観察結果に基づく判断及び救急救命処置の理解を目的とした演習を行う。また、外力により身体が器質的、機能的な障害により損傷した部位の観察・判断・処置要領の修得を目的とする。

2. 授業の進め方

救急救命処置に関する知識と技術を確実に修得させるために、シミュレーション型実技訓練に重点を置いて演習を展開する。また、座学を並行して行い、演習に必要な知識の修得を図る。

3. 授業計画

1. 脳卒中 脳卒中を疑う傷病者を対応するために必要な知識(観察・処置・判断)について理解する。 2. 呼吸器、循環器疾患 呼吸器・循環器疾患を疑う傷病者を対応するために必要な知識(観察・処置・判断)について理解する。 3. 消化器疾患 消化器疾患を疑う傷病者を対応するために必要な知識(観察・処置・判断)について理解する。 4. 虚血、うっ血 観察の方法について理解する。 5. 救急隊活動 内因性傷病者への救急隊活動を理解する。 6. 救急隊活動 内因性傷病者の緊急度重症度判断を理解する。 7. 局所の観察 皮膚・頭部・顔面・頸部の観察を理解し実践できる。 8. 局所の観察 胸部・背部の観察を理解し実践できる。 9. 局所の観察 腹部の観察を理解し実践できる。 10. 局所の観察 鼠径部・会陰部・骨盤・四肢・手指・足・爪の観察を理解し実践できる。 11. 救急隊活動 内因性傷病者へのアプローチについて班活動を行う。 12. 観察・処置・判断 体位管理、保温管理、情報収集と病院連絡について習得する。 13. 救急隊活動 内因性傷病者に対する一連の活動を習得する。 14. 救急隊活動 内因性傷病者に対する一連の活動を習得する。 15. 第1回～第14回までのまとめ実技確認試験を行う。	16. 第1回～15回までのまとめ筆記試験を行う。 17. 外傷活動 状況評価、初期評価、必要な処置についての理解を深める。 18. 外傷活動 状況評価、初期評価、必要な処置を習得する。 19. 外傷活動 ネックカラー・全身観察についての理解を深める。 20. 外傷活動 ネックカラーの使用・全身観察を習得する。 21. 外傷活動 バックボード、スクープストレッチャーによる全身固定について理解を深める。 22. 外傷活動 バックボード、スクープストレッチャーによる全身固定を習得する。 23. 外傷活動 状況評価から全身固定(情報収集含む)までの一連の流れについて理解を深める。 24. 外傷活動 状況評価から全身固定(情報収集含む)までの一連の流れを習得する。 25. 外傷活動 車外救出について理解を深める。 26. 外傷活動 車外救出を習得する。 27. 外傷活動 外傷傷病者に対する一連の活動を習得する。 28. 外傷活動 外傷傷病者に対する一連の活動を習得する。 29. 第17回～28回までのまとめ実技確認試験 30. 第18回～28回までの筆記試験
---	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

カリキュラムに応じた予習・復習内容（課題レポート、小テストの見直し、ノート整理）を適宜提示する。これには週3時間以上を要する。実技については、次の授業までに訓練し修得する。これには相当数の時間を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

1) 小テスト

誤った問題についてはレポートにまとめ、次の授業時に提出しフィードバックを行う。

2) 課題

- a) 教員は学生が提出した課題を評価し、フィードバックを行う。
- b) 課題で重要な部分は、次の授業始めにその内容を口頭で説明する。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) JPTEC における病院前外傷処置要領を修得し、説明ができる。
- 2) PSLs・PEMEC における病院前活動要領を習得し、説明ができる。

7. 成績評価の方法・基準

成績評価の基準として、処置により病態の改善を予見するなど適切な思考判断を下し得る知力、技術の獲得ができたかを以下の方法で評価する。

1) 成績評価項目

- a) 事前の授業の準備と理解の評価
- b) 授業態度・主体的な授業への取り組みと講義の理解度の評価
- c) 授業後の内容の整理と課題の提出の評価
- d) 講義内容の理解度を試験で検討

2) 成績評価の方法

- a) 授業内容の整理・提出（20%）
 - イ) 事前の授業の準備と理解
 - ロ) 授業態度・主体的な授業への取り組み姿勢
- b) 実技試験
 - イ) 受験資格として 80%以上の出席かつ、全ての課題が期限までに提出され合格している事が必要である。
 - ロ) 可否を判定する。不合格のまま単位が出されることはない。
 - ハ) 追試験の該当・手続きについては履修要項を参照し（但し追試験料は不要）、該当しない欠席については試験放棄とみなす。
 - ニ) 再試験は必要に応じて1回のみ実施する（但し再試験料は不要）。
- c) 筆記試験（80%）
 - イ) 受験資格として 80%以上の出席かつ、全ての課題が期限までに提出され合格している事が必要である。
 - ロ) 中間試験は必要に応じて実施する。
 - ハ) 中間試験・期末試験結果それぞれの点数の 60%以上を合格とする。
 - ニ) 追試験の該当・手続きについては履修要項を参照し、該当しない欠席については試験放棄とみなす。
 - ホ) 再試験は、中間試験・期末試験それぞれ必要に応じて1回のみ実施し、60%以上を合格とする。
 - ヘ) 再試験の手続きについては履修要項を参照。

8. テキスト・参考文献

改訂第10版 救急救命士標準テキスト（へるす出版）
改訂6版 救急蘇生法の指針2020 市民用・解説編（へるす出版）
改訂第2版補訂版 JPTEC ガイドブック（へるす出版）
PSLS ガイドブック 2015（へるす出版）
PEMEC ガイドブック 2023（へるす出版）

9. 受講上の留意事項

- 1) 医学系授業の基礎となり、医療従事者であれば常に考え、身につけなければならない学習内容である。
- 2) 救急救命士としての資質を習得するために必要な団体行動、集団生活における時間管理・規律、礼儀、倫理感を養う。
- 3) 以下に該当する場合は、退出を命じ当日授業を欠席扱いとする。
 - a) 実習に相応しい身だしなみ（アイロンがけした制服、黒色または紺色の T シャツ、黒色または紺色の靴下、汚れていない内履、及び名札の着用）が履行できない場合。
 - b) 長い爪、髭、過度に明るく染色した頭髮、アクセサリーの着用等、社会通念上医療従事者として救急活動に従事する上で、相応しくないと認められる場合。
 - c) 使用するテキストや資料、個人資器材（腕時計、聴診器、ペンライト、ゴーグル）、その他授業に持参するよう指示した物品を忘れた場合。
 - d) スマートフォンなど音の出る電子機器については、電源を切ることを原則とし、これに従わない場合。
 - e) 居眠りや落ち着きのない言動等、授業の円滑な進行を妨げると教員が判断した場合。
 - f) 授業開始 10 分前までに事前連絡がない遅刻、及び 30 分以上の遅刻。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、公的機関等における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

柔道実技		実習	講師 佐藤 康宏	
科目カテゴリ	柔道整備師コースの専門基礎科目 教職科目		科目ナンバリング	12331103 12531107

1. 授業のねらい・概要

大学における「スポーツ」はスポーツの実習とスポーツ科学の理論の学習を通して、自己のライフステージや心身の状態（健康、体力、運動能力）に適したスポーツを生活の中に取り入れ、豊かなライフスタイルを形成できる能力を目的としている。

柔道は日本を発祥とするオリンピック競技種目であり、健康と体力の維持、増進のための身体や運動に基礎的な理論と実践方法を身に着けることができる競技である。本講義では学科の特性を踏まえ、その精神、体力、歴史、礼法、基本動作、受身、投技、固技、乱取りなどを通して、中学・高等学校保健体育教育職員、柔道整備師になる上で必要な技能の習得をねらいとする。

2. 授業の進め方

柔道衣の着方と礼法～柔道修行に於ける受身の重要性の理解と学習基本動作～後方受身、側方受身、前方受身の学習～前方回転受身の学習。補強運動と柔道を通しての機能解剖～受身の復習並びに受身の応用練習～足技、腰技、手技の学習～足技、腰技、手技の応用練習～固め技一抑え技、絞め技、関節技。各技の説明と実践練習。

3. 授業計画

1. ガイダンス（柔道の歴史について）	9. 固技の基本動作
2. 柔道着の着用～礼法の習得	10. 固技（袈裟固・崩袈裟固・肩固・横四方固）
3. 基本動作（受身：後受身・横受身）	11. 固技（上四方固・崩上四方固・縦四方固）
4. 基本動作（受身：前受身・前回受身）	12. 固技（関節技・絞技）
5. 基本動作（姿勢・組み方・進退動作）	13. 投げ技の応用練習～立技の乱取
6. 投技（背負投・体落・大腰・釣込腰・払腰）	14. 基本動作、投技、固技の総復習
7. 投技（小内刈・大内刈・大外刈・出足払）	15. まとめ（礼法・受け身・投技のテスト）
8. 投げ技の応用練習～立技の乱取	解説および再試験

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習として、高等学校学習指導要領（体育）の武道について30分程度読み、理解をしておくこと。実技前はストレッチングを上・下肢ともに十分程度行い、身体を柔軟に動かせるように準備をすること。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

各段階で習得したことを実践させて確認する。その都度、解説をして再練習をさせる。最終授業の15回目のテスト後に再度解説を行う。

6. 授業における学修の到達目標

健康と体力の維持、増進のための身体や運動に基礎的な理論と実践方法を身に着けること。また、柔道精神、体力、歴史、礼法、基本動作、受身、立技、固技などの技能の習得を到達目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

授業への取組み姿勢（50%）、および最終テストの結果（下記①②③）によって評価する。

- ① 身体の安全を、守れる体力・技術・知識を身につけているか（受身の試験 15%）
- ② 柔道の基礎的な知識を理解して、その基本的技術を習得しているか（投技の試験 15%）
- ③ 講義内に行われる応用練習について理解しているか（20%）

8. テキスト・参考文献

講義内で参考資料を配布。

9. 受講上の留意事項

- ・手足の爪は、短く切ること。
- ・装飾品（指輪、ネックレス、ピアス）等は外すこと。
- ・髪形について、ロングヘアーの学生は髪を結って襟につかないようにして参加すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、講道館柔道六段、柔道指導員 A 資格を有し、国際交流基金文化交流事業、海外での柔道指導歴などの実務経験を活かして実技指導を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリ」欄の記載のとおり。

運動器疾患と柔道整復術		講義	准教授 伊藤 新
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門選択科目	科目ナンバリング	12341301

1. 授業のねらい・概要

柔道整復師の業務は、骨折や脱臼、捻挫などの外傷を治療することである。しかしながら、柔道整復師の治療を求めている患者は、外傷性だけでなく非外傷性の疾患も含まれている。また、外傷性の疾患の中には柔道整復師が対応できないものが含まれている。したがって、これらを適切に評価するには、それぞれの疾患の病態をしっかりと理解することや、類似している疾患の特徴などを把握する必要がある。また治療法に対しては柔道整復師が古来より行ってきた伝統的な方法などを中心に説明を行う。

2. 授業の進め方

主に Power Point を用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。必要に応じて動画などを教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された教科書を補足的に用いる。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. 意識障害を伴う損傷
2. 柔道整復術の適応疾患の特徴と病態	10. 脊髄症状のある損傷
3. 外傷に類似した症状を示す疾患	11. 呼吸運動障害を伴う損傷
4. 血流障害を伴う損傷	12. 内臓損傷を伴う損傷と高エネルギー損傷
5. 末梢神経損傷を伴う損傷	13. 上肢外傷の診察・治療法
6. 脱臼骨折	14. 下肢外傷の診察・治療法
7. 外出血を伴う損傷	15. 体幹外傷の診察・治療法
8. 病的骨折と脱臼	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、配布プリントやノートを使って復習しておく（1時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

各項目の要点をまとめて記述できるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

定期試験の結果（100％）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

施術の適応と医用画像の理解 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
 柔道整復学・実技編改訂2版 社団法人全国柔道整復学校協会南江堂
 毎授業で資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用、飲食、帽子の着用は認めない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は整形外科における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

病理学概論		講義	教授 加藤 政彦	
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門基礎分野	科目ナンバリング	13321101	

1. 授業のねらい・概要

解剖学・生理学で学んだ知識を基に，疾病や病態の概念、疾病や病態の成り立ちを学習し，その科学的知識や理解を将来救急救命士として臨床の現場で活かす事ができるようにする。

2. 授業の進め方

テキストの範囲の内容を，適宜，スライドと配布資料を用いて授業する。授業の最後に最近の国家試験問題等を出題し解答を出席カードに記載して提出させる。

3. 授業計画

1. 病理学総論（序，細胞・組織障害，再生と修復）	9. 病理学各論（呼吸器系）
2. 病理学総論（循環障害）	10. 病理学各論（消化器系）
3. 病理学総論（炎症，免疫とアレルギー）	11. 病理学各論（内分泌系）
4. 病理学総論（感染症）	12. 病理学各論（造血器系）
5. 病理学総論（代謝異常）	13. 病理学各論（腎・尿路系）
6. 病理学総論（老化と老年病，腫瘍）	14. 病理学各論（生殖器・乳腺，運動器系）
7. 病理学総論（新生児，先天異常，生命の危機）	15. 病理学各論（脳・神経系，感覚器系）
8. 病理学各論（循環器系）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を，テキストと配布資料を使って復習しておく。さらに，授業の最後に出された問題を復習しておく。この問題は次回の授業の初めに解答を解説する。なお，これらの準備学習には90分以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回、過去に実施された国家試験の問題を实践解答させる。問題解答の際、また定期試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 授業で学習した医学・病理学用語の説明ができる。
- 2) 適切・的確な救急救置をおこなうため，疾病や病態を正確に理解する。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（30%），定期試験（70%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト：渡辺照男編，カラーで学べる病理学 第5版，ヌーヴェルヒロカワ，2019年

救急救命士標準テキスト編集委員会，救急救命士標準テキスト 改訂第10版，へるす出版，2020年

参考文献：小関一英編，2023年版救急救命士国家試験対策出題分野別国試験問題・解説集，晴れ書房，2022年
適宜指定する教材

テキストは毎回の授業に必ず持参すること。また，参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

欠席回数が全講義回数の3分の1（6回）以上となった場合には受験資格を失う。

遅刻，欠席ならびに授業中の私語，許可の無い教室の出入り，授業に関係ない言動は慎むこと。

医学系授業の基礎となり，医療従事者であれば常に考え，身につけなければならない学習内容である。

本科目の単位を取得してからでないと，専門分野への履修申請を行うことができない科目がある。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当あり。医療機関における医師としての実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

消防職員採用試験対策講座 A		講義	准教授 黒沢 賢一
科目カテゴリー	救急救命士コースの必修科目	科目ナンバリング	13120301

1. 授業のねらい・概要

消防職員採用試験では一次試験で教養試験(数は少ないが専門試験を課す自治体もある)。二次試験で論作文試験, 体力検査, 適性検査, 面接試験が行われる。教養試験に合格しなければ二次試験に進むことはできず, 消防職員をめざすなら, まずは教養試験対策に取り組まなければならない。

教養試験分野の問題は大きく一般知能と一般常識(知識)に分けられるが, 可否を決するのは一般知能の問題である。一般知能はさらに判断推理, 空間把握, 数的推理, 資料解釈などに分けられ, この授業では判断推理と空間把握について, その問題の解き方を講義する。判断推理はクイズのような問題で, 空間把握はパズルのような問題である。いずれも公務員試験独特のもので, 学校では習ったことがなく, 最初はとまどうかも知れないが, 試験に出題される問題は決まっているので, その解法パターンをひとつでも多く身につけていくことが大切である。合格ラインをこえるために必要な解法パターンはこの授業ですべて身につけることができるようにする。また判断推理と空間把握の講義と並行して, 授業では一般常識の主要科目である社会科学の試験に出るポイントも解説していく。さらに最近の人物重視の試験傾向をふまえて, 面接攻略のためのポイントも講義する。

科目名は消防職員採用試験対策講座となっているが, 授業は消防職員のほかにも警察官, 刑務官など公安系(体力系)試験にも対応している。最近では就職試験で課される SPI や SCOA を実施するところもあり, それらの内容にも配慮した授業内容にするので, 民間企業への就職を考えている学生にも役立つ内容になる。

2. 授業の進め方

毎回の授業は, ①一般知能テスト(判断推理, 空間把握の過去問を教材にした頻出問題を出題)→②解説講義→③一般常識のポイント解説講義という流れで進んでいく。面接対策については講義形式をとる。

3. 授業計画

1. ガイダンス 〈判断推理〉	〈空間把握〉
2. 順序関係	9. パズル問題(図形の分割・構成)
3. 位置関係	10. 軌跡と移動
4. 対応関係	11. 立体図形
5. 推理	12. 展開図
6. 命題と論理・集合算	13. サイコロと位相
7. 真偽・暗号	〈面接対策〉
8. 操作・手順	14. 面接攻略法
	15. まとめ講義

※判断推理, 空間把握のほかに社会科学分野の消防職員採用試験に出題されるポイントも解説する。

4. 準備学修(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習は必要ないが, 授業を受けた後は必ず一般知能テストで出題された問題について, 授業中にとったノートとは別のノート(これを「課題ノート」と呼ぶ)に問題の解き方を詳細にまとめ直し, すべての問題について何も参照しないで解けるようになるまで, くり返し復習することが求められる。一般常識については, テキストの指定された範囲のポイント暗記するまで反復する。そのための復習時間としては2時間以上必要になる。

5. 課題(試験やレポート等)に対するフィードバックの方法

テスト, 課題ノート返却時に評価のポイントなどを指摘する。

6. 到達目標

- (1) 消防職員採用試験に出題される一般知能の解法の基礎が理解できるようになる。
- (2) 消防職員採用試験に出題される社会科学の知識を修得する。

(3)消防職員採用試験の面接に向けた準備ができるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

授業内で実施する確認テスト(50%)と課題ノートの提出(50%)によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- (1)黒沢賢一著『Point Master 社会科学の論点』（三恵社） 毎回使用するので必ず持参すること。
- (2)その他の受験教材については授業の中で紹介する。

9. 受講上の留意事項

毎回、授業のはじめに一般知能のテストをするが、できなくても気にする必要はない。解説講義を聞いて、くり返し復習してできるようになればいい。解説講義はただ聞いているだけでなく、説明の内容をしっかりとメモし、ポイントを聞き逃さないようにすることが大切である。

授業中の私語やスマートフォン、イヤホン等の使用、他の学生に迷惑となる教室内の秩序を乱す行為については厳しい態度で臨むので十分留意すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

消防職員採用試験対策講座B		講義	准教授 黒沢 賢一
科目カテゴリー	救急救命士コースの必修科目	科目ナンバリング	13120302

1. 授業のねらい・概要

消防職員採用試験では一次試験で教養試験(数は少ないが専門試験を課す自治体もある)。二次試験で論文作文試験、体力検査、適性検査、面接試験が行われる。教養試験に合格しなければ二次試験に進むことはできず、消防職員をめざすなら、まずは教養試験対策に取り組まなければならない。

教養試験分野の問題は大きく一般知能と一般常識(知識)に分けられるが、可否を決するのは一般知能の問題である。一般知能はさらに判断推理、空間把握、数的推理、資料解釈などに分けられ、この授業では数的推理と資料解釈について、その問題の解き方を講義する。数的推理は小、中学校で勉強した算数、数学の知識をもとに答えを求めていくもので、資料解釈は与えられた図表から情報を読み取る問題である。特に数的推理については苦手意識を持つ学生が多く見受けられるが、授業では問題を解くために必要になる算数、数学の知識を復習しながら問題を解き進めていくので得点源にすることは十分可能である。試験に出題される問題はほぼ決まっているので、それを解くための解法パターンをひとつでも多く身につけていくことが大切である。合格ラインをこえるために必要な解法パターンはこの授業ですべて身につけることができるようにする。また数的推理と資料解釈の講義と並行して、授業では一般常識の主要科目である社会科学の試験に出るポイントも解説し、さらに小論文、作文、適性検査の対策法についても講義する。

科目名は消防職員採用試験対策講座となっているが、授業は消防職員のほかにも警察官、刑務官など公安系(体力系)試験にも対応している。最近では就職試験で課されるSPIやSCOAを実施するところもあり、それらの内容にも配慮した授業内容にするので、民間企業への就職を考えている学生にも役立つ内容になる。

2. 授業の進め方

毎回の授業は、①一般知能テスト(数的推理、資料解釈の過去問を教材にした頻出問題を出题)→②解説講義→③一般常識のポイント解説講義という流れで進んでいく。小論文、作文、適性対策については講義形式をとる。

3. 授業計画

1. ガイダンス 〈数的推理〉	9. n進法・数列
2. 整数の性質	10. 図形の計量 〈資料解釈〉
3. 方程式・不等式・速さ	11. 実数・構成比
4. 比・割合・濃度	12. 指数・増減率
5. 仕事算・ニュートン算	〈小論文・作文・適性〉
6. 平均算・文章題	13. 小論文・作文書き方講義
7. 集合算・覆面算・魔法陣	14. 適性対策講義
8. 場合の数・確率	15. まとめ講義

※数的推理、資料解釈のほかに社会科学分野の消防職員採用試験に出題されるポイントも解説する。

4. 準備学修(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習は必要ないが、授業を受けた後は必ず一般知能テストで出題された問題について、授業中にとったノートとは別のノート(これを「課題ノート」と呼ぶ)に問題の解き方を詳細にまとめ直し、すべての問題について何も参照しないで解けるようになるまで、くり返し復習することが求められる。一般常識については、テキストの指定された範囲のポイント暗記するまで反復する。そのための復習時間としては2時間以上必要になる。

5. 課題(試験やレポート等)に対するフィードバックの方法

テスト、課題ノート返却時に評価のポイントなどを指摘する。

6. 到達目標

(1)消防職員採用試験に出題される一般知能の解法の基礎が理解できるようになる。

- (2) 消防職員採用試験に出題される社会科学の知識を修得する。
- (3) 消防職員採用試験の小論文，作文の書き方と適性試験対策法が身につくようになる。

7. 成績評価の方法・基準

授業内で実施する確認テスト(50%)と課題ノートの提出(50%)によって評価する。

8. テキスト・参考文献

- (1) 黒沢賢一著『Point Master 社会科学の論点』（三恵社） 毎回使用するので必ず持参すること。
- (2) その他の受験教材については授業の中で紹介する。

9. 受講上の留意事項

毎回、授業のはじめに一般知能のテストをするが、できなくても気にする必要はない。解説講義を聞いて、くり返し復習してできるようになればいい。解説講義はただ聞いているだけでなく、説明の内容をしっかりとメモし、ポイントを聞き逃さないようにすることが大切である。

授業中の私語やスマートフォン，イヤホン等の使用，他の学生に迷惑となる教室内の秩序を乱す行為については厳しい態度で臨むので十分留意すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

救急医学		講義	教授 千明 政好
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門分野	科目ナンバリング	13341301

1. 授業のねらい・概要

救急医学分野のうち、特定行為を必要とする救急救命処置についての法律・倫理的・メディカルコントロール・医学的観点に鑑み、心肺蘇生の必要性や救急救命処置の医学的効果について論じる。また、拡大を続ける救急救命士の特定行為についてその変遷・歴史的な背景を、ウツタイン統計様式などを用いて論ずる。

2. 授業の進め方

参加型授業を提案し、双方向的な授業を実現できるようにする。理解を深めるよう画像・動画も使用した説明を行うとともに、学生自ら習得した知識を活用したアクティブラーニングによる授業展開を行う。

3. 授業計画

1. 救急救命士の行う救急救命処置の内容・特定行為について理解する。 2. 心原性心肺停止の病態と非心原性心肺停止の病態について理解する。 3. 心肺停止の病態と救命の連鎖について理解する。 4. 救急救命士における心肺蘇生と病態について理解する。 5. 救急救命士におけるインフォームドコンセントについてディスカッションを行い、理解・実践する。 6. 救急救命士における気管挿管の実際と効果について理解する。 7. 救急救命士における静脈路確保の実際と効果について理解する。	8. 第1回から7回までの講義のまとめと筆記試験 9. 薬剤投与の適応と効果について理解し、実技につなげる。 10. 救急救命処置におけるメディカルコントロールについて理解する。 11. 意識障害の病態と治療について理解する。 12. 各種ショックの病態と治療について理解する。 13. 救急医療における終末期医療について理解する。 14. 今後の救急救命処置と院内で使用される薬剤について理解する。 15. 第8回から14回までの救急医学1のまとめを行う
--	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- 1) 予習（必要時間：約 50 分）
 - a) 教員はオンライン教材(Google Classroom)を使用し、下記のイ) -ロ) に示す 2 項目を学生に提示する。
 - イ) 学習概要
 - ロ) 小テスト
 - b) 学習概要から出題した課題を提出・授業の冒頭 10 分間で小テストを実施する。
- 2) 復習（必要時間：40 分）
 - a) 授業内容整理

授業で配布したハンドアウト資料を整理させ、次回の授業に提出する。
 - b) 授業内容の再確認

小テストの誤った項目はレポートにまとめ、翌週提出する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

- 1) 筆記試験
 - a) 採点した試験問題および解答をデータで配布(Google Classroom)する。
 - b) 解説は、不正解問題を中心に行う。
- 2) 課題
 - a) 教員は学生が提出した課題に評価とコメントによりフィードバックをする。
 - b) 課題コメントで重要な部分は、次の授業始めにその内容を口頭で説明する。

6. 授業における学修の到達目標

救急医学分野のうち、病院前救急医学で、救急救命士が行うもっとも重要な重度傷病者に対する特定行為、心肺蘇生に関する病態・処置・法的・倫理的問題について完全に理解することを目的とする

到達目標

- 1) 救急救命士として変化し続ける救急救命処置と特定行為の病態を理解
- 2) 救急救命士処置の法的な背景、特定行為の要件の理解
- 3) 特定行為とメディカルコントロールの理解
- 4) 処置により病態の改善を予見するなど適切な思考判断を下し得る知力と思考力の獲得を到達目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

1) 成績評価基準

成績評価の基準として、処置により病態の改善を予見するなど適切な思考判断を下し得る知力と思考力の獲得ができたかを以下の方法で評価する。

- a) 事前の授業の準備と理解の評価
- b) 授業態度・主体的な授業への取り組みと講義の理解度の評価
- c) 授業後の内容の整理と課題の提出の評価
- d) 講義内容の理解度を試験で検討

2) 成績評価の方法

- a) 授業内容の整理・提出 (20 %)
 - イ) 事前の授業の準備と理解 10%
 - ロ) 授業態度・主体的な授業への取り組み姿勢 10%
- b) 筆記試験 (80 %)
 - イ) 中間・期末試験結果それぞれ合計点数の 60%以上を合格とする。
 - ロ) 再試験は期末の 1 回のみ実施
 - ハ) 受験資格として 3 分の 2 以上の出席かつ、全ての課題が提出されている事

8. テキスト・参考文献

改訂第 10 版救急救命士標準テキスト (へるす出版)

JRC 蘇生ガイドライン 2020 (へるす出版)

適宜指定する教材

9. 受講上の留意事項

医学系授業の基礎となり、医療従事者であれば常に考え、身につけなければならない学習内容である。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、医療機関における臨床の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

外科学概論		講義	教授 加藤 政彦
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門基礎科目	科目ナンバリング	12321305

1. 授業のねらい・概要

柔道整復師は、独立した施設で働くことが多く、専門分野以外についても幅広い医学的知識が必要である。本授業では、外科的に取り扱う代表的な疾患を学び、将来、臨床の現場で活躍するための基礎力をつける。

2. 授業の進め方

テキストの範囲の内容を、適宜、スライドと配布資料を用いて授業する。授業の最後に最近の国家試験問題等を出題し解答を出席カードに記載して提出させる。テキストの内容に沿った講義形式を基本とするが、随時、新聞・雑誌の記事などから具体的な出来事を取り上げて診療の現場に即した説明も行う。

3. 授業計画

1. 損傷・創傷・熱傷	9. 胸壁・呼吸器疾患
2. 炎症と外科感染・腫瘍	10. 心臓と脈管疾患①（心臓疾患）
3. 腫瘍・ショック・輸血と輸液	11. 心臓と脈管疾患②（脈管疾患）
4. 消毒と滅菌・手術・麻酔	12. 腹部外科疾患の主な症状と検査
5. 移植と免疫・出血と止血・心肺蘇生法	13. 代表的腹部外科疾患①（食道・胃十二指腸・大腸）
6. 脳神経外科疾患①（脳・神経疾患の主要徴候）	14. 代表的腹部外科疾患②（肝・胆・膵）
7. 脳神経外科疾患②（主な脳・神経疾患）	15. その他の腹部外科疾患
8. 甲状腺・頸部疾患・乳腺疾患	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、テキストと配布資料を使って復習しておく。さらに、授業の最後に出された問題を復習しておく。この問題は次回の授業の初めに解答を解説する。なお、これらの準備学習には90分以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回、過去に実施された国家試験の問題を実践解答させる。問題解答の際、また定期試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

総論や、各疾患の病態、症状、診断法、外科的処置を理解し説明できるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（30%）、定期試験（70%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト：炭山嘉伸編，全国柔道整復学校協会監修，外科学概論 改訂第4版，南江堂，2012年

参考文献：明治東洋医学学院編集委員会編，2024 第22回～第31回 徹底攻略！国家試験過去問題集 柔道整復師用，医学の日本社，2023年

適宜指定する教材

これらは毎回の授業に必ず持参すること。また、参考文献は、適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

欠席回数が全講義回数の 3 分の 1（6 回）以上となった場合には受験資格を失う。

遅刻，欠席ならびに授業中の私語，許可の無い教室の出入り，授業に関係ない言動は慎むこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。医療機関における医師としての実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

外傷学総論		講義	教授 千明 政好	
科目カテゴリ	救急救命士コースの専門分野科目		科目ナンバリング	13371301

1. 授業のねらい・概要

外傷学について解剖・生理から臨床現場での処置まで、救急救命士に求められる現場での確認項目を随所に理解していくことを目的とする。

救命することができる外傷死を減らすための観察・処置判断について解説し、搬送先の選定を具体的に実施できるような外傷学の知識を身につける。

2. 授業の進め方

学生には参加型授業を提案し双方向的な授業を実現できるようにする。前週に実施した授業を確実に理解することとする。また、理解を深めるよう画像・動画も使用した説明を行うとともに、学生自ら習得した知識を活用したアクティブラーニングによる授業展開を行う。

3. 授業計画

1. 外傷学総論① 外傷疫学、外傷の定義と分類	9. 現場活動⑦ 全身固定要領
2. 外傷学総論① 受傷機転	10. 現場活動⑧ 詳細観察・継続観察
3. 現場活動① 現場活動の流れ、ロードアンドゴーとは	11. 外傷活動で使用する資器材・ヘルメット除去
4. 現場活動② 状況評価、初期評価	12. 車内活動要領
5. 現場活動③ 全身観察、重点観察	13. 車外救出要領
6. 現場活動④ 状況評価～全身観察までの確認試験	14. 状況評価～車内活動までの活動の確認
7. 現場活動⑤ 緊急度・重症度の判断・緊急処置	15. 1回～14回までの確認演習を行う。
8. 現場活動⑥ 医療機関への連絡と搬送手段の選択	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- 1) 予習（必要時間：約 50 分）
 - a) 教員はオンライン教材(Google Classroom)を使用し、下記のイ)～ロ)に示す 2 項目を学生に提示する。
 - イ) 学習概要
 - ロ) 小テスト
 - b) 学習概要から出題した課題を提出・授業の冒頭 10 分間で小テストを実施する。
- 2) 復習（必要時間：40 分）
 - a) 授業内容整理

授業で配布したハンドアウト資料を整理させ、次の授業に提出する。
 - b) 授業内容の再確認

小テストの誤った項目はレポートにまとめ、翌週提出する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

- 1) 筆記試験
 - a) 採点した試験問題および解答をデータで配布(Google Classroom)する。
 - b) 解説は、不正解問題を中心に行う。
- 2) 課題
 - a) 教員は学生が提出した課題に評価とコメントによりフィードバックをする。
 - b) 課題コメントで重要な部分は、次の授業始めにその内容を口頭で説明する。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 救急救命士に係る病院前外傷医療体制を理解する。
- 2) 外傷死を減らすための救急救命士の観察・処置・判断を理解する。
- 3) 頭部から足のつま先まで各部の外傷を解剖学的・生理学的な側面から理解する。

7. 成績評価の方法・基準

1) 成績評価の基準

予防できる外傷死を減らすための観察・処置・判断・評価ができる能力を育成する。

2) 成績評価の方法

- a) 授業内容の整理・提出 (20 %)
 - イ) 事前の授業の準備と理解 10%
 - ロ) 授業態度・主体的な授業への取り組み姿勢 10%
- b) 筆記試験 (80 %)
 - イ) 中間・期末試験結果それぞれ合計点数の 60%以上を合格とする。
 - ロ) 再試験は期末の 1 回のみ実施
 - ハ) 受験資格として 3 分の 2 以上の出席かつ、全ての課題が提出されている事

8. テキスト・参考文献

改訂第 10 版救急救命士標準テキスト

改訂第 2 版補訂版 JPTEC ガイドブック

適宜指定するテキスト

9. 受講上の留意点

医学系授業の基礎となり、医療従事者であれば常に考え、身につけなければならない学習内容である。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、医療機関における臨床の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

外傷学各論		講義	教授 千明 政好
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門分野	科目ナンバリング	13371302

1. 授業のねらい・概要

外傷学について解剖・生理から臨床現場での処置まで、救急救命士に求められる病態を外傷部位ごとに解説し系統的な理解をはかる。救命することができる外傷死を減らすための観察・処置判断・について解説し、搬送先の選定を具体的に実施できるような外傷学の知識を身につける

2. 授業の進め方

参加型授業を提案し、双方向的な授業を実現できるようにする。前週に実施した授業を確実に理解することとする。理解を深めるよう画像・動画も使用した説明を行うとともに、学生自ら習得した知識を活用したアクティブラーニングによる授業展開を行う。

3. 授業計画

1. 外傷の病態生理 2. 胸部外傷① 循環血液量減少（血胸、横隔膜損傷など） 3. 胸部外傷② TAFXXX（心タンポナーデなど） 4. 頭部外傷① 急性硬膜外血腫、急性硬膜下血など 5. 頭部外傷② 外傷性くも膜下出血、高次脳機能障害など 6. 顔面・頸部外傷・縊首・絞頸	7. 脊椎・脊髄外傷 8. 腹部外傷 9. 骨盤外傷 10. 四肢外傷・皮膚・軟部組織外傷 11. 小児・高齢者・妊婦の外傷 12. 熱傷（電撃症） 13. 化学損傷 14. 刺咬傷 15. 1 から 14 までのまとめを行う。
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- 1) 予習（必要時間：約 50 分）
 - a) 教員はオンライン教材(Google Classroom)を使用し、下記のイ) -ロ) に示す 2 項目を学生に提示する。
 - イ) 学習概要
 - ロ) 小テスト
 - b) 学習概要から出題した課題を提出・授業の冒頭 10 分間で小テストを実施する。
- 2) 復習（必要時間：40 分）
 - a) 授業内容整理
授業で配布したハンドアウト資料を整理させ、次回の授業に提出する。
 - b) 授業内容の再確認
小テストの誤った項目はレポートにまとめ、翌週提出する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

- 1) 筆記試験
 - a) 採点した試験問題および解答をデータで配布(Google Classroom)する。
 - b) 解説は、不正解問題を中心に行う。
- 2) 課題
 - a) 教員は学生が提出した課題に評価とコメントによりフィードバックをする。
 - b) 課題コメントで重要な部分は、次の授業始めにその内容を口頭で説明する。

6. 授業における学修の到達目標

予防できる外傷死を減らすための観察・処置判断・について解説し、具体的に実施できるような以下の能力を育成することを目的とする。

到達目標

- 1) 救急救命士に係る病院前外傷医療体制を理解すること。
- 2) 外傷死を減らすための救急救命士の観察・処置・判断を理解する。
- 3) 頭部から足のつまさきまで各部の外傷を解剖学的・生理学的な側面から理解する。
- 4) 熱傷・放射線損傷・化学損傷・電撃症などの観察・処置・判断を理解する。

7. 成績評価の方法・基準

- 1) 成績評価の基準として、処置により病態の改善を予見するなど適切な思考判断を下し得る知力と思考力の獲得ができたかを以下の方法で評価する。
 - a) 事前の授業の準備と理解の評価
 - b) 授業態度・主体的な授業への取り組みと講義の理解度の評価
 - c) 授業後の内容の整理と課題の提出の評価
 - d) 講義内容の理解度を試験で検討
- 2) 成績評価の方法
 - a) 授業内容の整理・提出 (20 %)
 - イ) 事前の授業の準備と理解 10%
 - ロ) 授業態度・主体的な授業への取り組み姿勢 10%
 - b) 筆記試験 (80 %)
 - イ) 中間・期末試験結果それぞれ合計点数の 60%以上を合格とする。
 - ロ) 再試験は期末の 1 回のみ実施
 - ハ) 受験資格として 3 分の 2 以上の出席かつ、全ての課題が提出されている事

8. テキスト・参考文献

改訂第 10 版救急救命士標準テキスト (へるす出版)
改訂第 2 版補訂版 JPTEC ガイドブック (へるす出版)
適宜指定する教材

9. 受講上の留意事項

医学系授業の基礎となり、医療従事者であれば常に考え、身につけなければならない学習内容である。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、医療機関における臨床の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

メディアスポーツ論		講義	非常勤講師 武田 作郁	
科目カテゴリ	スポーツマネジメントコースの選択必修科目, スポーツトレーナーコースの専門選択科目	科目ナンバリング	11312205	

1. 授業のねらい・概要

現代社会において、スポーツに関する情報は、テレビやインターネットを通じてリアルタイムに全世界へと配信され、人々の関心を集める重要なコンテンツのひとつになっている。本授業では、スポーツとメディアの歴史やスポンサーなどのステークホルダーとの関係性、メディアの影響力について学びながら、スポーツとメディアの関わり合いについて理解を深めていく。

2. 授業の進め方

パワーポイントの資料や映像を用いた講義形式で授業を進めていく。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. スポーツイベントとメディア（冬季オリンピック）
2. メディアスポーツとは	10. スポーツイベントとメディア（ワールドカップ）
3. 日本におけるメディアの歴史	11. メディアイメージとスポンサー
4. アメリカにおけるメディアの歴史	12. スポーツイベントとメディア（箱根駅伝）
5. メディアの影響力	13. 特色あるスポーツイベント
6. メディアの変容	14. スポーツとメディアに関わる法と政策
7. メディアリテラシー	15. まとめ
8. スポーツイベントとメディア（オリンピック）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業開始までに前回の授業内容を復習しておくこと。授業内で指示するレポートや課題に取り組むこと。これらの準備学習には2時間程度が必要である。また、日常的に新聞、テレビ、ラジオにおけるスポーツやニュースに注意を向けて情報収集を怠らないこと。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

授業内で適宜解説する。

6. 授業における学修の到達目標

スポーツとメディアの歴史や、スポーツにおけるメディアの役割を理解し、スポーツ参加者、実施者とメディアの良好かつ発展的な関係性を考察することができる。

7. 成績評価の方法・基準

受講態度+レポート課題への取り組み（70%）、期末課題（30%）により評価する。

8. テキスト・参考文献

特定のテキストは使用しない。参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

特になし。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当なし。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。